

---

# 心と心の狭間

芽吹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心と心の狭間

### 【Nコード】

N5287J

### 【作者名】

芽吹

### 【あらすじ】

10歳の時に両親を亡くし、17歳の兄が親代わりとなった。あれから10年。私は恋愛にすっかり奥手な20歳になっていた。淡い恋が本物と気づき、そんな自分を受け入れ、相手の気持ちも受け入れ・・・と、真面目に四苦八苦する可愛くも不器用な恋愛模様。

## チャイムのアイツ

目覚めたのは朝8時半、完全に寝不足だ。

瞼は腫れぼったく頭痛までしてる。

吐き気がないだけで所謂典型的な二日酔いだ。

救いは今日が土曜で明日が休みということだけ。

昨夜11時、風呂から上がり濡れた頭にタオルを巻いた姿で、キッチンに立ったままオツサンのようにビールを飲んでいた。

二十歳にして早くもオヤジ化した妹の姿を目の当たりにして、7歳上の兄 和樹<sup>かずき</sup>は呆れて言った。

「こんな姿、死んだ親父とお袋に見せられない」と。

いつもこうだ。10年も前に死んだ両親のことを持ち出す。

けど、その後にこう付け足すのもいつものことだ。

「だけど心身ともに健康に育ってくれた姿は見せてやりたいな。喜ぶだろうなあ」

そんな時決まって目を細め、優しく微笑む両親の顔を瞼に浮かべているのだ。

親戚の人や知り合いの人は、みんな兄のことを『苦労人』と褒める意味で賞賛した。

両親が他界した10年前、兄は17歳だった。今思えば遊びたい盛りだっただろう。

だけど家には10歳の私がいる。兄は寄り道もしないで真っ直ぐ帰ってきてくれた。

だから私は父母が他界して悲しくて泣いても、『孤独』で泣いたこ

とはなかった。

父が医者だったので、当面の生活費に悩むことはなかったようだし

「お前は知らなくていい」

と兄は教えてくれなかったけど、父母は交通事故死で被害者側だった為、

保険金も相当額下りたらしかった。

私を育てながら兄は父と同じ道に進むべく、コツコツと、しかし猛烈に勉強に励んだ。

私がテレビに飽きて

「お兄ちゃんゲームして遊ぼうよ」と誘っても

「麻琴ごめんな、今は勉強の時間だから。

そうだ、明日の朝1時間早く起きろよ。

そしたら遊んでやるからさ。」

と可愛い妹(?)の誘惑にも決して靡かず、自分のやるべきことを一心不乱に遂行したのだった。

その成果はきちんと結果に結びつき、医大も現役合格。

卒業、研修医を終え、今やっと念願かなって現役医師として勤務しているのだ。

時々口うるさくお節介でイヤになっちゃう時もあるけど、私は兄が大好きだ。

そう、きつと世界で一番尊敬もしている。

因みに朝1時間早く起きてゲームをしたことは一度だってない。

私は寝起きが悪くて、大体が寝坊だったから。

昨夜ビールを飲んで小言を言われてる最中、玄関チャイムがけたた  
ましく鳴り響いた。

時間が時間だ。驚いて兄と顔を合わせ、一瞬にして青ざめた。

こんな時間に凶々しくやってくる人間といえはアイツしかいない。

兄と二人、足音を響かせないようにソロソロと玄関の方へ向かった。  
その間もチャイムの音はしつこく連打で鳴らされていた。

## 戸惑い

「おーい、居るんだろお。近所迷惑になるから早く開けるよお。」

自分で近所迷惑だと分かっているらしい。  
ま、近所以外に私たちにだって迷惑なだけどね。

「しょーがねーな、アイツは。麻琴いつも悪いな。」

そういうと兄は玄関の鍵を開け、一気にドアを開いた。  
するとタコが掃除機に吸い込まれるようにして健悟が纏れ込んできた。

思いつきり気を抜いていた私は、その勢いで健悟に押される格好で後ろに尻餅をつき倒れてしまった。

「ちよつとお・・・いったあ。。。もおつ 健兄って、どうしていつもこうなのお？」

「大丈夫か麻琴っ。ほら、健悟立てって。お前んちはここじゃないだろ？」

兄が健悟を無理やり立たせる。  
タコのようにになっているこの酔っ払いは兄の親友、というか幼馴染だ。

私が生まれる前から家に入りにして、私よりも7年分、私の両親を知ってる。

だからだろう、葬儀の時は彼も私たち兄妹に混じって一緒に泣いていた。

それも一番大きな声をあげて。遠い親戚はその姿を見て、

「子供は二人って聞いていたけど三人だったのね」

と勘違いしたらしい。

彼は酔うといつもこうやって家に来る。

いや、酔わなくても嫌なことがあったり、落ち込んだり、逆に嬉しいことがあったりしても来る。

心の節目に訪れるといったら解りやすいだろうか。

差し詰め今日は楽しい酒ではなかったようだ。

その証拠に私が靴を脱がせると、玄関から入って右手の和室にノロノロとナメクジみたいに這って行き、仏壇の前でなにやらブツブツと話している。

多分うちの親に文句を聞いてもらっているのだろう。

「お兄ちゃん、この状況って、今日泊まってくよね？先に布団だけ出しとく？」

「ああ、俺がやるよ。きつとまたここから離れないだろうし、ここに持つてくる」

兄は客用・・・って言っても、もう、ほぼ健兄専用のようにになっている布団を取りに和室を出ていった。

呪文のようにブツブツ文句をたれている彼の横に座った。

「健兄、今日もなんかあったわけ？」

「麻琴お、イイ勘してんなあ〜。男できたかあ？」

仏壇に目を向けたまま、やや呂律の回らない舌足らずな口調でふざけたようにちやかす。

「はいはい、私も二十歳の乙女ですもの。男の一人や二人いますよ。つて、そんなこと関係ないでしょ。」

まあ いったか。水持つてくるね、ちよつと待つてて。あつ！」

立ち上がるうと右手を床についた時、いきなり腕を取られ健悟の胸に抱き寄せられた。

一瞬なにが起こったのか分からず固まっていると、耳元に健悟の唇が近づき麻琴にしか聞こえない声で甘えるように囁いた。

「マコ、ほっぺでいいからキスして」

少し酒臭くて熱い息が、耳の奥に流れ込む。

中学生の頃、子供っぽいから嫌だと訴えてから使われることの無かった懐かしいあだな。

甘い魔法を掛けられたような錯覚に陥り、そして戸惑い身動きがでない。

これまで健悟が麻琴に甘えたことなんて一度もなかった。むしろ麻琴が甘えて纏わりつくこと

「お前の兄貴はあつちだろ」

と和樹の方に追いやったりして密着を避けたがっていたほどだ。

何となく中学生になったころから距離を感じていた。

和樹に「なんか悪いことしたのかな。健兄に嫌われてるみたい」と、半分泣きながら相談したことがある。

和樹は困った顔で「そんなことはないよ。いつも麻琴のこと本当の妹みたいで可愛いつて言ってるし。」と慰めてくれたが、小学生の



頃のように無邪気に接してくれることはその後もなかった。

ちやかさないでよ

「おい・・・」

声のする方に顔を向けると、明らかに眉間に皺を寄せ怪訝そうな兄が布団を抱えて突っ立っていた。  
健兄は全く動じることなく私を抱きしめたままにいる。

「おいって、健悟。お前なにやってんだ。麻琴から離れるよ。」

そういうと持っていた布団を放り投げ、健悟の肩の辺りの服を鷲掴みして力いっぱい引き離れた。

健悟はいとも簡単に畳の上に転がり、お尻をさすりながら

「あー、ケツいてー。赤鬼にやつつけられたあゝ」

と訳の分からぬ言葉を発した直後、大きないびきをかいて寝てしまった。

兄は無言で麻琴に両手を合わせ、

「今度なんかされそうになったらアイツの鼻んに指突っ込んでい  
いから」

と、真面目な顔で許可を出した。でもそれってなんか、私の指に不利じゃないか？

その後、結局なんだか寝付けなくて親友の美佳から貰ったワイン

を飲んだら二日酔いってわけ。

キッチンに行くと兄がコーヒーを飲みながら新聞を畳んだりして、イソイソと出かける準備をしていた。

気になる患者がいるのだとか。結局何だかんだ言っつて、殆ど休みなく病院へ行っているのだ。

コーヒーカップをキッチンのシンクに置きながら振り返りる。

「健悟のヤツ、昨日悪かったな。まだ寝てんだよ。叩き起こしてやるかっ」

まだ少し怒っているのか、イラついている。兄にしては珍しい。前日の感情を翌日に持ち込まずに済むことがまず無いからだ。

「あーうん、いいよ。寝かしといてよ。何かあったんでしょ。」

「どうせまた女のことだろ」

吐き捨てるように放たれた言葉に、なんでだろ、心のどこかがズキツとしたのを感じた。

兄が出かけて1時間くらい経った頃に健悟の様子を見に、和室の襖をそーっと開けてみた。

昨日のことがあって恐る恐るといった感じで。

「健兄、まだ寝てる？」

もし寝ていても邪魔にならないくらいの小声で聞いてみる。

「んにゃ、もう起きてるよ・・・俺、昨日どんなだった？」  
寝起きで少し掠れた不健康な声。

「ウソ、覚えてないの？」

「覚えてねー・・・ここに何時に来たのかもサッパリだ。  
しかも俺どっかで転んだのか右のケツ痛い。」

・・・それはお兄ちゃんにぶっ飛ばされて・・・って言うていいものかどうか。

でもその説明をするととなると、私に抱きついたことなんかも言わなきゃいけない。

ノロノロと上半身を起こし、すっかり寝癖のついた頭を両手でガシガシと搔いている。

「11時過ぎに来たんだよ。凄く酔っ払っててね、お父さんたち（仏壇）にブツブツ文句言ってたよ。ま、いつもと一緒よ。気にしないで良い程度ね。それよりシャワーにする？  
温かい物でも飲む？」

「そか。じゃあ良かった。先シャワーしてくるよ。」

少しホッとした表情を見せる。

お兄ちゃんには今回のことは何も言わないでってクギ刺しておかなければ。

「うん。健兄のタオルと着替え出してあるから。」

「サンキュ・・・なあ、麻琴」

「ん？」

襖を閉めようとした時、静かに呼び止められた。

まだ布団の上の健兄に目を向けると、さっきまでとは違う

穏やかで清々しい目がこちらを見ていた。

昨日のことが蘇ってドキドキと心拍は上がり、顔が一瞬で熱くなつた。

「な、なに？」

意識しすぎて声が上がらず。

「うん、麻琴大人になったなあって思ってたさ。綺麗になったな。」

ジッと見つめられて言われると、ふざけた言葉で切り返したいのに何も出てこない。

少しの間後、健悟がニツと口の端を上げた。

「なに照れてんだよっ。冗談の通じねーヤツだなあ。

そんなんだと直ぐに男につけ込まれるぞ。気をつけるお？」

いつものちゃかすような軽い口調。

今度は急激に顔が赤くなっていくのが分かる。

昔からよくからかわれてきた。最後には必ずと言っていいほど恥をかき形になるのだ。

でも、さっきみたいな表情で言われたことはなかった。

だから不覚にも健悟の言うように照れてしまったのは事実だ。

「なっ　なによっ。そんなこと分かってるもん。」

「ちゃかさないでよね！」

「どうでもいいけど早くシャワーしちやっつ。」

慌てた様子で言うだけ言って襦をパシッと閉めた。  
健悟はその様子に目を丸くした後、クスツと苦笑した。

「いつまでたっても可愛いヤツ」

## 突然の告白

「麻琴ちゃん、これも美味しいから食べてみなよ」

「あ、すみません。あの、わたし自分で勝手にとりますから・・・」

「いいのいいの、俺がそうしたくてしてんだから、ね。」

若者の好みそうな洋風居酒屋に入ってかれこれ1時間、ずっとこの調子だ。

美佳に無理矢理誘われ合コンに来たのはいいけど、何せ生まれて初めての合コンだ。男女5人ずつで、それぞれ楽しげにワイワイと打ち解けているが、麻琴は要領が掴めずちつとも楽しくない。おまけに、隣でへばり付いて離れない柳瀬が、あれ食えこれ食えと、テーブル上のつまみを皿に取り分けてくれ、とにかく大阪のオバちゃん並にお節介なのだ。合コンって、大食い大会のつもりで来なくちゃいけない所だったなんて知らなかった。

「麻琴ちゃんてさ、可愛いつていうか、美人つていうか、なんか俺の周りに居ない感じの女子なんだよね。こういう場でも設けなきゃ絶対にお近づきになれないって思うんだけど、やっぱり彼氏とかいるの？」

興味津々の表情で麻琴の顔を覗き込む。

柳瀬は23歳の広告代理店勤務の社会人だ。若者特有のスラツとした細身の体型と、頭頂部に軽くワックスで遊びをもたせた短めのヘアスタイルで、相手に爽やかな印象を与える。この手の会話にも慣れているのだろう。

なんか、こつこつ歯の浮きそうな言葉を口にする人って、結構苦手かも。

どう反応していいのか分からないもの。

「あはは・・・柳瀬さんって、そういうジョークみたいなお世辞好きなんですか。ちよつと困ります・・・」

「いやいや、お世辞じゃないって。結構ホンキで、それも勇氣出して言っただけどー！」

必死の形相で否定する柳瀬の反応が、少年のようにもの凄く素直で可愛く、麻琴は思わず笑い出してしまった。柳瀬は一瞬「え？」って顔をした後、つられるように笑い出していた。

「なんだ、麻琴ちゃん笑えんじゃん。マジ可愛いし。」

「だって可笑しいんだもん、笑うよー。」

「って、もうっ、そういう褒め殺しみたいのやめて下さいっ。」

そんなやり取りを斜め向かいに座る美佳が見ていた。

「柳瀬さん、お目が高い。」

麻琴は可愛いだけじゃないんだから。身も心もキレイよ。

あたしが男だったら間違いなく猛烈アタックしちゃうわ。」

同じ二十歳とは思えない色っぽい目つきで柳瀬をたきつけた。美佳は麻琴とは違いオープンな性格だ。それゆえ交友関係も広く、毎週のように合コンにも参加していた。麻琴もしょっちゅう誘われていたが、のらりくらりと断り続けていた。が、今回は急に人数が足りなくなつたとかで泣き落としに近い状態で頼み込まれ、折れる形で



仕方なしに、それこそ麻琴の方が泣く泣く来たのだ。美佳は事あるごとに彼氏をつくれというが、本人にはそんな気がまるで無いのが現状だ。

「ってことは麻琴ちゃん彼氏ないってこと？ マジ？」

なんとなく柳瀬が本気モードになってきた。

そんな空気を読んだ麻琴が返事に間誤付いていると、柳瀬が返事はどうでもいいといった感じで、スクツと立ち上がった。驚いた麻琴はビール片手にキョトンと呆けた顔で柳瀬を見上げた。

「麻琴ちゃん、お試しで付き合ってください！」

「お・・・お試し・・・？」

周囲では「オー！」「ハヤッ もう告ってんのかよー」「よっヤナセ カッコいい」「麻琴ちゃん顔真っ赤で可愛い」「  
などと囁し立てる声があがったが、麻琴には全くと聞いていいほど聞こえていなかった。

## クーリングオフ

「ホント、嫌じゃなかったら連絡ほしい」

帰り際に呼び止められ、そんな言葉と一緒に名詞を手渡された。裏には携帯の電話番号とメールアドレスが几帳面な文字で書かれていた。あの告白の後、どんな話をしたのかよく覚えていない。実はやや酔っ払っていたのだ。帰宅すると門限の10時を1時間過ぎており、しかも酒に酔っていた為、兄にこっぴどく叱られた。ヘラヘラと笑って謝ったのを、なんとなーく覚えているというのが現状。

数日後、授業中に携帯のバイブか鳴った。美佳からランチの誘いだった。麻琴は法学部、美佳は文学部と、学部が違うのでこのように連絡を取り合わなければ偶然会うことはあまりない。美佳の意見でたまには学食でランチにしようということになった。

「麻琴、こっちこっちい」

中央よりやや奥の席から、美佳が右手をヒラヒラと振っている。麻琴はハンバーグ定食をのせたトレーを両手で持ち、ゆっくりとした歩調で向かった。

「待った？」

「うっん、今来たばかりよ。あら、なんか良い感じのワンピース着てるじゃない。」

「ってネットクレスすごい綺麗！本物のダイヤ？だよねっ」

Vネックで胸の下の切り替えにレースのあしらいが大人可愛い、アイボリーの優しげなシルクのワンピースを着ていた。それに加え、ダイヤのネックレス。カラットは0.5と小ぶりながらも、VVSクラスでクラリティの高い一粒ダイヤだ。

さつきから男子学生が麻琴を振り返るのは、このネックレスのせいだけではないだろう。このネックレスを身に着けると、自分でもなぜか内面まで輝くように感じる。『本物』がそうさせるのかもしれない。

「ふふっ ありがとう。去年の誕生日に買ってもらったの。

私にはちよっと高価で似合わないでしょ。」

「なに言ってるんの、似合ってるって。

やっぱり麻琴はお嬢様よねえ。立ち居振る舞いもおっとりしていて、そんな洋服も似合っちゃうんだもの。この前の合コンだってそう。

あんた殆どしゃべらなかつたけど、周りの男たちは『高嶺の花』って感じで遠巻きにチラチラ様子見てたしね。なんか嫉妬しちゃうー。」

自分の言葉に『うんうん』と頷きながら納得している。

「そんなこと・・・。」

「あるあるっ。気づいてないだけ。で、ここから本題なんだけど」

意味深な顔をして美佳はトレーの端にのっている水をグビツと飲んだ。

「柳瀬さんのことなんだけど、麻琴少しでも付き合っ気ある?。」

気にはなっていた。皆の前で告白されて、連絡先まで渡されて、正直どうしたものかと考えあぐねていた。

「よく分からないの。『お試し』って、どういう意味なのかな？」

「えっ、そこ？」

「ん……。」「

「まあ、お試しっていうのはね……。なんてったらイイのかな。ん？難しいじゃん。」

まあ、ある一定の期間内で疑似的にデートしてみたりして、相手の人となりを見て、好きになれそうだったら本気で付き合う、じゃなかったらサヨナラって流れのことなんじゃないの？」

「はあ、それが『お試し』なのね。なんとなく解った。美佳って何でも知ってるんだね。」

結局のところ、付き合うにしても付き合わないにしても、美佳は『お試し』とやらを経験してみるべきだと言い残し、ランチは残さず去って行った。でも私はその『お試し』というのがちょっと気に食わない。だって品物に例えたら『クーリングオフ可』ってことですよ。擬似的とはいえ付き合ってみて、結局好きになれませんでした、なんて……。

やっぱりちゃんと断ったほうが柳瀬さんにとってもいいはず。今日帰ったら電話しよう。

全ての講義を終え外に出ると、昼とは一変し吐く息は白く凍り、薄暗い冬の空と化していた。今年は暖冬らしいが、今にも雪が降ってきてそうだ。寒いのは苦手だが雪は好きだ。音もなく降る雪は、儂くも強い意志をもっているようだ。

「おい、まーこーとー！」

聞き覚えのある声。キョロキョロと声の主を探すと、狭い道路の向こう側に健悟がいた。仕事の帰りなのか、スーツ姿で車に寄り掛かっている。思わぬ人物を前に一瞬で笑顔になり、小走りに近寄った。

「どうしたの健兄、こんなところに。仕事の帰り？」

久しぶりにスーツ着てるの見た。酔っ払ってないとカッコイイなあ。ねえ、本当にどうしたの？ あ、そだ、今日の晩ご飯、よせ鍋だよ。うちで食べる？」

笑顔のまま健悟の右腕を掴み、矢継ぎ早に続ける。

「ちよっ 腕掴むなって。それにまだ仕事中だ。

来月、ここで短期で講師することになったよ。

以前から依頼来てただけで、本業忙しかったから延期してたんだ。

」

そう言い校舎を見つめる。

健悟はこの大学の卒業生だ。しかも麻琴と同じ法学部で、本業というのは弁護士のことだ。昔から、『何かやり甲斐のあることをしたい』というのが口癖だった。中学生の麻琴は

「じゃあ、お兄ちゃんと一緒にお医者さんになれば？」

と言ったことがあった。しかしその返事はあっさりノーだった。理由は簡単、

『血がダメ』というだけのこと。ふとそんなことを思い出し健悟を見上げると、目を細めて麻琴の首の辺りと顔を交互に見つめていた。

「似合うじゃん、ネックレス。」

肩にかかった髪の毛を後ろによけながら満足げに言う。

二十歳の誕生日に何か形として残るものと健悟からプレゼントされたものだ。その時の麻琴は色気より食い気だった為「おっきいケーキをワンホール嫌って程食べたい」と申し出たが即却下だった。当然と言えば当然だ。そして「もっと女らしくなるように」と連れて行かれたのが銀座の一角にある高級ジュエリーショップだった。店内は黄みがかかった柔らかい照明で彩られ、どこもかしこもキラめいていて、ブース内の店員までもがキラキラとして見えた。緊張の中ケース内の金額を見て度肝を抜かれた。数千円のカジュアルなジュエリーしか身に着けたことのなかった麻琴には手の届かぬ桁が……。つまり数十万〜それ以上の額がズラリと並んでいたのだ。健悟に場違いだから出よう、もっと安いところがいいと耳打ちしたが、彼は淡々と言った。

「本物をプレゼントしたいからここでいい。

それに大人を馬鹿にすんなよ。俺だってキャッシュで買えるくらいは稼いでるっての」

健悟は1カラットのダイヤをすすめてくれたが、麻琴は普段使いきるくらいが良いと言い張り、結局半分の0.5カラットのとてもシンプルなデザインのプラチナネックレスに決めたのだった。

「今日ね、友達にすごい綺麗って褒められたよ。」

健悟にしか見せないであろう満面の笑みを向けて

## 罪悪感

中学を境にペタンコだった胸も少しずつ膨らみ、同時にウエストがほっそりと括れ、日に日に女になっていく過程をまざまざと見せ付けられ、小学生の頃のように撥って遊ぶなんてことはできなくなった。子供の頃の面影を残しながらも、18歳を過ぎた頃からは急に大人びた一面を見せるようになった。ふと手元を見る時の目線や、呼ばれて振り返る時の気の緩んだ表情に、若くして亡くなった麻琴の母と重なる時がある。そんな時、健悟は決まってどうしようもなく胸が痛むのだ。麻琴の両親は、この成長をどんなに見たかっただろう。もし生きていたら、みるみる美しく変化する娘の姿を、どんな想いで見ただろうと。例えば一緒に買い物に行き洋服を選んだり、流行の映画を見た後にはレストランで食事をしたりする。そんなありふれた風景を、麻琴と両親に当て嵌めてみては、空虚感に苛まれるのだった。きっと和樹も同じような心境だろう、と健悟は思う。

「健兄？ねえってばっ」

子供の頃の面影を残す笑顔を見せられ、駆け足のように一瞬で色んな感情を呼び出されていたことに健悟は驚いた。

「ああ、ごめん。なに？」

「もお・・・だから、仕事何時頃に終わるの？って」

「あ、やべっ、俺行くところあったんだ。お前これから帰るだけ？」

「うん、そうだけど」

「じゃ、乗れ」

麻琴の質問はあっさりスルーされ、有無も言わせぬスピードで押し込まれるように助手席に乗せられると車は急発進した。景色が流れ

るように入れ替わる。車内はラジオもCDもかかっておらず、聞こえるのは力チ力チという右左折する時に出来るウインカーの音が時々するだけ。麻琴は女の子にしては、どちらかというとな口な方だが、もつと無口な健悟からすると『お喋り』の部類に入る。今のこの静寂は二人にとって然程苦ではない。

「もう少ししたら目的地に着くんたけど、車の中で10分くらい待ってってくれるか」

「うん、いいよ。」

健悟の車は大廈高樓の立ち並ぶ高級住宅地の、とあるマンションの地下駐車場に入って行った。午後6時を少し過ぎた夕食時だからか、車の出入りはなくとどころに高級車が収まっている。その一角に健悟の車が静かに停まった。

「じゃ、ちよつと行ってくるな」

そう言うとは後部座席からアタッシュケースを取り、ドアをバタンと閉め颯爽と奥のエレベーターの方へ姿を消した。

「うーん、カッコイイなあ、スーツ姿の健兄。結構背が高いからキマルんだよね」

健悟の身長は高校3年でピタリと成長を止めたが185cmある。学生時代はずつと水球をやっていた為、特に上半身の筋肉の発達は今役時代からすると落ちてはいるが、それでも明らかに筋肉質で分厚い。『何をされても倒れない鉄のような強い男』といった風貌だ。健悟が麻琴の成長を見てきたように、麻琴もまた健悟のことは見てきた。一見いい加減で自由奔放だが、実はせいれいかっくん精励恪勤で怠けることを知らず、先入観や風説を排し観察力が鋭く、真実を追い求めようとする粘り強い性格に弁護士という職業は天職と言えた。しかしその



反面、自分の気持ちに鈍感で、些細なことで傷つきやすく感情の表現が下手なところがある。そしてそのマイナス面を本人は気づいていないのだ。

学生時代は本人も驚くほどよくモテた。バレンタインのチョコレートは売るほどもらい、顔と名前を思い出せないほどの女の子に告白を受けてきた。その辺をただ歩くだけで女の子たちが見つめザワザワし始め、体のあちこちに穴が開きそうだった。だが高校時代は水球や勉強に夢中だったため、女の子と付き合うことはなかった。そして志望大学に入学したある時、以前からちよつと可愛いな思っていた女の子に告白され、付き合うことになった。生まれて初めてできた彼女だった。何を話してもコロコロとよく笑い、社交的でお洒落で非の打ち所の無い子だった。男友達からはやつかみ半分羨ましがられ、健悟も鼻高々だったが、半年付き合った頃気づく。

（一緒にいて遊ぶには楽しいけど、愛してはいない、愛せない・・・）と。

その後も数人の女の子と付き合ったが同じだった。体を重ねても逆に愛せないことに焦りを感じ、大抵は罪悪感に陥り直後に別れることになるケースが多かった。『やり逃げされた』そんな噂が広がるのも当然だった。大学を卒業し、1年就職浪人した後、弁護士の職に就いた。相変わらず言い寄ってくる女はいるが、その頃から彼女も作らず禁欲的な生活を続けている。鈍感な男が自分の本当の気持ちに気づいてから、かれこれ3年は経っていた。

## 総称にない存在

「榎村総合法律事務所の弁護士をしております早瀬です」

相手は玄関先で健悟を見つめたまま名刺を受け取る。言葉はない。

「大変申し訳ありませんが担当弁護士の榎村に急用が入りまして、代理で私が書類をお持ち致しました。それからご準備いただいたているものをお預かりしてくるよう申し付けられています。そのご準備の方は整っておられますか」

淡々とビジネストークをすすめる健悟には特になんの感情もない。早くこの『使いつ走り業務』を終え、車で待たせている麻琴の元へ戻ってやりたい、いや、戻りたいのだ。

しかし相手はそうではない。なんとと言っても6年ぶりの再会なのだ。辻井香奈子

かつての恋人だ。長めの髪の毛を軽く捻りアップさせ、ゴールドのアージューコムでセットし、黒のパンツスーツを身に着けている。すっかり大人のオンナに姿を変えていたが、嫌味のない清楚な感じはあの頃のままだ。

「健悟・・・弁護士になったって風の便りに聞いていたけど、まさか榎村さんのところにいたなんて。元気だった？懐かしいわ。」

「ああ、君も元気だったかい。ジュエリーショップのオーナーだつて聞いてきたんだけど、男性の名前だったから君とは思わなかった。」

辻井 新太郎 様

書類の表紙部に印刷された文字だった。確かにこれだけでは彼女とは想像できないだろう。ただ健悟とて、この突然の再会に驚きがなかったわけではない。しかし仕事柄あらゆる面においてポーカーフエイズで、こんな時にさえそれが手伝い、まるで初対面のように振舞ってしまうのだ。

「父が代表なの。私は秘書として修行中なのよ。」

本当に久しぶりだわ。美味しいコーヒー淹れるから少しどう？」

「いや、悪いんだけど実は車に人を待たせているんだ」

ここで初めてフワツとした笑顔を見せたことに、彼自身全く気づいていない。

だが香奈子はそんな小さな変化を見逃さなかった。そして誰もを惹きつけるお得意の笑顔を向け、今一番の興味を隠すことなくストリートに聞く。

「もしかして彼女？」

一瞬の間を置き、彼は口元を緩め「ふっ」と、さも面白くなさそうに鼻で笑った。

「そういう総称に当て嵌めて考えたことはないな・・・」

そんなことよりこの書類をお父上にお渡しして下さい。そして「用意して頂いたものをお預かりしたいのだが」

「気を悪くさせたのならごめんなさい」

お得意の笑顔は一瞬で消え去り、寂しげな表情に入れ替わった。気

を悪くしたのは彼女の方だった。まるで『幼い質問をするな』と失笑されたように感じたからだ。あしらわれたことなどないお嬢様のブライドが、少なからず傷ついた。

無言のまま書類を受け取るとそのまま奥の部屋からA4サイズの白い封筒を持って戻り

「父からこれをお渡しするようにと。中身は知らないのですが、どうしますか、ご確認しますか？」

「いや、私も預かってくる物の内容は知らされていないので確認はできない。

お父上に、間違いなくお預かりいたしましたとお伝えください。

それでは、これで失礼します。」

丁寧に頭を下げ、香奈子の目をしっかりと見て「それじゃあ」と言い背を向け辻井家の玄関を出た。

「悪い、10分過ぎてたな」

「うっん、ちょっとだし、仕事だったんでしょ」「」

「まあな。さ・て・と、今日のディナーは寄せ鍋かー、腹減ったな。帰ったら7時過ぎるな。アイツ、和樹は何時に帰るんだ？」

「それがさっきメールで今日は泊まりになっちゃったから帰らないって。寄せ鍋のリクエストしたのお兄ちゃんなのに可哀想。ねっ？」

「はは、医者の子は未定だから仕方ないな。作るの面倒だったら、どっかで食ってくか。」

「どっちでも良いけど、どうせ健兄なんか、いつも外食かコンビニ

のお弁当なんでしょ？ちゃんと野菜摂って栄養バランス調えなきゃダメだよ。お兄ちゃんいなくて寂しいかもしれないけど、うちで食べよ？」

「寂しくないし、『どうせ』とか言うなよ。何もかも飢えてるみたいだ」

「じゃあ、外食する？」

「・・・寄せ鍋がいい・・・」

「でしょ？」

「・・・うん・・・」

何となくバツが悪いが、押さえ切れない喜びを表すかのように、車はまた急発進した。

## 心の琴

「いやー、食った食った。久しぶりに家庭的なもん食ったよ。食いすぎて全身が胃袋になったみたいだ。」

胃の辺りを擦りながら満腹であることを強調する。二人でテーブルを囲むことの小さな幸福感、最も自然体でいられる場所、そして相手がいる。満たされているのは胃袋だけではないのだが、それを口にすることはない。

「健兄はちつとも自分で作らないの？」

立ち上ると馴れた手つきで茶碗と皿を重ねながらテーブルの上を片付けていく。

「作らないな。手間かかるだろ。メニュー決めて買い物して、作って後片付けするなんてそんなの俺には無理だな。コンビニ弁当をレンジで温めるのだって面倒なくらいだ。」

「・・・呆れた。レンジでチンが面倒だなんて。」

彼女は作ってくれないの？」

「彼女ねえ・・・」

麻琴は・・・麻琴は作ってやるのか」

またしても麻琴の質問にはスルーを決め、その上に探るような質問を乗せた。

麻琴はいつも通り自分の食器をシンクの上に置く。そして健悟の隣に立ち、健悟の使った食器を重ねながら、座ったままの健悟の顔を

見る。

「え、誰に？」

「だから彼氏・・・に」

「いないもん、彼氏とか。あ、でも・・・」

健悟の表情が微妙に変わる。『でも』？それに近い男でもいるのか。答えのない段階にありながら言い様のない胸のザワつきを感じる。

麻琴は、ふと柳瀬のことを思い出していた。きちんと返事をしようと決めたが、やはり

まだ迷っていた。あれは合コンの席での告白だ。もしかしたらおふざけ半分で、わざわざ断りを入れること事態馬鹿げているのではないかと。

そして軽い気持ちで経験豊富と思われる健悟に相談を持ちかける。

「あのね、この前ね、合コンで」

「はあー？　コーコンッ？」

思いがけない『合コン』という有り触れた単語に、健悟は突拍子のない声を上げ麻琴の言葉を遮った。

「お前、合コンなんて行ってんのか。おまえ・・・おまえ・・・和樹は知ってんのか」

まるで悪さをした子供に「親は知っているのか」と詰問しているのと変わらないことはさて置き、健悟は驚きを隠せない。いくら二十歳を過ぎたと言えども、健悟にとってはまだ幼い頃の麻琴のイメージが色濃く残っているのだ。

一方、突然大きな声を出され、怒鳴られたと勘違いした麻琴は萎縮した。和樹にはちよくちよく怒られるが、これまで大きな声を出されたことはない。どちらかと言うと『躰』をメインに懇々と言い聞かせるのが常だ。

「ごっ 合コンは仕方なく初めて言ったの。お兄ちゃんには言っていないで、それで、それで・・・」

健悟の眉間の皺が深くなり、そこにはかり目が行って上手く言葉が出てこない。言いよんどんでいると一層その皺は深くなった。

「何かされなかったか。名前と顔、ちゃんと覚えてるか。」

「何かって・・・？」

「何かって言ったら、何かだよ。お前が嫌がるような・・・さ」

「・・・？あ、隣に座ってた人に嫌ってほど一杯食べさせられた。もういいからって言うのに。」

「・・・それから？」

「仕方ないからお腹一杯食べて、そしたら告白されたの。」

「でね、お酒に少し酔って門限過ぎちゃって、お兄ちゃんにネチネチ怒られて、」

「はははっ ネチネチか、想像つくな。ってそんな事どうでもいい！あと、腹一杯の話もどうでもいいっ。告白って、麻琴おまえ合コンに来るような男に告白されて喜んでるのか。」

鼻の頭を赤く染め、黒目がちの大きな瞳にはみるみる涙が溜まり今



にも零れ落ちそうになっている。その涙を堪えながら少しの反抗心を込め、震える声でポツポツと麻琴なりに言い返す。

「喜んでなんかいないもん・・・逆に困ってる。でも悪そうな人じやなかったよ。」

だから、どうしたら良いのかよく分からなくて、それで健兄に相談したくて・・・

そんなに怒られるなんて思ってなかった・・・そんな頭ごなしに何もかも決め付けるみたいに怒らなくても・・・そんなの・・・そんなのっ・・・」

テーブルの上には健悟と麻琴の狭間で生まれた行き違いが、心の雫となつてポタポタと零れ落ちた。一度零れると後はつられる様にして次々と溢れる。さっきまでの和気藹々とした雰囲気は完全に消え去り、不穏な空気が部屋中を蔓延していた。

自分の知らない所で男と一緒にいると思っただけで、ついカツとなつてしまったのは事実だが、怒ったわけではない。明らかな嫉妬だった。

「参ったな・・・マコ、ごめん。怒ったんじゃないんだ、泣くな」

どうしていいのかわからず、健悟は立ち上がると下を向いて泣いている麻琴の頭を、その大きな掌でそうつと撫でた。一瞬ピクンと肩が揺れ、シクシクと静かに、しかし本格的に泣き出した。

## 逃げ足の遅い男ご用心

「マコ・・・頼むから、もうそんなに泣くなつて」

一言も発せず泣き続けて、かれこれ20分になる。

宥めても嫌しても（すかしても）一向に泣き止まず健悟は困り果てていた。

何故たつたあれくらいのことでもこんなに泣くのか理解ができないのだ。

麻琴の頭を撫で続けていた手は動きを止め、目元を覆う前髪を掻き分けた。そして柔らかなきめ細かい白い頬に手の平をあてると、閉じられた瞼から無言で零れ落ちる涙を親指でぬぐった。

「どうして、そこまで泣く？」

「マコ、ちゃんと答えろ」

その質問にやっと瞼を開けるが、瞳は足元を見たまま俯いている。それでも僅かな変化に少しの進展を見たようで、健悟は小さな安堵感を感じた。

麻琴はそのままジッと何かを考え、数十秒後やっと発した声は酷く鼻声だった。

「・・・ごめんなさい。人前でこんなに泣くなんて大人じゃないね。どうしたんだらう私、おかしい。ズツ」鼻をすする。

「でも嫌なの。健兄にだけは・・・どうしても誤解されたくないの。合コン行って告白されて喜んでいいるなんて、そんな風に思われたいなかったよ。

そう思ったら、こんなになっちゃって。。。」

もともと親友の頼みを断りきれずに行った合コンであり、まして不埒な気持ちなど一切なく、後ろめたいことなど何一つしていないのだ。それを健悟にふしだらに思われた、軽蔑された、と思うとただただ悲しかった。

「分かった、ごめん。ちょっと言い過ぎた。マコはそんな子じゃないもんな。」

子供をあやす様に頬を撫でる。麻琴はやつと視線をあげ健悟を見つめた。

その視線はドキツとするほど大人の色を持ち、あやす健悟の手を止めてしまうほど惑わせた。

いつの間にこんな表情を見せるようになったんだ・・・

この瞬間、健悟から幼い頃の麻琴は姿を消した。意識して『大人の女』、『女性』から麻琴を切り離し、和樹のように兄妹のような関係で付き合おうとしてきたが、そんなことは無理なのだ。

「勘弁してくれよ・・・」

複雑な表情を見せる健悟に、麻琴はキョトンとしている。

今すぐ抱きしめてキスしたい衝動に襲われながら必死に耐える健悟の脳裏には、一つのストッパーがあった。親友であり麻琴の兄でもある和樹だ。

大学時代に何度となくクギを刺されている。

『麻琴にだけは絶対に手を出すなよ。もしもなんかあってみる、俺が医者になった時にメスで切り刻んでやるからな。悪いけど勿体無

いから麻酔なしだからな。二へへへっ』

医者になろうという人間に有るまじき発想と発言。そして冗談を含んでいるにしても不気味な笑い。背筋がゾワツとしたのを思い出した。

ダメ、ダメダメダメダメっ、あいつだけは敵にしたくない・・・

「麻琴、そういう顔は好きな男に見せる。できればその男は逃げ足の速いやツか、格闘技に長けているヤツがいい。」

「なに言ってるの??? 意味分かんない。」 瞼は腫れぼったいが涙はすっかり引いた。

「いいから聞けっつて。男ができたらな、できるだけ早く俺に教える。和樹より先にだ。」

「ここ重要だから守れよ。生き死にが関わってるからな、分かったかっ? おいっ まこ・・・と・・・

なんでだよお・・・おれ、また何か悪いこと言ったかあー?」

一旦引いたはずの涙が大復活していたのだ。和樹の存在を背中一杯に背負っている健悟には、この麻琴の涙はさつき以上に理解ができない。・・・女といえはもうこれか。

「お前、もしかして今日生理? 当たりだろっ イッ!!! ツー・・・」

言った瞬間 ダンツと左足を思いつきり踏まれた。予期せぬ出来事に目から火やら星やらが飛び散る。

「じゃあ聞くけど、健兄は逃げ足速い? 格闘技できる?」

「おまえええ」 加減しろよ。いてーなあ。。。

「.....はっ?.....」

## 他人の鼓動

「・・・俺？」

「そう・・・」

挑戦的に聞いたは良いけど、今となってはやや後悔の麻琴。答えを聞いたところで、その後の話の流れは全く見えない。

「俺のこと今関係あるか？」

「・・・うーん・・・」

健悟は健悟で、踏まれた足の先が熱を持ったようにジカジカとし始め『なんでこんなことになったんだ？』という疑問を抱きつつ、これ以上泣かれるのはご免と、一先ず素直に答えることに決め込んだ。

「まあ、格闘技は血を見るのが嫌だから降参だけど、そこそこ逃げ足速いかな。ヤバイと思いつながらヤバイことをするタイプだから、一目散は得意中の得意だ・・・ってこれ、そこそこ最低じゃね？」

「確かに・・・最低っぽいね。それで、それが何だっというの？  
どうして彼ができたなら健兄に言わなきゃいけないくなるの？」

『そうだ。健兄がどうしてこんなこと言い出したのかを聞き出せばいいんだ。』

『ヤバイ、この流れはヤバイぞ。なんとかはぐらかして一刻も早く帰ろう。』

二人はそれぞれにその場の打開策を練っていた。

「あ、いや、それは別にいいんだ。大したことじゃなくて・・・まあ、あれだ、和樹のヤツ、なんだかんだ言ってお前のこと箱入娘みたいになってたから、相手を見る目が厳しいと思うんだ。下手すると相手のことギツチヨンギツチヨンに・・・なんてさ、はははっ そうなったら困るだろうから、ま、余計なことだった。取り合えずは今の話は忘れる。すっかり忘れる。問題なし！」

ちよつとグダグダだけど、まあ、これで終結だな。

そう思ったのも束の間、ポーとしていそうだが、一筋縄でいかないのが麻琴だ。まだ終結には程遠いことを健悟は思い知らされる。

「なんか言ってること変。合コンで告白されたって言っただけで怒ったかと思えば、今度は相手ができたらお兄ちゃんよりも先に自分に教えるって、まるで応援するみたいなこと言うし。かと思えば最後には余計なことだから忘れるだなんて、一体どういうこと？ 矛盾だらけじゃない。」

『麻琴・・・女はいざと言う時にちよつと抜けてる方が可愛いんだぞ。』

今だけはもう少し馬鹿になってくれないかな。。。  
っていうか、もう降参。女に口で勝てるわけないんだ。』

そんな都合のいい希望と諦めを心の中で独りごちる。麻琴とて小学生の子供ではない。もう誤魔化しの効かない年であることを、この期に及んでも認識していないのは健悟くらいであろう。

「俺もよく分からん。さっきも言ったが、怒ったわけじゃないんだ。正直言えば、あれは嫉妬だ。麻琴が誰かのものになると思うと、妙

に苛立った。」

追い詰められた被告人が裁判官の前で、力の無い目で洗い浚い話す姿そのものである。

弁護士でありながら麻琴の前では余裕の欠片もなく、情けない限りだ。依頼者がこの姿を見たら間違いなく契約解除するだろう。

「だから、どうやって断つたらいいのか教えて欲しかっただけで、そんなんじゃないもの。」

「それは分かった。けどあの時、苛立ったのは事実なんだ」

「健兄……。」

このタイミングで言うの変かもしれないんだけど、私ね、好きな人いるみたいなの……。」

「なんだそれ、『いるみたい』っての。はっきりしないな。」

「だって、さっき気づいたばかりだから、まだその気持ちに馴染んでなくて……。」

「はは……お前らしいな。」

ま、俺にとやかく言う権利はないから、上手くやれよ。

あ、でもやっぱり俺、そいつの顔見たくないな。

麻琴は俺にとって……やっぱり特別なんだよ。」

もう少しで自分の抑えていた気持ちが目の前に飛び出してしまいうだった。一度それが表に出ると取り返しがつかなくなる。心の一部が千切れそうなくらいに辛い。そんな健悟に麻琴は追い討ちをかける。



「それ、無理」

「なにが無理なんだよ」

「顔見たくないっていう、それ、無理だから」

「おまえ結構さあ、意地悪いな。なーんでそんな捻くれてんだ。あれだな、和樹の悪う　いところ受け継いでるな。」

「ふーんだっ。だってその相手の人って、健兄みたいなんだもん。仕方ないじゃない」

「ほー、そりゃ　もんの凄い相手でございますな。だけど俺は絶対に顔なんて見ないからなっ。」

「……………あ、っ?!……………俺っ?」

麻琴はコクンと小さく頷いた。頬をピンクに染め、くすぐったい自分の気持ちを持って余すように、ネックレスのチェーンを指先でなぞったり引っ張ったりしている。

「いつ……………から?」

「っていつか、おまえ、俺を引っ掛けようとしてるだろっ」

「なっ　馬鹿なこと言わないでよっ。」

「いつからなんて分かんないけどっ!」

「健兄のこと好き……………みたい……………」

「だから、その『みたい』ってのおかしいだろうっよ。」

「俺は麻琴のこと好きだっってはっきり言えるぞ。」

「へえー、そうなの？ でも  
・・・えっ ホントに？」

「あっ ちょっと待て、なんか変だぞ、この流れ。  
なしっ 今のなし！ まっ まこと・・・」

麻琴は慌てふためく健悟の胸の中に自らスツポリと収まっていた。  
生まれて初めて聞く規則的な『トクトク』と鳴る他人の鼓動に、生  
命の愛しさを胸いっぱい感じて。

## 孤独な影

好きみたい

その曖昧な感情に戸惑っているのは、何を隠そう麻琴自身だった。

「好き」という言葉から、もっと深く、もっと温かい広がりのあるものがはみ出てしまっているような気もする。それ故『好き』という表現が的確なものなのか、その恋愛経験のなさから自信と積極性を奪う。

ふわっと頭上に健悟の大きな両手が触れ、そのままゆっくり下に降り頬を覆った。優しく上を向かされると、そこには穏やかな目をした健悟の顔があった。和らいだ表情のまま落ち着いた声で話し始める。

「俺は麻琴のこと、好きとかのレベルじゃなんいんだ。

ある時、気がついたら麻琴のかあさんのお腹が大きくなって俺聞いたんだ。

「お腹太ったの？」って。そしたらスッゲー優しい顔で笑ってさー、

「この中には愛がいっぱい詰まってて、もうちよっとしたら愛のお裾分けに出てきてくれるから楽しみに待っててね」ってさ。2ヶ月くらいしたら、メチャクチャ小さい赤ちゃんのお前を抱っこして『ホッペ触って良いよ。幸せになれるよ』って。で、恐る恐る触ったら、子供ながらも命の重さ感じちゃってさー。幸せとか愛って、命なんだって思ったよ。なんか、ただ漠然と『この命を幸せにしないきゃな』なんて思ったのよく思い出すんだ。」

そう言くと、じっと黙って聞いていた麻琴の半開きになった唇を、

そつと静かに右の親指でなぞると、人差し指で顎を支え、軽く啄ばむように唇を重ねた。そしてもう一度、今度はしっかりと麻琴を確かめるように。

思いもよらぬ健悟の口づけに目を閉じるタイミングも忘れ、ドアをドンドン叩かれたように心臓は高鳴り、だけど体はただ棒のように立ち尽くす。

男の色気を漂わせるように健悟の右目が開き、意味ありげに目を細めると、左の手で目を覆われ自然と目を閉じられた。

両手を背中に回され抱きしめられると、大切に守られているような安らぎの中にいとも簡単に落ちた。

「麻琴 愛してるよ」

麻琴の父さんと母さんの分も、おれ愛してるよ」

「健兄・・・ありがとう。嬉しい・・・」

もう、やだ。涙が・・・涙腺壊れちゃったみたい」

「ははっ、明日大丈夫か？目腫れて開かないっていいことないだろうな」

「大学休みだし、幸せだからいいもん。」

ね、ちよつとお酒でも飲む？」

「お、いいね。和樹の仕事中に悪いけど、ちよつとだけ飲むか・・・ゲツ」

今になって和樹の存在を思い出し、これはかなりヤバ目なことにな

りそうだと一瞬にして冷や汗をかいた。しかし今更引き返せるはずもなく、たった数秒前までは祝賀の意味で飲む気であったが、こうなったら自棄酒に切り替えるしかなさそうだと、腹をくくった。麻琴はそんな健悟の気も知らず、ビールとグラスを用意している。小さなハミングが耳に気持ちいい。

帰宅すると時計は23時45分を指していた。

健悟の自宅は麻琴の家から歩いて10分くらいの所にある。築27年、あちこちに痛みが出、最近では悪徳も含めリフォーム業者からのダイレクトメールがせつせと送られてくるようになってしまった。段差も多く、歩くと所々ギシギシと音が鳴り静かな家の中に響く。自分が生まれる直前に家が建ったと聞いている。両親はホームドラマみたいな夢のある幸せな家庭を想像して建てたに違いない。だが、ここで両親と健悟の3人で暮らしたことは一度も無かった。母親は健悟を生むと22歳の若さで亡くなったからだ。出産が原因だが、もともと病弱だった。父親は麻琴の父、寛和と幼馴染で、当時21歳だった。学生結婚だった為、父方の祖父に金銭援助を受けていたが、大学を卒業し、銀行に勤め始め自立した。3歳までは祖父母に世話を見てもらっていたが、相次いで他界し、忙しい父の帰りを待つ間、寛和の家で預かってもらっていたのだ。寛和の妻、百合子は同じ年の和樹と同様、膝に乗せたり抱きしめたりと、分け隔てなく接してくれた。いや、むしろ母親の愛を知らない健悟の方を強く抱きしめていたのだろう。『これは百合子ママのギューで、こっちのギューは健ちゃんママの分だよ』と、和樹よりいつも一回分多く抱きしめていた。すると足の先から頭のとっぺんまで、なんとも言い様のない幸福感に包まれたものだ。

その後、健悟の父親は36歳で女と蒸発。残された健悟は15歳だった。未だに毎月何処かから現金書留で10万送られてくるが、一度も姿を見せたことはない。もし会う機会があるのなら、恨み言の一つや二つよりも、お前のことは思い出すのも嫌だから、その存在を思い出させる毎月の金は要らないと言ってやりたいと、高校生の頃から思っていた。

健悟は和樹とトップ争いをするほど優秀だった。推薦入学で奨学金制度を受けていたが、それでも学費はかかる。禁止されていたが特別に許可を得てアルバイトをし、生活費と学費を稼いだのだ。父親からの仕送りは苦しくても使いたくなかった。頼りたくなかったのだ。

その生活を一番心配したのが寛和と百合子だった。一緒に住もうと言われたが、母親が住みたがっていた家を放置する気になれず断った。だが百合子が食事だけは家で摂るよう頑固に引かず、有り難く甘えることにした。また、毎週土日はあれこれと理由を付けられては泊まらされたのだった。お節介だけど、どれもこれも愛に満ちた掛けがえの無い大切な思い出だ。

電気も点けず、2階にある10畳の自分の部屋の窓を開ける。真冬の空は澄んでいて、満月に欠ける月が煌々と夜を照らしていた。窓枠に腰を下ろすと、斜め後ろに健悟を模った影が床に落ちた。

「かあさん、麻琴のこと本気だよ。」

月夜に百合子の笑顔を思い浮かべ、麻琴への想いを口にする。

## 告白の行方

昨日の急展開に若干、いや、かなりのぼせている麻琴だったが、柳瀬への連絡を忘れていたわけではなかった。

「健兄に相談するつもりだったのに、すっかり・・・」

呟きながら昨日の柔らかな優しいキスを思い出し、一人頬を染める。それもそのはず、麻琴にとっては生まれて初めてのキスだったのだから。異性関係に乏しく、告白を受けても尻込みしてしまい、オロオロと謝っては断り逃げ続けてきたのだ。お断りする時に、できるだけ傷つけないようにという配慮の気持ちはあるのだが、相手に「彼氏がいないなら付き合っ」と言われると、正直者の彼女は「彼氏はいないのですが、ごめんなさい。私、ちょっと無理です・・・」と泣きそうな顔で断ってしまうのだった。これでは「あなたとは無理」と言っているようなもの。相手へのダメージはそれなりに大きいだろう。

やはり明日美佳に相談してみよう。合コン用の上手い断り方、ルールが存在するかもしれない、と麻琴らしく真面目に考えていた。

一方、健悟は健悟で、別の告白に悩んでいた。何時、どのタイミングで和樹に麻琴とのことを告白するか・・・と。おそらくは99.9%良い顔はしないだろう。ただ、遅かれ早かれ告白しなければいけないのだしたら、胃に穴が開きそうな思いだ、精神衛生上も早い方がいいだろうとは思っ。

両親他界後の和樹は、まさしく親代わりだった。大事にし過ぎた面も否めないが、健悟から見ても立派だった。麻琴には言えないが、

和樹は麻琴のことでどれだけ自分を犠牲にしてきたのだろうと思うことがある。学校ではコツコツと真面目に勉強し、恋人も作らず真っ直ぐ帰宅する。手分けしていたというが、本当だったら親任せの洗濯、買い物、調理等の家事全般に、麻琴の教育やそれぞれの進路。大の大人であつても頭を悩ませる問題に何度も直面しただろう。その一つに性教育があつた。男は友達同士で面白おかしく学ぶことができるが、女の子の事情はよく知らない。一度だけ真面目な疑問として怒られるのを覚悟で、そのことを聞いたことがある。

- 麻琴の性教育って、誰がいつするんだ？ -

和樹は何でもない風に言った。

『10歳の時、医学書を開いて生命の誕生から逆送して説明した。少し科学的だったかもしれないけど、結構真剣に聞いてたよ。でもまだ完璧じゃないんだ。こういうことって、その年齢で理解できることと出来ないことがあるだろ。今の年齢ではそこまだけど、また少し成長したら、その時に見合った内容の教育が必要だと思ってる。』

彼は18歳になったばかりだった。麻琴のことなら、どんな小さなことでも手を抜かず、一つ一つ丁寧にやってきたのだ。その和樹から、いわば『掻っ攫っていく』のだ。そう簡単にいかないのは目に見えていた。

携帯メールの着信に気づいたのは午後3時だった。どうやら4時間前に送信されていたようだ。外の空気を吸おうと、缶コーヒー片手に病院の屋上に来て、曇り空の下たまたま何の気なしに携帯電話を



取り出したのだった。

『お疲れのとお悪いが、できるだけ早く話したいことがある。時間を作ってくれ』

和樹は最近の健悟の変化に少なからず気付いていた。最近と言っても3年くらい前からのことだが、以前に比べボーと考え事したり、落ち込んだり、なにかに悩んでいる様子を度々垣間見るようになったのだ。ある時、酒の場で聞いてみたのだ。

『どうした、また女のことか』

『まあな。』

と暗く答えた。会話にも乗り気ではなかった。

『もしかして結婚とか考えてるのか？』

その質問にそれまでと少し違う反応を見せた。

和樹の顔をじっと見たかと思えば、視線をテーブルのグラスに外し、そしてこう答えた。

『きつと付き合うことも無理だと思う。そいつの保護者が手を繋ぐ事も許さないだろう。』

酷く落ち込んで、一生懸命諦めようとしている姿が和樹の目に映った。

・もしかして、あの時の女と上手くいったのか？だったら聞いてやるわ。・

和樹はそんな軽い気持ちでメール返信をした。

『今晚7時、うち来いよ。麻琴になんか美味しいもん作らせる。酒は持参でよろしく。』

この返信に健悟は仰け反った。早めとは書いたが、今日の今日とは思わなかったのだ。しかも麻琴のいない居酒屋かどつかでと思っていたのだ。だが、『お宅じゃ嫌だ』と無碍に断ることもできない。もう仕方ない、麻琴には食後少しの間は自室に行ってもらおう。

いつの間にか外は雨雲を寄せ、ポツポツと冷たい雨を落とし暗雲を漂わせていた。

## 信頼

狂うことを知らない時計のように、約束の7時ピッタリに玄関前に到着した。従来几帳面な健悟だ、彼にとつては特別珍しいわけではない。むしろ予定の時間がズレたりすると妙に焦り罪悪感が押し掛かるため避けたいところだ。

勝手知ったる我が家とばかりに玄関ドアを開けると思いきや、今日の健悟の行動はいつもと違った。人差し指でキツチリとチャイムを押し、ご丁寧に両足を揃えて家主のお出ましを待ったのだった。

待ったのだが・・・家の中に人の気配は感じさせるものの家主はなかなか登場しない。訝しがりながらももう一度チャイムを鳴らす、やはりチャイムへの反応はない。

「なんだよ、普通チャイム無視するかあ？」

仕方なく玄関ドアに手を掛けようとした時、いきなり向こう側から開けられ拍子抜けした。

「何なんだよ一体。居るならとつと出るよっ」

少しイラついた様子で文句を言う。

言われた和樹は心外と云わんばかりに口を尖らせ言い返す。

「お前こそ何なんだよ、いつもはとつと勝手に入ってくるくせに」

そうだった、今日は『下手に 控え目に 穩便に』をモットーにする予定だった。

口の利き方と行動には気をつけなければ・・・

「ああ、いや、一応礼儀かなーなんてさ。あ、これ酒な。ツマミも少しある」

明らかに取り繕う。

和樹は何か変だと感じつつも、これから話されるであろう惚気に対する照れ隠しと勘違いし、ニヤニヤとしながら酒とツマミの入ったビニール袋を受け取った。

「サンキユ。まあ 取り敢えずは入りやがれ、この幸せヤロー はっはっはっ」

いつもの戯言に、いつもの突っ込みが返ってくるかと思いきや、何故か健悟は一瞬ビクツツと和樹の目を見てパツ逸らした。突っ込みの空振りにあつた和樹はズッコケそうになりながらも気を取り直し、ヤレヤレと健悟の肩をポンポンと軽く叩いた。すると今度は両肩をビクンツと振るわせ、誰がどう見ても脅えた風なのだ。いよいよオカシイ。怪しさ満載なのである。

和樹は直感で『何か疚やましいことがある』と感じ取った。

「健悟、まずはメシ食おう。酒は話が終わってからのほうが良さそうだな。」

「ああ、そうしよう。・・・麻琴はどうしてる」  
昨日の今日である。和樹への告白前に、もう一度麻琴の気持ち確かめておきたかったのだが・・・この急展開だ、麻琴と二人きりになることはほぼ無理だろう。

「どうもこうも、なんか知らんがメチャクチャご機嫌なんだ。料理も鼻歌歌いながらで浮き足立ってて、後数時間したら飛び立つ勢いだ。ありゃなんだ？彼氏でもできたかな。健悟なんか知ってるか？」

知ってるも何も・・・ここで「知らん」と言えるか？俺。　　さてよ、  
逆に「知ってる」とも言えるか？俺。　　うーーーーーん・・・

「おい、聞いてるのか？大丈夫かよお前。」

チラッとこちらを振り向きながら和樹は奥のリビングへと入っていく。

「ちよつと悪い、俺トイレ！」

バタバタとトイレへ駆け込んだ。

「なんだアイツ。妙に静かで気色悪いと思ったら腹痛かよ。食えんのかな・・・」

まさかの誤解である。さつきまでの直感はどこへやら、である。

『うわー、マジやべえ。どーすつかな。』

トイレの中、便座の蓋の上に腰掛け一人ブツブツと呟く。心臓は半分  
に千切られどっかの誰かにお手玉をされているみたいにシヤカシ  
ヤカシヤカシヤカと小刻みに鳴っている。

『もう、殴られてもいいや。こんな恐怖感耐え切れん・・・！』

パンツとトイレのドアを乱暴に開け放つと、もの凄い形相でリビング  
の和樹のもとへ駆け寄った。食卓テーブルの上には麻琴の作った  
料理がキレイに並んでいた。和樹は左手前のいつもの椅子に腰掛け、  
麻琴はキッチンの換気扇を止めたところだった。健悟を見つけると

はにかんだ嬉しそうな表情を見せたが、そんな麻琴の表情は今の健悟には見る余裕がなかった。

ここに来るまでに考えたことは、和樹の信頼を無くすであろうという一点だった。それは健悟にとって親友を無くすことと一緒にだった。

## 二人の狭間で

「お前、スゲー顔色悪いな。なんか変なもんでも食ったのか？」

一足先に椅子に座っていた和樹が見上げるようにして言った。顔面蒼白、眉間に皺、目は釣りあがり鼻は横に最大限に広がっていた。ついでに鼻息も荒い。所謂「興奮状態」にあった。おまけに今日の『3つのモットー』もトイレの中に置いてきてしまった。

「和樹、落ち着いて聞いてくれ！」

「ああ、お前も落ち着けよ」砕けた感じで笑い混じりに返す。

「単刀直入に言う」  
言葉を切り、呼吸を整える。

「麻琴をくれ。頼む」

一瞬で空気は凍りついた。健悟を見上げる和樹からは、見る見る余裕の表情は消え失せ、軽蔑を含む無表情なものに入れ替わった。麻琴は思いもよらぬ健悟の言葉に、ただ立ち尽くしている。そして心の中には色んな思いが駆け巡った。

どうして今なの。もっと落ち着いてからでも遅くは無いの。どうして先に相談してくれなかったの。どうして、どうしてなの・・・？

静寂の中、口火を切ったのは和樹だった。あくまでも冷静に、沈着に、そして体温を感じさせない冷たい表情と声でゆっくりと。

「はい、どうぞ」

と差し出すとでも思ってるのか。そんな訳無いよな。  
お前は記憶力が良いから、俺が言い続けてきたことを覚えているはずだ。

聞かなかったことにするよ、話はこれで終わりだ。  
座れよ、メシ食うぞ。」

「待てよ、俺の話聞いてくれよ!」

「健悟、もう良いから座れよ。食うぞ。」

溜息混じりで今度は健悟の顔を見ようともしない。話すだけ無駄だと云わんばかりの態度だ。  
聞き取れないくらいの声で健悟は呟く。

「こんなんでも・・・こんなんでも食えるかよ。」

しかしその声はしっかりと和樹の耳に届いている。そして今までに見たこともないような極めて寂しげな表情で、辛辣な言葉を差し出した。

「じゃあ、もう二度と来るな。麻琴とも会わな。」

・・・残念だよ。勿<sup>ぶんけい</sup>頸<sup>のこう</sup>之交を断ち切るなんて思ってもみなかったよ。  
一生の付き合いだと思っていたのにな・・・」

和樹の目に薄っすらと涙が浮かんでいた。

麻琴にはこのやり取りが上手く?み込めない。どうして兄がこんな  
に意固地なのか、健悟が何故、ここまで兄に対して臆するのか。

味噌汁の湯気もいつの間にかゆるゆるとしたものに変わり、健悟は  
黙ったまま微動だにせず、ただ無闇に時間が過ぎていく。麻琴はゆ  
っくりと健悟の隣に立つと、並んで兄の方へ向いた。



「お兄ちゃん、健兄、どうしたの？  
どうして物凄く話しが拗れているの？  
お兄ちゃん・・・私、もう二十歳だよ。  
好きな人が出来ても不思議じゃないよ。」

「分かってる。だけど健悟はダメだ。」

「なにそれ・・・どうして？」

「健兄を好きだと何がいけないの？」

「ダメなものはダメだ。口ごたえをするな！」

同時に握った拳でテーブルをバンツと叩くと、驚いた食器たちが一斉にガチャツと鳴った。過去をみても兄が声を荒げたのは初めてだった。その勢いに一瞬怯んだものの、説明がない分、兄への不信感がつのるばかりだ。麻琴には意固地で一方的で傲慢に映ってしまう。

「変・・・だよ。ちゃんと説明してくれなきゃ納得できない。」

「私が健兄を好きになっちゃいけないの？それはどうして？」

「お兄ちゃんのこと・・・嫌いになりそう・・・。」

いつの間にか麻琴の目からは、重さに耐え切れなくなった涙がポトポトと落ちていた。

## 兄妹

「頼むから兄妹喧嘩だけはしないでくれ」

麻琴に言った言葉だったが、和樹から具の根も出ない言葉を浴びせられた。

「原因を作っておいて何が兄妹喧嘩だけはしないでくれ、だ。兄弟のいないお前になにが分かる！」

「お兄ちゃんっ！」

健兄に謝って。。。謝ってよ！

そんなの、お兄ちゃんらしくないよ。

健兄に兄弟がいないのは健兄のせい？違うよね？」

「麻琴、いいんだ。

・・・和樹、また日を改めて来るから」

そう言うと不安そうな麻琴に『大丈夫』という目配せをしドアの方へ向かった。吸い寄せられるよう後に続く麻琴の背に「放っとけ！」と兄の声が聞こえたが、振り向くことなく健悟を追った。

玄関に続く廊下はピンと冷えた空気を持っており、まるで兄の心を映し出したかのようだ、と麻琴は思った。

「健兄・・・ごめんね。

お兄ちゃんの言ったこと本気じゃないから気にしないでね」

「いや、いいんだ。和樹の言ってることは間違いじゃないし。

それより麻琴、ごめんね。俺さ、コソコソしたくないばかりに急ぎ

すぎた。

また話し合いに来るから。じゃあな。」

リビングに戻ると和樹が冷蔵庫からビールを出して飲んでた。いつもは必ずグラスに移して飲むのに、直接缶に口を付けてゴクゴク飲んでる。

「ご飯食べないの？おかず沢山作ったんだから、ちゃんと食べてよね」

「後で食べるよ。」

「……………健悟、どんな様子だった」

言い過ぎたと反省しているのか、物静かないいつもの兄に戻っていた。

「お兄ちゃんの言ってることは間違いじゃないって……………多分すごく傷ついてると思うよ。」

少し責めるようにそう言うと、和樹は「悪かったな。カッとした」と小声で呟いた。

後悔しているのだろう。もともと思いやりのある穏やかな性格だ。人を励ましたり勇気付けたりすることはあっても、誰かを罵ったり傷つけることなどしたことがない。また、麻琴もそんな兄を見たことがなく、それ故、つい数分前の出来事が信じられないのである。

「麻琴、悪いがメシ持ってってやってくれないか」

「行っていいの？」 無意識に顔が綻ぶ。

「直ぐ帰って来いよ。許したわけではないから誤解はするな」

今日のお兄ちゃんはやっぱり変。これ以上は話さないほうが賢明と悟り、麻琴はおかずをタッパに詰め始めることにした。

紙袋からタッパを取り出し、小さなテーブルに置いていく。10畳の健悟の部屋はタンス、ベッド、小さなテーブルに、テレビ台があるのみの至ってシンプルな小ざっぱりとした部屋だ。2週間前にテレビが壊れてからは「そのうち買う」と言いつつも買う気配はない。天気予報とニュースは新聞で事足りるのだから、さほど必要性もないのだろう。

「お兄ちゃんが持って行って。言い過ぎたって反省してた。ね、どうしてあんなっちゃったの？」

当然の疑問だ。しかし大学時代の「女性遍歴」が原因しているとは今の麻琴にはとても言えない。何人も女性と付き合っても愛せなかった・・・という、本人にとっては苦しく辛い事実を、和樹はまだにただの「女遊び」と誤解しているのだ。その誤解を解くのが先だ。

「麻琴、ごめんな。今はまだ上手く説明できない。だけど麻琴のことは本気だ。」

ちゃんと説得するから、俺のこと信じてくれるか？」

「・・・うん。私は健兄のこと信じてるよ。」

一点の曇りもなく、健悟を真っ直ぐ見つめる。甘い言葉はないけれど、「信じて」という言葉が麻琴にとっては愛の囁きに聞こえた。

あれから何の進展もないまま3日が経っていた。授業も上の空で気付くと終わっているという感じた。5時半に近くの喫茶店で美佳と待ちあわせをした。先に着いた麻琴はレモンティーを頼み美佳を待った。10分くらいするとカランカランという乾いた鈴の音が鳴るのと同時に店のドアが開いた。ゆっくりとした足音が向こう側から近づいてくる。

「麻琴ちゃん」

聞き覚えのない声の方を見るとサラリーマン風の若い男が立っていた。親しげな表情に見覚えがあるが思い出せない。「誰・・・？」声にこそ出さないが、目がそう言っていたのだらう。男は苦笑し頭をカリカリと掻きながら言った。

「覚えてない顔だね。柳瀬寛人<sup>やなせひろひと</sup>っていったら思い出してもらえるかな。」

## 新しい関係

「柳瀬 寛人・・・さん・・・？・・・あつ」

そう、生まれて初めての合コンで、お試しに付き合わないかと麻琴を誘った青年、柳瀬だった。スーツを着ている為ピンとこなかったのだ。

「うーん、忘れられてたのはちょっとショックだけど、なんとか思い出してくれたみたいだね」

「いえ、違います。ちゃんと覚えています。

ただ、スーツ姿だったものだから、随分雰囲気も違って・・・あの、ご連絡差し上げなくてごめんなさい。ちょっと立て込んでいたもので」

「ということとは、連絡はくれるつもりでいたんだね。

実は、もう待っていていられなくて山本さんに頼んで・・・その・・・」

「え、山本って、美佳のことですか？

そういえば今、美佳とここで待ち合わせなんです  
美佳になにか頼んだんですか？」

柳瀬は立ったままシドロモドロとはつきりしない。さっきと同じようにカリカリと頭を掻いている。困った時の癖なのだろう。

「要するに、今日、この時間、ここに麻琴ちゃんと二人で会えるようにセッティングしてもらったんだ。怒った？」

「そんな・・・私、美佳が来るって言うから・・・」

連絡をしない自分にも責任はある。待つている方はさぞかし今か今かと焦らされている気分になるのも当然だろう。名刺を渡された時、「嫌じゃなかったら連絡ほしい」と言っていたのだから、そこまで責任を感じるほどでもないのだが・・・。

「怒ってないです。私のはっきりお返事しないのが悪かったです。ただ、ちよつと驚いてますけど・・・」

「本当に怒ってないの？」

「はい。あの、ずっと立っているのも何ですから、お座りになって下さい。」

「良かった、ありがとう。」

ホツとしたように笑顔で椅子を引き、ストンと腰掛ける。清潔感あるスーツ姿は若さの特権か、健悟のスーツ姿とはまた違う魅力がある。爽やかにコーヒーを頼む柳瀬をポーと見つめる。

小さな喫茶店の最奥にある二人掛けテーブルは、本来親密な恋人同士の隠れ家的スポットであるが、麻琴はこの落ち着いた場所が好きで、空いていれば必ずここを選んだ。しかし今日は失敗だ。美佳に初めて恋愛の相談をするつもりでこの席を選んだのだが、相手は柳瀬だ。そういうわけにはいかない。そもそも健悟と兄以外の男性には何を話したら良いのかさえ分からないのだ。

「それで早速なんだけど、この前の話・・・お試してもどうかっていうあれなんだけど、考えてくれたかな？」

そうだった。美佳はお試しだから試してみるべきとすすめたが、そ

んな気にはどうしてもなれなかった。俯いて言葉を選んでいると、湯気を上げた香り高いコーヒーが柳瀬の前に運ばれてきた。黙っている麻琴に柳瀬は優しい眼差しを向け、小さな溜息とともに苦笑する。

「麻琴ちゃんは、今どうしたら僕を傷つけないで上手く断れるかって考えているでしょう」

的を射た以外な言葉に、驚きの表情で柳瀬の顔を見る。

「柳瀬さんに一つ聞きたいんですけど・・・」

「なに？」

「お試して・・・私にはちょっと無理です。初めから品定めをして、気に入らなかつたら返品・・・ですね？柳瀬さんはいつもそんな感じで女性とお付き合いを始めるんですか？」

「やっぱり・・・。実はその『お試し』って、ちょっと不適切だったなって思ってたんだ。麻琴ちゃん真面目そうだし、軽薄な感じ受けただしょ」

「ちよつと・・・」

「正直だね。僕も正直に言つと、お試しで付き合い合ったことはないよ。結局僕の本音っていうのは、今すぐ恋人になってほしいとか、そういうことではなくて、時々会って映画を観たり、食事をしたり、何でもいいんだけど同じ時間を過ごして人間関係を作っていきたいんだ。もちろん二人きりじゃなくてもいいし、特に決まりごとのない自由な関係を築きたいなって思ってるんだけど。」



「友達……？ですよね。」

「違うよ、なにも友達に括らなくてもいいんだ。」

「何かに当て嵌めなくても良い関係。さっきも言ったけど自由な関係。」

「恋人でも友達でもない関係……？」

「そうそう。新しい関係を作っていく。未知の世界なんだけど、ちよつと面白くてワクワクしない？」

新しい関係……。確かにそれは未知の世界で魅力的だ。はっきりしない関係性にモヤモヤとしたものを感じそうで迷いはあるけど、その反面興味もある。

柳瀬は爽やかな笑顔で麻琴の答えを待っている。傲慢の秘密基地にこっそり招待してくれているような、そんな楽しげな少年の眼差しに麻琴は引き込まれるように返事をした。

「楽しそうですね。いいと思います。」

## 光

柳瀬との新しい自由な関係とは、一体どんなものになるのだろう。

『急がないで、のんびりと楽しみながら、最良の関係を築けたらいいね』

帰り際、そんな風に言われた。そして『合コンの時は一人突っ走ってゴメン』とも。

麻琴が悩んでいたことを彼は感じていた。

「この前は一方的で悪かった」

夜9時過ぎ、健悟の事務所近くにある居酒屋で二人は待ち合わせていた。居酒屋のカウンターというのに二人の手元にあるのはウーロン茶だ。真剣な面持ちの二人の周りでは出来上がった客らが大きな声で騒いでいる。

「いや、当然だと思っよ」

「……………健悟、麻琴のことだけど、まさか本気じゃないよな」

「本気だ。本気なんだ」

和樹は顔をしかめる。

少しはたじろぐとか、悩むとかしろよ。堂々と言いやがって心の中で毒づいてみる。

「麻琴はダメだ。本気でも何でもダメだ」

「和樹、理由を知りたい」

「理由？俺に聞くまでもないだろう。それとも自覚がないのか」

「……俺は学生時代に女と付き合っただけで長続きしたことがない。そのことか？」

「ああ。取っ替え引っ替えしてたよな。

来るもの拒まずって感じで、顔も名前も覚えていない女なんか何人もいるだろう。」

確かに覚えていない女もいる。今となっては自縄自縛と言えよう。しかし今、この自爆から開放しないことには、麻琴との今後は暗いものになる。

「和樹、ダメだここ。落ち着かないよ。外に出ないか」

その言葉に和樹は何も言わず立ち上がると、真っ直ぐレジに向かった。健悟が財布を出したが「小銭を減らしたいから」と、手で遮った。

店を出ると冷たい風が頬を撫で通り過ぎた。道行く人々も肩を竦め足早に過ぎ去って行く。

二人は10分くらい無言で歩いた。目的地はなく、ただ黙って歩いていた。

健悟はなにをどう話そうかと思案していたが、結局は口が勝手に喋るままに任せることにした。ゆっくりと前を歩く和樹に向かって話し出す。

「和樹、俺 女弄んだわけじゃないぞ。俺なりに真剣に相手のこと理解しよう、愛そうとしたけど、俺には愛するってことがよく分かってなかったんだ。」

浅はかで子供じみてるけど、体を重ねたら愛せるんじゃないかと本気で思っていた時もあったよ。」

いつの間にか二人とも立ち止まっていた。和樹は一言も発せず、相槌もなく、ただ一点遠くを見つめたまま黙って聞いている。

「情けないけど、一人も満足に愛せなかったけどな……。  
だけど麻琴は……麻琴だけは違うんだ……」

「なにが違うんだ。麻琴だって今までと同じなんじゃないか。  
今は好きになってる気がしているだけで、また少ししたら」

「違うんだよ！」

麻琴は決定的に違うんだ。

俺の方から好きになってた……」

「分からん。何がどう違うのかサッパリ理解できない。」

やっと健悟に目を向けるが、この前と同じく突き放すような冷たい視線だ。

「自分から好きになったことが今まで一度もなかったんだ。」

麻琴を大切にしたい、愛しいという気持ちに気付いて戸惑ったよ。  
麻琴だけはダメだってお前にもクギ刺されてたし、3年我慢した。  
我慢したら、この気持ちもいつかなくなるかな、なんて思ったんだ  
けど、むしろ深まる一方でさ……

まるでお前に愛の告白してるみたいだな。馬鹿みてー」

「こつ恥ずかしいヤツめ。もうやめてくれ。  
・・・麻琴はどうなんだ。お前のこと・・・」

「受け入れてくれてる」

だから もう少し控え目に言えっつーの。涼しい顔して当然み  
たいに言うなっ

「ふうーん・・・まあ、その、あつちはまだもう済んでるのか・・・？」

あー なに聞いてんの俺は。聞きたくない、言ってくれるな健  
悟

「いや、まだ指一本触れてない」

マジで？じゃー、今後もその調子でいってくれ  
って、『まだ』って何だ、『まだ』って

「あつ！ キスはした・・・しちゃった」

はあ〜？『しちゃった』だあ？

「お前・・・今さ指一本触れてないって言ったじゃねえか。」

俄かに殺気立ってくる和樹の目に、些か恐怖を感じながらも引くこ  
とはできない。

「頼む和樹、麻琴とのこと認めてくれ。こそこそと付き合いたくは  
ない。」

「あたり前だ！」

「じゃあ、いいんだな」

「なんで そーなるんだ！」

「お前、本当に麻琴に嫌われるぞ」

「ぐっ……」

いつの間にか立場が逆転していた。健悟はつつすらと勝利の光を見た気がした。

## 子離れの時

「もし好きになっちゃったらどうするの？」

「そんなこと・・・」

「ないとは言えないよね？」

「でも・・・私・・・好きな人いるし・・・」

「うそっ！ 誰っ？」

昨日柳瀬と会った例の喫茶店の同じテーブルで、今日は美佳と向かい合わせに座っている。

《昨日はごめんね。その後どうなったか経過報告求む。

6時ジャスト、場所は きこりの森。

では、楽しみにしてるぞよ》

今朝早くにこんなメールが入った。そして今、話の流れで健悟のこ  
とまで聞き出されている始末だ。切れ長の大人びた目元に、若干子  
供っぱさの残る思考回路が、今の麻琴を振り回していることなど美  
佳は気付いていない。

美佳はいちごパフェの生クリームをスプーンですくったまま止まっ  
ている。

「神様に試されているのよ。思い通りにいかない恋愛って、素敵い  
・・・」

ポワーンと何故か酔いしれる美佳。ちっとも相談相手には適してい  
なかった。しかしここまで話したのだ、少しはアドバイスが欲しい。  
昨夜遅く帰ってきた和樹は、彼にしては珍しくベロベロ状態に酔っ

ており、会話らしい会話はしていない。まさか和樹と健悟が自分たちの関係について一つの結論を出したことなど、今の麻琴は知る由も無い。

「美佳あ・・・お兄ちゃんどう説得したらいいと思う？」

こうなる前は本当に仲良くお喋りしたり、買い物に行ったりしてたのに

最近あまり喋らなくなっちゃったし、家で顔会わせても寂しいの。」

「そんなの簡単よ。」

お兄さんも本気の恋愛すればいいだけじゃない。」

非常に子供じみた短絡的発想であった・・・。

帰宅すると和樹はソファーに寝そべりテレビドラマを観ていた。主人公の小柄な女の子が片思いの彼を相手に、毎回何かしらの事件を起こしてドタバタするのだが、最後には何故か上手いこと解決するのだ。そしていつも告白出来そうでも出来ないもどかしさと、彼の気持が主人公に傾きかけているドキドキ感が視聴者を虜にするというラブコメディだ。麻琴も毎週欠かさず録画して観ている。

「ただいま。メールしたけど遅くなってゴメンね。ご飯食べた？」

テレビをボーと眺めていただけだったのか、笑えるシーンでも無表情だった和樹が麻琴の声に嬉しそうな顔をしてソファーから身を起こした。



「おかえり。適当に食べたよ。  
寒かっただろ。風呂沸いてるから入っておいで。」

そこには険しさのない、いつもの穏やかな優しい兄の顔があった。  
和樹の機嫌が悪かったのはたった数日であつたが、麻琴には何ヶ月にも感じられた。これまでどんなに小さなことでも和樹には相談してきたし常に頼ってきたのだ。突き放されたように感じていたこの数日間、言いようの無い孤独感を味わつた。それは両親が亡くなり、その上兄までもなくしたような、そんな錯覚によるものかもしれない。

「お兄ちゃん・・・もう、怒ってない？」

「・・・怒ってないよ。」

怒ってないからお風呂に入っておいで。  
後で酒飲みながら少し話そう。ツマミは健悟が持ってきたのがあるからそれ出そう。」

「ん・・・ありがとう。」

お風呂入るね。」

背を向けた途端、堪えていた涙が零れた。慌てて涙を拭くと急ぐようにリビングを出た。

和樹が麻琴の声に嬉しそうな顔を見せた時から、ジワジワと瞼には涙が溜まっていた。和樹はすぐに気付いたが、それには知らぬ振りをした。辛くても、嬉しくても、麻琴の気持ちは手に取るように分かるからだ。思春期からの女の子としての麻琴の変化にも、ほぼ見落としたことが無い。それ程、一冊の本を熟読するように麻琴を観察してきたのだ。

麻琴の二十歳を期に、一般でいう「親離れ・子離れ」を意識し、和樹は仕事中心の生活に入り始めていた矢先の出来事であった。時間がなかなか合いくなくなり、やっと時間が出来たと思えば健悟のいきなりの告白だ。和樹のペースは一気に乱され精神的ストレスにもなった。麻琴の顔を見ると健悟に対する嫌味の一つも言いたくなる始末で、だったら話さない方がマシかと口数が極端に減っていた。和樹にとっては優しさから来る苦肉の策ではあったが、麻琴にはその真意は見えるはずもなかった。

## スパイラルの前兆

風呂から上がり髪のもも乾かさず真っ先にリビングに向かった。久しぶりに美味しいお酒が飲めると思うと鼻歌混じりで足取りも軽やかだった。兄はその姿に「わかり易いヤツ」と苦笑いを見せたが、いつものように「なによっ！」と口答えすることはしなかった。どちらかというと和樹は健悟よりも麻琴のことを大人として見ているが、濡れた頭にはピンクのタオルを巻き、アイボリーのパジャマを着た姿は兄の目にも無邪気で可愛らしく映る。

「風呂上りはやっぱビールだろ」

「だねっ」

二人は互いにビールを注ぎ合い「じゃあ、乾杯っ」とカチンと軽くグラスを合わせた。無言でゴクゴクと飲み干したのはやはり麻琴の方だった。

「プハーー うまっ！」

「なんでビールを飲むと、必ずと言って良いほど見知らぬオヤジが乗り移るんだ・・・」

「失礼な。本物のオヤジに言われたくないしっ」

「うわぁ・・・いきなりトドメ刺しやがった。言っとくけど健悟だつて、アイツ俺と同じ年だからオヤジだぞ。あれだつてその内腹が出たり禿げたりするんだ。ザマー見ろ」

世の中の本物のオヤジに失礼極まりない二人だ。しかも和樹に限っては自分のことは棚に上げ、この場にはいない健悟をやり玉にあげている。本人は否定さえ出来ず言われっ放しになるしかない。

「お兄ちゃん・・・健兄のこと・・・」

それまでふざけて騒いでいたのが、健悟の名を耳にした途端、急に違う反応を見せた。

和樹はそろそろ話すタイミングだと察した。

「昨日アイツと話し合ったよ。」

「・・・泣かされるようなことがあったら、絶対に言うんだぞ」

認めてくれたんだ・・・

「・・・うん」

まだ少し複雑な表情を浮かべる兄に、どうしても謝っておきたいことがあった。

「お兄ちゃん、ごめんね。お兄ちゃんのこと嫌いになりそうだなんて言っで。私酷いこと言ったよね。本気じゃなかったよ。」

「ああ 分かってる。そんなことはどうでもいいんだよ。」

健悟のことだけど・・・アイツ、お前が思っているより孤独な男だよ。

母親は健悟の出産直後に命落としてるし、父親は仕事にかまけて幼いアイツを祖父母に任せっきりだった。その祖父母も3歳くらいの時には他界してるだろ。気がついたら父さんの親友の子供だから兄弟みたいなものだって言っで、父親が迎えに来るまでの一日の大半を家でアイツと過ごしていたよ。文字通り兄弟と変わらなかつたし、うちの両親も分け隔てなく接していたと思うけど・・・知ってたか、アイツさ・・・うちの母さんのこと暫くの間、本当の母親だと思っ

てたんだ。幼心に大人の事情で一緒には住めないだけなんだった  
ってたらしい。可哀相にな。違うと気付いた時の心境って、どんな  
もんだつたろうな・・・想像できないな。アイツの父親はそんなこ  
と知ってたのかな。・・・中学3年の時、女と忽然と姿消してそれ  
つきりだ。せめてもの償いなのか、未だ毎月決まった金額を送って  
くるらしいけど、電話すらよこしたことがないらしいよ。健悟は愛  
情に飢えて育ってるんだ。

健悟には悪いけど、麻琴にはさ、普通の家庭で愛情に恵まれて育つ  
た男と一緒にあってほしいと思ってた。いや、実を言うと今だって  
そう思ってる。

ああ、いや、いいんだ、分かってるから。それは麻琴自身が決める  
ことだ。ただ、今後真剣に付き合っていく間に愛情のもつれみたい  
なものは発生するかもしれないことを覚悟しておくんだ。歪んだ環  
境で生きてきたんだ。綺麗ごとばかりじゃないってことだ。」

ショックだった。私の知らないことばかりだった。健兄のことは何  
でも知っている気になっていたのに、実は何も知らなくて・・・い  
つも明るくて冗談が好きで、だけど変に真面目で・・・表面的なも  
のしか目に映っていなかっただんだろうか。私、ちゃんと本当の健兄  
を・・・好き・・・なの・・・？

健兄に会いたくて、抱きしめたくて、でもどこかで孤独な背景を持  
つ健兄と向き合つのが怖い。いくら考えてもこの矛盾した感情を結  
局は纏められなかった。

この後 健悟と麻琴の距離は、愛が深まれば深まる程に、縮んでは  
離れ、離れては縮んでを繰り返すのだった。

## 視線

あれから一ヶ月が経とうとしていた。健悟が非常勤講師として教壇に立つのはこれで二度目だ。『若くて高身長のイケメン講師』の存在は大学内外において瞬く間に噂となり、あるビジネス雑誌の取材の申し込みまでできた。本人は大学に迷惑が掛かるからと丁重に断つたが、それに対し雑誌社がわざわざ大学側に掛け合うと、なんと『大学の宣伝になりブランド価値も上がる』という目論見から取材を受け入れたというのだ。本人は本業を差し置いて表通りを歩いているように後ろめたいと言ったが、麻琴は誇らしかった。

講義が終わると女子学生たちが健悟に群がった。といっても法学部は男女比8：2の割合だ。中には見知らぬ学生、つまり部外者らしき者も混ざっている。健悟は学生の頃からこのように度々取り囲まれることがあった為、然程驚きはしない。が、驚いたのは麻琴だった。視線の先にいる健悟が急に遠い存在に感じて不安になってしまったのだ。その不安を纏い俯いたまま席から立つとトボトボと出口の方へ向かった。

「それじゃあ、また次の講義で。急いでいるからこれで失礼するよ」

麻琴の姿を目で追いつつ、ざわめいている生徒にこれといった感情も見せることなく淡々と告げた。そして資料を雑に纏めて麻琴の出て行った出口の方へ足早に向かった。

廊下に出ると大勢の人の中から直ぐに麻琴の後姿を見つけた。「麻琴」口の中で小さく呼ぶ。聞こえるはずもなく麻琴は真つ直ぐ歩いていくが、その目の前に歩いてきた男子学生が急に立ち止まり踵を返した。健悟は無意識に「あっ！」と声を上げた時にはもう遅かつ

た。

真後ろを歩いていた麻琴と男子学生が正面衝突した形でぶつかったのだ。転倒にまではならなかったが、よろけて持っていたものをバサバサと下に落とした。人が行きかう中ぶつかってきた男子学生と慌てて拾い上げている。健悟が近づいていくと会話が聞こえた。

「ごめん、怪我はしなかった？痛いところはない？」

「いえ、こちらこそボーとしていて・・・すみません」

「あ、美山さんでしょ、美山麻琴さん」

「そうです・・・けど、どこかで？」

「同じ学部なんだけどな」

ちよっとガツカリしたように呟く。

「富樫翔太とがし しょうたっていうんだ。ヨロシク！」

白い歯を見せ右手を差し出した。麻琴は慌てて右手に持っていた物を左手に持ち替え握手をした。健悟は新しい出会いの瞬間を目の当たりにし、初々しい眩しさを感じつつも、一種の嫉妬にも似た感情が湧き上がってくるのを感じていた。

富樫と名乗った学生は身長こそ175cmくらいで普通だが、癖毛なのかフンワリと緩いパーマに、男にしては可愛い顔立ちでアイドル系の雰囲気を持っていた。可愛い笑顔で握手をすると「ごめん、忘れ物したんだ。じゃあ また！」というと急いで走り去っていった。その後姿を呆然と見送る麻琴が健悟の視線を感じたのはすぐだった。

「健兄・・・あ、早瀬教授」

構内ではこの呼び方がいいだろうと咄嗟に思った。健悟はプツと笑い麻琴の頭を撫でた。

「別にいつも通りでいいだろう。今日は早く帰るから一緒にメシ食わないか。」

「う……ん、良いけど。でも、あの、凄い見られていて……」

健悟を追いかけてきたと思われる女の子達の視線が麻琴の全身に突き刺さる。尋常じゃない初めての経験に萎縮するのは当然だろう。

健悟は撫でていた手を引っ込めると、声を小さくし話を続けた。

「参ったな……取り合えず今日そっち行くよ」

「うん、待ってる」

好奇の目から逃れるように麻琴は健悟の前からいなくなった。

「ただいまー」

玄関から真っ直ぐに挨拶に行くのは仏壇の前だ。手を合わせブツブツとなにやら話している。いつものことだ。

「健兄、お帰りなさい」

開いた襖から顔をのぞかせニッコリと出迎える。

会いたかった

健悟は心の中で呟く。立ち上がって麻琴の前に立ち両手で顔を挟むと、覗き込むように身を屈め優しく口付けた。一度口付けると二度、三度と歯止めが利かなくなる。

「んっ……け……けんに……ん……くる……し」



「ん？ 苦しい・・・って、お前息しろよ」

呼吸のタイミングがつかめず息を止めていたのだ。

「だって・・・いきなりだったし」

「んでも鼻で息するだろ、フツッ」

「・・・忘れてた」

「なんだよそれ・・・ほんと可愛いな、麻琴」

呆れ半分クスクス笑いながらギュッと抱きしめた。麻琴の母、百合子にもらったように愛情一杯を込めて。

オトナ オソナ

「やっぱりお兄ちゃん泊まりになっちゃったね。最近ずつとなんだよ。」

「あれでも医者だし、特に小児科医は不足してるからな。忙しいんだよ。」

「そうだけど、今日の鶏の唐揚げと茶碗蒸しだってお兄ちゃんのリクエストだったんだよ。楽しみにしてたのに可哀相。」

「また作ってやればいいさ」

「うん、そうだね」

食後コーヒーを飲みながらリビングで寛いでいた。この家で健悟と二人きりになるのは、寄せ鍋をして依頼だ。あの日がなければ二人がここまで接近することはなかったかもしれない。そうすると和樹の忙しさにも感謝するべきか……。

「健兄、お風呂どうする？ 入ってくんだったら沸いてるんだけど」

健悟が食後に風呂に入って帰ることは珍しくない。その為いつも数回分の衣類を置いてあるのだ。洗濯物は一応持ち帰っている。

「そうだな。今日はもう用事もないし入ってくかな」

「じゃ、タオルと着替え準備してくる」

最後の一口を飲み干すと鼻歌交じりにリビングから出ていった。

いつも和樹の着替えも準備しているのだろう。本人に世話を焼いている意識はないが、その姿は甲斐甲斐しく、毎回健悟に温かい安らぎを与える。そして、それはここでしか味わえないことも分かっている。

そんな気持ちに浸っていると風呂場の方から「準備okだよ」と元気の良い声が響いた。

「風呂出たぞ。麻琴も入ってくれば」

首にかけてタオルの端で後頭部をゴシゴシと拭きながら冷蔵庫のドアに手を掛ける。

「うん、じゃあ、入ってこようかなっ。

って、ビールもう飲んじゃう？待っててくれないの」

「あー・・・5分で入ってこい」

「5分は無理・・・だけど、できるだけ早めに戻る！」

「冗談だよ、普通に入っていいし・・・」

風呂に入るのはビールを飲む為であるかのようだ。とは言っても麻琴が風呂から出てきたのは30分後だった。マイペースな彼女はこれでも急いだつもりのようだ。

結局待ちきれず健悟は先に飲み始めていた。

「もー、待っててくれなかった。」

プーとふくれながら冷蔵庫からビールを取り出す。立ったままプルトップに指を引つ掛け、一瞬このままグラスに空けずに口をつけるかどうか躊躇った。ソファーにいる健悟の手元を見ると缶に直接口を付けて飲んでいる。和樹にはグチグチ言われかねないが、健悟は比較的大雑把な性格である。同じく自分も口を付けて飲んだ。しかし大雑把な人間でも許せないところがあった。

「麻琴、行儀悪いぞ。ちゃんと座って飲め。」

あいつの躰も中途半端だなあ。これじゃお前、アイツの失敗作だぞ。

「

「そこまで言わなくても・・・」

ムツとしながら健悟の隣にストンと座るとソファーが一瞬大きく沈んだ。そしてグビグビと喉を鳴らしビールは一気に麻琴の体内に吸収されていく。

「いい飲みっぷりだな。和樹言つてたぞ。将来アル中か酒乱になるんじゃないかって。あと、どっかのオヤジが乗り移って見えるって。なんか解るわ・・・実感。」

頷きながら麻琴の横顔を見る。

「んーまいつ。旨過ぎるのだ！もう一本飲んじやおつかなあっお兄ちゃんいると煩くてっ。オヤジオヤジって、毎回言われるんだよ。健兄まで言うの？」

そう言いながらも、すでに冷蔵庫からビールを2本取り出して戻ってきた。一本を健悟に手渡す。二本目は少し落ち着いたペースで飲み始めた。なんとなく無言になる。だが、息苦しくはない。むしろ居心地はいい。

「麻琴、オトナみてー」

「もうオトナですが・・・」

「オヤジみてー」

「あの・・・これでもオンナですが・・・」

「うん。シャンプーかな、イイ匂いがするもんな。オンナかも」

耳元でクンクンと麻琴の匂いを嗅いでいる。ごく自然に手からゆっくりとビールを取り上げるとテーブルの上にコトツと置いた。肩に置かれた手は撫でるように少しずつ鎖骨へと移動し、その窪みを擦っている。麻琴は予期せぬその行動にどう反応したらいいのか解らず、借りてきた猫のように硬直している。思考はほぼ停止状態だが、さっきまでの健悟と違うことだけは理解した。

「健兄・・・？ちよっ・・・酔っ払った？ 手・・・」

R15 ・ 今時じゃない？（前書き）

今回本文中に性的表現、描写があります。

R15をご理解の上、ご覧になって下さい。

（でもR15って、実はどの程度のことを指しているのか理解していないのは私だったりします・・・  
だって、難しくないですか？）

いつの間にかソファーに横たわり、健悟が覆いかぶさっていた。それは乱暴なものとは違い、大切なものを包み込むような優しいものだった。ひたすら頬や唇、首、パジャマの襟元からのぞく細い鎖骨にキスが降り注ぐ。経験のない麻琴でさえ、その先にどういった行為が待っているのか容易に察しがつくが、この場で何をどうしたら良いのかは皆目検討がつかず、されるがままの状態にあった。そんな麻琴を見て、健悟がフツと声を漏らし笑みを浮べた。

「麻琴、緊張してる？ 体固まり過ぎ」

そう、手も足もロボットのようにはピンと真っ直ぐ伸展したままなのだ。

「う・・・うん・・・どっ どうして良いのか分かんなくて」

「それにしても・・・ 普通に力抜いて、肌や体温を確かめ合っただ」

健悟は麻琴がバージンであることを知らない。今時の女の子は経験が早い。大人しそうだっただ自分の初めての恋人もすでに経験済みだった。そのことから麻琴も例外ではないと思った。ただ麻琴が誰かと・・・と深く考え想像することは敢えてしなかった。

健悟に力を抜くようにアドバイスされ、それに従うことで幾分かリラックスできたが、『肌や体温を確かめ合う』とは一体どういうことなのか、いまひとつピンとこない。

健悟は麻琴の顔を見ながら、パジャマのボタンを上から順に一つ一つゆっくりと外していった。ブラジャーは着けていないが、パジャ

マの下には胸元にレースをあしらった淡いピンクのキャミソールを身に着けていた。色白の麻琴によく映えている。ツルツルとしたサテン地越しに薄っすらと色付いた二つの突起が、無言で健悟の目に誘いをかける。

両側から寄せるように包み、その先端を親指で触れると、本人も驚くほどにビクンと身体がしなった。ただ、気持ち良いのかと聞かれればそれとは違う。何故なのか身体が勝手に反応しただけなのだ。耳元に健悟の甘い囁きが聞こえる。

「まこと 敏感なんだ」

「・・・う・・・ん・・・」

慣れた手つきでパジャマの上を脱がし、キャミソールを胸の上までたくし上げると、形の良い瑞々しい果実のようなバストが現れた。健悟はその一点から目を逸らすことができない。それなりに女性経験のある男から見ても、その美しさは否定できないものがあった。

「・・・きれいだ」

誰に言うでもなく、無意識に口の中で呟いていた。

「見ないで・・・待って、ね、健兄ってばっ」

「もう・・・待てないよ・・・」

麻琴の言葉をよそに、胸を隠そうとする手を押さえつけ、その柔らかく振るえる胸の頂に口付ける。

「あっ やっ・・・健兄・・・」

わたし・・・初めて なの・・・こわいっ」

「え・・・初めて・・・ってホントに？」

両手を押さえつけたまま行動はピタリと止まった。



「うん、ホント・・・」

「なんで」

「なんでって、理由なんてないけど」

「麻琴はバージン？ 処女？ 未経験？」

「そう。って、それ全部同じ意味だよ」

目は点、口はあんぐりと開きつ放しで顔面蒼白の健悟。後もうちよつと頑張ればムンクの『叫び』も夢じゃない。そしてハツとしたような表情を見せたかと思うと、慌てて麻琴のキャミソールを元通りに戻し、脱がせたパジャマを前から被せた。

「麻琴、ちよつと落ち着け」

「もう・・・結構落ち着いてるんだけど」

「そか。うん、そかそか、なるほど」

「・・・健兄？」

「なんだっ」

「・・・大丈夫？」

「すこーしだけ待ってくれ。今軽くパニックだ。」

「みたいだね」

「要するに、麻琴は経験がないんだな？」

「うん」

「まさかと思うが、キスもこの前が初めてだったとか？」

「初めてだけど・・・ダメなの？」

「・・・本当に初めてだった？」

「う・・・ん。ファーストキスだった・・・」

もうっ、いいよ。初めてだと何か困るんだね。

きつと、そういうの重たいんだっ」

今にも泣き出しそうな顔をして膝を抱え、俯いてしまった。

「バカ、違う。勘違いすんなよ。

逆だよ、逆。今時貴重だつての。」

そう言うと麻琴の頭をクシャツと撫で、額にキスした。

R15 ・ 今時じゃない？ (後書き)

すみません。明日もR15です。

**R15・神聖なる儀式(前書き)**

R15(?)です。

理解の上ご覧下さい。

ネットでR15を検索してみました、

イマイチ分かりませんでした。

詳しい方がいらしたら、是非ご伝授下さい。

R 15・ 神聖なる儀式

「今日は何もしないで一緒に寝よう」

そんな風に言われて断る理由はなかった。素直に受け入れ、麻琴はベッドで彼の左腕に頭を乗せ、その広い胸に抱かれている。電気を消した暗闇には、頭上にあるカーテンの僅かな隙間から月明かりがほんの少しだけ差し込み、うつすらと互いの表情を浮かび上げさせている。

『何もしない』とは言っていたが、健悟の右手は麻琴の背中や腰を撫で擦っている。だが麻琴は嫌がる素振りも、『約束と違うじゃない』と嗜めることもなく、ただ大人しく身を預けていた。

決して強引ではない健悟の手が背中や腰の辺りを行き来するたび、その手に意識が集中し、なぜか満たされた気持ちになっていく。ふと、ウエストのくびれを確かめるように滑っていた手がピタリと止まった。

どうしたのかな、寝たのかな？

止まった手に物足りなさを感じた自分に、麻琴は驚いた。

もっと触れてほしい

そう願った時、健悟の手は再び動きだし、背中から肩に移動してきた。そして肩を抱き寄せ愛しむように柔らかな唇が何度も重ねられた。離れ難い不思議な感情が芽生えた時だった。

健兄と自分の身体は、どうして別々に存在するんだろう

それは愛する者と一体になることを無意識に心が許した瞬間だったとも言えよう。

いつの間にか健悟のキスに自ら応え、ベッドの中は情熱の如く湿っ

た熱を帯ていた。

「麻琴、愛してるよ」

少し掠れた健悟の低い声が耳元にこびりついた。キスの隙間に放たれた想い。それはありきたりの言葉だけれども、聞いたことも無い切羽詰ったような切ない愛の囁きで、麻琴の心をジリジリと焦がした。

健悟の手は頬から肩、肩から鎖骨へと順に降りていき、そこから張りのある柔らかい胸へと到達した。パジャマ越しに包むように触れただけで、その中心にピンと反り立った突起を掌に感じる事ができる。ソファアールで見た姿が健悟の脳裏に蘇る。そして麻琴の呼吸が浅く回数を増し始めると、健悟の下半身は完全に理性のコントロールを無視しはじめ、どうにもならない状態になっていた。いや、そもそもベッドに入った時点で理性の一部が少しずつ削ぎ落とされ、今まさにバラバラに崩壊しそうになっているのだ。

「麻琴……」

「はあ。。。んっ……。うん……。？」

必死に声を殺すも、胸への刺激で麻琴の口からは色を持った吐息が自然と漏れてしまう。それが健悟の耳に更なる刺激を与えていることも知らずに。

「裸で抱き合いたい」

「……痛く……。しないなら

……。いいよ」

戸惑いが無いわけではない。ただ、性欲とは違う何かが健悟との交

わりを願っている。麻琴なりにその意思を伝えたいが、表現のしようが見つからず黙り込んでしまう。

全くの初めての交わりとは、おそらくは指の進入すら抵抗を感じるはずだ。痛みを伴わないですることはまず無理だろう。ここで嫌がれば今日は諦めようと決心をし、心の準備も促す意味でも健悟は正直に話す。

「多分、痛いと思う。どれくらい痛いかは、俺男だから分かんないけど」

健悟にとってもバージンを相手にするのは初めてだった。これは快樂の為のただのセックスでなく、二人にとって一つの神聖な儀式であることを健悟は理解していた。

「・・・じゃあ・・・優しくして。乱暴にはしないでほしいの」

「乱暴になんてしないよ。ちゃんと優しくもする。」

痛みは・・・少しだけ我慢して。

ただ無理にはしないから、途中で止めても構わない」

月明かりに照らされる麻琴の裸体は、眩しい程に美しい曲線と艶を作り出していた。

「ホントにきれいだ」

「あまり、見ないで。ちょっと恥ずかしいよ。」

「そう言われると余計に見たくなる」

「もう・・・」

直接触れてくる健悟の手は、どこまでも優しく、そして魅惑的だっ

た。普段見ることの無いその身体も、想像以上に筋肉質で頑丈そう  
で背中も胸も広々としていた。そしてさっきから麻琴の太腿あたり  
にぶつかる硬い健悟自身にも驚きを隠せない。

なんだろう、どうしてあんなっちゃうんだろ

見たいような、見るのが怖いような、見ちゃいけないような、でも  
見なきゃいけないような、そんなことをグルグルと考えていると、  
突然健悟が麻琴の左手首を掴み、ある一点へと導いていた。



**R15・神聖なる儀式（後書き）**

明日もR15の予定です。

サラッといった方がいいのか悩み中です。

R15・初めての痛み(前書き)

R15です。

R15・初めての痛み

「麻琴、触ってみる？」

そう言いながら健悟は麻琴の手を、健悟自身へと導いた。

「えっ、別に・・・えっ！」

「どんな感じ？」

どんな感じって・・・なにコレ・・・骨？

「いつも・・・こんな？」

「そんな訳ないだろ。いつもだったら病気じゃねえか」

この手、どうしたらいいの？ ひっこめたら悪いような気がするのななぜ？

「なに黙ってたんだよ」

ニヤついている健悟には余裕が感じられるが、麻琴は健悟を握り締めたまま微動だにしない。ソファアの時と同じく硬直状態にあった。だが、一応返事をしているだけマシか。

「・・・え、うーん・・・」

まあ、返事とも言えないようだが・・・。麻琴の反応の悪さに、健悟は優しく胸全体を擦りながらリラックスするよう促す。

「麻琴、深呼吸してみ」

「うん」

素直に空気を胸一杯吸い込み、ゆっくりと吐き出す。それをたった2回繰り返し返したただけなのに、落ち着いてくるから不思議だ。

「面倒くさくてごめんね」

「ばーか。俺は麻琴が誰の手にも触れられていなくて嬉しいんだっ  
ての」

麻琴の不安はどうしたら取り除くことができるのか・・・その全ては  
健悟に委ねられている。

決して施しを受けなかったわけではない。少しでも痛みを和らげる  
ように、充分過ぎるくらいに潤いを与えられた。想像通り指一本で  
も初めは痛かったが、時間を掛けることで少しずつだが満たされて  
いくのも感じていた。しかし健悟自身が押し入ってきた時には身を  
切り裂かれるような痛みが走った。収まり切らないのではないかと  
思った健悟自身が、ギシギシと凶器のように入り込む。苦痛でしか  
なかった。痛みで声は出ず、目を開くこともできないのだ。

「麻琴・・・っ 大丈夫か」

ゆっくりと動きながら、健悟も苦痛の表情を見せる。

「う・・・ん。い・・・痛い」

「もう少し力抜いて」

「力・・・入れて・・・るつもりな・・・いつ」

麻琴は途中で止めようとは決して言わなかった。健悟が少しでも早  
く快樂を得て、そして自身を解放されることを一身に願ったのだ。

「麻琴・・・もう、すぐだ・・・もう・・・終わるから・・・」

それから程なくその言葉通り麻琴の体内で、より硬化を増した健悟

が快楽に顔を歪め呆気なく性を放った。同時に麻琴の目からは、言葉にならない色んな感情が涙となって零れ落ちたのだった。

「痛かったんだな、ごめんな」

顔中にキスを落としながら、麻琴から身体を離す。乱暴にはしていない。だが、麻琴にとっては恐らく乱暴で痛みしか感じなかったのだろう。僅かに全身が震えていた。健悟がその部分をそっとティッシュで触れると鮮血が滲んだ。

「辛いだけだったか・・・？」

肩で息をしながら聞く。その言葉に涙で一杯の目を開けると、見下ろす健悟を泣きそうな顔で見つめた。

「想像以上に痛くてビックリしたよ。健兄は・・・健兄は、痛くなかったの？」

「少し・・・かな。でも直ぐ気持ち良くなってた」

「本当に？嫌いになったりしない？」

「本当だよ。なんで嫌いになるんだよ。麻琴には悪いけど、最高だった」

「・・・なら、良かった・・・こんなこと、健兄とでなければ逃げ出してたと思う」

その言葉に健悟は相好を崩す。

「うん・・・回数重ねれば少しずつ悦びに変わってくよ。努力するから覚悟しろよ」

「こういう事って、慣れるものなの？」

身体が千切れるかと思うくらい痛かったんだけど。

健兄の・・・その・・・ソレって、サイズの調節みたいなこと・・・でき・・・」

「るワケねーだろっ！」

いまだ力漲る健悟自身を、麻琴はさっきまでとは違う堂々とした視線で、恥ずかしがる素振りも見せず睨みつけていた。

「そんな目で見るなよ。麻琴のエッチ・・・」

「なっ・・・！」

## 新たな出会い

「麻琴ちよつと変わったね。なんていうのかな・・・しつとり落ちて着いてきたっていうかあ・・・」

オムライスを頬張りながら美佳が意味ありげな目を向ける。とにかく恋愛ごとになると動物的勘が働く。

「ズバリ、何か あった、でしょ。言いなさいよ。洗い浚い言っちゃいなさいよ！」

「えっ！どういうことっ？麻琴ちゃん、なんか良い事があったわけ？」

美佳の話しに喰い付いたのは柳瀬だ。見開いたその目は、美佳と麻琴の間を泳ぐように行ったり来たりしている。「新しい関係」に一番興味を示したのは実は美佳だったのだ。そして今日の集まりも美佳が率先して決め、初めて3人で食事をしていた。場所はいつもの喫茶店 きこりの森 だ。カウンターに麻琴・柳瀬・美佳の順で一列に並んで座っている。

「何もないよー。美佳は勘ぐり過ぎっ」

「そっかなー。だって例の彼とは上手くいつてるんでしょ？」

「ちよちよちよちよちよつと待った！ 麻琴ちゃんて彼氏いないんじゃないかったっけ」

「寛くん、それ過去の話ね。時は刻々と過ぎ、麻琴も進化を遂げるのよ。」

彼はね、お兄さんの幼馴染で親友の人なんだって。」

メールをやり取りする間に、何時の間にか柳瀬を『寛くん』と呼ぶ

仲になっていた。

美佳は大学にイケメン講師として来ている健悟の存在は知っていても、その健悟が麻琴の相手とは知らない。美佳もご多聞に漏れず健悟の容姿に関する噂を聞き、一度だけ授業をこっそり見に行ったことがあった。『大人の男の色気に、ウツトリした』と麻琴に報告したが、麻琴はクスツと笑って何も言わなかった。

「えー、麻琴ちゃんそれ本当なの？」

「うん、本当。でもまだ最近なの。だから柳瀬さんには今日報告するつもりだったの」

「そっ だーかーらー、寛くんは潔く諦めなね。って、寛くんは別に麻琴を恋人にしたいとかじゃなくて、『新しい関係』を築きたいんでしょ？ 麻琴に彼がいても支障ないでしょ」

その通りだ。しかしそうは言っても、できることなら麻琴と付き合いたいという密かに隠している本音がある。新しい関係の先には、やはりそういう下心が存在するのだ。

柳瀬は二人の真ん中で肩を落としてしまった。

「柳瀬さん・・・報告遅くて怒っちゃった？メールするよりも、会って言った方が良いかなって思ったの。ごめんね」

好意を抱いている相手に直接報告を受けることほど残酷な仕打ちはない。それに間接的なメールの方が、今日ここに来る心構えもできたはずなのだ。だが麻琴は柳瀬の『新しい関係』を額面通り受けているし、美佳も加わったことから、尚更恋愛は一切排除されたと認識している。

「麻琴ちゃん、その彼と別れたら真っ先に報告してね！」



あれから『飲もう!』と美佳が言い出し、柳瀬の友達がバイトしている jazz ber に行った。初めての jazz ber は古くからあるらしく、年配のマスターのサトさんと奥さんのヒロコさんが仲睦まじく、雰囲気もアットホームな感じで開放感があった。客層も幅広く、サトさんの昔馴染みである年配客から、その子供世代である麻琴くらいの年齢の客もいた。この ber の一番の売りは、マスター夫婦のさり気ないスキンシップらしい。

「麻琴ちゃん、うち来るの初めてよねえ？」

でもどこかで会ったことあるね。どこかなあ……。

ねえ、サトさん、麻琴ちゃんと会ったことない？」

夫のサトに空いたグラスをカウンター越しに渡しながら聞く。ヒロコは小柄な女性で、黒髪のショートカットだが、マスターのサトは痩せてはいるが高身長で、やや明るめのブラウンの髪を肩まで伸ばし、それをオールバックにして後ろで一本に縛っている。それぞれの雰囲気によく似合っていた。

「んー？どれどれ、麻琴ちゃん顔をよく見せてごらん」

サトは人懐こい顔にタレ目を作り、麻琴の顔を覗き込んだ。腕を組んでフムフムと、目・鼻・唇のパーツを一つずつ見ていき、最後に顔全体を大きく眺めた。初めての相手にここまでジツクリ見られるとかなり恥ずかしい。アルコールが入っていないなくても顔が赤くなってしまうそうだ。

「うーん、いい顔してるねえ。誰からも愛される可愛らしい目元に、

優しい口元。

ヒロコ、あれじゃないか？ほら、昔、なんて言ったかな・・・ん  
「あー・・・」

「もう、サトさんも年いったわねえ。唸ってるばかりで全然ダメじゃないの、ふふっ」

自分のことは棚に上げ、ヒロコはサトを笑う。が、バカにした笑いではない。麻琴はほのぼのした雰囲気の二人に両親に会ったような懐かしさみtainなものを感じていた。

この二人が後々麻琴の人生に大きく関わってくることも知らずに・・・。

お泊りOK？

Jazz berを出て帰宅したのは門限の10時を5分過ぎた時刻だった。門限前だったら堂々とチャイムを鳴らしてもいいところだが、5分でも遅刻は遅刻だ、少しバツが悪い。音がしないように慎重に鍵を開けソロッと玄関内に足を踏み入れ、また音がしないようにそうつと鍵を締める。コソ泥のように身を屈め後ろを振り向くと、両腕を組んで仁王立ちした和樹が上から目線で見下ろしていた。

「ひっ！ おっ お兄ちゃん・・・た だいま・・・です。」

「・・・・・・・・」

怒りを爆発させない為か、何故か瞑想のように目を瞑っている。

「ごめんなさい。。。でも たった5分だよ〜」

「たった5分でも門限は過ぎている。一体 誰と何処行ってた」

怒鳴られるのではなく抑制された落ち着いた声で聞かれると、やはり威圧感を感じ恐怖は一層増すというものだ。麻琴は口だけに笑みを作り、他は必死の形相で答える。

「みつ 美佳と、柳瀬さんという方と3人で夕食たべて、その後 jazz berに連れて行ってもらったの。少しだけお酒飲んだけど、酔っ払ってはないよ」

「健悟はそこにいなかったのかっ」

今度はやや棘を含む声だ。何故ここで健悟の名前が出るのか麻琴には分からないが、和樹にとって健悟は今「要注意人物」の一人として、脳内リストに名を記載されているのだ。そして何とか目を光ら

せて、キス以外の行為を塞ぎ止めたいと思っているのだった。  
すでに手遅れで気の毒だが……。

「健兄はいないよ……」

「なら もういい。入りなさい」

一緒にないと分かるとあっさりしたものだ。麻琴にはよく分からないが、どうやらお説教はもうないらしい。ノコノコと和樹の後に続きリビングへと入った。

冷蔵庫からペットボトルの水を出しながら、機嫌の直った和樹に、今度美佳が泊まりに来てもいいか聞いてみた。他人をあまり自宅に入れたがらない和樹だが、麻琴がいつも世話になっていると思えばダメとも言えなかった。それに自分の知らない所で知らない人と遊んで、門限までに帰宅しないよりは安心でもある。健悟と二人きりになる時間もその分減ることだし、和樹にとっては一石二鳥も三鳥もあるというものだ。

そして和樹の承諾を得た次の週末、さつそく美佳が泊まりにきた。そして今、ちょうど帰宅した和樹に挨拶をしたところだ。

「麻琴お〜 お兄さん素敵なお〜。お医者さんだつて言うから、てつきりがり勉強で野暮ったい地味なモテない代表みたいな人想像してた〜。彼女とかいるのかな〜」

「彼女はいないと思うよ。でも素敵かなあ？」

麻琴にその魅力は感じられない。お兄ちゃんはお兄ちゃん、良くも悪くも見えない、常にいつも同じお兄ちゃんだ。和樹には恋人がい

だが、それはもう2年も前の話だ。結婚寸前まで行ったが、相手の両親に家庭環境が良くないと反対された。それでも同人同士がそれで良ければ彼女の両親を説得する術もあったのだが、一人娘だった彼女も両親からの祝福のもと結婚したいからと去っていった。だが、麻琴にはその経緯は説明されていなかった。

「じゃー、私お兄さん狙っちゃおうかな。ね、麻琴ダメ？」

「ダメじゃないけど・・・なんか複雑・・・」

「麻琴、今日の晩ご飯のおかずはなに？」

「今日は美佳の好きな煮込みハンバーグと、お兄ちゃんの好きな具沢山のイタリアンサラダと、後はオニオンスープなんてどう？ もちろんワインも添えて」

「凄い、いつもそんなに作るの？」

「ね、イタリアンサラダの作り方教えて。私が作るっ」

明らかに和樹狙いで下心が見え見えだ。麻琴は複雑な心境になるが、美佳は猪突猛進タイプで向う見ずなところもあるが、明るく裏表の無い人柄だ。人を思いやる優しさも持ち合わせている。反対する理由はない。麻琴はニコツと笑みを見せると

「スパルタだから覚悟してよ！じゃあ、もう6時半だから急いで作り始めよっ」

そう言い、ソファーから立ち上がるとキッチンへ行き、冷蔵庫から使う材料を出し始めた。その姿を見た美佳は、麻琴に頼もしさを感じ、良い恋の予感に心を躍らせた。

「それにしてもこの家って広いよねえ。リビングだって20畳はあるでしょ。繋がってるこのキッチンだって10畳くらい？麻琴の部屋だって18畳って言ってたよね？お兄さんの部屋は？」

「お兄ちゃんの部屋は6畳よ」

「えっ　なんで????　他に広い部屋はないの?」

「あるよ。12畳の部屋が2つ。それも折り戸になっていて開くと24畳の一部屋になるの。あとはお仏壇の部屋が一つあるの。寝るだけに帰ってくるから、できるだけ掃除の簡単な部屋がいいって、一番小さな部屋を選んだの」

「ふうーん、掃除なら私がしてあげるのに」

積極的な考えである。和樹の意見は今のところ関係ないようだ。

イタリアンサラダはタコ、胡瓜、玉ネギ、トマト、セロリ、レタスを適当な大きさに切り、白ワインビネガーとバジル、ブラックペッパーと塩、オリーブオイルでドレッシングを作って軽く合わせただけの簡単なものだ。ハンバーグを作りながら美佳に丁寧に教えると『簡単で美味しそう。それなら私にも作れる!』と張り切ってタコを切り始めたが、包丁を持つ手が恐ろしく危なっかしく麻琴は青褪めて取り上げた。いままで料理は殆どしたことがないとのことだった。

「タコはいいからレタスでも干切ってて」

「はあ〜い。ちょっと練習しなきゃダメかな。へへっ。やっぱり女は料理が出来てナンボよね?麻琴は手馴れてるし、何でも出来るんだね。慣れてないのは恋愛だけか。それも見方によっては新鮮で可愛いかもしれないけど。家も立派、超素敵なお兄さんもいて、頭も顔も良くて、凄く恵まれてる。羨ましいなー」

「なに言ってるのよ。料理は嫌いじゃないけど、やっぱり親がいな

いからやるしかないのよ。どうせやるなら楽しんだ方がいいし美味しい物食べたいじゃない？美佳はお母さんとお婆ちゃん的美味しい料理食べて育ったんでしょ？私はそれが羨ましいよ。今度私もご馳走になりたいな。」

「うんうん、絶対うちに来てよ。お婆ちゃんなんか張り切っちゃうと思うよ。」

女の子同士、楽しい会話をしていると、リビングのドアが豪快に開いた。

「あー、腹減ったー。今日のおかずなに？寒いからオニオンスープなんか良いな」

勢い良く入ってきたのは健悟だった。

「あーっ!!!」

「ワッ!!! なにッ?」

初めの声は美佳、その後はその声に驚いた健悟の声だ。  
美佳は口をパクパクさせ鯉の物真似を披露している。(本人はそんな気はないが)

「あー ビックリした。珍しいな友達か」

まだ若干驚きの表情は消えないが、麻琴に優しい目を向ける。仕事帰りか麻琴の好きなスーツ姿だ。

「うん。今日ね、お兄ちゃんにOK貰ってお泊りなの」

「へえ。あ、申し遅れました、早瀬 健悟と申します」

内ポケットの名刺入れから一枚取り出すと美佳に差し出した。呆然としている美佳はそれを無意識に受け取る。

「失礼ですが・・・」

ポ！となつてゐる美佳にさり気なく自己紹介を促す。その自然な気遣いに我に戻り慌てる美佳。

「あつ はいっ。私は美佳です。山本 美佳と申します。

あのっ なんて早瀬教授がここに?」

「ああ、あの大学の学生か。山本さんも法学部?」

「いえ、文学部です。でもあちこちからのお噂で早瀬教授のことは



存じ上げています」

「はは、どんな噂なんだか……。その教授って言うのはちょっとやめて貰えるかな」

照れくさそうに苦笑する。その顔がまた男の色気を醸し出し、美佳をフワフワと浮かぶシャボン玉の中に閉じ込めようとする。が、シヤボン玉はパチンと弾いて消えるもの。

「そっだよ美佳。教授なんて健兄には似合わない。聞いてるこっちも恥ずかしくなる。あはっ」

「なんだとコノツ。お前だけは俺のこと「健悟さま」と言え」

「バカみたい。言うわけないじゃない。今日来るなんて聞いてなかったから晩ご飯食べさせないっ」

「お前汚いなー。食い物で俺を左右しようなんて。」

麻琴さま、お願いです。俺の分も用意して下さい」

「うーん、まあ、今日のところは美佳も来てることだし大目に見てあげましょう。美佳に感謝するのよ」

「早瀬教授の口から『麻琴さま』って……。完全に驚きを隠せない美佳である。」

健悟はアレ以来も麻琴の変わらぬ受け答えと、食事にありつける嬉しさで、相手を崩しっぱなしだ。そして美佳に微笑むと

「君のお陰で麻琴の料理が食べられるよ。ありがとう」と両手を合わせた。

予想外の乱入であったが健悟の分も何とか用意でき、四人でテーブルを囲んだ。オニオンスープは健悟の好物だ。食事をしながら美佳の質問コーナーが始まった。そしてそれらの質問全てに回答をもらった時、やっと麻琴と健悟が恋人であるという事を理解した。

「ビックリしたけど、麻琴と早瀬さんか・・・うん、お似合いよ。絵になるもの」

その言葉に右眉をピクツとさせたのが和樹だ。そして大人気なく突っかかってくる。

「美佳ちゃんは本当にそう思うの？7歳も年上のオジサンが女子大生とつり合うかなあ？」

『オジサン』という言葉に麻琴はフツと笑いを漏らしたが、言われた健悟はムツとしている。でも黙って口を挟むことなく黙々と食べている。

「あら、お兄さん、年なんて関係ないわよ。確かに女性も男性も年上が好きとか年下じゃなきゃダメとか、それぞれに好みはあるでしょうけど、基本的にはどの組み合わせも相性だと思えます。麻琴と早瀬さんは会話のテンポがすでに夫婦みたいにシツクリいつてるもの。そういう意味でもピツタリだと思いますよ。」

「美佳ちゃん、君はもしかしたら吸いも甘いも知り尽くした30代の女子大生？」

「お兄さん！ 私も麻琴と同じ二十歳ですっ」

「ああ、失礼。物の考え方が成熟してるから・・・さ」

そんなやり取りがあっても楽しく食事の時間は過ぎた。一人よりは二人、二人よりは三人、三人よりは四人と、食事は一人でも多いほうが賑やかで楽しいものだ。

食後は麻琴と美佳が二人で後片付けをした。リビングでは和樹と健悟が飲んでいる。会話は聞き取れないが仕事のことらしく、少し難しい顔をしている。麻琴は二人の様子を時々チラチラと見ていた。

和樹が健悟のことを避けてはいないか心配だったのだ。その麻琴の心を見透かしたのか、美佳が話しかける。

「麻琴、大丈夫よ。お兄さんと彼、憎み合ってるわけじゃないもの。お兄さんね、可愛い麻琴が離れていくようで寂しいだけなんだよ。」  
優しい美佳の言葉に少しだけ気持ちが楽になった。

「美佳・・・ありがとう」

健悟と愛し合った後、その行為に後悔はなかったが、和樹に対しては罪悪感があった。いつも心に蟠りがあり、騙しているような罪の意識。何でも相談してきた兄にそれができなくなり、その距離を作ったのが自分なのだと思うと辛かった。麻琴には親離れができていなかったのだ。

翌朝目覚めたのは7時ピッタリだった。酔っ払った美佳が麻琴のベッドで寝てしまったので、昨日は麻琴が客用の布団に寝たのだ。今も美佳は麻琴のベッドで寝息を立てている。起こさないように部屋から出た。リビングに行くときボサボサ頭の健悟がソファーにゴロンとなりニュースを観ていた。

「健兄おはよう。早いね。ここで寝たの？」

「ああ、おはよう。いや父さんたちの部屋で寝たよ。喉渴いて水飲んだら目が覚めて起きちゃったんだ」

健悟も昨日は結構飲んでた。軋んだような掠れた低い声が麻琴の知らない男のような錯覚を与える。

健悟が起き上がり麻琴の座るスペースを作った。そしてそこを人差し指でトントンと叩き座るよう合図する。麻琴が腰を下ろすと肩を

抱き寄せ類にキスをした。そして唇にも。

「和樹、今日も仕事行つたぞ」

キスの合間に言う。このタイミングでなくてもいいのに

「ん・・・帰り・・・は・・・なんて？」

舌の進入に上手く喋れない。

「昼ごろって言つてた」

「珍しい・・・う・・・ん・・・」

「麻琴感じてる？」

「そんな・・・の、わかんない・・・」

「分かんないわけないだろ。確かめようか」

「ああん・・・」

ハッキリと声が漏れた時だった

「じゃ、おしまいっ」

「え・・・」

「もつとしてほしい？」

意地悪な顔で麻琴を見つめる。

「そんなこと。。。な・・・い」

あまりの羞恥に真っ赤になって俯き、そのまま背中を向ける麻琴。

「ゴメン。苛めたくなくなった。続きは夜だ。」

## デート日和

8時半過ぎに美佳が起きてきた。

「おはよー。よく寝たあーっ」

「おはよう。二日酔い大丈夫？」

「結構飲んだわりには大丈夫みたい。ん？ お兄さんと早瀬さんは？」

「お兄ちゃんは仕事。でもお昼頃に帰るらしいよ。健兄はさっき帰った。11時に人と待ち合わせしてるんだって」

二人は恋愛のあれこれを語り合いながら朝食のベーグルを頬張った。

「ねえ美佳、また来てね。こうやって楽しくお喋りしながら食べる朝食って凄く美味しい。ベーグルがいつもより甘く感じるよ」

「来る来るっ。私もこういうの好きっ。麻琴も家に来てよ。大した持て成しできないけど大歓迎するから」

「うん。お兄ちゃんに許可貰ったら絶対行く」

「許可って、中学生じゃあるまいし・・・お兄さんそんなに厳しいの？」

「厳しいかな？私はそんなに感じてないけど。あ、でも門限には煩いかな。心配性なのよ」

「大事に育てられたんだねえ。ますますお兄さんのこと好きになりそう。今日お昼に帰ってくるならデートに誘ってみようかしら」

その言葉の通り、和樹が帰宅すると真っ先に玄関に行き、甲斐甲斐しくカバンを預かり（奪い取った？）なにやら世話を焼いている。

「美佳ちゃんはお客さんなんだから、そんなことしなくていいんだよ。麻琴だってそこまではしないよ」

とかなんとか和樹も必死に抵抗を試みるが大した抗力はないようだった。

「お兄さん、これから私とデートして下さい。どこかで美味しいランチして、少しお買い物に付き合っただけいいんです」

「え、ー、ちよつとそれは。だって美佳ちゃん彼氏いるでしょ」

「私ボーイフレンドは一杯いますけど、彼氏はいません。ね、麻琴」  
「あ、うん。」

「ね、だからそんな心配はいりません」

「じゃあ、麻琴も一緒に」

良いことを思いついたと言わんばかりの、明るい顔で二人を交互に見る和樹。しかしそんな思いもアツサリ跳ね除けられる。

「イヤです。私はお兄さんと二人がいいの。だってデートですもの」  
「参ったな・・・麻琴お」

助け舟を呼ぶが世の中そんなに甘くない。

「お兄ちゃん、美佳と楽しんできて。それにお兄ちゃんにだってそういう時間が必要よ」

その言葉に美佳が嬉しそうに頷いている。

「・・・じゃあ、美佳ちゃんに付き合うか。着替えてくるから待ってて」

諦めたようにリビングから離れて行った。

「麻琴サンキユ。お兄さん借りるね。絶対私に振り向かせてみせる」  
「！」

「あまり苛めないであげてね。ふふっ」

『もしもし麻琴？俺だけど用事いま済んだんだ』

「そう、早く終わったんだね。美佳もお兄ちゃんもいなくて暇してたの。来る？」

『彼女も帰ったのか』

「それがお兄ちゃんとデートしてるの」

『ハアー？どついうことだよ』

「ふふふっ 後で詳しくご報告いたしますー！」

『麻琴、たまには外出てこないか。俺たちもデートしよう』

「でね、美佳が凄く積極的でお兄ちゃんタジタジなの。家出る時も引きずられるようにして出ていくものだから可笑しくて ふふふっ」

「へえー アイツも隅に置けないな。美佳ちゃん大人っぽくてしっかりした感じだから案外良いんじゃないか」

見た目はその通りなのだが、以外と見掛け倒しなところがある。おそらく和樹はそのチグハグさ加減に今頃振り回されているに違いない。

「それより健兄、ここのパスタ美味しいね。いつもこんな高級なところで食べてるの？」

清潔感のある落ち着いた高級イタリアンレストラン。周りには品のある客が物静かに食事を楽しんでいる。子供や学生の多いファミリーレストランとは大違いだ。

「まさか。いつもは来ないよ。」

実は、まだ弁護士になって1年くらいの頃だったんだけど、当時暴

力事件に巻き込まれた人が被疑者として勾留されたんだ。その日たまたま俺が当番弁護士としてその被疑者の担当をしたんだけど、その被疑者つてのがこのオーナーだったんだ。無実の人だから当然すぐに釈放されたんだけど、俺のお陰だつて言つて、いまだに誕生日やクリスマスにカード送ってくれるんだ。俺はそういうの苦手だから、お礼代わり時々事務所のヤツ誘つて来てたんだ。」

そんな話をしていると噂のオーナーが姿を見せた。

「これはこれは早瀬先生、いらつしやいませ」

「オーナー、ご無沙汰してます。お元気そうです」

「先生もお変わりなさそうですね。で、こちらの可愛いお嬢さんは？」

気さくな笑顔を麻琴に向ける。60代くらいだろうが、少しふくよかな体つきが、このイタリアンレストランにマッチしている。

「はじめまして。美山 麻琴と申します」

「俺の大切な人だよ」

誇らしげに付け足す。健悟に恥じらいは一切ないが、麻琴には気恥ずかしさがある。

「それはそれは。 チリエージョ Cilliegioへようこそ。 そうですね、

貴女が・・・

先生はハンサムだからうちの女性スタッフにも大変人気がありましたね、ただ先生には女性の影がないものですから、もしかして男性がお好みなのかもしれないという噂も・・・いやいや失礼。

こんなに可愛い女性がそばにいるなら、他に目も移らないはずだ。ははは。

他に何かお召し上がりになりたいものがありましたら、ご遠慮なく申し付け下さい。」



そう言い奥の方へとオーナーは姿を消した。

「ふうーん健兄、男の人がお好みだったの？」

「バカ、変な噂を本気にするな」

時刻はまだ2時というのに、外に出ると少し風が冷たくなっていた。少し足を延ばし話題の巨大ショッピングセンターへと向かった。迷子になりそうな程広い施設内を二人は手を繋いでブラブラと歩いた。時々立ち止まっては、ヘンな帽子やサングラスを健悟に被せて遊んだり、妙に露出度の高いランジェリーを麻琴にあてて健悟がニヤついたり、とても下らないことを笑い楽しんだ。健悟との仲が深まって初めてのデートは、ロマンチックでも気取ったものでもなかったが、心がスキップしてるみたいに凄く弾んでいた。手を繋ぎ健悟を見上げて言う。

「健兄、デートに誘ってくれてありがとう。こんなに楽しいと思わなかった」

「どういたしまして。麻琴、記念に何か買おうか」

「ううん、別に欲しいものなんてないし、いいよ」

そう言ったが、健悟は麻琴の手を引きズンズンと迷い無く歩き出した。そしてさつき立ち寄ったランジェリー店の前で止まった。

## 解けない誤解

「お兄さんは恋人いないんですか？」

もしかしたら『いる』と嘘でも言っておいた方が無難だろうか

昨日初めて顔を合わせた麻琴の親友の美佳を、今は車の助手席に乗せて運転している。もしかしたら気まぐれな女子大生の悪戯なのかもしれない。大人びた顔つきにあどけない言動がミスマッチで、掴みどころが無く扱いに困る。妹の麻琴とはまるで正反対なのだ。

「お兄さん？」

「ああ、ごめん。何だっけ」

「恋人はいないんですか？つて聞いたんですけど・・・  
やっぱりお兄さん、私みたいな子嫌い？」

美人は嫌いじゃないけど、おちよくられるのは嫌いだな

「いやいや、そうじゃない。恋人は・・・いないよ。仕事が忙しい  
暫くは考えていないっていうのが本音かな」

「いないんだあ。良かった」

ポワワワワワントなって、和樹が一番強調したつもりだった『本音』と称したバリアなど聞いちゃいない。それどころか、薔薇を背景により積極的になる。

「お兄さん、お仕事のお休みの日とか、時間のある時に連絡下さい。」

メールでも電話でもいいです。ね、お願いっ。約束ですよっ」

「ははは・・・美佳ちゃん・・・ボーイフレンドは大勢いるんでしよう？なにもこんなオジサンをその仲間に入れなくたっていいじゃないか」

「お兄さんはオジサンなんかじゃないし、それにボーイフレンドの仲間になんて入れませんよ。私の恋人になってほしいんです。」

ストレートな子だな。慣れてる・・・というか、モテるんだろうから自信もあるんだな。きつと断られたことがないんだ。ということはプライドが高いということか。麻琴はどうしてこの子と仲が良いんだろう。話合うのか???

いつの間にか目的地の水族館に到着していた。車を止めたまま和樹も美佳も降りずにいた。

「美佳ちゃん、俺をからかうならもう止めてほしいな。さつきも言ったけど、仕事が本当に忙しいんだ。電話もメールも今の自分にはできない。それにね、お互い昨日会ったばかりだよ。本気で恋人になってほしいなんて思ってるわけじゃないだろう？」

「・・・本気と言ったら？」

「俄かに信じがたいんだが・・・」

「でも・・・本気なんです。お兄さんは初めてでも、私はお兄さんのこと麻琴の話で随分前から知ってるんです。麻琴から見たお兄さんと、私がこれから感じていくお兄さんは必ずしも同じとは言えないけど、でも私はお兄さんのこと凄く・・・凄く・・・」

これまで勝気なくらいに話していた美香がガラッと雰囲気を変え、

言葉を選びながら消え入りそうな声で一生懸命想いを告げようとしているのが伝わってきた。

「なんだ、やっぱり麻琴と同じ年頃の女の子なんだな。性格は全く違うけど、不器用さは同じだ。どうせ年上への憧れみたいなものだろう。少し付き合えば飽きるか」

「美佳ちゃん、君の気持ちは分かったよ。恋人になるのは無理だけど、友達・・・ボーイフレンドの一人としても良いなら時々連絡を取り合おう。それで良いかな」

「・・・ボーイフレンドの一人・・・そんな風に思えないけど、でも良いです。友達とか恋人とか、そういう関係じゃなくても繋がっていたい」

それは柳瀬が麻琴とどうにかして繋がっていたいという想いから、苦肉の策で思いついた『自由な関係、新しい関係』と同一のものであった。そしてその関係は、なかなかその先に発展しにくいということも、麻琴と柳瀬を見て知っている。それでも近づきたい一心で受け入れた。

「今の電話お兄ちゃんだったんだけど、美佳送ったらそのまま病院行くって。多分帰らないって・・・。もう少し早く連絡くれると助かるんだけどなあ。ずっと食べずに待ってたのに、健兄ごめんね」

「ああいや、慣れっこだ。でも、もう食おう。腹ペコだ」

味噌汁をテーブルに置いたところで今度は美佳からメールが入った。

《今帰宅しました。お兄さんに色々無理言ってしまったが、楽しかったよ！またその内メールくれるって約束もしちゃった。頑張るぞー！また遊びに行くのでヨロシクです》

対面して椅子に座り健悟のお茶碗にご飯をよそいながら、メールの内容を掻い摘んで話した。すると健悟は右手で頬杖をつき考えるポーズを作った。そして次第にニヤつく。

「もしかして病院じゃなくて今頃ホテルに居たりして・・・」

「・・・！ お兄ちゃんに限ってそんなことないよつ。健兄とは違うんだからあつ」

何故かムキになる麻琴。

「なんだよ、人聞き悪いな。俺がいつもそついう事してるみたいに言うなよ」

「だって・・・健兄はモテたでしょ？女性経験豊富な感じする」

もちろん健悟の学生時代のモテぶりは、以前から和樹に聞いて知っている。その中には多少の誤解もあるのだが・・・

「そりゃあ大学の頃は・・・でも初日デートの当日ってのはなかったぞつ」

「やっぱり経験豊富なんだ。。。」

色んな人と付き合つて、色んな人と関係して、自分の知らない色々な楽しい思い出が健悟と見知らぬ女性の間にある。過去に対しての明らかな嫉妬が麻琴を取り囲んでいた。少し悔しげに目からジワジワと涙が浮かぶ。分かっていながらもショックなのだ。自分から話を振っておいて大きく後悔する麻琴。

「なっ、冗談だよ、冗談。ほら チリエージョ c i l i e g i o のオーナーだって  
言ってただろ、女性の影がなかったって」

「だってオーナーは弁護士になつてからの健兄しか知らないじゃない。大学時代の健兄のことは何も知らないし・・・私のことだって何とでも誤魔化せるじゃない」

これ以上続けると負のスパイラルに陥るのは目に見えていた。健悟は方向性を少しだけ変え何時もの麻琴を引き出そうとした。

「麻琴、今更どうしようもないことに拘られても困るな。それとも麻琴は過去の俺で現在の俺を判断するのか？もしそうなら、俺にはもう何も言うことができないよ」

少し突き放すような硬さのある声と目。麻琴の表情はサツと反省の色に変化を見せた。

「分かつてるもん、そんなこと分かつてる・・・」  
その大きな瞳に涙を浮べ、鼻の頭を赤く染めている。麻琴には可哀相だが、健悟は麻琴のこの表情さえも愛しいと感じる。椅子から立ち上がり麻琴の頭を優しく撫でると、我慢していた涙が床に零れた。大人と子供の間を歩き来する素直で純粹で汚れを知らない美しい涙。悪戯に泣かせてしまったような気分になり、健悟も少し反省する。

「麻琴、ごめん。目腫れるからあんまり泣くなつて。な？」

俺、麻琴にこんなに弱かったっけ。全然強く言えねえ・・・

「うっん、私こそゴメンね。健兄の言う通りだね。過去のこと拘

られてもホント困るよね。もう言わないから、「ご飯食べよ」

健悟は麻琴が過去の女性関係についての程度把握しているのかを知らない。まさか和樹が予防線の為とはいえ、過去の女性関係を麻琴に話しているとは思いもしなかったのだ。それも酷く誤解した内容を吹き込んでいたとは・・・

## 選択は暗示なり

「あー 旨かった、ご馳走様っ。また腕上げたんじゃないか？」  
「お粗末さまでした。そんなに褒めたって何も出ないよ」

健悟の機転で負のスパイラルは回避できた。素直で反省のできる麻琴の性格をよく知っているからこそであるが、あと僅かにでも言い過ぎたら大泣きして取り返しのつかないところだっただろう。笑った顔も可愛いが、怒った顔も泣いた顔も、やはり可愛い。時々は見たいものだが、その後のリスクが高過ぎる。  
二人で食器をキッチンのシンクへ移し終わると、珍しく健悟が泡立てたスポンジを持ち不慣れな手付きで洗い始めた。そして麻琴は隣に立ちすすいだ食器を水切りカゴへ移していく。

「麻琴、お風呂・・・」

「出来てるよ。もう入る？」

「いや、そうじゃなくて・・・」

さつきから同じ食器を洗い続けている。残り僅かになったというのに、なかなか終わらない。健悟の手元から目が放せないまま

「あ、今日は入らないで帰るってこと？」

「入るけど・・・さ・・・」

「？ じゃあ、入れば??? って言うか、健兄早くそれ洗ってよ  
お」

若干イライラが芽を出す。しかし健悟はそのイラつきには気付いていない。

「・・・うん・・・そのさ、お風呂一緒に・・・」

「・・・イヤ! 絶対にイヤ。」



一緒にお風呂に入っていることを想像すると同時に、今朝の卑猥な光景が思い出される。きつとまた意地悪な事をされる。そして恥ずかしくて嫌なはずなのに、どこかでそれを許している淫らな恥ずべく自分がある・・・

麻琴は自然にある性的欲求に対して、まだ素直に受け入れられていない。セックスは愛があつてするものという認識はあれど、それを求めたりオープンにすることにはまだまだ抵抗があるのだ。そして健悟も麻琴の性格からそう憶測するため、このような誘い方になる。拒否されることも想定内。

「じゃあ、今日買ったやつ身に着けてくれたらお風呂は一緒じゃなくても我慢する。」

「どっちがいい？ 一緒にお風呂に入ると、アレを身に着けると」

「え・・・どっちって・・・どっちも・・・恥ずかしいもん、イヤよ」

その言葉通り恥ずかしそうに顔を赤らめ下を向いてしまった。

「麻琴お、我が俣はダメだ。どっちかを選んだ」

選択肢を与えることで、どちらかを選ばないといけないと暗示かける。健悟は麻琴の顔を覗き込んで返事を促す。そして麻琴が選んだのは・・・

チャポン

「麻琴お・・・暗いよお。。。怖いよお。。。真っ暗じゃないかよ

「」  
「だって明るいと見えちゃう」

「見るのが目的だったのに・・・」

「変態っ！」

暗闇の中、二人はバスタブに浸かっている。

「……なんでアッチ選ばなかったんだよ」

「だって今日買ったばかりで洗ってもいけないし。それに……

あの下着はセクシー過ぎるよ。絶対に似合わない」

肌馴染みの良いサーモンピンク。ブラはカップの縁取りに柔らかなフリルが付いて可愛いが、カップ部分が透け感のある素材で出来ており、補正の役目は放棄している。ショーツはサイドリボンとなつてキュートな感じがあるが、やはり中央部分は透け感が強い。完全に健悟の一存だけで決めて購入した代物だ。

「あー、早く着せて見たいな。きつと似合うよ。麻琴はなに着ても可愛いはずだ」

「はいはい」

一瞬へんな沈黙に押し黙る二人。

「……麻琴 背中洗ってくれる？」

「うん、いいよ」

二人でバスタブから出る。当然暗闇のままだ。足元が見え難く、ほぼ勘が頼りだ。

「麻琴気をつけるよ。ほら、手」

そう言うと正面から麻琴の手を取る。

暗闇に少しずつだが目が慣れ、薄暗い中に麻琴の艶かしい裸体が浮かび上がってきた。

「あっ・・・！」

麻琴は胸元を凝視する健悟の視線に気付き、慌てて空いている右手で胸を隠した。

しかし健悟はその右手をそっと掴みそこから離れた。

「やっぱり俺は自分で洗う。先に麻琴洗ってやるよ」

「いい、いいよ・・・自分で出来るもん」

断る麻琴を無視しボディソープを手に取り向かい合って抱き寄せようようにして背中から両手で洗い始めた。洗うといっても撫で回すような手つきで、いつの間にか隙間無く密着し、麻琴の腹部には健悟のシンボルが硬く主張していた。

背中からゆるゆると下に降りた手は白く丸い臀部を柔らかく撫で回す。

石鹸でなでられると、こんなに気持ちいいんだ

麻琴本人は気付いていないが、少しずつ呼吸が浅く甘いものへと変化していく。

徐に両肩を掴まれ密着していた身体を離されると、急に寂しさが込み上げた。

どうして別々の身体なんだろう

いつかと思った離れているということが不自然に思えてくるあの感覚だった。

「はっ あ。。。」

「大丈夫？麻琴は尖がったところが性感帯なのかな」

暗がりではつきりとした表情は読み取れないが、ニヒルに口元を緩めているようにも見える。両手で脇の下からウエストまでのラインを確かめるように撫で洗われ、ジワジワと性感帯を引き起こされるのが分かった。時々我慢したいという意に反して漏れる甘い吐息に、健悟が本気モードに入りつつあった。

「大事なところも洗わなきゃな」

言うのと同時に麻琴の足の間に右手が入り込んできた。一瞬の出来事に阻止できない。

麻琴の足の間に健悟の右下肢が差し込まれ、ジリジリと麻琴の右足を外側に開いた。そして健悟の手が入りやすいスペースを作ると遠慮なく右手が麻琴の大切なところに触れてきた。人差し指と中指で下の突起を前後に撫でられ、麻琴の中からトロリと何かが溢れるのを感じた。

「凄いな・・・」

耳元に色が入った声で囁く。頬に、脛に、唇に、胸の頂きに次々と吸い付くような熱いキスを受け、麻琴の思考は溶けていく。そしてトロトロになった中心へと中指が収まると、行き場無くした液体が溢れて足を伝った。

「ああ、麻琴の中凄いことになってるよ。ほら、ね。」

「あぁっ・・・」

卑猥な音が浴室内に響く。もちろんこれも聴覚を刺激する為わざと音を立てているのだ。が、健悟自身も一層興奮を増してしまった。

「やだ・・・こんな・・・はっ・・・ずかし・・・う・・・ん・・・」

健悟の手を押さえようとするが、興奮しきっている健悟の手はビクともせず、また麻琴の手にも力が入らず抵抗にならない。

「あっ あっ・・・健兄っ なんか ヘンに・・・あーっ」

「麻琴、いいよ・・・」

健悟の手の動きが急激に加速する。麻琴は自分から出る高くか細かい声が、頭から抜けていくような感じがした。そして子宮が宙に浮かんだような後に軽い痙攣を起こし、直後へナヘナと床に座り込んでしまった。

「ハア・・・イッた・・・な」

健悟は放心する麻琴を見下ろすと、満足そうに大きな手を頭に乗せ、いつものように優しく撫でた。

## 冷ややかな視線

ペタンと座り込んだまま、なかなか立ち上がれず健悟に立たせてもらった。なんとか浴槽の中に移動するも、のぼせたのかと思うほど頭の中はボーとしている。薄暗い中、自分で身体を洗う健悟の背中を呆然と眺めていると、訳も無く涙が溢れてきた。健悟のゴシゴシと身体を擦る荒っぽい音と、麻琴の鼻を齧る音が混じる。

「・・・？ 麻琴・・・もしかして泣いてる？」

「ズズツ・・・ううん」

「ちよつと待って」

訝しげな健悟の声。そして浴室のドアを開け、パチツと電気を点けた。いきなり視界が明るくなり、いつもの浴室の雰囲気を取り戻す。

「えっ！ヤダツ 電気っ」

「やっぱり泣いてんじゃないかよ。鼻赤くして」

「泣いてないってばっ」

あちこちに泡が付いたままの健悟が、浴槽で小さくなっている麻琴を見下ろす。麻琴が健悟を見上げると、仰け反るようにピンっと天に向けた健悟自身が目の前に現れ、また慌てて下を向いた。

わわわわっ。見ちゃいけないモノが目の前に・・・

「あっ 見たなっ。金取るぞ」

隠す訳でもなくケロツとして言う。その何でもない態度を見て、自分ばかりが恥ずかしがっていると思うと急に悔しい気持ちが沸々と湧き出てきた。

「もうっ 腹立つっ！」  
無防備に露出されている健悟のソレを、予告なしにペシッと平手打ちしてやった。

「いーってっ！！ なーにすんだよっ」  
目を吊り上げて腰を引き気味に両手で押さえている。

「ふんっ。知らないっ」  
「まーこーとー、やって良いことと悪いことがあるんだぞ。  
今はダメだろ、今は。コイツに謝れっ」

「ばっかじゃないの？私出るっ。アッチ向いててっ」

若干揉めながらも、何とか二人は風呂を出た。そして結局は仲良く同じベッドに入り、健悟の望み通り朝とさっきの続きをすることに。健悟の進入にはまだ痛みを伴うのだが、幸せの痛みであるという意識からか、初めての時とは幾分かその痛みも軽減していたように思う。

「おはよう、美山さん。この前は悪かったね」  
振り向くと人懐こそうな富樫翔太の笑顔があった。あと10分程で講義が始まる時刻だ。

「あ・富樫さん。おはようございます」  
畏まった挨拶をすると、翔太が白い歯を見せ笑った。

「先輩後輩ってわけじゃないんだし、敬語は無しでいいよ。それよ

りココ空いてる？」

麻琴の隣の空席を指差す。

「あ、うん。誰もいないよ」

翔太の人懐こさと明るい性格に、麻琴も躊躇無く話す。和樹と健悟以外の男性には、あまり心を開かない麻琴には珍しいことだ。実は柳瀬ともまだ距離を縮められずにいるのだ。

「麻琴ちゃんて呼んでいい？俺のことは翔太って呼んでよ」

「ん・・・じゃあ翔太くんて呼んで良い？」

やはり呼び捨ては麻琴にはハードルが高い。

「オケオケッ。で、麻琴ちゃんもやっぱり例のイケメン講師のファンなの？」

「え、なんで？」

「この前、忘れ物取りに行つて戻る時にさ、女子たちが噂してたんだ。イケメンに声かけられてる女子がいて、親密そうだったって。色白の目の大きなハーフっぽい可愛い顔した子だったって言うってたから、きつと麻琴ちゃんのことだろうって思ってたさ」

麻琴はハーフではないが、確かに間違われることがある。決して彫が深いわけでも、パーツが濃いわけでもない。だが、睫毛が濃く長く、グレーがかかった色素の薄い瞳と、薄茶色の髪の毛に透き通るような白い肌が、一般の日本人のものとは違う印象を与える。

「ファンじゃ・・・ないわ・・・。実は恋人・・・なの」

「えっ マジ？ だってあの人、講師になってまだ間もないでしょ。もうそういう関係・・・？」

「違うの。ずっと前から、私が生まれた時から知ってるの。兄と同



じ年で、幼馴染で、近所に住んでて・・・だから最近知り合ったのとは違うのね。でも恋人になったのはわりと最近だけ。ふふっ」

自分からこんな話をするのは初めてだった。まして二度しか会ったことのない相手に。

「へえー 驚いたな。美男美女でお似合いだけど、二人ともファンが多いから公表しない方がいいかもなー」

「私はともかく、健兄・早瀬さんの方はファンがいっぱいよね。翔太くん今の話内緒ね」

ちよっと悪戯っぽく笑ってみせる。この表情に惹かれない男はいないだろう。翔太も例外ではないが、気付かれないように装う。

「麻琴ちゃん気付いてないの？ 違う学部の男子からも憧れの的だよ。ま、高嶺の花って感じで、堂々と声掛けてくる勇敢な男は少ないかもしれないけど、事実俺の周りでも麻琴ちゃんの話は結構出るしね。あ、俺は安全パイだよ。彼女いるし下心は無し。へへっ」

「えっ、どこどこ。彼女は同じ学部？翔太くんの彼女見たいっ」

キョロキョロと周りを見渡す麻琴を、翔太は可笑しそうに笑った。

「大学生じゃないもん。ここには居ないよ。残念でしたー」

二人は前からの知り合いのように顔を見合わせ笑いあった。その仲の良い様子を見る冷やかな視線にも気付かず。そしてその視線は、空席状態の教壇にも向けられた。

## 動き出す過去

「いつもこんな洒落たところに来るの？」

「素敵なところですよ。実はこの前麻琴たちと初めて来て、今日で二度目なんです」

二度目のデートに選んだ場所は柳瀬と麻琴と来た *jazz* *be*  
*rspan* スパン だ。

「麻琴たちって、他は誰？」

「柳瀬くんって23歳のサラリーマンなんですけど、その人と三人です。ここに連れてきてくれたのも彼なんです」

「ふーん、サラリーマンね・・・」

男が一緒だったなんて聞いてないな。全くアイツは・・・しかもこんな大人の来るところで似合わないっての。和樹は麻琴のことならどんな些細なことでも把握していきたい。

カウンターに腰掛ける二人は、まだ飲み物すら頼んでいない。マスタアの妻、ヒロコが頃合いを見て注文の切っ掛けを作る。

「いらっしやいませ。」

美佳ちゃんよ。また来てくれて嬉しいわ」

そう言うと和樹に目を移し挨拶をする。

「いらっしやいませ・・・」

お飲み物は・・・」

笑顔だったヒロコの顔色がどんどん悪くなっていく。それは美佳に

も、そして初めて会った和樹にも分かる程だ。和樹は具合でも悪いのかと顔を覗き込む。

「あの、どこか悪いんですか？ 顔色良くないですよ。

ああ、失礼しました。私は美山と申しまして小児外科医をしています」

その言葉にヒロコは息を呑み言葉も出なくなった。右手で口元を押さえ、目は見開き驚愕の表情を見せる。そんなヒロコに気がついたマスターのサトさんがカウンターから出てヒロコの腕を掴むと、ハッと気を取り戻し取り繕うような笑顔を見せた。

「ああ、ゴメンなさい。更年期障害かしら、ボーっとなっちゃった。何をお飲みになりますか？」

するとすかさずマスターのサトさんがフォローを入れる。

「すみませんね。久しぶりにハンサムなお客さんが来たもんだから、見惚れちゃって。俺の前で失礼な女房だよ。ハハハッ」

「あ、ヒロコさんダメですよ。こんな素敵な旦那さまがいるのにつ、美佳も冗談交じりに笑顔を見せる。しかし和樹は腑に落ちない。明らかに自分の顔を見て笑顔を無くし、名を告げたところで驚きの表情を見せたのだ。体調が悪いのとは違う別の変化。一体なぜだろう。

「ごめん、実は今日飲めないんだ。明日の午後なんだけどオペがあつて・・・美佳ちゃんは好きなの飲んでいいよ。自分は適当にソフトドリンクを」

美佳は申し訳ないと思いつつ、和樹のすすめでカクテルを頼んだ。

他愛ない会話で時間は過ぎてゆく。美佳はその後3杯飲み、すっかり宵の口となってしまうた。

「ちょっとお手洗いに」

フラフラと席を立つ美佳を心配そうに見つめながら見送る。和樹はさっきからある視線に気付いていた。そしてその視線の先にはヒロコがいる。パツと目を逸らし、ヒロコもお手洗いへと姿を消した。

「マスター、ヒロコさんは私のことを知っているんでしょうか」

「どうだろう。ヒロコは何も言っていないが、美山さんはヒロコとは全く初めてかい？」

「さっきから考えているんですけど、ちょっと思い当たらなくて・・・患者さんでも、患者さんのご家族でもないみたいだし・・・」

話しているとフラフラと美佳が戻ってきた。

「あー、男同士なに話してたんですかあ」

呂律の回りが怪しい。頬も赤く染まっている。

「いや、別に。さて・・・と、美佳ちゃん送るよ。もう9時半だ」

「あー、ホントに門限10時なんだ。おにーさん、麻琴いつつもバタバタしてますよあー。ちょっと厳しいんじゃないですかあ。らつて、もうはらち過ぎた大人らしいー、#\$。。。。」

「ハハ・・・美佳ちゃん結構酔ったね。分かった分かった。ちゃんとして立てるかい？足元気をつけて、ほらしっかり」

会計を済ませ美佳を抱えるようにしてspanを後にした。ヒロコの視線が気にはなるが、これ以上は追求できないし、もう来ることのない店だろうと思いい忘れることにした。

「おにーさーん、今度は動物園連れてってくらさーい。ゴリラ見たいのでーす」

「えー、ゴリラ??? 相当酔ったな。はいはい、ゴリラでもゴジラでも良いから、ちゃんとシートベルトして大人しく座って下さい」

美佳のシートベルトをする為に向こう側に手を伸ばした時、和樹に美佳が抱きついた。

「美佳ちゃん、ちょっと・・・」

「お兄さん、あったかい。優しくてあったかくて・・・好き」

和樹は失敗したと思った。酔っ払っていると思って、美佳の気持ちへの配慮を怠っていたのだ。彼女の好意は初めから知っていた。だが、美佳は全くとは言わないが、本当に酔っ払っているのではなかったのだ。

「美佳ちゃん、ダメだよ。シートベルトしよう。自分でできる?」

「できない。お兄さんがして・・・」

甘ったるい声と吐息が耳を擦る。

「本当に出来ないの?」

「うん、できないの」

「しょうがないな。してあげるから、この手離してよ」

首に巻きつく美佳の両腕を軽く掴むが、抵抗を感じる。

「はぁ。。。美佳ちゃん・・・苦しいから離して、ほら」

「キス・・・して・・・くれたら離す」

## 二度目のデートは雨降り

「そういう駆け引きは、そういうことが好きな男とするんだな。男がみんな恋愛の駆け引きを好きだと思ったら大間違いだ」

厳しくも柔らかく諫めるその言葉に、自然と美佳の手の力が抜けていく。

「駆け引きなんてしたことないし、男の人が駆け引きを好きだなんて思ったこともないです。お兄さん、私のこと嫌いでしょ。私のこと初めから遊んでる女の子だと思って見てるでしょ」

「それは・・・」  
言葉が続かない。それは中らずとも遠からずだったからだ。美人で明るく積極的な彼女からは、麻琴とは違い男馴れしているような印象を受ける。和樹の目には、その物怖じしない美佳の性格が裏目に出ってしまったのだ。

「・・・やっぱり。そういう目で見られるの初めてじゃないから、もう慣れっことですけど。でも私、ゲームみたいに男の人と遊んだ事も、こつやって自分からデートに誘ったこともないです。でも・・・そんなに迷惑なら、もう誘ったりしません。嫌われるのは怖いですが。。。」

10時を少し過ぎ外はシトシトと雨が降り始め、狭い車内の空気は湿り気を帯びている。

数分前までの戯れた感じの彼女は身を潜め、今はあの勝気な目に薄っすらと涙が溜まり、小さな幼女のように見えた。

人の言動が直接その人の思考と結びつくわけではない。よく考えたら自分は人を表面的にしか見ていないのかもしれないな。どこまで本当か分からないけど、健悟もそうだった。散々女を弄んでいたかと思えば、実は思い悩んでいた。美佳ちゃんは・・・彼女はどうなんだろう。勝気なようでもないので・・・男性経験がないとは思えないけど、そう多くもないのか・・・

美佳を落ち着かせ自宅前まで送った。和樹自身が帰宅した時間はすでに11時半を過ぎていた。雨も本降りとなり、家の外灯も霞んで見える。

ガチャ

「お帰り。遅かったね」

玄関ドアを開けると仏間から麻琴が顔を出した。風呂から上がったばかりなのか、頭にはバスタオルをグルグルと巻いている。

「ただいま」

「雨強いね。濡れなかった？」

「大丈夫だ。あ、今日spannに行ってきたよ」

「spann・・・？それなに？」

「この前行ったんだろ？jazz berだよ」

「ああ、spannというんだ。マスターのマサさんと奥さんのヒロコさんの名前は覚えてるけど、お店の名前は気にしてなかったから。いい感じのところだったでしょ」

「うん。だけどそのヒロコさんて、少しヘンでさ、俺の顔と名前聞いて顔色が変わったんだ。なんか凄い悪いものでも見たみたいに見えるってというか、違う世界にぶっ飛んだって言うか・・・」

「そう言えばあ・・・私の顔見た時も、どこかで会ったことがあるよ

うなこと言った。知り合いの人にも似てて驚いたんじゃない？」

「うーん・・・そうなのかな。ま、いつか。冷えたから風呂入ってくるわ」

「あ、はい。じゃ着る物出しとくね」

翌朝美佳からの短いメールが入っていた。

《昨日はおかしなこと言って困らせてごめんなさい。

麻琴とはずっと親友でいたいので、昨日のことは忘れて下さい。もうデートに誘ったりしないので安心して下さいね》

こんな一方的なメール・・・あれから風呂から出て眠りにつくまで、どれだけ苦労したと思ってんだ

美佳を傷つけたかもしれないと思うと、疲れていて睡魔も来ているが、なかなか寝付けなかったのだ。正直今でも恋愛ことは面倒だと思っっている。まして麻琴の親友で、性格もまだ掴めずにいて、どう対応したらいいのか分からず悩む。なぜそんなことに悩まなければいけないのか和樹にも分からないが、気付いたら向き合おうとしている自分がいたのだ。

《今日の夜、仕事が終わったらメールします。

一人で結論出して納得しないでほしかったな》



## テーブルの下の本心

「じゃあ、そういうことで また今度」  
右手を上げる翔太に麻琴も手を振る。大学内では翔太と顔を合わせることが多くなった。

さて、今日はお兄ちゃんは夕食いらないから自分の分だけね。  
あ、健兄はどうか。急に来られても準備できないから確認しようかな

携帯電話をバッグから取り出しアドレスを開いたその時だった

「美山麻琴さん・・・ですよね」

「え・・・はい」

振り向くと見知らぬ女性がにこやかに立っていた。高級そうな黒のパンツスーツにオレンジのケリーバッグをさり気なく持っている。整った目鼻立ちに清楚な雰囲気大人の女性の匂いを漂わせる。

「はじめまして。私、こういうものです」

女性は名刺を取り出し麻琴に差し出した。

「ありがとうございます。」

えっと・・・ジュエリーショップ on you の・・・辻井  
香奈子さん・・・。

あの、私になにか？」

「ええ、ちょっと聞いてほしい話があるの。直ぐそばにある喫茶店

でどうかしら」

「あまり長い時間は困るんですけど・・・」

「お時間は取らせないわ」

足は例の喫茶店 きこりの森 に向いている。辻井というこの女性は何者で、自分にどんな話があると言うのだろうか。一抹の不安を感じる。

### カランカラン

きこりの森の鈴の音色は重たく乾いた古い音がして、どこかの国の民族楽器のものとよく似ている。

ちようど真ん中あたりの席が空いていた。辻井香奈子は真っ先にそこに腰を下ろした。勝手に二人分のコーヒーを注文すると、色っぽく足を組む。テーブルに片肘をつき、掌に顎を寄せ、麻琴を正面から見つめる。

「ホント、可愛いわね。育ちも良さそう、性格も良さそう。」

ニコニコと微笑んでいる。しかしその本心は見えぬ麻琴は困惑する。

「あの、辻井さん、私にお話って・・・」

自分の知らない相手が、自分のことを知っている。目の前の女性が綺麗な人であっても、それは不気味で気持ちの悪いものだ。得体の知れぬ不安が渦を巻く。

「あら、そうだったわね。ごめんなさい。」

実はね、私学生の頃健悟とお付き合っていたのよ」

唐突な告白だった。だが健悟の女性関係の話で今更驚く麻琴ではない。和樹の話では、相手は美人ばかりだったとも聞いており納得の上だ。ただ美人ばかりを選んで健悟が声を掛けたのではなく、自信のある美人が自分から健悟に声をかけてきたというのが正確な事実ではあるのだが。

少しも驚きを見せない麻琴に香奈子は違和感を感じつつも話を続ける。

「先月、数年ぶりに私たち再会したの。懐かしくてまた会う約束をしてね、最近も会ったばかりなのよ。彼女はいないの？って聞いたら、あなたのことは幼馴染の妹で仲がいいって言ってたけど、彼女なんかじゃないって言うの。でもあなたはどうかしら・・・。私たち、また昔みたいな関係に戻りたいと思ってるの。それで今日伺ったのは、一応誤解があってはいけないし、今後この事であなを傷つけることにならないようにと思ったからなのよ」

香奈子は余裕の顔で一気に話を詰めた。

彼女なんかじゃない

健悟は本当にそう言ったのだろうか。ならば彼にとって自分という存在は・・・？

「そうですね・・・。でしたら、私がお話をしなければいけないのは辻井さんではなく、彼の方ですね。わざわざ足を運んで頂いたのにすみませんでした。これ以上辻井さんとお話をすると、それこそ誤解を生じる可能性があります。ですので私はこれで失礼します」

笑顔はないが決して敵対心を露わにしているわけでもなく、冷静に淡々と述べる。テーブルの下で小刻みに震える両足とは裏腹に、司

法に携わろうという心構えに毅然としたその振る舞いが、香奈子の目に可愛げのない小娘に映るのだった。

## 心の迷走

「無理に会ってくれなくてもいいのに・・・」  
「ん？」

少し口を尖らせて拗ねた顔してるんだろっな。

車を運転する和樹は今の美佳の表情を実際に見ることはできないが、容易に想像が付き無意識に顔が綻ぶ。声にも笑みが含まれていたのか、美佳の癪に障る。

「何が可笑しいんですか。お兄さん結構やな性格してるんですねっ」  
「はははっ そうかもな」

「・・・」  
否定された方がオープンに突っ掛かっていけるのだが、簡単に肯定されると口を噤むしかない。

「美佳ちゃんはそのう易怒的なのも似合うねえ」

「いどてき・・・？なんですか、それ」

「まあ、簡単に言えば怒りっぱいって言うのかな。」

とある公園の前に車を止めた。その公園の向こうから五棟に連なる団地がこちらを見下ろし、切れ掛かった外灯の明かりがチリチリと刻むように車内を照らす。

「酷い・・・バカにしてるんですね」

美佳は窓の外を向いている。少ししか見えない横顔を目の端に捉えながら和樹はいつもの真面目な彼に戻る。

「ごめんごめん。そうじゃないよ。」

君は解り難い性格なのかなって思って、ちょっと身構えていたんだ

けど、ストレートな性格みたいだ」

「どうせ単純な性格ですよ」

「ほら、そうやって思ったことを直ぐに口に出すんだ。解り易い。」

頭にカツと血が上りそうだった。麻琴の兄でなければ平手打ちの一つでも見舞わせ、車から飛び出していただろう。優しくて誠実そので、包容力のある大人の男を絵に描いたような和樹を好きになったのは自分だ。その自分を否定したくはない。だが、思い描いていたものと、本来の和樹は違うのかもしれない。自らキスを求めたときの和樹の返しは、美佳にとって頭から氷水を掛けられたような冷たなものだったし、軽蔑されたとも思っている。

「何も卑下することはない。裏表のない素直な性格だって言っているんだ。」

麻琴が君を信頼するわけも何となく解った。勿論、まだ数回しか会ったことがないから未知の部分はあるけど、だから・・・もっと美佳ちゃんを知りたいとも思ってる」

「え・・・」

やっと和樹の方を向いた顔は、飾り気のない素の美佳そのものだった。

健悟と話をしたい。しかしこんな日に限って仕事が忙しいのか、携帯に電話を入れても電波が届かなかつたり、留守電になるばかりだ。

溜息混じりに諦めるものの、もしかして次こそは出てくれるかもしれない、と10分置きに掛けてしまふ。そんなことをしていると、突然電話が鳴った。やっと気付いてくれたかと慌てて携帯を手に取り取る。

「もしもしっ 健兄？」

「あ、や……柳瀬だけど……」

「ああ……すみません」

落胆の色を隠せない。それを察知した柳瀬も申し訳なさそうな声になる。

「タイミング悪かったみたいだね。いやさ、この前のjazz barに居るんだけど、出てこないかなあって思って電話したんだけど……急じゃ無理だよな」

一瞬間が開いたが、麻琴は明るく返事をした。

「良いですよ。一人で考え事ばかりしてつまらなかったから。今から行きます」

「えっ いいの？場所覚えてる？迎えに行こうか」

「大丈夫です。大体覚えてますし、迷子になったら電話します。家からじゃ、きつとそちらに着くのは8時頃ですけど良いですか？」

香奈子の話を全て鵜呑みにしているわけではない。だが、健悟と連絡が取れない以上、全てが不透明で不安になるばかりだ。自分にはないしつとりとした色香のある大人の女性。ただそれだけでも健悟を奪う十分な魅力も感じる。

『愛してる』という言葉も、一時の戯れの囁きだったのではないか。考えれば考える程に不安は増すばかりだ。麻琴の心は迷走していた。

そんな中、偶然にも柳瀬からの電話があり、麻琴は相談がてら誘いに乗ったのだった。



## ヒロコの秘密

「知らなかった。美佳ちゃんとお兄さんが・・・」

柳瀬は深い溜息をつく。先駆けて告白した柳瀬の恋は成就の気配すら見せず、周囲では次々とカップルが誕生する。何かのバチかと考えるが、これといって思い当たる素行の悪さもなく、逆に気分が落ち込む。柳瀬も社内では女の子に人気があるほうだ。デートの誘いもある。しかし今は麻琴一筋で他の子とのデートなど考えられず断っているのだ。柳瀬が願うのは麻琴が最近付き合い始めた彼と一刻も早く別れてくれること、ただそれだけなのだ。そんな気持ちは欠片も見せず、柳瀬は麻琴との会話に集中する。

「美佳ちゃんが猛攻撃する姿が思い浮かぶようだよ。そう言えば麻琴ちゃんのお兄さんってどんな人なの？やっぱり似てる？」

「うーん、似てるって言われたことはないかな。

目は切れ長の奥二重で、少しだけ垂れてるの。鼻筋はスツと通ってて、口は普通・・・？どちらかと言えば、優しい涼しげな顔かな」

実はジツクリと見たことがなかった。悪い顔ではない・・・と思う。

「うーん、抽象的で想像がつかないな・・・」

柳瀬も少々困っている。そしてその会話を聞いていたマサさんが割って入る。

「でも兄妹なんだから少しはどこかが似てるんじゃないの？本人た

ちは似てないって思っても、他人から見たら似てるってことあるでしょ。麻琴ちゃんは人が振り返るほどに可愛い顔立ちしているから、きつとお兄さんもイイ顔してるよ」

「そんなこと・・・あ、この前美佳と二人でspanに來たつて言つてましたよ。マスター覚えてませんか？ あ、ヒロコさんが兄の顔を見て驚いた顔してたつて言つてました」

「・・・ああ！覚えてるよ。物静かで落ち着いたイイ男だった。あの彼は麻琴ちゃんのお兄さんかあ。おい、ヒロコ、ちよつと」

ニコニコと笑い手招きするマサさんは、世の中の嫌なことや、つまらない人間関係とは無縁の人のような気がする。人生を心から楽しんでるようなゆとりが感じられるのだ。

「ヒロコ、この前ここに来てくれた180cmくらいの、キチツとした物静かで落ち着いた良い感じの男のお客さん覚えてるだろ。その人、麻琴ちゃんのお兄さんなんだつてさ。お前見惚れてボーっとしてただろ」

「・・・そうだったかしら。そんなお客さんいたかしら。ゴメンなさい覚えていないわ。」

「おいおい、あれだけ驚いた顔してたのに忘れるのか？美佳ちゃんて女の子も一緒に、ほら、小児科医だつて言つてた人だよ」

「覚えていないつて言つてるでしょー！」

小柄なヒロコのどこから出るのだろうと思うほどの大きな声が、jazzナンバーのかかる静かな店内に響いた。麻琴も柳瀬も他の客たちも驚いたが、一番驚いたのはマサさんだった。言葉なくヒロコ

を見つめている。

「ごめんなさい、わたし・・・ごめんなさい・・・」

周りをオロオロと見渡し謝る。いつの間にか他の客はまた自分たちの世界に入っている。ヒロコは身の置き所に困ったようにソワソワとしている。マサさんがヒロコの肩をポンポンと軽く叩くと、俯いたまま顔を覆った。

どうしてこんなに辛そうなんだろう。私とお兄ちゃんに何か関係あるの？

ヒロコさんには何か秘密がある。その秘密は一体・・・

そう思っても、目の前のヒロコに聞ける状況ではない。和樹が感じた不信感や違和感を、今は麻琴が感じていた。

また新しい客が訪れたのか、入り口のドアが静かに開いた。驚いていたマサさんがすぐにマスターの顔に戻った。

「いらつしゃいませ。あ・・・」

そこには美佳と、その少し後ろに和樹が立っていた。

片付けようと手に持っていたグラスが、ヒロコの手から零れるように落ち、床に到達すると細かく砕けた。そしてその上にヒロコ崩れるように倒れた。

「ヒロコ！・・・！」

マサさんの声が悲鳴に聞こえた。

## ヒロコの過去

「ヒロコ、大丈夫だよ。医者は過労じゃないかって言ってる。・・・考え事が多いみたいだけど、最近ちゃんと寝てるのか？」

突然倒れたヒロコは救急搬送され病院のベッドにいた。目の前には丸椅子に腰掛けたマサさんがいつもと変わらぬ優しい面持ちでヒロコを見ている。

「マサさん、ごめんなさい。お店・・・お店は？」

「今は店なんて気にしないで良いんだよ。心配するな。」

それより・・・そろそろ君の悩み事を正直に話してもらえないだろうか」

「・・・はい」

「さてと、これで終了ね」

麻琴はマサさんに借りたミドル丈の腰下エプロンを外して畳んだ。柳瀬と美佳は店内の掃除、和樹はマサさんと一緒に救急車に乗ったが、過労以外に異常がないことが分かると一足早くタクシーでspan>anに戻ってきた。

「でも良かったよね。脳梗塞とかだと後遺症があったりして怖いじゃない？過労なら栄養あるもの食べたり、ちゃんと休養取れば問題ないんでしょ？」

「うん、まあ そうなんだけど・・・」

和樹は身体的な過労というよりは、心労が原因しているのではないかと思っっている。具体的なことは何も分からない。だが、先日の自分を見た時の様子、そして麻琴から聞いた倒れる直前の話から、何か自分たち、若しくは自分に関係しているような気がしてならないのだ。

結局ヒロコは一日だけ入院するということになりマサさんも朝まで付き添った。和樹が鍵を預かって来ていた為、片付けが終わると全員が帰路についた。

十分な睡眠と点滴からの栄養を受け、ヒロコは午前中に退院した。二人の住まいはspanから二駅離れた駅前のマンションの13階にある。部屋は綺麗好きなヒロコの手入れが行き渡っており、白を基調にスッキリと整っている。マサさんが入れてくれたコーヒーに口を付け、フーッと細い溜息を一つつくとベッドルームのダンスから一冊の小さな手帳を持ってきた。

「マサさん、黙っててごめんなさい。これから全てお話します。それを聞いて貴方が離婚したいと思うのだったら、それに従います」

涙を浮かべ静かに話し出すヒロコは、声を震わせ更に小さく見える。マサさんは辛いなら話さなくてもいいと喉まで出掛かったが、話す

ことで心の負担が少しでも軽減されるのかもしれないと思い直した。

「和樹・・・美山 和樹は、私の実子です。これはあの子を妊娠した時の母子手帳なんです」

母子手帳をテーブルの上に置き、マサさんの目の前に滑らせるように差し出した。これまで何度も開いたのだろう。表紙の一部だけが苦心の跡を示すように擦り切れて変色していた。思いもよらぬヒロコの告白。だが子供の一人や二人いても不思議ではないとも思う。二人は5年前に初婚同士で結婚した。人間が50年以上も生きてきたのだ。言いたくないことや、死ぬほど辛い出来事の一つや二つあって当然なのだ。

「そうか。それであんなに取り乱したんだな。彼は何も知らないよ。うだが、そう装っているだけなのか」

「いいえ、あの子は何も知らない・・・何も知らないんです・・・どうしよう。。。」

「・・・彼を手放したのは・・・いつだったんだい。何故手放さなければいけなかったんだい？麻琴ちゃんは・・・君の子供ではないのかな」

誰もが思う疑問だろう。ヒロコはポロポロと涙を落としながら一生懸命マサさんの質問に答える。まるでこれまでの後悔を搾り出すように。

「麻琴ちゃんは違うわ。真正正銘、美山さんご夫婦の娘さんよ。」

和樹は・・・私が17歳の時に生まれたの。相手は当時の高校教師だった。その人と一緒に育てるつもりで授乳だってしたわ。それが・

・あんな事になるなんて・・・」

## 以外的な相談相手

健悟から朝早くメールが入っていた。昨日は仕事関係で忙しくてメールが出来なかったという事と、その忙しさが暫く続くので当分会えないということだった。昨日はヒロコが倒れ、柳瀬に相談するどころではなかった。でも誰かに聞いてほしい。だが和樹には相談しにくい。また変に拗れそうな気もする。では美佳はどうだろう。美佳は今和樹のことで頭が一杯だろう。浮かれ気分の彼女にできる内容でもないな……

「連絡先とか知らなかったから必死で探したの。でも会えて良かった」

「そうだったね。じゃ、後で連絡先交換しよう。で、その言いにくい相談ってなに？」

相談相手として きこりの森 に連れ込まれたのは翔太だった。彼は嫌な顔ひとつせず、麻琴の相談に耳を貸す。簡単な経緯を説明すると、翔太はうーん……と呻ったまま考え込んでいる。そして真面目な顔で麻琴の気持ちを探ってきた。

「麻琴ちゃんは早瀬教授のこと信じてないの？」

「信じてる……信じたい」



「じゃあ、何を悩んでるの？」

「私のこと彼女じゃないって言ったってことが・・・じゃあ私はなんなの？って」

「本当にそう言ったのかな。そう言ったとしても、その前後の話は聞いている？」

「聞いて・・・ない。全然。」

「じゃあ、悩むだけ無駄だよ。言葉はその前後が意味を作るんだ。ピックアップされた言葉に無理に意味を持たせるのは良くない。忙しくても教授に少し時間を作ってもらって話し合うべきだよ。その元カノが会ったって言ったって、教授が本当に会いたくて会ったか分からないしね。元気出しなよ」

翔太は可愛らしい見た目によらず、サバサバと男っぽい性格のようだ。

『悩むだけ無駄』

その通りだと思う。だが、このタイミングで忙しい、会えないと言われ、携帯さえ出してくれなかったのだ。どうにかして会えないものかと考える。翔太は職場に行くとか、自宅を訪ねるとかすると良いと言っ。

きこりの森からだ準急電車を使えば20分で健悟の勤める法律事務所がある。一度だけ健悟に頼まれごとをして行ったことがあった。

「翔太くん、ありがとう。私会ってくる。」

あの、でも・・・少し強引だけど、男の人ってこういう鬱陶しくない？」

「どうかな。人によると思うけど、俺に限って言えば嬉しいかな。真剣に想ってくれてるって実感するだろうし」

翔太はハツラツとして答えてくれる。正直者特有の、気取らぬ仕草と言葉。麻琴は勇気をもらい、ここに来るまでよりも数倍明るい表情となっていた。

- 榎村総合法律事務所

事務所の木製ドアの表面に黒い文字で書かれている。社長の榎村弁護士が独立したのは40代の頭で、かれこれ25年は経つ。ドアも25年開閉されれば、傷や塗装の剥がれなどの痛みが目に見えて分かる。おまけに開く時は「ギー」と、吸血鬼がどこぞの屋敷のドアを押した時の音がするのだ。

「あの一、すみません。どなたかいらつしゃいますか？」

声を掛けるが誰の返事もない。奥の方からボソボソと人の声が聞こえる。もう一度、今度は大きな声で呼んでみる。

「ごめんくださいー」

「はい、ちょっとお待ちを」

少し間延びした男の声が奥から聞こえる。そしてすり足ぎみの足音と共に現れたのは、白髪で色白の60代も半ばかと思われる小太りの男だった。

「ほお、これまた可愛らしいお嬢さん、どのようなご依頼で？」

細い目を更に細め麻琴に微笑む。嫌らしさはない。むしろ友好的で敵を作らないタイプに見える。

- 誰かに似てる。あ、ケンタッキーフライドチキンのカーネルおじさんの小さいバージョン！

「すみません。依頼ではないんです。実は早瀬健悟の知り合いの者で、ちよつと用があまりまして・・・居ますか？」

「早瀬くんのファンかあ。モテるねえ彼は。じゃあ、ちよつと奥のソファーに座ってお待ちなさい。あと10分やそこらで帰ってくるよ。コーヒーがいいかな、紅茶がいいかな？」

「どうぞおかまいなく。こちらの勝手に待たせていただくんですから」

「いやいや、わたしも今からお茶を飲むのでね。最近はミルクティーに嵌ってるんだ。君にも淹れるよ」

奥には以外と大きなソファークラセットが設置されていた。先ほどのポソボソと聞こえた人の声はラジオからのものだった。部屋をグルッと見回すと木製の本棚に所狭しと書籍が整列していた。

- 健兄はいつもここでお仕事してるんだ。健兄の机ってどこかな。

この場所からは見ることはできない。

「はい、どうぞ召し上げね。そうだお嬢さん、貴女の名前を聞いて

いなかった。」

「失礼しました。私は美山 麻琴と申します。今大学生で法学部に在籍しています。」

「ほお、では未来の弁護士のおかね。こんなに可愛い子が弁護士だったら裁判官もメロメロだろうねえ。いやいや失礼。今のは褒め言葉。セクハラじゃないよ。ははは」

「あの、おじさんは事務員さんですか？」

「はっはっはっ そんなものだね。役に立ってるのか立っていないのか怪しいもんだが。そろそろ定年時期だしねえ。第二の人生も思案中だよ」

「第二の人生・・・ですか」

カーネルおじさんはニコニコ美味しそうにミルクティーを飲んでいく。麻琴も釣られて飲んでいく。

「あら、美味しいです、この紅茶。ほんのり甘くて良い香り。」

「じゃあ、第二の人生は紅茶を売りにした店でも開くかな」

・ ギイー ガタンッ

「ボス、勘弁してくれませんか。あの件はボスが初めから絡んでるんですから、今さら俺に振らないで下さいよ。全く・・・俺は俺で忙しいんだし、もういくら時間があっても手が回らない。聞いてるんですか、ボス！」

やや大きめの声で話しながらツカツカと足早に応接室に近づいてくる足音を聞きながら、カーネルおじさんはゆったりとミルクティーを飲み麻琴にウインクをした。

「あと2秒でイケメン弁護士の登場だ」

## 健兄のなに？

- ガチャッ

そこには目を吊り上げた健悟が居た。麻琴の姿を捉えると、その目は一瞬にして喜びと驚きの二つを合わせ持つ健悟らしからぬ間の抜けたものへと変わった。

「麻琴……」

「おかえりー、早瀬くん。美山麻琴さんがお待ちかねだよー。遅かったねえ。どこで油売ってたんだかー。はははっ」

「ボス、はははーじゃないですよ、はははーじゃ。ボスのせいで駆けずり回ってんですから。売る油もなくなりました。それより麻琴、こんな所でどうした」

仕事中の健悟を目の前にポーと見とれていた。色が剥げ落ちてきた弁護士バッチが誇らしげで、家で背中をボリボリと搔いているいつもの健悟とは明らかに違い大人の男を見せ付ける。

「あ、ごめんなさい。実はちょっと大事な話があつて……少しだけでも時間作ってくれないかなって」

健悟は難しい顔をして黙っている。当然10分や20分位の時間はもらえるだろうと思つてた。しかし健悟の口から出た答えは違った。

「ここは仕事場だ。プライベートを持ち込む場所じゃない。

麻琴、それくらい分かれよ。今朝もメールした通り本当に忙しいん

だ。ボスのせいで仕事が二倍だし、今からまた直ぐに裁判所に向  
かなきゃいけない。悪いけど麻琴一人で帰ってくれ。」

「早瀬くん、少しくらい時間あるだろう。こうやって来てくれたん  
だ、ちよつとくらいは……。」

「ボス、そういう問題じゃないです。そもそもボスのせいじゃ  
ないですか。つたく。」

「じゃあ、書類取りに戻っただけだから行きます。」

麻琴、一緒にそこまで出よう。」

「はい……。」

嬉しそうな顔してくれたのに迷惑だったんだね。香奈子さんと  
は会う時間があっても私には時間くれないの？

知らず知らずのうちに目には涙が溜まっていた。健悟はチラッと見  
たが、知らぬふりをして足早に歩いている。外に出ると建物内の  
暗さに慣れていた目が射光によって頭にズンという鈍い痛みを与え  
た。健悟の後ろを追うように小走りで近づき、スーツの裾を掴んだ。

「健兄……。」

「ん？」

振り返ることはしないが、少しだけ歩くペースを落としてくれた。

「いつ暇になるの？」

「裁判の結果によってだから、何とも言えない」

「そう……。私、健兄のなに？」

「……仕事と私とどっちが大事なの？ってやつ？」

人をこばかにした言い方。

「違うっ、そんなんじゃないっ。昨日・・・香奈子さんが来たの。健兄が私のことは彼女じゃないって言ったって・・・。それで私、」

「そんな話なら尚更今はダメだ。麻琴、ここで別れよう。おれ送ってやれないから。タクシー乗るならこれ使え」

健悟は麻琴の手に一万円札を握らせ、路肩に止めていた車に乗り込みあつと言う間に走り去ってしまった。

健悟はバックミラーでぼつねんと立ちすくむ麻琴を見ていた。今にも泣き出しそうな姿が、車の加速と同時に小さくなっていく。当然気になることは気になる。だが、一分も無駄に出来ないほど忙しいのも事実。

麻琴は『彼女』なんて一括りにできるような、そんな存在じゃないんだよ。

ジージー      ゴージー      ゴージー

背広の胸ポケットに入れている仕事用の携帯のバイブ音が鳴った。プライベート用とは違い、いつもこの場所に入れ、裁判中以外は必ず出られるようにしている。

「早瀬です」

『健悟？わたし、香奈子よ』

「はい。なんの御用でしょうか」

「固いのね。今日なんだけど、家に来れないかしら  
もちろんお仕事の件で。それから大切な話もあるの」

「今日は忙しいんだ。本来仕事の担当はボスと君の父上なんだから、  
俺に連絡してくるのはおかしいと思わないかい？」

それから・・・仕事のことは関係ないんだが、麻琴に会ったそう  
だな」

「あら、もうご存知。可愛い子ねえ。そのことも含めてお話したい  
のよ。遅い時間でも結構よ。お待ちしてるわ。じゃ、お仕事がんば  
ってね」

返事を聞く前に勝手に切られてしまった。

本当は夜にでも麻琴のところに行こうと思っていたが、香奈子  
に確認しておかなきゃいけないこともあるしな。仕方ない・・・か。



## 過去の責任

仕事が終わったのは11時も近くなってからだった。香奈子に連絡すると今からでも良いと言う。鉛のように身体が重たかった。本当だったら予告なく麻琴のところへ行き抱きしめてやりたかった。移動中はあの不安そうな姿が何度も思い出され、もう少しで信号無視するところだった。

「お疲れ様、待ってたのよ」

香奈子は笑顔で健悟のカバンを受け取るうとした。だが健悟は片手で制する。広々とした応接室に通されると、まずは仕事の話から入った。健悟が初めてここに来たあの日、香奈子が父親を通してボスの榎村に今後は健悟を超越するように指示していた。健悟としては顧問弁護をする予定なく大学の講師を受けたわけで、非常に迷惑な話だということ伝えるべく、先日某ホテルで直接会ったのだ。だが、断るのなら今後榎村事務所は一切の関わりを経つと言われた。自分分はそれでも良いが榎村は困るだろう。お得意様だ。

「それでは、ここにサインをお願いします。これで以上です」

「これで良いわね。さて、もう一つのお話だけども、ふふふっ」

含みを持たせる言い方に健悟はイラツとした。いつもだったらこんなことで苛立つことはないが、麻琴のこともあるし、今は極度に疲労を感じている。なんと言っても一刻も早く帰り、風呂にも入らずに眠ってしまいたいくらいなのだ。

「麻琴になぜ会った。あいつに何を言ったんだ」

「そんな怖い顔しなくてもいいじゃない。麻琴さんには貴方とまた付き合いたいって話したの。貴方は麻琴さんのこと彼女じゃないって言ってたけど、本人はそう思っていないかもしれないじゃない？ だったら気の毒だと思って誤解のないように言いに行ったの」

「なに訳の分かんないこと言ってんだ？ 麻琴は彼女とか恋人とかいう言葉で表すことが出来ないほど、俺にとって大切な存在なんだ。そういう意味で彼女じゃないって言っただけで、誤解しているのは君の方だ。余計なことをして麻琴を不安にさせるなよ」

香奈子は何故か余裕の面持ちで聞いている。健悟の話が終わると同時にテーブルのコーヒーを取り一口飲み込んだ。

「健悟もコーヒーどうぞ。美味しいわよ」

「いや、結構だ。もう帰る」

立ち上がる健悟に香奈子は抱きついた。僅かに甘い香水の香りがあった。

「帰らないで。健悟、驚かないで聞いて。

貴方と私の間には子供がいるの。男の子よ。拓馬っていうの。今6歳よ」

「……嘘だろ？ だって……俺たちいつだって……」

「避妊してたわよね。だけど、一度だけそうしなかった」

「え……」

一生懸命思い出そうとするが、いくら考えても思い出せない。香奈

子は本当のことを言っているのか。

「健悟覚えてない？ 凄く酔っ払ってて、『愛したいんだ』って何度も何度も言っつて、少し乱暴に私のことを……」

愛したい……でも愛せなくて焦っていたことを思い出した。しかし香奈子に乱暴な働きをしたことは正直覚えてない。

「突然別れを告げられて、もの凄くショックだった。暫くは貴方の事忘れられなくて……。でもね、神様は私に微笑んだの。拓馬を授けてくださった。今、向こうの部屋で寝てるんだけど、見てみる？」

「……………」

こんな話を聞かされて驚かない男はいない。しかし次から次へと疑問が溢れ出す。できるだけ控え目に健悟は問う。

「俺の子供で間違いないのか。何故今まで黙ってたんだ。何故今なんだ……」

「酷いこと言うのね。もういいわ、帰って！」

一瞬にして香奈子の表情が怒りのものへとすり替わった。

「そんな大きな声出すなよ。子供が寝てるんだろ？」

そんな言葉も無視し、スタスタと部屋から出ようとする香奈子。

「待てよ、話は終わってない。子供のこと、どうするんだよ」

「今まで通りよ。何も変わらない。榎村さんに言っておいて。もう早瀬さんは来させないでって。」

香奈子は話し合いに応じず、そればかりか追い出されるようにして  
香奈子のマンションを出た。時刻は12時になっていた。  
過去の自分の責任を一頻り<sup>ひとしき</sup>考えるが、疲労の強い頭では考えが及ば  
なかった。

## 血縁

『あの二日後なんだけど、spanでバイトしてる友達の慶介って覚えてる？そいつから連絡あつて、ヒロコさんは翌日には無事戻つて、その翌日からspanにも出てるんだって。元気みたいだよ』

「そう。あまり無理しないほうがいいけど、お客さんはヒロコさんいなくちゃ寂しがるし・・・ね。マスターがついてるから平気よね」

『うんうん、そうだよ。また今度行こうね。それからお兄さんにも宜しく言っておいてね。お医者さんが居るつてのは凄く心強いもんだな。あ、これから企画会議なんだ。もう行かなきゃ』

「柳瀬さん、わざわざ電話くれて有難う」

『いやいや、じゃあ また今度！』

あれから5日が経っていた。そして健悟と連絡が取れなくなってからは4日経つ。

逢えないと思うと淋しさは増し、切なく不安な気持ちになる。いや、ただ逢えないからだけではない。その不安の要因の多くは香奈子の存在にあり、強いては健悟に会いに言つても素っ気無く帰されたことが大きく原因している。

過去の女性<sup>ヒト</sup>だけど、今現在の女性でもあるの？ 健兄、私やっぱり健兄のことが凄く好きで、あの女性に嫉妬してる。凄く嫌な気持ちだよ。自分のこと嫌いになりそうだよ。

これまで嫉妬とは一切無縁だった麻琴。健悟の女性問題を和樹から聞いても自分には関係なかった。寧ろ『カツコイイからモテて当然かもね』と笑っていたくらいだ。それが今では違う。独占欲なのか、それとも束縛心なのか、健悟のことを少しでも知りたくなっている。

香奈子とのよりを戻すことなど全く考えられなかった。でも・・・彼女が悪い嘘でも吐いていなければ、この世に自分の血を分けた子供がいる。その事実には動揺はあるが、血縁の繋がりの薄い健悟にとって胸の内側をジワリと温める何かもある。

金に困っているわけではないだろう。養育費などが目的ではないはずだ。香奈子がなぜ今このタイミングで打ち明けたのか。その目的が解らない。そして疑問を口にしたことで香奈子の豹変も気になる。

健悟はあれから毎日のように電話をしたり、マンションに足を運んで話し合いの場を持つとうとするが、香奈子は徹底的に避けていた。もしかして子供の姿が見れるかもしれないと思い、マンション近くをウロウロしたこともあるが、やはりその姿は一度もキャッチできなかった。

麻琴にはもう少し結論に近付いてから話さなければいけない。子供が居るとなければ、麻琴との関係もこれまでとは違ったものになるかもしれない。でも・・・麻琴だけは手放したくない。どうしても手放したくない。麻琴に会いたい。肌を確かめ合いたい。だけ

どんな気持ちのままでは・・・

麻琴にはあれから電話すらしていなかった。毎日毎日麻琴のことを想いながら、香奈子との問題を解決すべく行動しており、意識はそちらに集中していた。

車庫に和樹の車はない。まだ明るい時間だ。帰宅していないのだろう。そのスペースに健悟は車を止めた。車庫から真っ直ぐ玄関ドアの前に歩く。美山の表札を見るのは随分と久しぶりのような気がする。ふと人の気配を感じて後ろを振り向くと、門の外から小柄な女性がこちらを見ていた。その顔は青白く何かに脅えているようにも見える。

誰だ？

「あの、失礼ですが、この家に何か御用ですか？・・・あっ　あのっ！」

声を掛けると女性は慌てたように走り去ってしまった。

何なんだ。人んちの前で気持ち悪いな。まさかご近所トラブルとか？まさかな。

ガチャッ

鍵は掛かっていない。何時ものように仏間に行き両手を合わせる。

「健兄・・・どうして・・・」  
玄関を開ける音で気がついたのか、仏間の入り口に麻琴が呆然と立っていた。

「麻琴、ごめん。待たせたな」  
立ち上がった麻琴の側に立ち、優しく頭を撫でた。麻琴は黙ってその暖かな手を受け入れ、背中に両手を回し涙声で必死に訴える。

「待ったよ、凄く。本当に待ったんだから」

「うん。・・・うん、分かってるから」

両手で麻琴の顔を包み、そっと上を向かせると一瞬だけ見つめ合い唇を重ねた。



## 真意

会えない時間を埋めるかのような長く情熱的なキスだった。そのま  
まりビングのソファ―に纏れこむように二人で転がり言葉を交わす  
こともなく抱き合い、健悟が唇を離すと麻琴がその唇を追い求め、  
麻琴が唇を離すと健悟が求める。暫くはその繰り返しだった。  
健悟がゆっくりと体を起こしたと思うと、頭をグシャグシャと掻き  
乱した。その様子にいつもと違う何かを感じる。

「健兄？」

今の麻琴は直ぐに不安を抱く。会わない数日間にそんな癖がついて  
いた。

「うん？」

「……この前のこと……勝手に仕事場に行ったりしてごめんな  
さい」

「いや、本当は少しでも顔が見れて嬉しかった。忙しくて……悪  
かったな」

「仕事してるんだもの、謝らないで。お兄ちゃんだって帰る帰るっ  
て電話してくるくせに一週間も二週間も帰らない時あるよ」

「はは。アイツは人の命預かってるからな」

「うん……」

「麻琴、この前の話だけど、香奈子に会ったっていう……」

香奈子って呼び捨てにするんだね。当然か、恋人だったんだも  
んね。

「健兄は香奈子さんとまたお付き合いするの？」

「……いや。ただ、この話もう少し待ってくれないか。彼女に確

かめなければいけないことがあるんだ。麻琴には隠し事はしないし、きちんと話す」

「・・・まだ待たなきゃいけないの？」

私、ずっと不安だったんだよ。健兄が私のことは彼女なんかじゃないって言ったって香奈子さんに聞かされて・・・」

鼻を赤く染め声を震わせ涙を堪える。

「それは・・・」

愛してる　　という言葉よりも、その説明は気恥ずかしいものがある。健悟にとってはプロポーズ同様のものだ。麻琴の目を覗き込み、そしてまた頭を掻き<sup>か</sup>む<sup>む</sup>る。

「彼氏とか彼女とかじゃないだろう、俺たち・・・」

その言葉は麻琴を奈落の底へ一気に落とした。健悟の言葉の意味するところとは全く違う解釈をし、麻琴は殻に閉じこもる。

「そ・・・だよね。」

忙しいのに来てくれてありがとう。

私これから出かけるんだ。だからあまり時間なくて・・・」

目一杯の笑顔と嘘を吐く。しかしその真意は健悟には伝わらず

「突然来てごめんな。また来るから」

「無理しないで」

「ああ、じゃあ」

ソファから立ち上がる寸前に麻琴に口づけたが、麻琴がそれに応えることはなかった。

バカみたい。健兄と愛し合って、すっかり彼女気取りでいた。キスも体も、全部健兄に差し出したのに。信じられないくらい幸せだったのに……。健兄にとってはそうじゃなかった。じゃあ、なんだったのって思うけど、怖くてそんなこと聞けない……

次から次へと涙が溢れ、膝の上においた拳の上に水溜りを作った。どれ位の時間がたっただろう。電気もつけず膝を抱えソファに座っていた。

空腹を感じたその時、玄関のドアの開く音が聞こえた。その直ぐ後には仏間の戸の開閉する音が聞こえる。

「お兄……ちゃん？」

ソファからヨロヨロと立ち上がり様子を見に行く。そこには仏壇に向かう和樹の背中があった。その後姿は力の抜けただらしない姿に見え、とても疲れているようだった。

「お兄ちゃん、お帰り」

「なんだ麻琴居たのか、ただいま」

いつもの優しい温和な声。だが和樹は振り向かないまま仏壇の方を見て鼻をズズツとすすった。

「風邪でも引いたの？ なにか温かい飲み物作るね」

「ああ、ありがとう。手を洗ってそっち行くから……」

「元気ないね。熱でもあるんじゃないの？」

麻琴が近付き和樹の額に触れた時、やっと初めて振り返らなかった  
訳を見た。  
和樹は、黙って眼を瞑ったままシトシト降る雨のように静かに涙を  
流していた。

真意（後書き）

初めて短編小説も書いてみました。  
少しだけ幸せ風味です。

## 謝罪

「病院で・・・なにか辛いことあった？」

和樹の隣に正座し、小さな声で遠慮気味に聞く。和樹は涙を擦るよ  
うに拭き取る。

「いや。何でもないよ。心配するな。」

甘いココアが飲みたいな。作ってくれるか？」

鼻声だがいつもと変わらない優しい返事をする。だが和樹が泣いて  
いる姿など両親が亡くなった時以外は見たことがなく、なにか余程  
のことがあったに違いないと想像させる。

「うん、いいよ。お母さんがよく作ってくれたのと同じの作るね」  
ミルクたっぷりのココア。最後に一つまみ塩を入れると甘みは一層  
引き立つ。

「・・・ああ」

健悟が訪れた数分後、和樹は家に向かって自宅近くの公園前を歩い  
ていた。小学生の頃、健悟や他の友達とよく駆けっこをしたものだ。  
広々と見えた公園も今ではこじんまりと見える。楕円を描いたよう  
な丸い敷地で、外側に3人掛けベンチが3つ並んでおり、ここ数年  
は温かくなるとホームレスがよく寝ている。

暫く泊まりが続いていた為、帰宅したら直ぐに風呂に入りたい。麻  
琴の顔も久しぶりだ。連絡入れずに帰宅するのだから驚く顔が見れ

るなどと少し悪戯心もあり、疲れていても気分は良かった。  
ふと公園の中央のベンチに目をやると、ショートカットの小柄な女性  
性が腰掛けている。どこかで見た後姿だった。顔を確認する為、少  
し距離を縮めて公園の丸みに沿って歩いてみた。

ああ、やっぱり。Spanのヒロコさんだ。

和樹は声をかけるかどうか迷った。二度しか会っていないが、その  
二度ともあまり良い印象がない。しかし身体の調子のことも多少気  
になる。挨拶程度に聞いて失礼しようと、ゆっくり近付き正面に立  
つと声をかけた。

「こんにちは。お加減どうですか？」

小児科医らしく、丸みのある温かい声にヒロコはパッと顔を上げた。  
そして一瞬目を見開き息を呑んだ。

ほら、まただ……。どうしてこの人はオドオドビクビクして  
いるんだろう。

「そんなに驚かないで下さいよ。体調悪くなりますよ」

「う、ごめんなさい。身体は大丈夫ですよ、以前と変わりありませ  
ん。

その節は大変ご迷惑お掛けしました。」

ヒロコは立ち上がって深々と頭を下げた。

「ああ、やめてください。僕は何もしてませんから。でも変わりな

いなら良かった。

・・・では、また機会がありましたら」

それは社交辞令だった。和樹にはもう会う気はなく、一礼して背中を向け歩き出した。その後ろ姿をヒロコは瞬きもしないで見つめていた。そして少しずつ遠のいていく和樹を無意識に追いかけていた。

「待つてっ 待つて！」

和樹っ！！！！」

狭い公園にヒロコの声が響いた。子供は一人もいなく、向こう側にはバイクに乗った郵便局員が見えるだけの静かな環境。和樹は怪訝な表情でゆっくりと振り返った。

まずは自分の名前を呼び捨てにされたことに驚いた。そしてヒロコの只事ではない様子に、得体の知れない不安を感じた。

和樹は言葉なく黙ってヒロコを見つめた。やはり何処かで会ったことがあるのか？

「ごめんなさい。ごめんなさいっ。」

ヒロコは理由も述べず、ただ謝り続けるばかりで、気付くと地面に額を擦りつける様に土下座しており、和樹は慌ててしゃがむと抱きかかえるようにして立たせた。ヒロコの体は少し力を加えただけで粉々に砕けてしまいそうなほど軽く頼りなく思いのほか華奢な骨組みだった。

「ヒロコさん、何故謝るんですか？ そんなに謝る理由はなんですか？



なにが貴女をそうさせるのか僕には解らない。とても不思議だ。」

## 出生

和樹はそつとヒロコをベンチに座らせ、その後ろにある自販機で温かいコーヒーを二つ買い、一つをヒロコの手にした。そしてヒロコの身体を気遣い別のどこか温かい店にでも入って話そうかと言ってみたが、和樹さえ良ければこの場所で良いと言う。

和樹は黙ってヒロコが話し出すのを待った。ゆっくり息を吸い込んで話し始めるかと思えば、躊躇して押し黙ることを繰り返すヒロコ。だが和樹はじつと待っている。職業上、待つことに慣れているのだ。苦痛は何もない。だが相手は苦痛の表情を浮べる。少し話す切っ掛けを作ってあげなければ気の毒かと、優しく質問を投げかけてみた。

「ヒロコさんは僕のことを何時から知っていたんですか？」

しかしその質問はヒロコにとって最も痛烈なものだった。ヒロコはグツと涙を堪え、やっと話し始めた。

「私は・・・あなたのことを生まれた時から、いえ、生まれる前から知っていました」

「え・・・？どういう事かな、興味深いな」

和樹は少し笑みを浮かべながらも心中穏やかではない。

「とてもよく動く元気な子で、早く世の中に出てきたがって・・・  
3180gの健康な赤ちゃんだった。お乳はよく飲んでくれたし、  
夜鳴きも少なかった」

「ちょっと待ってください。どうしてそんなに詳しく僕のことを・・・  
僕の母のことをご存知なんですか？」

## 僕の母

この言葉にヒロコの心は締め付けられた。和樹の母は10年前に他界した育ての母のことであり、自分のことではないのだ。自分が今、実母であることを告げて、良いものかこの期に及んでもまだ迷っていた。

「あなたのお母さんは・・・百合子さんは、私の命の恩人です・・・」

「あの、すみません。よく話が見えなくて、急かすつもりはないんですが、もう少し具体的に・・・いや、結論から話してもらえませんか」

長い沈黙がまた続いた。和樹が小さな溜息を吐いたその時、ヒロコの口が開いた。

「そうね、これ以上隠せないわ。本当のことを話します。あなたには辛く嫌な話です。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あなたは、私がお腹を痛めて生んだ子供です」

啞然とする和樹。言葉なくヒロコの口元を食い入るよう見つめている。ヒロコもまた、心を千切られる思いで両手をギュッと握り、ポツリポツリと話す。

「あなたの実父は25歳の高校教師でした。私はまだ高校生でしたが二人とも本気で愛し合ってた。気付いたらあなたを身籠っていて、

・ 高校生ですから、それは驚いたし悩みました。でも、彼が前向きでお互いの両親を説得してくれたの。形ばかりの式も挙げ、彼の実家に入った。義父母は彼とよく似ていて、穏やかで優しくて良い人達だった」

過去を思い出し次々に止めどなく涙が溢れてくる。だが和樹はまだ信じられない思いで話を聞いており、その涙に対する気遣いにまだは気持ちが追いつかないでいた。

「祝福の中であなたは産まれたの。本当よ。義父母も私の両親も、もちろん彼も心から喜んでくれた。幸せの絶頂だった。それが・・・あの日、私の体調が急に悪くなって救急車で搬送されたの。大した事じゃなかったの。嘔吐が続いて食事が2〜3日摂れなかっただけでも儀父母がとても心配して救急車を呼んで、授業中だった彼に連絡を入れたの」

そう言うとヒロコは顔を歪め言葉も詰まり嗚咽しはじめた。聞いている和樹も苦しくなるほどで、見ていることさえも辛くなってきた。

「・・・大丈夫ですか？」

「優しいのね。・・・あの人にソックリ。本当によく似ている。」

彼はね、連絡を受けて急いで駆けつけてくれたの。タクシーに乗ったらしいんだけど、途中渋滞に巻き込まれて、お金を払って降りたらしいわ。必死だったのよ。何も目に入らなくて、とにかく早く駆けつけることしか考えていなかったんだと思う。青信号だったし安心もしていたでしょう。積載オーバーのダンパーが信号無視するなんて考えてもなかったのよ・・・私のせいよ。私さえ居なければ、あの人は死なないで済んだのっ」

公園のベンチで小さな身体を震わせ子供のように声を漏らし泣き始める。和樹には聞きたいことが沢山あった。あり過ぎて纏められないほどに……。

ヒロコを落ち着かせようと自分の着ていた黒のステンカラーのラグランコートでヒロコの肩に掛けてやると、小柄なヒロコはコートの中にスッポリと包まれ、遠目には子供が案山子の真似をしているように見えた。

「あなたがspanに初めて来た時、私は幻を見たかと思った。祐二さんが帰ってきたと錯覚するほど、あなたは彼の生き写しのようで……」

ユウジ という名前だったんだ。

「和樹さん、色々言いたいことがあるでしょう。聞きたいことも、恨み言も……」

「そうですね。恨み言は……今のところないですが、聞きたいことは山ほどあります。」

まず先に一つ申し上げておきますが、僕は美山和樹として育てられました。実子ではないということ、とうに知っていました……

・ 驚きましたか？」

祐二と同じ優しく穏やかな眼差しがヒロコを包んだ。

## 眞の教育者

二人はある日突然、何の前触れもなくこの世から居なくなつた。事故なのだから予告もなく突然というのは当然だが、なぜあの時あのタイミングであの二人だったのか、と考えずにはいられなかつた。二人は子供から見ても仲の良い理想的な夫婦で、二人同時に逝つたのはある意味納得できたのだが……。麻琴はまだ10歳で、母親が側に居ないというだけでも淋しがる年頃で親戚の何人かは引取ることも考えていた。

父方の祖父もまた医者だったが59歳の時、脳梗塞で他界。祖母も60歳で他界していた。その祖父の10歳年下の妹の 美山 花子が葬儀直後に和樹のもとに訪れた。

花子は結婚もせず美山の本家に住み続け、その当時57歳だった。美人ではないが独身だからか派手にしなくても身なりは小ざっぱりと若々しく、スラツとした知的な雰囲気を持った人で、昔から麻琴よりも和樹を可愛がつてくれた。

『和樹くん、将来どうするの？』

将来のことなど考えられなかつた。医者になりたいと思つていたが、両親が他界してはそれどころではなくなつた。

『わからない……』

素直にそう答えた。花子は俯く和樹の背中をゆっくりと擦りながら『うんうん、そっか、そうだね』と小さな声で呟いた。

『和樹くんはお父さんとお母さんと麻琴ちゃんのこと大好きだよね？』

『うん』

何故そんな当然のことを聞かれるのか分からない。

『じゃあ、今一番大切な人は残った麻琴ちゃんだよ？』

『うん』

『だったら麻琴ちゃんを守るために、和樹くん医者になりなさい。

前からなりたいて勉強してきたじゃない。医者になるために努力して、その姿を麻琴ちゃんにもちゃんと見せるの。正しい生き方やその姿勢は、それだけでも見る人を育てるのよ』

『でも・・・医者になるってお金かかるって・・・』

『お金も時間もかかるわよ。幸いここの家のローンもないみたいだし、お父さん相当頑張ってたのね、あなた達が大学卒業するまでの生活費も学費も心配いらなみたいよ。それにこの花子オバさんだつてついでじゃない。私だつてこう見えても医者of端くれよ。夫も子供もいないんだもの、必要な援助と手助けはさせてもらうわ』

『できるかな・・・僕に』

『やるのよ。男でしょ』

花子は目標と勇気を与えてくれた。そして折を見て訪れては相談に乗ってくれ、適切なアドバイスもくれた。麻琴の育て方もその一つだった。花子は子育ての経験はないが今思えばどれも確だった。麻琴の教育を通して和樹自身の教育もしていたのだ。そしてその中で、ごく自然に世間話でもするようにして美山夫婦が血の繋がりのある実の親ではないということを知る。その細かな経緯までは花子自身も知らなかったが、捨てられたのではなく仕方なく手放されたのだということと、和樹が当時3歳だったと言うことを教えてもらった。その話を聞いたところで何も変わらなかった。生活も生きる事に対する観点も、何一つとして変化はなかった。和樹の最も長所とするところは、物の見方に対する柔軟性だったのだ。その長所を

見抜いた花子がタイミングを見て大学生になる頃に告白したのだっ  
た。



## 温もり

和樹は両親の仏壇の前に座ると、申し訳なさで一杯になった。

自分は生涯実母に会うことなど想定していなかった。他界した両親に会いたいと思ったことは数知れずあっても、実母・実父に会いたいと思ったことは一度もなかったのだ。

それが突然現れて、表情に出さずとも驚きは大きく動揺もした。ヒロコが実母である証拠は母子手帳と、その中に収まっていた十数枚の写真。その中の一枚には自分を抱く10代の若いヒロコと、その傍らには笑顔で目を細める男性が幸せそうに寄り添っているものがあった。そして別の写真には、同じ赤ん坊を抱く美山百合子が和樹を柔らかな表情で見つめる写真。その他の写真は毎年の成長記録のように和樹の身長が伸び、顔の輪郭や体つきが徐々に大人びていく様子を捉えている。同じような写真が家のアルバムにもある。どの写真も百合子が写したものだ。

「父さん、母さん・・・ごめん」

和樹は仏壇に向かって謝っていた。写真の中の二人はいつもと変わらず口元を緩めて優しい顔で和樹を見つめている。

和樹はヒロコが実母であることを知り、そしてその細かな経緯を聞かされて、同情しながらも甘かな嬉しさを感じた。一度も会いたいなどと思ったこともなかったのに、だ。

その心の変化に気付き和樹は呆然とした。両親の前にはいけない感情のような気がし、罪悪感で一杯になった。麻琴に対しても同じである。麻琴には自分の出生の話をしたことがない。この事実を知った時、麻琴は孤独を感じはしないか。そう思うと、今度はその事ばかりが頭をもたげる。

自然と涙が出ていた。感情が絡まって何に対して涙が出ているのか

さえ判らない。

「お兄ちゃん、お帰り」

そんな時に麻琴が来たのだった。和樹は平常心を装うが麻琴には通用しない。すぐに何かに気付き側に寄ってきた。そして額に手を当て涙に気付くと詰問することなく温かなココアを淹れてくれた。おそらく自分からその訳を説明しない限り、気になっても麻琴から何か聞いてくることはないだろう。

「ね、お兄ちゃん？」

「ん？」

「私ね、健兄とダメかも」

明るい表情でサラッと涼しげな麻琴の言葉。

「何言ってるんだよ。何かあったのか？」

「あつたと言えばあつたし、ないと言えばない・・・けど」

「ハッキリしないな」

「とにかく、そういう事だからっ。じゃ、私ちよつと出かけてくるね。」

あ、悪いけど晩ご飯は適当にお願い。お風呂はお湯を入れるだけになってるからね」

「ちよつと麻琴、待って・・・」

最後はどんな表情をしていたのか。顔を背けてこちらを振り返ることなくバッグを掴むと玄関の方へ走っていった。程なく玄関の閉まる音が聞こえ、麻琴は家を出て行ってしまった。和樹は慌てて携帯に電話したが当然無視され、メールを送信した。

《 門限10時厳守。  
できるだけ早く帰宅すべし 》

「なによ、このメール。変なのっ。」

そう呟きつつも、和樹の心配が手に取るように分かる。本当は和樹に泣いて縋って甘えたかったのだが、その和樹自身が重大な何かを抱えているようで憚られた。

「ハアー、タイミング悪すぎ。お兄ちゃんのバカっ」

公園のベンチに腰掛け投げやりな目で携帯を見る。その携帯をしまおうとベンチに置いたバッグを手に取るうとした時、携帯の呼び出し音が鳴った。

またお兄ちゃん？しつこいなー、全く・・・

仕方なく携帯を耳にあてる。

「もう、そんなに遅くならないから心配しないでよお」

『えっ？ ああ、誰かと間違えてるね。』

俺だよ麻琴ちゃん、翔太』

電話の向こう側ではクスクスと笑い声が聞こえる。てっきり和樹だとばかり思っていた麻琴は恥ずかしさで耳まで赤くなっていた。

「翔太くん・・・ごめん、兄と間違えちゃった」

『はははっ 別にいいけどさ、麻琴ちゃん案外オツチヨコチヨイなんだ』

「うーん・・・そう思われても言い訳できないね。。。ところで翔太くんどうしたの？」

『あー・・・うん、お節介かなーとは思ってたんだけど、例のことどうなったかと気になってね。その、早瀬教授とのこと・・・』

「もし・・・時間があつたら聞いてくれる？電話じゃなくて」

翔太が待ち合わせに選んだ場所は、お互いの最寄駅の中心になる隣の改札口だった。先に待っていたのは翔太だった。ニコニコと手を振っている翔太を見つけ、ホツと顔が綻ぶ。

「ごめんね、待った？」

「ぜーんぜんっ。さて、どこ行こうか」

言いながら右手を掴むとズンズンと駅の外に連れ出した。麻琴は突然手を掴まれドキドキしていた。健悟と手を繋ぐのとは違う感覚。行き交う人の視線が繋がれた手に集中しているかのような気さえして、手元が熱くなってくる。だが、今その手を離さないで欲しいと思っていた。

翔太は昔この町に住んでいたらしく、懐かしがりながら細い路地をクネクネと曲がりながら進んでゆく。夕日に翔太の少し伸びた癖毛

の先が、ユラユラと薄茶色に透けて見えた。その髪の毛を見つめながら、麻琴は健悟のことを相談しようと思いを開いた。

「翔太くん、あのね・・・」

翔太は手を繋いだままピタッと足を止め、麻琴の方へ向いた。

「麻琴ちゃん、泣いていいよ。この通り、ここは潰れた居酒屋とかスナックとか人気のない路地で、殆ど人目ないし。思いつきり泣きなよ」

「な・・・んで?」

「だって麻琴ちゃん、駅の改札口ですでに泣きそうな顔してたから人の居ないところってホテル以外、こんなヘンピなところしか思い浮かばなくて悪いんだけどさ」

麻琴の肩をそっと掴み顔を自分の胸元に引き寄せた。こげ茶色のパーカーの前を開けていた為、中のグレーのカットソーからは翔太の胸の温もりが伝わった。その温かさに安心すると急に涙が溢れてきた。一度涙が溢れると止めどなく溢れ出て、翔太のグレーのカットソーを色濃く濡らした。

「ごめつ 翔太くんのシャツ濡らしちゃって・・・」  
離れようとする麻琴をシッカリと抱きしめ、そのまま翔太は話しかける。

「そんなのいいよ。辛いときは泣いてもいいんだよ。思いつきり泣いて、それから考えればいい。我慢しなくて良いんだよ」

頭上から優しい言葉をかけられ、麻琴は再び涙を流した。健悟の前

では強がり、兄の前では心配させたくなく、ひたすら我慢していた。人の温もりが恋しかった。心の温もりが欲しかった。不安を取り除く温もりに抱きしめられたかったのだと、翔太の胸で気付かされた。

「翔太くん・・・キスして」

麻琴は顔を上げ翔太の目を見た。

夕日は沈みかけ、辺りは薄暗く翔太の顔もハッキリとは見えない。だけどその表情は少しだけ驚いていて、戸惑っているようにも見えただ。

そして翔太は一言も発しないまま、静かに麻琴の唇に少し長めのキスをした。そのキスは翔太の癖毛のように柔らかくふんわりとしていて、いやらしさなど全くないものだった。

## 麻琴の心

その後二人は一言も喋らないまま、当て所なくただ歩いていった。すっかり日は沈み繁華街のネオンが辺りを明るく見せていた。麻琴は歩くうちに少しずつ冷静さを取り戻していた。なぜあれほどまでに泣いたのか、なぜ翔太にキスを求めてしまったのかも心の中では整理はついていた。しかしその反面、自分がもつ健悟への想いの強さを感じ、翔太へ甘えてしまったことに後悔し始めていた。そして翔太にしても困ったに違いない・・・と思うと恥ずかしく、どう話しかけて良いのか分からずにいた。

また翔太にしても麻琴の求めるままにキスをしてしまったことに、男としての喜びはあれど、多少の罪悪感を感じずにはいられなかった。麻琴がキスを求めてきたのは、翔太に恋愛感情があるからではなく、一時の慰めが欲しかったのだと分かっている。そしてそれは一瞬でも救われるのだろうか、確実に後悔するであろうことがその先へ見えている。結果的に麻琴が苦しむのではないかと思うと、自分のした行動は表面的な優しさで、何もしない方が良かったのではないか・・・と。

「麻琴ちゃん、ごめん」

突然謝られ麻琴は驚いて翔太を見上げた。翔太は麻琴の顔を見ておらず、前を向いたまま歩調はそのままゆっくりと歩いている。麻琴も足を止めることなく翔太の横を歩く。少し間を置き、麻琴は口を開いた。

「翔太くんは何も悪くないわ。」

私のことを心配してくれて、それで私の我が侷をきいてくれたの。

謝るのは私の方よ。翔太くん、ごめんなさい……。私、心底恥ずかしい。翔太くんが困った顔してたの気付いていたのに……。軽蔑したでしょ」

「違うよ、もちろん驚いたけど、本音は嬉しかった。俺なんかでいいのになって。軽蔑なんてしないよ。」

「……ありがとう。そう言っただけで済めると救われる」

その時だった。バッグの中で携帯の呼び出し音が鳴った。このタイミングで出るのは翔太に悪い気がして、そのまま放置しようとしたが、翔太が「お兄さん心配してるんじゃないの」と出たことをすめた。

「もしもし……」

『やっと出た。麻琴、落ち着いて聞けっ』

和樹の切羽詰った様子が伝わってきて凄く嫌な予感がした。心臓がバクバクと高鳴り、上手く返事ができない。

「どっし……たの……?」

『健悟が何者かに腹部を刺されて救急搬送された。意識がないらしい。今から××総合病院に向かう。お前いまだどこにいるんだ』

「う……うそっ……やだっ。なんでよっ。」

お兄ちゃん、健兄死んじゃうの？死んじゃうのおっ?」



街中で人目も憚らず泣き崩れる麻琴。翔太が慌てて麻琴を支え、電話を取り上げる。

「もしもし、お兄さんですか。麻琴さんと同学部の富樫と申します。彼女話せるような状態ではないようで、勝手に電話を取り上げたんですが、彼女の行動はこれからどう誘導したら良いでしょうか」

突然男の声がしたので戸惑ったが、和樹は申し訳なさそうに指定した病院へ連れてきてくれるように頼んだ。

翔太は麻琴には何も告げず、引きずる様にして大通りの方まで行き、タクシーを止め押し込むように麻琴を乗せると自分は反対側から乗り込んだ。運転手に行き先を伝え、麻琴の手をギュツと握った。病院に着くまでの麻琴は魂を抜き取られたように青白い顔をして、握った手も氷のように冷たくなっていた。

指定された病院までは20分くらいで着いた。関東では有名な大きな総合病院で、病院に全く縁のない翔太であっても知っていた。救急外来の入り口に進むと窓口があり受付の女性事務員がいた。翔太は麻琴を支えながら事務員に尋ねた。

「すみません、救急車で運ばれた男性なんですけど、どちらに行けば・・・」

「お名前はなんておっしゃいますか？」

「えと・・・あ、早瀬と言います。早瀬健悟です」

事務員は手元の何かを確認している。数十秒のその時間がやけに長く感じられ翔太は若干の苛立ちを覚えた。

モタモタとする事務員。

「お待たせしました。その患者さんは、只今3階にいらっしやいます。この先の左側にエレベーターがありますので、それで上がっていただいて、ナースステーションに声をおかけ下さい。」

「どうも」

と短く礼を言うと、抜け殻になった麻琴を抱えるようにして聞いた通り3階へと上がった。

「麻琴ちゃん、しっかりしなよ。もうすぐだから」

3階へ降り立ち、ナースステーションへ足を向けようとした時、反対側から一人の男性が大腿で近付いてきて、おもむろに麻琴の腕を掴んだ。そして翔太の方へ目を向けると

「急なお願いをして大変申し訳ありませんでした。お礼はまた落ち着いた時に改めてさせて頂きますので、今日のところはお引取りください」

「あの・・・早瀬教授は・・・」

「ああ、そうか、君も法学部か。まあ、今は何とも言えないので・・・この事は黙っていてくれるかな」

「はい・・・分かりました。では、これで」

頭を下げる翔太に、和樹も軽く頭を下げた。麻琴は腕を掴まれたま

まで目には何も捉えていない様だった。いま麻琴の心はどこにあるのだろう。心配になりながらも、これ以上ここについては逆に気を使わせるだろうと翔太は病院を後にしたのだった。

## 祈り

麻琴は全身を小刻みに震えさせていた。和樹が腕を掴んでいなければ足元から崩れてしまっただろう。ナースステーションから少し離れたところにある長椅子に腰掛させると、和樹は麻琴の顔を覗き込んだ。目の焦点は合っておらず、明らかに自分を見失っている。その姿は嫌でも10年前のあの時と重なる。あの時も同じだった。両親の搬送された病院で、麻琴は感情を封じ込め涙と言葉を失った。あまりにショックが大き過ぎて、心の処理が追いつかなかったのだ。そしてその後、言葉を取り戻すまでに時間を要した。

「麻琴、しっかりしろ。健悟は大丈夫だ、心配するな」

両手で麻琴の頬を軽くパチパチと刺激すると、少し驚いたような反応を見せた。口を開け息を吸い込むが、言葉にならなかった。

麻琴、頼む。壊れるな

和樹は胸を絞めつけられる思いで祈った。

「健兄……」

うわごとのような聞き取れるか聞き取れないかの細かい声で、麻琴は健悟を呼んだ。和樹はたったそれだけで救われた気がした。

健悟は極めて危険な状態にあった。鋭利な刃物で人体の枢要部である腹部を15cm以上の深さで刺され静脈を切り裂かれ意識不明だった。担当医は出来る限りの処置はしたが、大量出血をしていたのだ、ICUの管理下においても安心はできないと和樹に説明した。

「麻琴、健悟を信用しよう。アイツは大丈夫だ。少し休んでいるだけだ」

麻琴に向けた言葉だったが、無意識に自分に言い聞かせていた。

面会謝絶ではあるが、本当は近親者扱いで立ち入りを許されており、和樹は麻琴が到着する前に健悟の様子を見ていた。しかし今の麻琴には管に繋がれ横たわる健悟の姿は酷だ。少し落ち着きを取り戻すまでは・・・そう判断しかけた時だった。

「健兄・・・健兄どこ？」

立ち上がるうとするが足に力が入らずヘナヘナと床に両手を突いた。しかしそのまま這ってICUの方へ向かおうとしている。

「麻琴、今はダメだ」

制する和樹の声は届かない。正面から両肩を掴まれ体を起こされると麻琴は正座した状態でやっと和樹の顔を捉えた。

「お兄ちゃん・・・何してるの？健兄は？健兄を助けてっ。早くうっ」

悲願するかのよように泣き継った。それはやっと感情の命を取り戻した時だった。

「麻琴、いいか、落ち着いて聞け」

言葉を区切りながら麻琴に言い聞かせる。

「今、健悟はICUにいる。会いたいか？」

一瞬 目を見張ったが麻琴は小さく頷いた。そして和樹に立たせてもらうと、支えられてICU室の前に立った。和樹は看護師に声をかけ、麻琴に消毒をさせ使い捨てのマスクと白衣、スリッパを履き替えさせると、和樹も手早く準備をした。

健悟のベッドを見つけると、麻琴は駆け寄るようにして側にたつた。何本もの管に繋がれ人工呼吸器で辛うじて命を繋げる健悟を見て、麻琴は呆然とした。

「健兄……どうして……？」

布団の隙間から出た健悟の左手を掴むと咽ぶように泣き始めた。

「死なないで、死なないで……お願い

健兄、お願い。。。健兄が死んじゃったら、わたし……」

手を握ったままベッドの横に泣き崩れても尚、健悟に乞い続ける。和樹は見ていられず目を背けてしまった。声が枯れそうなほど繰り返す麻琴の言葉は全身からの祈りだった。

「麻琴、もういいだろう。健悟も頑張っている」

「健兄……」

ふと麻琴の声のトーンが変わった。

「お兄ちゃん、健兄が手を握り返してくれてる……」

## 恋人と言いたい

その手には力こそ弱いものの、意思を持って確かに麻琴の手を握っていた。

「健兄？ 聞こえる……？」

目を開けて。

お願い、私を見て……」

しかし健悟の目は閉じられたまま開くことはない。そして再び手の力も抜け昏々と眠り続けた。それまで気にもしていなかった機械音のみが辺りを支配する。

麻琴は泣きはらした顔で和樹を振り返り、必死に明るい答えを聞き出そうとする。

「今本当に手を握ったんだよ。お兄ちゃん、健兄は分かっているんだよね？」

声も聞こえて意味も分かって、今寝てるだけなんですよ？」

和樹は一時的なものだっただろうと判断している。意識不明患者の中には、突然目を開いたり、今の健悟のように身体の一部が一瞬だけ動いたりすることは稀にだがあるのだ。だが今の麻琴には希望が必要だ。嘘を吐くような後ろめたさもあるが、僅かな可能性として和樹は言った。

「ああ、きつと健悟は麻琴の声が聞こえて、心配するなって言いたかったんだ。

今はまだopeして間もない。麻酔の中にいて目も開かないよ。

また明日来よう。俺も時間ある時は覗くから……」

なかなか立ち上がるうとしない麻琴を説得しながら立たせ、なんとかICUを後にした。

帰りはどう帰ったのか麻琴に記憶はない。ただずっと健悟が意識を取り戻すことだけを心の中で祈り続けていた。帰宅してからは食事もとらずシャワーだけ済ませるとベッドに入った。しかし当然眠れるはずもなく気が付くと朝になっていた。和樹の出勤と共に麻琴は健悟の病院へ行くため一緒に駅へ向かった。

「麻琴、コンビニでパンでもおにぎりでも良いから買って食べよ」

「うん。心配しないで。お兄ちゃん気をつけて行ってね」

「ああ、じゃあな」

二人は改札に入ってから左右に別れた。

健悟の様態に変化は見られなかった。だが昨日とは明らかに様子が違う。それは事件の捜査が始まり、健悟の意識が戻るのを待つのは麻琴だけではないということ。つまりは刑事が待ち構えているのだ。当然麻琴は事件に関しては一切知らない。しかし近親者として面会許可を得ている麻琴の姿を捉えると直ぐに声をかけてきた。

背広の胸元から手帳を取り出し、麻琴の目の前にサツと見せる。

中肉中背の30歳前後の刑事だった。顔は大きな特徴はないが、眼光が鋭く冷たい感じがした。

「失礼ですが、美山さんと早瀬さんはどのような関係ですか」

麻琴は一瞬躊躇った。健悟と自分の関係は、今となっては曖昧で一言では伝えられないものがあった。

「彼は家族のような存在です」



今はそう言うのが精一杯だった。本当は恋人と胸を張って言いたかった。

すると刑事はペンを持ったまま右手で顎を擦りながら麻琴に疑問を投げかけた。

「ふうーん、そうですね。いや、実は早瀬健悟さんとあなたは深い仲だ・・・と聞いているのですが、それは事実ではないということでしょうか。本当のことを言ってくれなきゃ困りますよ」

「深い関係・・・？」

「ええ、解り難いですが。ようするに・・・男女の仲であると」

最後の部分は麻琴にしか聞こえないような小さな声だった。麻琴はカッと顔が熱くなった。

刑事は麻琴の少しの表情も逃すまいと張り付くような眼差しで見入っている。

「やめて下さい」

「いやいや、失礼。ただ、家族のような・・・と言うよりも恋人という方が確なのだと思ったもので。あなたたちお二人を知る人物も恋人だとおっしゃっていたので」

「私たちを知る人物・・・」

当然その人物の名前を刑事は教えてくれなかった。そして最近の様子や麻琴の知る健悟の交友関係、性格や癖、これまでにトラブルはなかったかなど、いくつもの質問があった。

「最近はずいぶんと会っていませんでした。でも昨日少しだけ家に来

て話したんです。その後・・・刑事さん、健兄は、彼は誰にどうしてあんな目に遭わされたんですか？」

詰め寄る勢いの麻琴に刑事は表情一つ変えずに言う。

「まだ捜査は始まったばかりです。しかも早瀬さんは今何も語れない。状況証拠を？き集めている段階です。私たちも何も判っていないのです。ただ、通り魔とかではなく、明らかに何者かが早瀬さんを狙ったと思われます」

「何故ですか。どうして通り魔でない？」

「金目の物は取らず、携帯電話や手帳なんかが無くなっていました。隠したい何かがあるのかもしれない」

## 握られた手

5日目の昼過ぎだった。担当医が自発呼吸が充分に行えると判断し、人工呼吸器を外された。だがベッドサイドモニタでの管理は変わらず継続されていた。

そんな医療機器音の中、麻琴はいつものように健悟の手を握っていた。

「ねえ健兄。そろそろ起きてよ。点滴ばかりじゃ味気ないでしょ？そろそろ私の手料理食べたくない？」

健悟に話しかける時は、あえて明るく冗談交じりを心がけていた。暗くなつては何もかも悪い方向へ向かつてしまうのではないかと思えてならなかったからだ。

握る手も指を一本ずつマッサージしたり、ギュッと握ってみたりと、少しでも神経を刺激して回復を心から願った。

「そうだ。昨日ね、公園の桜が咲いたんだよ。よく桜の木の下で遊んだけど、あの頃は桜を見ても季節とか感じなかったなあ・・・」

気のせいだろうか、握った健悟の手がピクツと反応したような気がした。

「健兄・・・？ いま・・・」

やはり同じくらい弱い力で僅かにだがピクツと反応した。

「健兄つ　健兄つ！」

今度は麻琴の手をしつかりと握り返す。そして薄っすらと両目を開いた。  
眩しそうに開けた目は、はじめ焦点が定まらなかったが、麻琴の声と手、そして目の前にある涙を溜めた丸く大きな瞳をゆっくりと、しかし確実に捉えていた。

「ま・・・こと・・・」

腹に力が入らず、低く掠れた声だった。それでも麻琴にははつきりと聞き取れた。

健悟は言葉の変わりにニヒルに口角を上げた。

「健兄・・・ううつ。。。お帰り

心配したんだからあ。本当に死んじやうと思ったんだからあつ  
もう、こんなのイヤ。イヤだからねっ」

同時にコールで意識が戻ったことをナースに伝えた。

意識が戻った途端に刑事が数名現れ、まだ発声もままならない健悟を質問攻めにした。だがそれも数日間だった。日に日に回復を見せる健悟は、事件当初のことを少しずつ思い出し、的確に刑事の欲しがる答えを提供していったのだ。

腹部の傷口がまだ痛む為、腹圧を掛ける大声や笑い声をあげることが禁止されているが、点滴から流動食に変わり、半月後には一般食を摂れるまでになっていた。

「いまだ時々刑事が来るから6人部屋に行けないんだ。毎日暇だよ。

「他の患者に迷惑がかかるからと6人部屋へは遠慮して欲しいとナースに言われ、ICUから個室に移されていた。」

「でも麻琴が見舞いにくることを考えると個室ってのはありがたいんだよな。へへっ」

「明日にでも6人部屋に入れてやるよっ！」

和樹は椅子から立ち上がった。

「おいおい、和樹。そろそろ子離れしろって」

ニヤニヤとこばかにしたように和樹の背中に投げかける。

その言葉にムツとする和樹だが、冷静を装い健悟を振り返った。

「とつくにしてるよ。ただ二人きりにするとお前が何するかわからん。危険回避だ」

「何するかのナニって、なんの何だ？」

またしてもおちよくる様な健悟。

「なんだ、その変な余裕・・・お前、本当にヘンなことしてないだろうな」

「それは・・・麻琴の名誉の為にも言えないな。ハハハ・・・ハ」

「まさか、お前・・・」

和樹の顔色が怒りのものへと変わった。

ヤバイ。マジ殺されるかも。

死んだフリ・・・いや、コイツには通用しないか・・・

「スゲー具合悪くなってきた。俺ちょっと一休みするわ。お前帰っ

ていいぞ」

そういつと布団に包まり寝た振りをした。

「健悟、お前・・・はあ、今は仕方ないか」  
若干騙されてくれた和樹に感謝する健悟。

「じゃあ、今日のところは帰るか・・・」

「悪かったな、いろいろと。その、心配かけてさ。  
和樹さ、今日本当はなんか話あっただろ」

「いや、まあ・・・そうだな。近いうちに話聞いてくれ。  
また来るよ。じゃあな」

## 命の証明

元来、白黒ハッキリしないと気がすまない性格でもある。健悟は深く調べ過ぎたのかもしれない。あの日から仕事の合間の時間を利用して独自調査をしていた。その中で少しずつだが透明化してきたことがあった。確かに6年前、香奈子は赤ん坊を生んでいた。その半年ほど前から大学は休学していたが、結局はそのまま退学している。赤ん坊は香奈子の言った通り男の子だ。そして・・・ある事実を知った。

香奈子の生活パターンが少しずつ掴めてきた頃に接触到成功した。どうしても直接会って話をしなければいけなかった。これまで何度も電話をしたりマンションにまで足を運んだが取り合ってもらえなかったのが、実際に健悟を目の前にすると以外にすんなりと受け入れた。そして外よりは話しやすいからと香奈子はマンションへ招き入れた。

まるで健悟が来るのを待っていたかのようだった。広いリビングに通されると、やはり子供の気配はなかった。

「子供は拓馬と言ったな」

「・・・ええ」

「どうした、歯切れが悪いな」

その言葉に一瞬目を伏せる香奈子。そして上目遣いで健悟を見上げると、しな垂れかかった。

「健悟・・・会いに来てくれて嬉しい・・・」

「なにを誤解しているんだ。俺は今日、事実を知りに来たんだ。」

この前、子供は俺と君との間にできた子供だと言ったが、あれは嘘

だ  
」

その言葉に香奈子の顔色からはさっきまでの色気は失せ、険しいものへと変わる。

「なにを証拠にそんなことを！」

気の強さが前面に出る。本来の姿なのだろうと健悟は思った。清楚な姿を見せているが、お嬢様育ちで苦労なく我が俣に育ち、プライドが高く何でも思い通りにいくと思っっている。

「証拠？ それがあるんだよ。だが、今それを見せることはできない。」

逆に俺の子供だという証拠を見せてもらおうか」

「それは……」

言葉に詰まり、悔しげに俯いている。健悟は淡々と続ける。

「それは無理だよな。そんなものはないんだから。」

これ以上君を追及するつもりはないんだ。今回のことは忘れてやってもいい。

だが、一つだけ条件がある。」

健悟がここに来ただただ一つの目的は、ここにあった。

「麻琴には二度と会わないでくれ」

その言葉に香奈子はやり場のない怒りを覚えた。両手をワナワナと握りしめ、震える声を絞り出す。

「バ……バカにしないでよ。あんな女のどこが良いのよ。」



あんな女より私の方がずっと貴方のことを想ってるわ。  
健悟、ずっと忘れられなかったの。本当よ。もう一度やり直しまし  
ようよ」

怒りは絶えるものへと変化していった。

「そんな気は一切ない。俺はいずれ麻琴と一緒になるつもりだ。  
だから子供のことが気になった。もし本当に自分の子供だったら、  
認知くらいはさせてもらおうと思った。君に詳しく話を聞きたくて  
も取り合ってはもらえず、仕方なく色々調べさせてもらったよ。  
確かに男の子供を生み、拓馬と名づけた。父親は 村井 哲也。君  
の高校時代からの付き合いのある男だね。俺は二股を掛けられてい  
たのかな。まあ、今となってはどうでもいい。  
そして君は子供が生まれる直前に村井の籍に入る。初めは上手く行  
っていたようだね。だが村井が君の父上の会社に就職し働き始めて  
2年くらいした時に、ある女と不倫関係になった」

「やめてっ。誰からそんな嘘聞いたのよっ。子供は貴方の」  
香奈子の言葉を静かに遮る

「嘘じゃない。本人が素直に話したんだよ。悪い男じゃないと思う  
が、気の小さい男だな。弁護士に嘘つくと良いことないよって言っ  
ただけでペラペラ喋り出した」

「あの男が何もかも悪いのよ……」

「……相手ばかり責めるな。」

離婚する時、君は……酷い母親だな……」

健悟は軽蔑の眼差して香奈子を見た。

「不倫相手と結婚したい。離婚をして欲しいと頼み込まれた君は、

確かに気の毒だったとは思つよ。だが2歳にも満たない我が子をゴミのように……もういらぬ、連れてつてくれるなら離婚してやつても良いと……」

「そんなの哲也の一方的な話だわつ。それにあの人が連れて行くつて言ったのよ……拓馬は……本当は……。」

健悟は香奈子が哀れになった。若さもあり口からの出任せだったのかも知れない。男を引き止める手段として子供を使ったのかもしれない。だが男は本気で不倫相手を愛し、その為ならどんな条件でものもうとした。プライドの高い香奈子だ。一度言ったことを撤回するなんてことはできなかつたろう。

「私は悪くない……。」

健悟、お願い。私と結婚して子供を引取らない？ あの子は貴方の子よ。また引取つて、今度は二人で育てましょうよ」

「バカな……俺の子ではない。そのうちDNAが証明する。」

健悟はアタッシュケースから手帳を取り出し、その中に挟んでおいた写真を取り出し香奈子の前に突き出した。

「元夫と子供だ。ここまで似る親子も珍しいな。DNA鑑定をする必要もないかと思つたが、君は何をするか分からないからね」

食い入るように写真を見る香奈子に、健悟は付け足した。

「これ以上惨めな思いはしたくないだろう。目的は子供で俺を利用して取り戻したいと思つたんだろうけど、それは無理だ。諦めろ。」

とにかく麻琴にだけは関わらないでほしい。頼む」

健悟は香奈子に頭を下げた。

あくまでも彼の中には麻琴のことしかないのだ。全ての行動のベールには麻琴の存在がある。その事実が香奈子の歪んだ嫉妬に火を点けたのだった・・・

## ヤキモチ

「随分とあの子に熱を上げてるのね。もういいわ、分かったから帰って」

妙に冷めた、そして物分りの良い香奈子に気味の悪さが無かったわけではない。しかし香奈子も人の子だ。これまでに十分傷ついてきただろうと健悟は同情した。

「分かってくれたなら俺は大人しく帰るよ。」

「じゃあ、もう会うこともないだろうけど元気で」

健悟は表情を作らず右手を差し出す。そして香奈子はその手を見つめ、小さな溜息をつき

「ええ、あなたもね」

決して健悟の手を握らなかつた……。

外に出ると薄暗くなっていた。香奈子は子供を諦めたのだろうか。それとも違う手段で子供を取り戻す策でも考えているのだろうか。自分には関係のないことだが、その後が全く気にならないわけではないのだ。

もし子供が自分の子だったとして、それを麻琴に隠すという選択は健悟には無かつた。麻琴にとっては隠し通して欲しいことなのかもしれないが、やはり出来る限り正直に生きたい。辛い思いをさせるかもしれないが、それ以上に幸せにしてやれば良いと本気で思っていたのだ。

確かあの角のケーキ屋のプリンが好きだったな。帰り際はなん

か拗ねてたし買って持ってってやるか。

ケーキ屋に一步足を踏み込むと、麻琴を思わせるような、ほんのりと甘い匂いに全身を包まれた。ケースを除きこみ、プリンだけでなくケーキも数種類選んだ。ケーキは店員の手によって四角い箱に閉じ込められ、健悟の手に渡った。

ケーキ屋から出ると車を停めたコインパーキングへと足早に向かった。パーキングに近付くにつれ人気はなくなっていた。少し離れたところに黒いコートと帽子を目深に被った不審な人物がいたが、健悟はケーキを頬張る麻琴を頭に描き気付かなかった。

車のドアを開きケーキをダッシュボードに乗せた時だった。背後から何者かが走ってくる足音が聞こえた。何事だろうと振り返った瞬間、右下腹部に鈍痛が走った。倒れこむ途中、一瞬だけ足音の主と目が合った。左目の下に縦に走る3cmくらいの深い傷跡があった。

「健兄、リハビリ頑張ってる？」

部屋の入り口からちよこんと顔だけ覗かせおどけて見せる麻琴。健悟は入り口から一番手前のベッドに胡坐をかいて座っていた。麻琴は毎日のように欠かさず見舞いに来ている。そしてこの部屋の住人たちのアイドルとなっていた。

「麻琴ちゃん、今日も可愛いねー。そんなとこ突っ立ってないで入

って入って」

窓際の石田が満面の笑顔で手招きをしている。そして他の住人たちも大歓迎している。あの日、和樹は本気で病棟看護師に頼み、健悟は翌日6人部屋へ移されていた。

してやられた　と齒軋りをしたが、やはり麻琴を待つ時間は長く、このむさ苦しい連中とバカな話で盛り上がっているのも飽きなくて楽しいものだ、と、若干の感謝もしている。

「お邪魔します。今日は皆さんにクッキーを焼いてきたの」

バッグから箱詰めしたクッキーを取り出して見せる。健悟を除く一同はベッド上から身を乗り出し

「おーっ!!!」  
と歓喜の声を上げる。しかし健悟は面白くなさそうに横から口を挟んだ。

「そいつら全員糖尿病だから血糖値上昇して死ぬぞ。食わせるな。あいつらの為だ」

「えっ・・・そうだったの。私、知らなくて・・・」  
青褪める麻琴。しゅんと下を向いてしまった。だが・・・

「なに嘘こいてんだよ、弁護士っ。俺は右上腕部の骨折だ。糖尿なんかじゃねーぞ」

「俺だっつ。バイクでこけて左大腿骨骨折だけだ。ヘンなこと言うなへっ。ポコ弁護士っ」

「俺はハシゴから落下して脳挫傷。内臓バリバリ元気だし。弁護士は俺らに麻琴ちゃん取られてヤキモチ妬いてんじゃねーの？」

「右大腿骨と右手首骨折。クッキー大好物！ 嘘つき工口弁護士」  
「俺は車の衝突事故であちこち怪我して縫ってもらっただけだ。エセ弁護士めっ」

一斉に攻撃を受ける健悟。しかし口元を押さえて込み上げる笑いを抑えている。

ここの住人たちは内科には全く問題のない20代〜30代の男ばかりだった。職業も家族構成もそれぞれ異なるが、年齢が近く利害関係がない分、気を遣わず気楽な仲間となっていた。

だが、健悟は麻琴が来ると自分より先に声をかけたがる石田たちを正直「うざい」とも思っている。「あいつらが麻琴のことで喜ぶ顔なんか見たくない」とも。

全ては和樹の計らいだった。

「個室の早瀬健悟ですが、さとう淋しいらしくて、少し鬱傾向にあります。できるだけ賑やかで柄の悪い6人部屋に入れてやって下さい。そういう所を本人が好んで希望していますので」

和樹がほくそ笑んだのは言うまでも無い・・・

一カ月が過ぎた。

「レスピレーター（人工呼吸器）外したその日に覚醒するなんて、やっぱりタフな体なんですね。筋肉質な体のお陰もあったと思いますよ。筋肉が無ければ刃物はもっと奥深くに刺さっていたでしょう。災難でしたが、不幸中の幸いとはこのことでしょう。若いからと言って過信してはダメですよ。無理はしないという約束ですから

ね。」

担当医は分厚い眼鏡の向こう側にタレ目を作り健悟に釘を刺す。

「ありがとうございます。感謝しています。」

やっと退院の許可が出たのだ。

当分の間は麻琴と和樹の管理化の下、美山家で生活することになった……



## 引き摺る誤解

久しぶりの美山家は懐かしい匂いがした。仏壇の前に座ると、見守る二人の柔らかな温もりも感じる。

「生きてる」

感じたことのない実感がそこにあった。

ICUにいた時、なだらかで長い坂道を延々と歩く夢を見ていたような気がする。なかなか辿り着く事はできないが、坂の向こうの方には写真でしか見たことのない母親と百合子の二人が居た。早く行きたい、でも何故か足は一定のテンポしか刻めずにいた。時々小さな女の子が現れ自分の手を握る。相手は小さな子だというのに、手を握られてホツとする自分がいた。時々ふと現れることに自分は何の疑問も持っていないかった。女の子はなにやら自分に話しかけてくるが、上手く聞き取れず笑いかけてはぐらかした。泣きそうになる女の子をどう扱っていいのかわからず、握る手をしっかりとにぎり返してやると女の子は大人しくなった。

「あれは麻琴だったのかなあ・・・」

「え？」

コーヒーを淹れながら麻琴が振り向く。

「いや、なんでもない」

退院した夜、二人は麻琴のベッドで寄り添って寝た。健悟の強い希望だ。

「和樹ずっと夜勤だといいのにな」

和樹が聞いたなら、ただじゃ済まないだろう。

「お腹の傷痛くない？」

「引き攣れる感じあるけど、無理な体勢とらなきゃ大して痛まないな。」

あー、本当は今直ぐ無理したいんだよー」

「???? 意味が分からない」

「麻琴と無理したいってこと」

耳元を擦るように囁く。暗がりで見えないが、きつと目元口元と緩みっぱなしでだらしの無い顔をしているだろう。

「ダメよっ！ 絶対に」

「分かってるよ・・・俺だって麻琴と無理して傷口開いたら、医者とアイツらに何言われるか・・・」

『アイツら』とは、勿論6人部屋の住人たちのことだ。健悟が退院する時、彼らは本当に悲しげな顔を見せた。

それぞれが「また絶対に顔をみせてくれ」

「いつでも良いから来てくれ」

「せっかく知り合えたのに・・・」

「いつか全員が元気になったら上手いものでも食いにいこう」

などと挨拶した。目に涙を浮べるものまでいて・・・全員が握手を

求めた。

そして飾らぬいつもの優しい笑顔で麻琴は一人一人と握手をして挨拶を交わした。

「麻琴、ちゃんと手洗っただろうな」

「は？ 洗ったもなにも、ちゃんとお風呂入ったし。なんで？」

「いや・・・なんとなく」

「麻琴、愛してるよ。ずっとこうしたかった・・・」

布団の中でガサゴソと麻琴の方に横向きになり、頬、瞼、鼻の頭、耳元、そして唇に口付けた。麻琴はただ黙ってその行為を受け入れる。健悟の片手は麻琴の肩を擦り、鎖骨、胸へと移ってきた。

「これ以上はしないから、少しだけ・・・」

「・・・」

胸の頂きを手の平の中心で感じ取ると、麻琴の身体が僅かにしなつた。

健悟は自分の身体が恨めしかった。健悟の中心はベッドに入った瞬間から麻琴を求めている。それなのに腹部の傷口がジカジカと禁止命令を出しているのだ。麻琴に心配させない為、敢えて不調を訴えることはしないが、実際は痛み止めや炎症止め、抗生物質等を飲んでいても、全く支障を感じないわけではないのだ。

「麻琴、完全復活したら寝ないで愛し合おうな」

麻琴は返事をしない。健悟は照れているのかと思いきすと笑った。そしてそのまま眠りに付いた。

麻琴の涙にも気付かないままに・・・。



## もう一つ

麻琴は事件の概要を何一つ知らされていなかった。しかし麻琴の知らないところでは既に被疑者も特定され逮捕までの大詰めを迎えていた。

健悟は退院後暫くは通勤せずに美山家でデスクワークのみを地味にこなしている。以前『イケメン大学講師』としてマスコミの取材を受けていたこともあり、事件翌日には一部の新聞社が物騒な字面で紙面を埋めていた。強いては大学や槇村事務所にまで報道陣が押し寄せ、当分は姿を隠すこととなつたのだ。

最近の麻琴の様子は鈍感な健悟から見ても気になるところがある。一緒にベッドに入ってはくれるものの、以前のように気持ちを通わせることを避けているように思えてならないのだ。愛していると囁いても俯いてしまうのがその証拠だろう。

また和樹にしても最近おかしい。何か話したそうな素振りは見せるが、押し黙つたまま口を開かない。どちらにしても二人に避けられているような疎外感が不穏な空気を作り出して居心地が悪いのだ。

まずは和樹から片付けるか。女の気持ちの方が分かりにくくて厄介だ。

珍しく麻琴は美佳の自宅へ招かれて食事をしてくる。和樹は比較的早い時間に帰宅すると聞いている。健悟は今日こそ和樹から話を聞き出そうと決め込んだ。

複雑な悩みとも知らずに……

「お前、毎日暇だろ」

「それがそうでもないんだな。」

ボスがあればこれ仕事送り込んでくれるから色々やることあるんだ。まあ、有り難いけどさ」

「そうだな。この不況下において仕事あるってことは良いことだ」

二人は夕食もそこそこに、リビングでソファを背もたれに床に胡坐をかいて酒を酌み交わしていた。床には麻琴が作り置きしていた鮭の南蛮漬けときんぴら牛蒡、そして一升瓶が直に置かれている。以前麻琴が言っていたように和樹は殆ど家に戻らない。食事を作っても無駄になることが多いというのも頷け、最近の和樹は疲れから少し痩せたようにも見えた。

「入院してる時からずっと気になってたんだけど・・・和樹なにか隠してないか？」

和樹も今日こそは健悟に聞いてもらおうと思っていた。だが、いざその時が来ると、どこから話していいのか悩んでしまう。酒を一口飲むとさっきまでとは違う辛味を舌先に感じた。

「話は二つある。一つは麻琴のこと、もう一つは・・・」

喋りたくても、『母親』と言葉にすることに美山の両親や麻琴に対して罪悪感があり、どうしても口が拒否するのだ。健悟はその「もう一つ」が問題なのだろうと、その様子から感じ取った。無理に聞き出してはいけないと察し、黙って和樹のお猪口に新しい酒を足し

てやった。その酒を一気に飲み干すと、和樹は意を決したように一つ大きく深呼吸をした。

「ちょっと複雑な話なんだが・・・まあ、職業柄お前はこういう話慣れてるだろうな・・・」

「・・・」

「麻琴にもしていない話だ。」

これから話すことは一先ずここだけの事として聞いてくれ」

「わかった」

和樹は自ら酒を溢れそうな程なみなみ注いだ。だが口には運ばす床に置かれたままだ。

「俺さ、美山家の養子なんだ」

思いもよらぬ突然の言葉に驚いて声も出ない健悟。

「だよな。驚くよな普通」

「・・・ああ。本当なのか」

探るように問う。昔冗談で「和樹だけ誰にも似ていないけど、本当は捨て子なんじゃないのか」とからかったことを思い出した。

「本当だ。大学入る頃だったかな。どうせ何時かは分かる事だからと花子叔母さんが教えてくれたんだ。もちろん俺自身驚いたけど、でも名前も顔も知らない人より、やっぱり俺の親はあの二人だと思っただよ。遠い親戚より近所の他人と同じで、産みの親より育ての親だと思っただよ」

「・・・生きてるのか・・・その産みの親は」

「生きてる・・・よ。母・・・親の方は」

ヒロコの小さく頼りない体と、辛そうな顔が浮かんだ。

「つい最近知った。お互い探していたわけではなかったのに、出会うもんだな。」

俺は一度だって会いたいと思ったことがなかったのに・・・。

父親は俺が生まれて直ぐに26の若さで交通事故で亡くなったそうだ。その後母親の方はショックのあまり精神を病んで入退院を繰り返したらしいよ」

和樹は淡々と話し始めた。



## ちょっとだけお知らせです

いつも覗いてくださりありがとうございます。

実は以前「R15」の回をコッソリとソフトに手直ししました。

そして今度はそれをコッソリと「ややハード」に手直しいたしました、

「R18」にしてしまいました。

まだ途中までしかアップしていませんが、一応「ムーンライト」さんの

<http://novel18.syosetu.com/n5831k/>

へページを設けさせて頂いておりますので、お暇な方、興味のある方は是非いらして下さい。

私には、「R15」の基準がよく分からなくて、やっぱり少し難しかったです。。。

## 使命

「まあ、その場合、育児能力が欠落していただろうし捨てたというのは違うな。」

「ああ、別に恨んじやいないよ・・・正直その辺に関しては何の感情も湧かないんだな」

当時生きることには希望が持てず、病院の屋上から飛び降りようとしたことをヒロコは話した。その時、麻琴の父、美山寛和は研修生だった。ヒロコの夫 佐々木祐二が事故死したことを新聞やニュースで知り、その妻が精神を病んで研修先の病院に入院していることも知っていた。

ヒロコの頭の中は死ぬことで一杯だった。死ねば祐二に会える、一生祐二の側に居られる。早くその場所に逝きたい・・・と。和樹のことを考える余裕など一切なかった。

「赤ちゃんて可愛いですよね。無垢で生命に溢れている。希望と夢の塊だ。」

「そう思いませんか？」

寛和は明るい声で、屋上から無表情で地面を見下ろすヒロコに話しかけた。

その時、初めて我に返ったとヒロコは言った。

自分には和樹が居る。和樹と生きなければいけない。しかし病んだ心は崩壊寸前にまでできていた。自殺願望は鳴りを潜めたが、次第に食事が摂れなくなり自力で立っていられない程に衰弱した。

その間、和樹の面倒は祐二の両親がみていたが、二年位経った頃、父親が胃癌で他界した。母親は息子の祐二と夫を短期間で亡くしたのだ。2歳になった和樹の世話もままならない状態となり、ヒロコ

の見舞いの際に院長の美山茂久に相談したのだ。

そしてヒロコの知らぬ所で和樹の戸籍が動いた。茂久は初め自分の養子に迎えようと考えていたが、その事を当時婚約をしたばかりの息子、寛和と婚約者の百合子に伝えると、二人は年齢的にも自分たちが育てることの方が自然だろうと言った。茂久は随分反対したが、二人は頑固にその意志を貫こうとした。特に百合子が必死になつて説得した。

「きつと私たちにも子供ができるでしょう。その時、和樹くんに兄弟ができるんです。何れ年齢からいけば私たちは先に死にますが、和樹くんには兄弟という支えができる。お義父さまには和樹くんに兄弟を作つてあげられますか？」

その言葉に茂久は折れた。

百合子は朗らかで慈愛に満ちた女だった。ヒロコが入退院を繰り返していることを知り、年に一度は体調への労わりと和樹の近況を手紙にし、写真を同封して送った。

その手紙と写真はヒロコに生きる希望を与えた。徐々に精神は安定を見せ始めた。ヒロコが立ち直るまでに相当な年月が掛かつていた。完全に薬を立ったのは和樹が高校進学したという手紙を貰った頃だった。写真の和樹はここ一年でグッと身長が伸び、輪郭や目元が祐二そのものとなっていた。美山夫婦には自分の命と和樹の命を助けて貰ったと心から感謝していた。当然いつか自分が引取ることも考えたりしたが、和樹の幸せを思うとこのままの方が良いだろうと自分に思い込ませ諦めた。それは身を引き裂かれるような辛い選択だった。そしてその年を最後に、百合子からの手紙は途絶える。

一番最後の写真は高校の真新しい制服を着た和樹と、白いワンピースを着た9歳になった麻琴が並んで写っているものだった。

Spanで麻琴をどこかで見たとあると思ったのは、この写真

のせいだったと後から知る。そして何度か見舞いに来てくれた百合子の面影も残している。

ヒロコは美山夫婦が交通事故で死んだことを当初知らなかった。手紙が届かなくなつて1年が過ぎ、2年が過ぎ、3年が過ぎた。初めの一年は毎日手紙を待った。二年目は必死で忘れようとした。そして三年目は諦めたと言う。会いに行こうとすれば場所は知っている。だけど、その勇気はなかった。当然諦められるはずもないが、諦めたフリを・・・自分を必死で騙し続けてきたのだ。

そして知人の伝手でspanというjazz barでアルバイトを始めた。いつまでも癒えない傷を持つたままだったが、それでも少しずつ心開かせてくれる男性と出会い、そして結婚した。

一度だけ「辛い過去がある」とマサさんに話そうとしたことがあるが、  
「辛い過去ならわざわざ言わなくてもいいよ。これからの幸せな未来を語り合つて生きていこう」と包み込む笑顔を返された。

「俺の悩むところは、つまり・・・今後の関係をどうしたら良いのかということ、麻琴のことなんだ。麻琴は血の繋がりが無いことを何も知らない。俺と血が繋がっていないと知ったら、あいつ孤独になるんじゃないか・・・って。そんな思いだけはさせたくないんだ。麻琴だけは、麻琴だけは絶対に・・・」

淡々と話していた和樹は、いつの間にか目に一杯の涙を溜めていた。和樹の掛け替えのない宝物。いや、命と同等とも言えよう。その麻琴を守ることは和樹の使命と化していた。その意志は花子から養子であることを聞いたあの時から、揺らぎのない強いものへとなつていった。

「和樹・・・おまえ・・・」

## 心の怪我

「あー、おばあちゃんの煮物本当に美味しかったあ。  
やっぱり腕が全然違う。尊敬しちゃうな。」

「いいなあ、美佳。羨ましい」

食事を終え満足満腹の二人は、美佳の部屋で寛いでいる。10畳の洋室でピンクを基調にした美佳らしくない(?)女の子らしい部屋だ。

「まあ、確かに美味しいけど、居ると居るで口うるさくて、やんなっちゃう時あるんだよ。お兄さんの門限程じゃないけどさっ」

麻琴は美佳の方をチラッと見た。ここ最近、美佳の口から和樹の話が少なくなっている。麻琴も健悟の事件後はずっと病院通いをしてきた為、美佳との接触も激減していたし、和樹も多忙でなかなか連絡を取れないようだった。

「今日、きつと居るよ。まだ7時半だから寝てないし、面倒じゃなかったら来る?」

「えっ いいのっ?お兄さん迷惑じゃない?」

迷惑だろうと何だろうと美佳には関係ないだろうが、形だけ一応聞いてみる。そして麻琴が返事をする前にコートを来てバッグを手にしていた……。

「ただいまあゝ」

「おっじゃましませーす」

美佳はルンルンでスキップしそうな勢いだ。だがリビングに入ると電気は点いているも、健悟と和樹の姿が見えない。

「あれっ・・・なんで？」

キヨロキヨロと部屋を見回す。リビングの入り口から見るとソファ―は背を向けており、その向こう側は見えない。だが麻琴のところからは床に一升瓶が転がっているのが見えた。

「もう・・・どうしてあんなところにビンが・・・」

片付ける為にソファ―に近付いた。

「きゃっ」

麻琴の短い悲鳴。なんとソファ―には和樹が横たわっており、その下の床には健悟が身を隠すようにして丸まっていた。そして二人とも麻琴の驚いた顔を見て笑い声を上げた。

「やーい 引つかかった引つかかった」

こんな悪戯っ子のような子供じみた言葉を発するのは健悟だ。どうせ麻琴に悪戯を仕掛けたのも健悟だろう。

「・・・いい加減にしてよ、二人とも。本当にビックリしたじゃない。お客さんが来てるのに、恥ずかしい・・・」

「えっ」

「うそっ」

今度は悪戯をした二人が驚いている。そして同時に起き上がるとドアの方を一齐に向いた。

「こんばんは。お邪魔します・・・」

和樹を見てか俯き加減に少し照れたような仕草をした。

なんか美佳、可愛い・・・乙女だぁ

麻琴は心の中で呟いた。

「あっ いらっしやい。寒いから入りなよ」

和樹がいつも通り優しい声を掛けると美佳は嬉しそうに頷いた。

「すみません。こんな時間に。麻琴に誘われて来ちゃいました」

対面式キッチンのある食卓テーブルの椅子にバッグを置きながら和樹と健悟に向けて言う。

「いや、こちらこそ麻琴がご馳走してもらったんだよね。お世話になりました」

律儀に頭を下げる。その横から麻琴が嬉しそうに報告する。

「あのね、おばあちゃんもお母さんもお料理がとっても上手で、おいしくて沢山ご馳走になっちゃった。お兄ちゃんや健兄にも食べさ



せてあげたかったなあ」

「そうか、良かったな。こっちは健悟と二人で味気無かったよ。酒飲んでも大して酔わないし・・・ああ、二人とも少し飲むか？」

「あ、でもオイ、酒飲みきってるぞ」

「そうか・・・じゃあ、俺ひとつ走りしてくるか。麻琴、なんか簡単なツマミ頼むよ」

そう言うと和樹は上着を着た。テキパキと次への行動が早いのは、これまで時間に追われた生活をしてきたからだろう。無駄な動きがなく、全てが流れるような動きなのだ。

「ね、美佳。お兄ちゃんと一緒に買ってきてくれる？」

「うんっ」

飛び跳ねるようにして玄関にいる和樹の方へと飛んで行った。

酒屋からの帰り道。家まではせいぜい10分もかからない距離だ。和樹は美佳の歩幅に合わせてゆっくり歩いた。

「美佳ちゃん、連絡できなくて悪かったね。」

健悟のことも含め色々と立て込んで・・・元気だったかい？」

「はい。お兄さんも元気でしたか？ 少し痩せたみたいけど・・・」

「

「まあまあ　かな、ははっ」

確かにこの一ヶ月で体重が5キロ近く落ちていた。仕事が忙しいことに加え、ヒロコに関する問題と健悟の事件がタイミング悪く重なったのだ。無理もないだろう。

苦笑いを作る和樹を美佳は心配そうな顔で見上げた。

「美佳ちゃん、そんな顔しなくても大丈夫だよ」

「でも・・・お兄さん今辛そう。心が疲れてるみたい」

「美佳ちゃん・・・」

そんなつもりはなくても、自分はそんなに疲れた顔をしているのだろうか。言われてみれば健悟にも「なにか隠してないか」と言われた。

「美佳ちゃん、少しその公園のベンチに座らない？」

心配そうな面持ちの美佳の右手を取ると、外側に一番近いベンチの方へと向かった。

決して強引ではないが、美佳には有無も言わせぬ行動だった。

ベンチに買った酒の入ったビニール袋を置くと、二人は並んで座った。

「お兄さん、どうかしたの？」

「少しだけここで飲もうか」

「え、でも二人とも待ってますよ・・・」

ビニール袋から麻琴に頼まれた生ビールを一本取り出すと、プルトップを引き美佳に渡した。そして自分の分も取り出し、プルトップを引くと何も言わずゴクゴクと飲んだ。美佳もその様子を見て口を

付ける。

「やっぱりお兄さんへん。いつもの感じと違う」

「どう違うの？」

「うーん・・・えー・・・と・・・」

どう表現していいか考えあぐねる美佳を見て、和樹はクスッと笑った。

「美佳ちゃんも最初の頃とは違うね」

「あら、どう違うんですか？」

「もつと生意気な・・・あ、ごめん」

「ふふっ いいです。慣れてるし・・・」

笑顔で涙を堪えているように見えた。

傷つけてしまったかもしれない

そう思うと、つい軽く出た言葉だったが酷く重たいものだったと思われ、罪悪感で一杯になった。

言葉を重ねるとまた余計に傷つけてしまいそうだった。

美佳の肩をそつと抱き寄せ胸にうずめた。

## 言葉よりもキス

「遅いなあ・・・酒」

「酒じゃなくて美佳とお兄ちゃんでしょうっ！」

せいぜい20分程で帰宅するものと思われた二人は、40分経った今も姿を現さない。携帯に連絡しても出ず、麻琴はそろそろ探しに行こうかと本気で考え出していた時だった。握り締めていた携帯がやっとな鳴ったのだ。

「もしもし、どこまで買いに行つたの？」

『いや、いつもの酒屋だけど、ちよつと酒飲み過ぎたみたいで気分悪くて、公園で休んでるんだ。もう少ししたら帰るよ。心配するな』

「それならそうと早く連絡してくれなきゃ心配するじゃない・・・とにかく気をつけて帰ってきてね」

「和樹なんだって？」

「酔っ払って公園で休んでるみたい。美佳について行ってもらって良かった」

「どうかな、もしかして公園でイチャイチャして　イツ・・・テ  
ーッ！」

思いつきり足を踏みつけられ後ろのソファーに引っくり返った。

「麻琴おー　俺こう見えても重症患者だったんだぞーっ。

もんのスゲー痛い。足に心臓あるみたいだ」

「あ、そ」

見向きもしないで冷たく言い放つ麻琴。

「うわあー お前、氷のような女だな。俺の愛した麻琴は何処に行つたんだ」

「・・・愛して・・・なんかいないくせに」

聞き取れないくらいの声。

「え、なんだつて？聞こえなかった」

「・・・愛してなんかいないでしょ。私のこと、ちょっとからかって遊んだだけでしょ」

「なに言つてんだよ。バカみて」

「だつて香奈子さんに・・・」

健悟は香奈子との話をまだ麻琴にしていなかった。事件のこともそうだが、心配の種になりそうな話は避けていたのだ。だが、話さないことで麻琴の不安は膨らみ、疑問から疑いへと変わり、不信感を募らせた。

「麻琴、今日は和樹も具合悪そうだし、酒はやめてちゃんと話そうか」

「・・・もう嫌いになったとか、そういう話なら、ちゃんと話さなくても直ぐに終わるでしょ」

完全に思い込んで殻に閉じこもってしまっている。健悟は やれやれと頭を掻いている。

「聞いたよ。和樹に、俺とはもうダメかもしれないって言った

「んだって？」

「……」

「麻琴は俺のこと嫌いになったのか？」

「……そんなことない」

健悟がICUに入っていた時、嫌という程愛していることを実感させられた。健悟とは別の人生を歩んでもいい、だから絶対に死なないでほしいとさえ……。

「俺も嫌いになんてなっていないよ。寧ろ日に日に麻琴のことが愛しくなる。」

こんな風に人を愛せることに、我ながら感動するぐらいだ」

「でも……香奈子さんに……」

「彼女じゃないって話か？」

目につつすら涙を溜め、コクンと頷く。その姿に、こんな時であっても健悟は愛しさを募らせる。麻琴の仕草一つ一つが可愛く思えるのだ。

「彼女じゃないって言ったのはだな、そんな人括りのちっぽけな存在じゃないっていう意味だよ。麻琴の存在はそういう簡単な総称に当てはまらないほど、俺にとっては大きくて幅広い存在だ。例えば結婚を約束したら婚約者、結婚したら妻、子供が生まれたらお母さんになるけど、それとは別に、俺にしか分からない麻琴がそこに居るんだ。他人には解りようがないし、きっと麻琴にも理解できないものなんだ」

「……私にも理解できない……？」

「そうだ。……もしかして麻琴は全て言葉で表現しなきゃ信じられないか？」

「・・・言葉、欲しい」

「そうか。言葉は時として嘘や誤解を生むだけだな。例えばセックス。あの行為は言葉が必要か？」

「例えが変だよ・・・」

「大事なことだろ。じゃあいいよ。キスに置き換えよう。キスをする時、言葉でいちいち何かを表現するか？しないだろ。するとしたらどんな言葉で表現する？」

キスする前に言うのか？愛してる、今すぐお前と繋がりたいって」

そう言うと健悟は麻琴の手を取り自分の方へ引つ張った。そして徐々にキスした。引つ張った手の強さとは裏腹に、唇は優しく何度も啄ばむように重ねられる。

「こうやって言えばいいの？好きで好きで、言葉なんかじゃ表現できないものを、チープな言葉で無理に表現して、それを聞いて麻琴は満足か」

また唇を塞ぐ。強く抱きしめ、麻琴の唇の端から舌を差し込んだ。今度は貪るような、熱をはらんだ熱い口づけに麻琴は言葉を失う。

「麻琴、黙ってないでなんか言えよ。今のキスは言葉で表現するとどんなものだ。良かったか、悪かったか。イヤだったか、嬉しかったか。それとも、物足りなかったか？麻琴の好きなタイプのキスは？俺に分かるように全部教えてくれよ」

矢継ぎ早に攻め立てるように言葉を続ける。

「・・・そんなに・・・意地悪なこと言わないでよ・・・」

優しいキスと情熱的なキスの後には、麻琴を苦しめる言葉。色んな

感情が麻琴の心を支配する。言葉ではないのだ。自分の欲しいものは、揺らぎのない安心感なのだ。

「健兄・・・もっとキス、して・・・」

自ら健悟に抱きつき、少しでも唇を近づけるように踵を上げ背伸びをしたその時、玄関の開く音が微かに聞こえた。しかし今の二人には聞こえるはずも無く・・・



## 心の闇

靴を脱ぎ、きちんと揃えて爪先を玄関の方へ向ける美佳に、和樹は初めの頃とは違う印象を持ち始めていた。美佳と会う度に初めの印象を覆されるのだ。そして最近では、その塗り替えられる印象を見つけるのが和樹の楽しみにもなっている。

「お兄さん先に手を洗って下さい。私は買ったものを置いてきます」  
そういうとトコトコとリビングの方へと向かった。そしてドアを開けてピタッと立ち止まっている。和樹は不思議に思い近寄った。

「なに？」

小声で聞くと美佳が慌ててドアを閉めた。

「おっ お兄さん、ちゃんと手洗いました？ダメですよ、ちゃんと洗わなきゃっ！」

和樹の小声に対し、美佳は大きな声で言った。そして背中を押すようにして洗面所の方へと押しやられる。何故か美佳までも洗面所へと入ってきた。

「分かった分かった。ちゃんと洗うから・・・  
違うんだよ。美佳ちゃんが急に立ち止まるからどうしたのかわかって思っただけで、手を洗わないつもりなんて・・・ちよっ、美佳ちゃ

ん近いって」

ドアを開けると思いがけない光景が美佳の目に飛び込んできた。

二人のキスは映画やドラマのワンシーンのように美しく、美佳を一瞬で釘付けにした。だが、そこに兄の和樹がノコノコやってきたのだ。麻琴を過保護に育て、今でも「門限 門限」と呪文のように繰り返す兄。その兄が二人のキスシーンを見たら・・・

美佳は咄嗟の判断でその場を取り繕う為に、手洗いを理由に和樹を洗面所に押しやったのだ。そして今、美佳の目にはさっきの二人の口づけが焼きついて離れず、和樹の背に抱きついた状態になっていることも気付かなかった。

「あっ すみませんっ」

「どうしたの。ヘンだよ。あ、分かった、あの二人・・・」

「えっ？」

和樹は意味深にニヤニヤしている。美佳は和樹の鋭さにドキッとした。そして・・・

「あの二人、さっきの俺たちみたいに姿見せないで隠れてんだろ。

二度も同じことするなんて子供過ぎだよな。ははっ」

ガクツときた。

10時近くになり和樹が美佳の帰宅を心配し始めた。どうやら麻琴のことだけではなく、美佳にも門限の呪文をかけようとしているよ

うだ。電車で帰るといふのを、これまた心配してタクシーを呼んだ。そしてタクシーが到着するまで麻琴の部屋で待つ事にした。

「ごめんね・・・ホント恥ずかしい。。。」

「いえ、ご馳走様でした」

「もうっ 美佳ったらっ。でもお兄ちゃんに見られなかったのは幸運だった。美佳の機転のお陰だわ。本当にありがとう」

「いえいえ。でもやっぱり二人は絵になるな！。素敵だったあゝ」

美佳は思い出してウツトリしている。だが直後、麻琴のある質問に慌てふためく。

「ね、美佳はお兄ちゃんとキス、もうしたの？」

「えっ えっっ！ なによっ きっ 急にっ。そんなことっ」

「・・・美佳、顔 真っ赤。照れてるの？ふっ」

このシチュエーション、本来であれば真逆であるはずだが、いつの間にか逆転している。

抱きしめられたがキスまでは至っていない。美佳には受け入れる準備はできているのだが、肝心の和樹がその素振りすら見せないのだ。

もしかしてお兄さんて男の人が好き・・・？

そんな変な想像までさせてしまう始末である。

一方リビングでは男二人が真面目な顔で向き合っていた。

麻琴の帰宅直前まで、和樹は健悟に二つの相談をしていた。その結

論は未だついていないが、健悟に話したことで少なからず安堵感をもちたらしめていた。

「慌てないでじっくり考えればいいんじゃないか。その、実の母親のことは。でも和樹、麻琴はきつと本心から喜んでくれると思うぞ。そういうヤツだろ、麻琴は」

「けどその反面、繊細だ。最近色々あったばかりだし……。お前が搬送された時、麻琴……。壊れかかったんだ。精神的にかなりヤバかった。父さんと母さんが死んだ時のこと覚えてるだろ。声でなくなっちゃってさ。あちこちの精神科や心療内科に連れて行つたろ。またあんな風に抜け殻になったら……。って思うと、少しでも精神的に追い詰めるようなことはしたくないんだ」

「……。そうだな。分かるよ。取り敢えず、もう少し時間を置こう。それから……。俺と麻琴の問題の方だけど、お前らが酒買いに行ってる時に少し話したんだ。と言っても、まだ具体的な話はしていないんだが、今度時間とってジックリ話すことにした。香奈子のこと包み隠さず言うつもりだ。これまでのことも、傷つけない程度に出来る限り正直にな」

和樹にはサラサラと事件のことも香奈子のこと話すことはできた。しかし和樹同様、麻琴が相手となると言葉を選ぶだろう。それでも伝えなければいけない。麻琴の前では、いつも心を裸にしておきたいのだ。

「ところで和樹さ、今日公園で何してた？」  
目だけを向けてニヤツと見やる。

「何って・・・別に」  
健悟のニヤつきに気付かぬふりをして、ソファからスッと立ち上がった。

「密着しただろ。」

お兄さんの体から美佳ちゃんの香水の残り香がするんだよなあ〜」  
ふざけた口調の健悟。美佳にキスしている場面を見られているとも知らず、和樹をおちよくる。

「本当かつ？」

慌てて犬のように自分の腕や胸元を忙しくクンクンと嗅いでいる。

「嘘だけだな。ははっ。」

でもいいじゃないか。美佳ちゃんかなり本気らしいし、一見擦れているようにも見えるけど、実は真面目だろ。麻琴の親友だから間違いないよ」

「・・・お前の基準は麻琴かよ。弁護士が呆れるな。」

確かに美佳ちゃんの良い娘だ。考えていないように考えてるし、人の心の動きにも敏感だ」

「良いじゃないか。お前も本気で付き合えば」

「どうか。まだよく分からないな。」

とにかくっ！ 今後も麻琴にはおかしな真似するなよ」

和樹は話を摩り替え、美佳とのことを濁した。だが健悟は、その冷静な目で和樹の心の闇を捉えていた。



## 消えた記憶 消せない想い出

「男の方は本罪以外にも余罪が16件あるみたいなので、生きて出て来れないものと思って良いでしょうが、辻井被告の方は余罪は出て来ていないようですし、準抗告の申し立てもしました。まあ、おそらくは却下でしょう。例え保釈請求したって通らないはずだ。ところで早瀬君はどうしたいと考えていますか」

久しぶりに事務所に出勤している。傷口も随分と治り、ある程度は通常の生活ができるまでになっていた。そろそろ美山家から出て自宅へ戻ることも考えている。

辻井香奈子は被疑者勾留から被告人勾留へとなっていた。健悟の想像通り、香奈子は多額の金銭で殺し屋ハンターを雇い、そしてあの日、実行を命令した。その後は何食わぬ顔で仕事に出るなど、ごく普通の生活を送っていたという。しかし健悟が意識を取り戻し、犯人の特徴が明らかになると事態は一変する。槇村の話によると、犯人は年齢35歳の男で犯歴も余罪もある殺し屋ハンターだった。男の特徴である顔の傷は、刑事たちの間でも有名で直ぐに特定された。闇中で生きる男と香奈子の接点は未だ分からない。余罪に関しても被害者の殆どは殺傷で命を落としているらしく真相はまた闇の中に葬られるであろうことが想像できた。だが、本罪に関しては運良く健悟は生還している。少なくとも、この件においては何らかの判決が下される。

「ボスにお願いがあります」

「僕にお願いですか。ほー、それまた珍しい」

「自分の弁護を依頼します」

「・・・僕はもう、年老いた老いぼれ爺さんなんです。

寝ないで情報収集したり資料作りしたり、警察や裁判所を駆けずり回るのは身体に堪えます。早瀬君、どうか辞退させて下さい。。。」

「そんな同情を買おうとしてもダメです。是非ボスにお願いします。ボスがやるんです！」

ピシヤリと言いつけると槇村は丸いお腹をスリスリと撫ぜながらシヨンボリと立ち上がりデスクの方へと歩いて行った。どうやら渋々にでもやる気になったようだ。見てくれは野暮ったいノンビリした風貌だが、実際には仕事は迅速的確でこの世界では敏腕と名を馳せている。ここ数年は『もう僕は散々やってきたから休憩したいの』と若手育成を中心にきていた。恐らく本格的な弁護活動は6年ぶりだろう。

「あーあ、疲れたなあ〜」

「ボスッ まだ何もやり始めてないじゃないですか！」

並んで大学の門を出た。最近やっと春らしくポカポカとし、厚手のコートも必要なくなっていた。そして気が付くとあちこちの桜の木に花が咲き、見上げる空を薄っすらピンクに染めていた。二人は10分ほど歩き、ある桜の木の下で立ち止まった。

「あの、これほんの気持ちなの」



「え、なに？」

「うん、タクシーで病院に連れて行ってくれたでしょ？」

「ああ、別にそんなのいいよ」

「ううん、そうはいかないわ。兄にもきちんとお礼するようになって言われてるし、それに本当に翔太くんには助けて貰ったから。どうもありがとございました」

翔太の手にお礼の品を持たせると麻琴は両手を前に揃え、深々と頭を下げた。

「実はね、情けないんだけど、私覚えていないの。兄から携帯に電話があつたのよね？その前後のことも、あと、翔太くんと居た場所とか、なんの話をしていたのか・・・断片的にも思い出せなくて・・・あの日のことだけが、どうしても思い出せなくて。」

翔太くん、私あの日どんなだったの？」

「覚えてないの？一つも？」

キスしたことも？

翔太は目を丸くして驚いている。あの日麻琴から相談があると持ちかけられ二人は隣駅で待ち合わせした。今にも泣き出しそうな麻琴を見て、人気の少ない場所まで連れて行き、気が済むまで泣かせたのだ。そして、余程不安で淋しかったのだろう。麻琴からキスを求められ・・・その後少しの気まずさを残し二人は目的なく歩いた。翔太はあの時のことをこれまで何度も思い出していた。麻琴が自分に対し恋愛感情がないにしても、やはりあのキスの誘いは嬉しかった。翔太に想う人がいても、だ。だが、麻琴の中では想い出にすらなっていない。

「うん・・・ごめんなさい。」

なにか大切なお話とかしたのかしら。約束事とか、相談事とか」

翔太は桜の木を見上げ何か考えている。  
そして沈黙の後、ゆっくり口を開いた。

## 優しさ

「実はあの日はこれといって何も話していなかったんだよ。隣駅で待ち合わせして、ブラブラ街を歩いていたら麻琴ちゃんの携帯にお兄さんから連絡が入ったんだよ。」

ただそれだけなんだよ。うん、それだけだったんだ」

翔太は自分に言い聞かせるようにして答え、麻琴に笑顔を見せた。

「そうだったの。やっぱり思い出せないけど・・・少しだけスッキリしたわ。ありがとう」

「いえいえ、大してお役に立てず」

柔らかな癖毛をクシャクシャとしながらおどけてみせる。麻琴はその翔太らしい仕草に癒される思いがしてクスツと笑みを漏らした。翔太のささやかな優しさだった。思い出したらその時はその時だ。麻琴に心が傾き掛けていたが、まだその気持ちに気付かないふりくらいはできる。いや、今ならまだ、忘れて引き返すこともできる。この瞬間、少しだけでも心の負担を軽減してやればそれで良いのだ。

「あの、今度ね、仲の良い人達だけで快気祝いをしましょうって話があつて、是非翔太くんにも参加してほしいの。あ、彼女とか連れてきてもいいのよ。ホント身内だけでっていう計画だから。日時と場所が決まったら連絡していい？」

「お誘いありがとう。連絡待ってるよ」

「やっぱり健兄は勝手よ。どうしてちゃんと話してくれなかったのよ」

モスグリーンのクッションを抱き、ソファーに正座を崩した姿勢で座っている。

「一杯色んな心配したり、誤解したりして辛かったんだから。香奈子さんのことだってそうよ。突然現れて何が何だか分からなくて、もう健兄のそばにいてはいけないのようになって本気で悩んだんだから。会いに行っても追い返されるし話し合いも出来ないし、私、私・・・」

「分かったよ。分かってるって」

あらゆる説明をするのに1時間以上の時間を費やした。始めは健悟もソファーに腰掛けていたが、何時の間にかソファーの下、つまり床に胡坐をかいて座っている。麻琴に見下ろされているこの状況には、まだ気付いていない。

十分に説明しているつもりでも麻琴の着眼点は健悟の伝えたいこととは少しズレていて、時々突拍子もない質問が飛んでくる。ただその中で『ああ、成る程そういう事だったのか。分かってなかったな俺』と気付かされることもあった。その分かっていなかったことの対象は、全て自分だった。自分で自分の気持ちをはやく解釈や理解することの難しさを感じずには居られなかった。

「だからこうやって謝ってるんじゃないか。俺だって誤解を解くために色々香奈子に掛け合ったり調べたりして、時間を要したんだ。蔑ろにしていたわけじゃないから……さ。……どうした？」

麻琴が急に驚いた顔で宙を見つめ固まっていた。

「私、あの日のこと……思い出した。

どうしよう、私 翔太くん……」

突然耳の中がドキドキと鳴り響き、まるでそこに心臓があるかのような錯覚を起こす。

あの夕方の出来事を鮮明に思い出したのだ。翔太の胸で泣いたことも、そして自分からキスを求めたことも。

あんなことがあったのに、なぜ翔太は何も無かったかのように話したのか。麻琴にはまだその真意が掴めない。とんでもなく恥ずかしいことをしてしまった。その羞恥だけが麻琴の心を支配する。

「翔太って、富樫翔太のことか」

「えっ、健兄知ってるの？」

「一応教壇に立ってるからな。ジャーニーズ系の男だろ。

それに、言っているのか分からないけど、これまでかなり優秀な成績を収めてるという意味でも目に止まる学生だ」

だが本当のところはそれだけではない。校内で麻琴と翔太が鉢合わせの形で正面衝突をしたのを健悟は見ている。その後から度々二人は並んで授業を受けるようになってきていることも知っている。健悟と

しては正直面白くなかった。自分の以外の男と、それも特に優秀な男となると近付けたくなかった。要するに健悟本人は未だ気付いていないが、大人げなく翔太のことを敵視していたのだ。

「そうなんだ。翔太くんて凄い人なんだね。そんなこと億尾にも出さないから、ちつとも知らなかった。脳ある鷹は爪を隠すって本当ね」

「まあ、そういうことだな。で、その富樫翔太がどうしたんだよ」

「あつ……」

「なんだよ」

「……いつ 言えないっ……」

持っていたクッションを勢いよく健悟の顔面に投げつけると、ソファから飛び降りドタバタとリビングから出て行ってしまった。

取り残された健悟はクッションを抱え啞然とするしかなかった……。

コンコンッ カチャッ

「おい、どうしたんだよ」

いつもだったら遠慮なくドアを開けるところだが、なんとなく今日はそつと開けてみた。

電気も点けず、スツポリとベッドの中に潜り込んでいる。健悟の声かけにも返事はない。

「具合悪いのか？腹でも痛いのか？」

「何でいつもお腹の調子ばかり気にするのよっ」

布団の中から籠った不機嫌そうな声。

そう、麻琴の言うように彼女の様子がおかしい時は、いつも『腹でも痛いのか』と聞いているのだ。

「いや、女だから生理痛とかなのかなって・・・」

ベッドの前に突っ立って、至って真面目に答える。

「終わったばかりだから違うもんっ」

「あ・・・そうなんだ・・・」

何でわざわざ余計なこと答えちゃったんだろ、私。恥ずかし過ぎるよー。。。

「じゃあ、どうしたんだよ」

「なんでもないから、本当に……」

「今日はなんか頑固だな。ま、言いたくないならいいけど、顔出せよ」

「やだ」

「いいから顔見せろって」

意固地に嫌がる麻琴を無視してバサツと布団を剥ぎ取る。麻琴は胎児のように身体を丸めて背中を向けていた。

「寒いよ」そう言いながら布団を引つ張り被ろうとする。

麻琴は薄手のシンプルな白いニットワンピースを着ただけで、帰宅後には羽織っていたカーデイガンもタイツも脱いでいた。重なった白い素足が健悟の目を釘付けにして離さない。

「俺も寒い」

健悟はベッドに横になり、胎児のような麻琴の背中を抱くようにして布団を被った。互いの温もりが冷えた部屋の空気を少しだけ和らげる。麻琴の首元に顔を埋めるようにして大きく息を吸い込むと、甘酸っぱい柑橘系の香りがした。思わず首筋を熱くなった唇でなぞり、吸い付くようにキスをした。

「あっ……や……」

「いい匂いがする。香水かなんかつけてるのか」

返事の代わりに首を左右に振る。

唇は首元からふくよかな耳たぶに移っていく。



「うっん、つけて・・・ない・・・ハア・・・  
健兄・・・ダメ、やめ・・・ああっ」

後ろから延ばした健悟の手が、なんの予兆もなくワンピースの上からピンポイントで膨らみの頂きを摘みなぶる。

「こっち向けよ」

「いや」

「キスしようよ」

「・・・だめ。 あっ んっ」

一瞬にして組み敷かれ健悟の唇が重なっていた。角度を変えては何度も何度も口づけが降り続ける。何時の間にか麻琴も応えていた。

「マコ・・・マコ・・・」

うわ言のように繰り返される幼い頃の呼び名。布団の中でスルスルとワンピースと下着を脱がされ一糸纏わぬ姿になっていた。

「待って、シャワーを」

「そんなの良いよ。久しぶりだな、マコと・・・ハア  
スゲー興奮してる俺」

確かに鼻息も荒く触れる肌は熱を帯び、早急さを感じる。しかしガツガツとしているわけではなく、あくまでも腫れ物に触れるような優しいタッチだ。

全身をくまなく愛され蕩けそうになったところで健悟が恐る恐る進入してきた。

「痛くないか？」

「ふ・ん・痛くないみたい あんっ」

麻琴にとって初めて繋がりの中で快楽に溺れた日だった。身体が離れた後も不思議な余韻が残り、暫し身体に力が入らなかった。その隣で健悟は今までに無く満足そうに腕枕をし、空いた手で麻琴の身体をサワサワと擦りながらいつの間にか眠りについていた。

朝目覚めると時刻は7時を少し過ぎていた。身体を起こそうとすると健悟に感じながらも抱きしめられ全くと言って良いほど身動きが取れなかった。麻琴もあの後眠りにつき、二人は全裸のまま抱き合って寝ていたらしい。

変な声を一杯出したような気がする。健悟の寝顔を見ながら昨日のことを思い出し、一人頬を染める麻琴。朝目覚めて愛する人が幸せそうに眠る姿は、そのまま麻琴の幸せにもなる。だが、やはり翔太とのキスは罪悪感を残し苦しく、心のあちこちにチクリと刺す痛みを感じた。

「健兄、ごめんね・・・」

眠っている健悟に極小さな声で謝った。

「いいよ、許してやる」

寝起きの掠れた声。目の前には完全に開ききらない健悟の優しいな細い目があった。



## 二つの後悔

「・・・え・・・」

眠っているとはかり思っていた健悟の返事に驚く麻琴。健悟は麻琴の身体をグツと強く抱きしめ、目に、頬に、そして唇に、羽のような柔らかく優しい口づけをする。

「けんに・・・」

「いいんだよ、麻琴」

やんわりと言葉を遮られる。

翔太のことは何一つ知らないはずだ。いや、実はすでに知っているのだろうか。

健悟は一体自分のなにを許すと言っているのだろうかと困惑する麻琴。

翔太のことを思い出してしまった今、正直に告白して謝るべきか。しかしそれは自分の気持ちがあスツキリするだけで、健悟には嫌な思いをさせるだけだろう・・・。あれこれ考えるも自分の気持ちが纏まらずに涙が浮かんでくる。泣いたところで何一つ解決しないことは十分に承知しているが、こればかりは意思と反して止めることができないのだ。

「ハッ　なに泣いてんだよ。いって言ってんだろ」

寝癖のついた麻琴の髪の毛を整えるように優しく撫で付けるゴツゴツとした大きな手が、無言でなぐさめてくれる。

「でも・・・謝っているその理由とか」

「そんなのどうでもいいよ。だって反省して謝っているんだろ？」

今後もう二度と同じことで反省するようなことにはならないんだろ？」

「それは勿論そうなんだけど、健兄は気にならないの？その理由・・・を」

「全く気にならないとは言わないけど、同じなんだ。

聞いても聞かなくても、結局俺は麻琴を許すんだ。

だからいいんだよ。俺がいいって言ってんだから良いんだ」

健悟には大体察しがついていた。昨日、翔太の名前が出た後から麻琴の様子が急におかしくなり、その後キスを拒む仕草を見せた。何か悔やまれることをしたんだ、とその時感じたのだ。それに悔やまれることなら自分も沢山してきた。自分がしてきたから許すというのは違うが、反省している人間にこれ以上の反省を強いるわけにもいかない。

ただ麻琴以外の人間が相手であつたらこうは思えなかつただろう。

香奈子や自分を刺した男が「ごめんなさい」と謝ってきてても、今のように頭を撫でて許すわけにはいかない。

「じゃ、麻琴さん、反省したところでそろそろモーニングエッチでもしましょうか」

その後、「デリケートがない。バカ！」と罵られ謝罪させられたことは言うまでも無い・・・

spanの休みの日で時間もまだ明るい午後2時。夫のマサは趣味の陶芸に出掛け不在だ。

二人はL字型のソファに斜めに向かい合う形で腰を下ろしていた。

変な癖がなくて居心地の良い部屋だな

これが部屋に入っただの第一印象だった。出されたコーヒークップも白が強めの水色で清潔感があり、ホッと疲れを癒す空間のアクセントとなっている。『これが生まれて初めて淹れてもらったコーヒークップか』と心の隅で印象付けながら口に含むと、家で飲むのとはまた一味違う味と香りがした。

「麻琴にはまだ話をしていません。今後話をするかどうかも決めていません」

「はい、それは私が口を挟めることではないので、和樹さんのご判断で・・・」

「ごめんなさいね、こんな余計なことを背負わせてしまって」

「僕は誰も責めてはいませんよ。運命だったのでしょう。それに僕はこれまで幸せだったんですよ。もちろん美山の両親が亡くなったことは不幸な出来事だったけど、本当に大切にしてもらったんです。それは貴女に生んでもらえなければ与えられることのなかった幸せです。感謝してますよ」

和樹は本心を伝えた。「お母さん」と呼べず「貴女」という呼び方をするのも、今の本心からである。無理に呼び方を変えたところで、

それは作為的な関係になりかねず、後々苦しくなるだけだ。自然に任せようと和樹は考えていた。そしてそれは健悟のアドバイスがあつての考えでもあつた。

「ありがとう。あなたを生んで良かった。本当に良かった。」

こんなに優しく立派な青年に育つたのは、勿論あなたの努力もあつたでしょうけど、ご両親のお陰です。どう感謝していいの。。。」

ヒロコは声を詰まらせ目尻に溜まつた涙を中指で拭つた。

和樹が思っている以上にヒロコは控え目な女性のようにだった。それは美山夫婦を「ご両親」ということから判る。女子高生と教師が関係して自分が出来たと聞いて、正直初めは面食らつたが、話を聞いていくうちに、ただの過ちではなかつたと知り安堵した。おそらくは大人しくて自立たない儂げな少女であつたらうと和樹は想像する。

「もう泣かないで下さい。こうやってお互い健康で再会することができたんですから」

「ええ、ええ、本当に」

目元を押さえるヒロコの顔は、僅かにではあるが今までになく柔和に見えた。その少女のような温順な姿に、和樹の心も温まる。

心身ともに死の淵を彷徨い辛かつただろう。この人は幸せになるべき人だ。

自然とそう思えた。

「貴女は・・・今幸せですか。今の人とはちゃんと愛し合つて？」

「・・・ええ、幸せに思っています。こんな私には勿体無いくらいに。」

何もかも隠して結婚したのに、それを全て許してくれました。反省してもしきれません、隠してきたことを心底後悔しました・・・

自分の幸せを問う和樹に、埋もれていた例えような大きな愛情が溢れ返りそうになるのを強く感じていた。それまでは写真を見て謝り続け、そして後悔ばかりを語り懺悔していた。心の底では和樹の幸せを願うも、和樹が幸せであるということは、当然自分の幸せに直結する。ともすると幸せを願うことは自分のエゴのような気がして、いつからかその気持ちを感じ込める為に幸せを自分の中から排除したのだった。ヒロコもまた罪悪感から負のスパイラルに陥っていたのだ。

「麻琴ちゃんは百合子さんによく似てるわね。美しさとか可愛らしさと両面を持ち合わせていて、明るくて裏表のない屈託の無い性格。いいお嬢さんだわ」

「はい。まだ子供っぽいところがあるんですが、そこも可愛いところですよ」

和樹の目尻が今日始めて垂れ下がった。その表情は和樹の父親と一寸変わらぬ重なりを作り出す。赤ん坊の和樹や若かりし頃のヒロコを見る時と同じ目元に、今の和樹の気持ちが手に取るように量られる。それは他人には知りえないほんの小さな小さな違いである。

「麻琴ちゃんのこと、愛してるのね」

「・・・はい。兄として」

「男として、でしよっ」



「 . . . 」

甘んじて

「ただいまー。見てくれよお ヒロコ。今回は良い・・・」

紙袋に手を突っ込んだまま部屋の入り口で固まる姿は、どこか滑稽で可愛らしささえ感じる。

「おかえりなさい、マサさん。お邪魔してます」

「た、ただいま。えー、いらっしやいませ」

取って付けたような挨拶にヒロコはクスクスと笑っている。和樹もつられて相好を崩す。

「マサさん、そんなところに立っていないで座って下さい。今コーヒー淹れますね」

ヒロコが立ち上がりキッチンへ姿を消すのと入れ替えに、マサさんが紙袋を床に置きソファーに腰掛けた。

「いや、驚いたよお。美山さんが家に居るなんて」

「お留守にお邪魔してすみません」

軽く頭を下げると、マサさんは顔を左右に振り笑顔を見せた。

「来てくれて嬉しいよ。ヒロコのさっきの顔を見て、今の心境が手

に取るように分かったよ。嬉しそうだった・・・美山さん、ありがとう」

今度はマサさんが軽く開いた両膝に手を乗せ、深々と頭を下げた。

「そんな、私は何も・・・顔を上げて下さい」

ゆるりと顔を上げたマサさんの顔には、ヒロコに対する愛情と、和樹に対する感謝が見て取れた。その後3人は色々な話をした。マサさんの軽快なトークに笑い、ヒロコの温かな話に微笑み、和樹の子供時代の話に感慨深く聞き入ったりと、それぞれがそれぞれの感情でその時間を共有した。話は尽きることなく時間ばかりが過ぎていく。気付くと既に夕刻となっていた。

「もうこんな時間ですね、そろそろ帰ります。色々とお話できて楽しかったです」

「美山さん、麻琴ちゃんは元気かい？」

「ええ、元気ですよ。またspanに行きたいと言っていました」

「もちろんspanも大歓迎だけど、今度家にも連れておいでよ。何でもご馳走するよ」

「・・・実は麻琴、まだ何も知らないんです。」

「そうか・・・余計なことを言ったね」

「いえ。でも、その内麻琴にも話そうかと思っています」

そう言いヒロコを見ると、とても驚いた表情をしていた。ヒロコは自分の存在を一生隠し通される覚悟でいた。それは当然受け入れるべきと・・・。

「お二人に憧れているんですよ。自分もヒロコさんとマサさんみたいになりたいって。spanに行った際には可愛がってやって下さ

い

「勿論だよ。ところで麻琴ちゃんは恋人はいるのかい？」

「ええ、いますよ。その恋人の快気祝いをspanでお願ひしたいという話をもつて来ると思いますが。もしご迷惑じゃなかったら私からもお願ひします」

「ああ、大歓迎だよ。いつでも貸切りにするさ。な、ヒロコ」

「え……ええ。それは勿論そうですけど……」

「どうしたんだ、ヒロコ」

歯切れの悪くなったヒロコを覗き込むマサさん。和樹はヒロコにだけ分かるように小さく目配せした。それは、その事実を

『甘んじて受け入れているのだから』  
と無言で訴えかけるものだった。

ヒロコは切なくなつた。色んな我慢を強いられてきた和樹は、今は最愛の人を想うことさえも我慢しなければいけないのかと。そしてその原因を作ってしまったのは全て自分なのだ。

と同時に、和樹の大人の選択にヒロコは逞しさと強さも感じていた。

きつとこの子は大丈夫。

絶対にいつか素敵な恋愛をして、可愛い女性と幸せな結婚ができる

確信にも似た想いが薄暗かつた目の前を明るくした。

「どうもしないわ。男らしい和樹さんに見とれていただけよ」

「えっ……」

和樹は本気で焦るマサさんの男としての素直な反応に、可笑しくも眩しさを感じていた。

## カクテルの力

「へえ、良い店じゃないか」

健悟は店内をグルリと大きく眺めて言った。

スタンダードなジャズナンバーと落ち着いた照明が、レトロ口で洒落た感じを醸し出している。L字型のカウンター席の他、8席の丸テーブルが点在している。

「でしょ。実はお兄ちゃんも来たことがあるのよ。ね、マサさんっ」

麻琴はカウンターの中心に可愛らしい笑顔を向ける。マサさんは声は出さず、ニツコリと頷き健悟に軽く会釈した。

こんな時、健悟はちよつと面白くない。いくら相手が年配であつても男は男だ。麻琴の笑顔を見て喜ぶ男の顔など見たくないのだ。自分でも心の狭い男だと思うが、目の前でされてしまうとジリジリと勝手に嫉妬の芽が顔を出すのだから仕方ない。

「麻琴ちゃん、お連れの方は恋人なのかな？」

マサさんが真っ白い布巾でグラスを磨きながら優しい声で聞く。

そして麻琴は健悟の顔を見て「恋人なの？」と小さな声で聞いた。

健悟はクスツと笑いながら「だろ」と短く答えると、満面の笑みでマサさんに返事をした。

「はい、恋人です」

「なんだ、えらく嬉しそうだね。彼氏の前だとこんな顔するんだ」

「そつ そんな変な顔してますか？ね、健兄、変？」

健悟に向き直り真剣に聞いている。

「顔って言うより、頭が変だな。」

マスター、同じのもう一杯お願いします」

健悟は2杯目のウイスキーを頼んだ。麻琴が『頭が変』と言われて隣でブーブー怒っているが気にも留めていない。何気なくカウンターの中間にいる小柄な女性に目が行った。物静かな雰囲気を持つその女性は、健悟と目が合うとニコリと小さく会釈をした。その押し付けがましくない空気を持つ女性に、どこか懐かしさを感じ、つい話しかけていた。

「あの、どこかでお会いしましたよね。自分は早瀬健悟と言います」「ヒロコと申します。どこでお会いましたのかしら・・・ごめんなさい、覚えていないのだけれど・・・」

「俺も覚えていないんだよな。でも、どこかでお会いしてますよ・・・」

「え、そうなの。でもお店初めてでしょう？人違いじゃないのお」「いや・・・あ・・・まあ、そうかもな」

健悟は思い出していた。麻琴の家の玄関先にいた女だ・・・と。そして女性のスツと通った鼻筋と和樹のそれがよく似ていることにも気が付いた。

この人が・・・

「ヒロコ、麻琴ちゃんの恋人だって

早瀬さんはモデル業でも？」

ヒロコに紹介しながらも健悟に対する興味は湧いてくるらしい。

「はは、まさか。ただのサラリーマンですよ」

健悟はいつも『弁護士』と名乗らず『サラリーマン』という言い方をする。弁護士というと、なんとなく一線を置かれたり、逆に親しくなろうとあれこれ質問されることもある。それに槇村事務所では給料を貰って働いているのだから『サラリーマン』であることに嘘はない。

その後、健悟がトイレに立った時に、麻琴はマサさんとヒロコに快気祝いのお話をする、待つてましたと云わんばかりに即OKの返事が返ってきた。

席に戻った健悟はご機嫌で更に6杯目のアルコールを頼み、麻琴も4杯目を頼んだ。見た目には大して酔っているようには見えないが今日の健悟は珍しく饒舌でよく笑った。家以外でこれ程までにリラックスしている姿はあまり見ることができない。だが、これ以上飲ませるのは良くないような気がし、麻琴はストップを掛けた。

「健兄、そろそろ家に帰らなきゃ。お兄ちゃん居ないからって、やっぱり12時過ぎるのはちよつと・・・」

すでに時間は11時半近かった。その言葉を聞いて健悟はクツクツと笑い、麻琴の頭を軽く撫でた。

「シンデレラみたいだな。分かったよ、帰ろう。少し酔いを醒ます為に歩きたいから、カボチャの馬車タクシーは途中で乗ろう」



「うん、いいよ」

本人にも酔いの自覚はあるらしい。しかし足元はしつかりしているし、呂律の回りも通常通り何の問題も無い。いつもより喋り笑うといても、もともとテンションが低めであるため、傍目には全くフツウなのである。普段をよく知っている麻琴だからこそ気付ける小さな変化だった。

Spanを出てゆっくり歩き出した。麻琴の方が少しフラフラしていた。二人とも酒は強い方だが、麻琴の飲んだカクテルは以外にも度数の高いものだった。飲みなれないカクテルをジュースのような勢いで飲んでいたので健悟は知っている。

「カクテルの飲み方勉強しろよ。子供みたいな飲み方してたぞ」

そう言い、手を繋いでくれた。

「酔ってないよ、私。少し気持ちいいだけだもん。ふふっ、健兄こそ今日は酔ったでしょ」

「うん、ウマイ酒だった。いい店だったし、また行こうな。今度は和樹も一緒に」

「うんうん、いいね。みんなで楽しく飲みたい」

ゆるいトークをしながら手を引かれテクテクと歩いて行く。気付くと見知らぬ部屋の中に連れられた居た。

「ん？健兄、ここどこ？なんか可愛い部屋だねえ。」

健兄の部屋ってこんなだったっけ？」

「ハハっ。俺の部屋にこんなピンクのソファあつたら気持ち悪い  
だろ」

「え、じゃ・・・どこ？」

麻琴は完全に酔っていた。思考も足も上手く機能していない。

「ここはホテル。所謂、ラブホテルっていうところだ」

## R15 ・ スカーフとカットソー

「そーだったんだあ。だから可愛いんだあ。あははっ」  
「え・・・あ、うん」

健悟は拍子抜けし呆気にとられていた。全くと言っていいほど物怖じせず緊張感もない。しかも可愛いと指差すピンクの二人掛けソファーにゴロンと横になってしまった麻琴は、すでに目を閉じ小さな寝息を立て夢の世界の人となってしまった。

「あの、麻琴・・・麻琴？」  
「ZZZZZZ。。。」  
「嘘だろ。さっきまでしっかり歩いてただろ・・・狸寝入りか？  
本気で寝てやがる。ちえっ」

仕方なく麻琴を抱きかかえベッドへと移動させた。酔った人間は思いのほか重たい。

着替えどようしようかな・・・

ベージュのシンプルなカットソーにアクセントとしてベビーピンクのスカーフをし、下はコットン素材の白いロングのギャザースカートを身に着けている。悩みながらも健悟は恐る恐るスカーフを外した。徐に細く白い首が現れ妙にドキドキする。

ただの首見て 俺なに興奮してんだよ

いつの間にか口呼吸になり手には変な汗を握っている。スカートを外すとカットソーがいかにもボディーラインを強調する服かが分かる。スラツと伸びた手足とふくよかな胸に括れたウエストは紛れもなく女の身体。健悟の目はついつい深めのVネックの中心に行ってしまう。

麻琴って結構胸おっきいんだよな。谷間が・・・ヤバイ。こんな服着るなっのっ

そう毒づきながらも視線はそこで止まったままだ。酒の酔いはすっかり醒めているが、今現在は無防備に眠る麻琴にクラクラと酔いまくりである。

「ん・・・」

寝返りをうつと何か温かいものに触れた。薄っすら目を開けると部屋は暗いがベッドの端の方で見慣れない緑色に光る小さな明かりがあった。

あれ、なんだろう。

ゆっくりと体を起こすと掛かっていた布団が半分ずり落ちた。そこで別の異変に気付き麻琴は慌てて、落ちた布団を肩まで引っ張り上げた。

ここ何処。なんで何も着てないのっ？ あっ！！！！

思い出したように布団の中に手を突っ込み確かめた。どうやらシヨーツは身に着けていたようだ。ホツとしながらも不安と疑問は次々に押し寄せる。そして次のそれは、さつき背中に当たった温かい「なにか」であった。座った姿勢から、布団の中からギリギリとおっかなびっくり右側に手を伸ばすも、怖くてその寸前で引っ込めてしまう。

怖いいゝ

モタモタしていると右側の「なにか」が大きく動き、麻琴の太ももに触れた。

「ヒッ！」

「んゝゝゝうん。。。」「

「キヤーツ！！！！」

「うあああつ」

悲鳴と共に同時に飛び上がった。

「なんだよっ！」

「だだだだだ だれっ！！！！」

「なんだ麻琴 寝ぼけてるのか」

「け 健兄・・・？」

まだ身を引いたまま警戒する麻琴。健悟は最悪の目覚めに大きな溜息をつきながら、ベッドサイドの緑に光るスイッチに手を伸ばし頭上の照明を点けた。そして暗めのオレンジ色をしたライトが室内を包んだ。

「あ・・・健兄・・・」

「どうしたんだよ、大きい声あげて」

「だって真っ暗でどこだか分からないし、隣に誰か居るみたいだけど、それも誰か分からないし・・・凄く怖かったんだもん」

「ああ・・・そっかゴメン」

そう言ったまま黙って一点を見つめる健悟。

「ど・・・したの？」

「いや、いい眺めだなーって」

「なにが」

「麻琴のおっぱい」

「え・・・キャツ。ダメ、見ないでっ」

瞬時に両手で胸を隠す。飛び上がった時に布団を手放して上半身を露わにしていたのだ。

「別にいいだろ、見せても。なんでそこまで恥ずかしがるんだよ」

「やだっ 恥ずかしいもんっ」

「だから何が恥ずかしいんだよ。もう身体擦り合わせてるのにさ」

低く色を帯びた卑猥で甘い声。ズイズイと麻琴に擦り寄る。隠した胸は自らの両手によって零れそうな深い谷間を作り、余計に男の性を誘っていることを本人は気付いていない。そして抱き寄せられ健悟の人差し指はその谷間をツーとなぞり、その深みに押し込まれた。

「やっ ちよっ・・・」

「今何時か知ってる？」

「知らないっ 知らないけどっ！ この手っっ」

「夜中の3時なんだ。朝までまだまだ時間あるから大丈夫だよ」

「何が大丈夫なのよっ。大体ここ何処なの？ あっ ちよっ う・ん・ん」

ゆっくりと押し倒され強く押し付けられる唇に言葉も飲み込まれる。

「麻琴すぐに寝ちゃうんだもんな。手出さないで我慢した俺を褒めてほしいな」

「はっ 裸にしたくせにっ。手出してるじゃない・んっっ」

抵抗は封じ込めと、さくらんぼのような可愛らしい唇は直ぐに塞がれてしまう。

「いいから黙ってるって。今から麻琴の知りたいこと一つずつ教えてやるからさ。

まずは誤解を一つ解くでしょう」

健悟を無言で誘い呻らせた、細く白い首に今度は躊躇いなく吸い付く。二度、三度と繰り返してから麻琴の目を真っ直ぐ見据える。そのセクシーな仕草にドキッとせずにはいられない。

そんな色っぽい目で見ないで・・・

麻琴は下半身にジワツとする変な感じを覚え、慌てて太ももをギョッと合わせた。

「裸にしたけど、ちゃんと見えないように布団を被せてから手だけ突っ込んで時間掛けて脱がしたんだぞ。服着て寝ると疲れるし、皺になるしな。それにパンツはちゃんと着けたままだろ？これから脱





R 1 5 ・ 欲しいのは愛の実感

「脱がないっ!」

「また子供みたいなことを・・・」

「ん　ん　!」

次のキスには首を振りジタバタと絶対的拒否を示す。まさに駄々っ子状態である。健悟の押さえつける手もやや引き気味になってくる。

「なんで?そんなに嫌なのか?」

「ヤダ」

「どうして」

「知らない場所だし怖い。なんか怖いよ」

「ここはラブホだよ。入ったこと無くても麻琴だってそれくらい知ってるだろ。お化けが出てくるわけでもないし何も怖いことないよ」

「違うもん。怖いのは健兄・・・だもん」

「へっ?　俺かよ。どこがだよ」

『怖い』と言われたのは生まれて初めてのことだ。あまりにも思いがけぬ麻琴の言葉に驚きとショックを隠せない。麻琴から離れベッコト上に正座した。

「だって・・・そういうこと、ただシタいだけみたいなんだもの。

愛してるとか、そういうことよりも性的な目的っていつか・・・そういうの怖いよ。いつか飽きて、麻琴のことなんか要らないよって

言う日が・・・」

「じゃないね、そんな日」

上半身裸のパンツ一丁でちまっと正座して何となく情けない姿だが、男らしくキツパリと言いつつ切った。

「正確には、飽きて要らなくなるなんてことが無いということ、性的な目的は、これは理解して欲しいところなんだけど否定できない。もちろん前提として愛はあるんだ。その愛をベースにして、性的欲求が上乘せされる。男だけじゃなくて女にだって性欲はある。麻琴にだってあるはずだぞ。寧ろそれが自然だ。確かにお互いの気分が一致していなければいけないけど、だから俺はこれから今みたい麻琴を口説こうとすると思うんだけど、こんなんじゃないか？」

「ダメ・・・じゃないけど・・・」

「けど？ なにが引つ掛かる」

麻琴はまだ両手で胸を隠し、押し倒された時と変わらぬ格好でいた。その両手をそこから外しゆっくりと健悟の方へ伸ばした。

「抱かれる時は愛してるっていう実感が欲しいの」

突然大人の女に変わった麻琴を見せ付けられた気分だった。麻琴はもう、可愛いだけではなくなっていた。

「わかったよ・・・そんな目で見るなって」

麻琴に導かれるように体を前に倒し、互いにキスを、そして体を求め合った。

愛を意識してのセックスは、これまでの健悟にとってないものだった。意識するものではないと思っていたし、愛はその後から付いて来るものと漠然と思っていた。それで失敗してきたのだが、いつまでも気づく事ができず健悟は愛し方を知らないままだったのだ。麻琴にとって初めての大人の恋愛であるように、健悟にとっても又、初めてに等しい恋愛であったのだ。

その日二人は三度愛し合った。

ホテルを出る頃には当然足はフラフラし完全に寝不足だったが、満たされた充足感が全身を包んでいた。帰り道、駅までの道を並んで歩いていった。

「麻琴さ、一つ頼みがあるんだけど」

「なに？」

「その服なんだけど、できればもっと体の線を強調しないものを着てくれないか」

「え、でもそんなにピタツとした服は持ってないよ。スカートだって」

「スカートはいい。その長さもバッチリだ。けど上がね、胸も開き過ぎだし、胸からウエストにかけてのラインが出すぎてて・・・男って結構見てるんだ。だからダボダボのシャツ着るとか、なんだったらジャージとか色気ゼロの着てもいいよ」

「えっ やだよそんなの。小学生じゃあるまいし、ジャージ着て歩くなんてっ。健兄バカみたい。アハハッ。気にしすぎだよ。誰も私のことなんか見てないから安心してよ」

「アハハじゃない。男は絶対見てるから。これ定説だからな。」

これからジャージ買いに行くか。まとめて10着くらい買ってやるぞ」

「要らないし……」

「そうか……じゃあ、できるだけ野暮ったい服着るように心掛けるんだぞ」

「はいはい……」

「家では早くあのピンクのランジェリー姿見せろよ。も、想像するだけで……ヒャー」

「はあ？」

ただただ呆れる麻琴であった。

## 波紋

その場所は古く狭い。しかし一度法壇ひとたいひに黒の法服をまとった裁判官が現れると、法廷の中は一瞬にして重厚感を帯び、空気すらピンと引き締まるような緊張に包まれる。当然ながら中央には裁判長、その両脇には陪席裁判官が陣取っている。更にその手前には大きな風呂敷を携えた検察官。対極して香奈子の弁護を引き受けた加山という50代前後のベテラン弁護士がいる。加山の細面の顔には、薄い唇と一重の細い目が収まっており、その人の温かみや親近感を奪い、その代わりに鋭さや冷たい印象を与えていた。

傍聴席にはマスコミ関係の人間が数人と、被害者、加害者側の近親者が緊張の面持ちでいる。そしてその中に麻琴もいた。これまで勉強の為に、幾度か裁判の傍聴の経験はある。しかしそれはあくまでも他人事ではなかったと、法廷内で香奈子を目の前に初めて感じていた。告訴した健悟は今、この場においてどのような気持ちなのだろう。少なくとも過去、恋人だった女性が被告人として目の前にいるのだ。心中穏やかであるはずがないだろうと思うが、隣に座る健悟の無表情からは何も読み取ることができない。

裁判官がその姿を現すと、検事、弁護士が起立した。そして連鎖したかのように傍聴人も起立し一例した。

裁判は淡々と進められる。全て台本通りと言ってもいい。被告人に氏名・年齢・職業・住居・本籍を尋ねる人定質問から始まり、検察官の切れ間無い恐ろしく早口での起訴状の朗読。法に疎い人間にとっては聴き慣れない言語の羅列で意味の理解は困難であろう。

起訴状を読み上げるだけでも結構な時間を要したが、それぞれの段階を踏んで、確実に裁判は進んでいく。被告人と弁護人の言い分を述べる陳述では、香奈子が起訴状に対して「事実ではない」と声を荒げ、一時法廷内は騒然となったが裁判官に諫められ直ぐに落ち着いた。しかし、そこに香奈子の父親が身を乗り出し娘の無実を訴えるなど一悶着起こし、当然ながら父親は退席を言い渡されたのだ。

その様子を黙って見ていた健悟が、麻琴にコツソリと耳打ちした。

「大抵の被告人は起訴状通りだつて素直に認めるんだ。香奈子は今プライドだけで戦っているが、直ぐに崩されるからちゃんと見とけよ。お前には良い勉強だ」

健悟は恐ろしく客観的だった。そこに感情を潜り込ませることなく、罪だけを見ている。次の成り行きもお見通しと云わんばかりだ。

次に証拠調べ。所謂犯罪の立証である。

検察側がもつたいぶる事なく出したのは健悟の手帳であった。そして尋問が始まった。香奈子は手帳を前に目の色を変えたが、後ろにいる傍聴人らにはその様子は分からなかった。

「これに見覚えはありますか」

「知りません」

「あなたの部屋のクローゼットからこれが出てきた。これは被害者の物だが、それが何故そのような所から出てきたのですか。答えてください」

「知りません。」

いえ、黙秘します」

検察側は香奈子の側に立つと、今度は一枚の写真を見せた。

「この写真は被害者が先ほどの手帳に挟んでいたはずのものです、これが何処にあったか知っていますか？お答え下さい」

「しっ 知らないわ、そんなこと」

目は泳ぎ声は震えていた。検察官は香奈子の顔を覗き込み、よく通る大きな声でゆっくりと付け足した。

「あなたの職場のデスクの引き出しの中にあつたのではないですか」  
「勝手に人の机を荒らすなんてどういうことっ！」

「以上です」

検察官は裁判官へ向き直り、堂々とした態度でその場を返した。

二人は地裁から駅方面へと並んで歩いていった。健悟と歩いていて注目を浴びることに麻琴は慣れていった。そのため極力気に留めないようにという心構えも最近では板についてきた。だが健悟は違った。最近の視線の大半は男のものだからだ。自分が見られるなら気付かぬフリも簡単だが、麻琴に張り付くその目はどうしても許せない。思わず相手をジーンと見つめて、目が合ったところでギローっと思いつけてしまうのだ。当然相手の男は黙殺されたように二度と麻琴へ視線を向けることなくすれ違って行った。

「健兄、あの写真ってなんだったの？」

「香奈子の子供の写真だ」

「どうして健兄が持ってたの？」

「調べたんだ。何を企んで俺や麻琴に近付いてるのか・・・俺の子供だって言い張ったから、その事実を突き止めようとしたのが全ての事の始まりだったんだな。調べるにつれ、香奈子が惨めになったよ。何を考えているのか直ぐに分かった。自分のプライドから子供を手放したけど、本当は前夫も子供も手放したくはなかったんだ。そこに良い鴨になりそうな俺が現れた。上手く説得できりゃ法の力を駆使して子供を取り返せると思っただろ。それには麻琴の存在が・・・アイツには邪魔だったんだろ。探偵に調べさせて麻琴を特定すると直ぐにクギを刺しに行ったんだ。俺はクギじゃなくて刃物で刺されたけどな。ははっ」

「健兄、それ全然笑えない。。。」

そんなことより、香奈子さん気の毒ね。本当にお子さんと離れたくなかったのよ」

「そんなことよりって・・・」

それとこれとは話が違っただろ。

ネギ背負った鴨が通り過ぎようとしたら、ネギ踏みつけて、鴨を刺し殺そうとしたんだぞ」

「それはそうだけど、鴨ははじめにネギをあげても良かったんじゃないの？そしたら香奈子さんだってあんなこと・・・」

つまり子供を取り返す為の力になってやってても良かったのではないかと麻琴は言いたいのだ。その意味を理解するや、健悟は顔をしかめ麻琴の次に続く言葉を遮った。

「麻琴、それは違う。最終的にアイツはネギが欲しかったんじゃない」



い。自分の思い通りに行かなかったことに逆上したんだ。俺を殺つたら、次は麻琴だったかもしれないんだぞ。殺し屋まで雇うなんて普通の女、いや、人間がすることじゃないだろ。麻琴言っていることは無責任な情けだ」

「そう・・・だね。確かに私は間違っただけを言ってるし、それもちゃんと分かってる。

ただね、そんな酷いことをした人でも、香奈子さんは母親なのよ。子供に対する愛情はあった。それだけは健兄、分かってあげてほしいの。ただのプライドだけじゃないってこと、分かってあげて」

「麻琴・・・甘いよ。」

アイツの中に残ったのは、結局のところプライドだけだよ」

「そんなことない。

上手く言えないけど、家族とか血の繋がりがかって、もっと深いものがあるはずよ」

健悟はいつの間にか自分の身の上と照らし合わせていた。

「ならば何故、もっと大切にしなかったんだ。後悔しても遅いんじゃないか」

「後悔してもなにしても、断ち切れない何かがあるのよ！」

俺は親父に断ち切られたじゃないか！

お前みたいに守られて生きてきたわけじゃないんだ。

「そんなものあるかよっ！」

「あるわ」

「信じられないね、そんなもの。  
そもそも何かって何だよ。曖昧すぎるんだよ」

「……………」

「麻琴さ、デイベートとかディスカッションとか向いてないだろ。  
弁護士目指すのやめたら？」

頭に血が上り、半ば八つ当たり過ぎなかった。麻琴の言っていることは確かに思いやりのある正義だ。だが、健悟は自分でも気付かぬうちに麻琴の言葉に深く傷ついていた。  
色んな事件が起こる中で、親子の怨恨によるものも少なくない。そんな時、健悟はできるだけ自分の過去を切り離してきた。そうやっていつまでも傷は癒えないままなのだ。

「本当に分からないの？」

健兄って、そんな冷たい人だったの……？」

「冷たい？そう思うなら思えば」

「なんでそんな・・・投げやりな」

「もう沢山だ、やめよう。」

俺はこれから事務所に顔出すから一人で帰ってくれ」

深く考えようとすると冷静でいられなくなることを知っている。埋めることのできない深い傷に塩をすり込まれ、今更悲鳴なんかあげたくない。そうやって避けて避けて逃げてきたのだ。

駅前に来ると麻琴を取り残し、ツカツカとタクシー乗り場に行くと消えるように車内に吸い込まれて行った。麻琴の喉には飲み込めない大きな塊が残った。飴玉のように噛み砕くことも溶かす事もでき

ないその塊は、次第に形を変え膨らみ、窒息しそうな感覚を広げる。それは健悟も同じであったが、今の麻琴には分からない。

その日、健悟は麻琴のところへは戻らず自宅へ帰った。

それぞれの異なる環境からくる価値観の相違ではあるが、それはただのすれ違いではなかった。

二人の歯車は大きく外れ、互いの喉から落ちた塊はそれぞれに水面に落ち、交わりを拒むように波紋を広げた。

## 波紋（後書き）

ややへビーな内容になってしまいすみません。

でも、「裁判 & amp; 親子」のテーマはどうしても組み込みたかったので・・・

お休みしていたので、内容的にはいつもの二日分を載せました。  
今後ストーリーは少し悲しく切なく進んでいきます。。。

気温の差が激しいです。お体大切にお過ごし下さい。

あれから・・・

想わない日は一日もなかった。恋しくて苦しいだけの日々を、どうやって過ごしてきたのか。きつと思いついたら少しは思い出せるんだろうが、それは辛すぎる。俺は前にも増して壊れた機械のように一心不乱に仕事をこなし、家には風呂に入って寝るだけの為帰宅している。まるで生きながらも死んでるみたいだ。

麻琴から連絡はない。その代わり和樹とは会って話した。内容はよく覚えていないが、合計3発殴られたことは記憶している。力任せに殴るもんだから鼻血はでるわ口の中は切るわで散々だった。けどそんなことよりも、アイツが人を殴るということに驚いた。しかもガキみたいに泣き喚きながら。もっと殴られても良いと思ったけど、それ以上殴られることはなかった。アイツがあんな風に暴力的に怒ったのは人生で初めてだろう。麻琴を傷つけてしまったのだから当然だろうが、和樹には別の意味もあっただろう。和樹と俺は考え方や行動は違うが、気持ちや想いは酷似している。それくらい鈍感な俺にだって分かるさ。

あれからもう二年も経った。俺たちはちゃんと話し合わないまま、別れの言葉もないままに別れた。

最後に和樹に言われた言葉を俺は忠実に守っている。八子公みたい

に。  
「麻琴のこれからの人生にお前は要らない。二度と会わない」

麻琴に会いたいと思うたび、この言葉を思い出すようにしている。そうしなければ、裸足のまま走り出してしまいそうだから。でも、もう麻琴を傷つけたくない。俺と付き合った短い期間に、麻琴は何度泣いただろう。辛い思いしかさせていなかったんじゃないだろうか。本当は透明感のある笑顔が一番似合っているのに。

麻琴に会いたいけどそれは出来ない。毎日毎日、呪文のように繰り返す俺の思考。

情けないよ。もう30も近いというのに……。

あれから・・・(後書き)

タイトルには入れませんが、実質2章目に入ります。

## 実家

「麻琴ちゃん、もういいよ。お疲れ様」

「はい、お疲れ様でした」

グラス磨き専用の布巾を畳み終え、ペコンと頭を下げる。ごく最近、背中まであつた髪の毛を一気に肩位置の長さにするえ、今流行りのボブヘアにした。本人もまだ馴染んでおらず、下を向くとサラリと動く髪の毛に違和感を覚える。

「麻琴ちゃんに手伝ってもらうようになって、もう少して3ヶ月だね。」

予想以上にお客さんが増えて嬉しい限りなんだけど、麻琴ちゃん狙いの変なお客とかいたら絶対に隠さず教えるんだよ」

「マサさん、またですか？もう毎日それ言ってる……。ヒロコマも何か言ってるよ」

ヒロコはクスクスと笑っている。一年前、麻琴はヒロコのことを「ヒロコママ」と呼ぶようになった。それは和樹から実母であるという話を打ち明けられた翌日からである。

打ち明けた時和樹の予想を大きく裏切り、麻琴は全く驚きもせず、大粒の涙を落しながら言った。

「お兄ちゃん、良かったね。お父さんもお母さんも心から喜んでよ。」



どうしてもつと早く教えてくれなかったの？酷いじゃないのっ」

泣いたり怒ったりしたが、深いところでは例えようの無い喜びで一杯だった。

和樹はもつと早くに麻琴に伝えようと考えていたが、健悟とのことが思っていた以上に尾を引き、ヒロコとのことは控えていたのだ。別れてからの麻琴の落ち込みようは本当に酷く、一年近く塞ぎ込んでいた。眠れない日々が続く、和樹の判断で一番軽いとされている安定剤、デパスを暫くの間内服させた。徐々に睡眠が取れるようになる。と少しずつ食事も口に入るようになり、血色も良くなってきた。そしてタイミングを見計らい、和樹は伝えた。

『麻琴を支えてくれる人は他にもいる』ということ。

「ってことは、ヒロコさんは私のお母さんでもあるんだよね？」

お兄ちゃんのお母さんだから、私のお母さんでもあるでしょ？」

「うーん・・・あ、そっか。そうだな。じゃあマサさんは継父か」

美山の両親は麻琴の実の親であるが、和樹の親でもある。逆にないただけだと麻琴は言っている。

「嬉しいー。お兄ちゃんありがとう。ヒロコさんとマサさんが両親なんて最高っ」

そのお礼の意味をどう受け止めていいのか分からないが、和樹は純粹に喜ぶ麻琴の笑顔にホツとして、子供の頭を撫でるようにそうした。

「お兄ちゃん、明日spannに行ってもいい？ヒロコさんとマサさ

んに娘からご挨拶しなきゃ。ね、ヒロコさんって『お母さん』って呼ばれるのきつと抵抗あるよね。ヒロコママって呼んでもいいと思うっ。」

「どうかなあ、直接聞いてみたら？」

「ところでお兄ちゃんはなんて呼んでるの？」

「・・・ヒロコさん」

「え・・・恋人みたい。ちよつと他人行儀じゃない？」

「そうなんだよ。もうちよつと違う呼び方をしたいところなんだけど、でも今更変えにくくてな・・・」

「あ、なんかそれ分かる。ちよつと恥ずかしいんだよね。照れちゃうってどうか」

「そうそう。ヒロコさんも俺のことと和樹さんって言ってるし、もうそれで良いかなって」

それから麻琴は頻繁にヒロコとマサさんに会いに行くようになった。二人のマンションへ行く時は冗談まじりに「実家に帰らせてもらいます」と言い、和樹を笑わせることもあった。やっと笑顔が戻ってきたのだった。

若いときに人知れず苦勞してきたヒロコは、今の麻琴にとって一冊のバイブルのような存在になっていた。和樹には言えないこともヒロコには包み隠さず相談できた。そう、健悟とのことも。

「麻琴ちゃん、今日は家に泊まっていきなよ。ラストまで手伝ってもらったし疲れたろう」

「うん。じゃあ、実家にお泊り決定！ふふっ」

「ヒロコ、今日は娘が泊まりにくるぞ」

「いいわよー。そうだ、麻琴ちゃん明日は何か予定ある？」

もし空いているんだったら、ちょっとお買い物に付き合ってもらいたいんだけど」

ヒロコからの誘いは珍しい。もともと普段は忙しくてそういう時間を持ってないのだから仕方ないのだが、どこへ行くのであれ麻琴は母親と並んで歩くことに夢を持っていた。二つ返事でOKし、帰宅するとシャワーだけして寝てしまった。

## 二人の母の味

「麻琴、迎えに来たよ」

公園のベンチに腰掛け本を読んでいた麻琴は、懐かしいその声に顔をあげた。そこには太陽を背にした男が見下ろしていた。太陽が眩しくその男の顔はハッキリと見えないが、麻琴には直ぐに分かった。長身に広い肩幅、そこから伸びる長い腕に大きな手。

麻琴は足元に本が落ちた事も気にせず立ち上がり、無意識のうちにその男の広い胸に抱きついた。

「健兄っ。ずっと、ずっと待ってたよ」

「分かってる。でも、もうこれで最後だ。」

麻琴、さようなら」

麻琴の肩を掴み自分の胸から強引に引き離すと、踵を返し歩き始める。

「健兄っ、待って、行かないでえっ！！！！ 行かないでえっ」

嗚咽が漏れ感情のコントロールが出来ず、頬に涙が伝う。

「うっうっ。。。もう。。。いや。」

こんな夢、見たくないのに」

何十回見たか知れない健悟の夢。いつも無言で消えていなくなる夢だが、今日初めて別れの言葉を言われた。

「さよならも言わずに別れたからって、今更夢で言う？」

思わず夢の中の健悟に悪態をつく。

時計の針は5時10分を指していた。掌で涙をグツと拭き取りソロソロと布団から抜け出た。ヒロコのマンションに泊まる時は、いつもこの10畳の洋室が麻琴の部屋となる。泊まる回数が増えるにつれ麻琴の私物も少しずつ増え、部屋全体がなんとなく女の子の雰囲気を持ち始めた。ヒロコ夫婦はその変化をワクワクした想いで受け入れ、そして大切にした。

二人を起こさないように静かに廊下に出てリビングを通り、その奥のキッチンに向かうと先にヒロコが居た。

「おはよう。コーヒー飲むでしょ？」

柔らかく微笑みを向けるパジャマ姿のヒロコからは、やはり和樹と同じ匂いを感じる。消す事のできない匂い。

「おはよう。ヒロコママ早いね。ビックリ」

「でもグッスリ寝たわよ。アメリカンでいいわね。座ってて」

「うん、ありがとう。あ、その前にザッと顔洗ってくるね」

気付かれてはいないと思うが、涙の痕が気になった。麻琴は洗面所に行くのと冷たい水で顔を洗った。痛みを感じるほどの冷たい水。だが、いくらか気持ちりが引き締まった。

大丈夫、健兄なんかいなくても大丈夫なんだから。会えなくて平気。

濡れた前髪を気にしながらリビングに戻ると、テーブルにはユラユラと湯気を立てたコーヒーカップが置かれていた。ヒロコはまだキッチンでガサゴソと動いている。

「ヒロコママ、飲まないの？」

「飲むわよー。でもちよつと待って、あ、麻琴ちゃん先飲んでいいのよ」

「じゃ、熱いうちにいただきまーす」

砂糖とミルクが入っていた。普段麻琴はブラックだし、ヒロコもそれを知っている。だが、今日は何故か砂糖とミルクが入っている。

「甘くて美味しい・・・お母さんの味だ」

「やっぱりそう思う？」

「あ、うん。でもどうして？」

「昔ね、百合子さんからのお手紙の中に書いてあったのよ。」

『麻琴がコーヒーの味を覚えました。和くんもそうだったけど、お砂糖とミルクをたっぷり入れて、少し元気の無い時に出してあげると自然に笑顔になるんですよ。二人はよく似ています』って。本当だわ。さすが百合子さんね。ふふっ」

「ヒロコママ、私って元気ない？」

そう問いかけながらも目には瞬き一つで零れるほどの涙が溜まっていた。



## 麻琴の女神

「麻琴ちゃんはいつも明るくて朗らかでとても魅力的な女性よ。でもね、欠点が一つあるの。自分で分かる？」

「欠点なら沢山あり過ぎて一つに絞れないよ……」

困ったような顔で笑みを見せる麻琴。その顔をヒロコは痛々しい想いで見ていた。

「それよ、麻琴ちゃん。あなたは上手に泣けないの。泣きたいときにちゃんと泣けなくて、それがずっと心に蓄積されて発散できないのよ」

「……！」

「辛いでしょ？」

それは……とても苦しいでしょ？」

ヒロコはゆっくりと麻琴の座っている横に立つと、その細い腕で頭をスッポリと包んだ。

「泣きなさい。何も考えず、思いっきり」

掌で後頭部を優しく撫でられると、安堵感から堰を切ったように止めどなく涙が溢れ出た。



「ううう　くっ　苦し・・かった

どうし・・て、ひっ・・麻琴は、きらわ・・れっ　ううう

けんにつ・・に。。っく、どうして・・捨てられちゃった・・の？

お母さん、どっ　どう・・してえっ。。。」

無意識に『お母さん』と呼んでいることにも気付かず、ヒロコに泣き継る麻琴。

「二人とも、きっと大きな誤解をしているのよ。

麻琴ちゃんは嫌われたのでも、捨てられたのでもないと思うわよ。

ちゃんと会って、とことん話し合ってください」

「うううう　無理よお。。。」

今更・・ひっ。。もう・・むりだもんっ。。。」

「バカな子ね。無理なわけじゃない。

ちゃんと生きてこの世にいるのよ？

なんでも出来るわよ。

諦めないで、自分の気持ちに素直になるの。

そしたら涙も上手に出てくれるし、それによって自分の気持ちもよく分かるわ」

あの日を境に、一切の連絡を取らなくなった。いや、取れなくなったと言った方が正しいだろう。いつかひよっこり会いに来てくれるだろうと思っていたが、一週間経ち、一ヶ月が経った。自宅へ様子を見に行っても帰っている気配はなかった。和樹に聞いても「知らない」の一点張りで、更には「それまでの関係だったんだろっ」と辛辣だった。

言われてみればそうなのかもしれないとも考えた。本当に自分のこ

とを愛しているのだったら、どんなことをしても会いに来るだろう。それに事の発端は自分の余計な感情論だったと分かっている。家族や親子というものに縁の薄い健悟に向かって言った言葉は、今になつて思えば耐え難いものであつただろうと察しがつく。後悔してもしきれず、謝りたい気持ちは勿論あるが、それが更なる傷を深めてしまふのではないかという恐怖もあり、その呪縛から立ち止まっていた。

堂々巡りだった。この二年間、麻琴はずっと同じ場所で立ち止まり、何一つ解決を見出せずに泣く事もできなかった。そして自分でも予想外だったが、全身がひどく健悟の温もりを欲していた。

涙で濡れたまま拭いもせずヒロコを見上げた。自分に優しい眼差しを注ぐヒロコは、この世で一番美しい愛を身に纏った女神のように見えた。愛する事も愛の与え方も、そして愛され方も正しく身に着けている清らかな女神に。

「麻琴ちゃん、生きている間はね、やっぱり後悔しないように前に進むしかないのよ。」

辛くても苦しくても、未来に向かうの。それにね、同じ後悔するにしても、何もしないで後悔するのと、そうでないのとでは大きく違うでしょ？」

「・・・うん」

「さ、涙拭いて。コーヒー淹れ直すから」

「おう、久しぶりだな。元気だったか」

「まあな。そっちはどうなんだよ。少し痩せたな」

「最近忙しくてな。去年の夏に院長が亡くなってから色々あってな。そっちも噂じゃ榎野弁護士が・・・気の毒だったな」

「ああ・・・」

みんな元気なのか」

「元気だよ。一人を除いては・・・」

「・・・麻琴、どっか悪いのか・・・？」

「ちよっと・・・な」

## 助け舟

槇村の事務所の応接室で二人は向かい合っていた。

「まあ、大したことない。お前には関係ないことだし」  
「・・・ああ」

何を差し置いても一番に気になることであるにも関わらず、麻琴のことに關しては何一つ知る権利も言う権利もない。和樹の少し意地の悪い言葉にも黙るしかないのだ。

健悟もまた、麻琴同様一步も前に進めず2年前に立ち止まったままなのだ。

「そんなことより健悟、今日は折り返り入って頼みがある。うちの顧問弁護士やってくれないか」

緊張の面持ちで真っ直ぐ健悟を見据える。健悟は一瞬顔をしかめたが、やはり目を反らさず和樹の目を真っ直ぐ見て言葉を選ぶ。

「俺にはできない。俺でなくてもいいなら、以前に医師会の顧問やっていた仲間がいるんだ。今はどこの顧問も請負っていないから恐らくは・・・」

「お前は駄目なのか。どうしても駄目か。仕事と割り切って受けてくれないか」

畳み掛けるように詰め寄る。和樹にしては珍しく急かすような言動だった。

「どうしたんだよ・・・仕事と割り切っているから適切な人材を充てようとしているんじゃないか。俺は刑事事件を専門としているんだ。医療には精通していない。

弁護士も医者と一緒に得意ジャンルがあるんだよ。それくらいは知ってるだろう」

「ああ、悪い。そうだよな。でも・・・だ、何とかならないか」

「お前、和樹どうしたんだよ。

ここで引き受けたら逆に無責任になる・・・」

「・・・だよな」

ガツクリと肩を落としてうな垂れる。その姿は年齢を10歳ほど老けさせた。

「お前さ、もしかして訴えられたのか・・・？」

うな垂れたまま、コクンと力なく頷いた。

「詳しく話せ」

「じゃあ、マサさんお留守番お願いね」

ヒロコが玄関で靴を履きながら奥のリビングの方へと声を掛ける。  
するとマサさんは洗濯カゴを手に笑顔で出てきた。

「二人とも気をつけて行ってくるんだよ。」

家のことは全部やつとくから心配しないで楽しんでおいで。」

いつてきますと麻琴とヒロコは玄関を出た。

この二年間、麻琴はこの二人の夫婦喧嘩を見たことがない。そもそも二人が何かに怒っている姿すら見たことがないのだ。ホンワカとした陽だまりのような幸せがいつもそこにあり、麻琴を包んだ。

駅の方へ歩く道すがら、麻琴はヒロコに以前から言いたくても言えなかったことを伝える決心をした。

「ヒロコママ」

「なあに？」

小柄なヒロコが麻琴を優しい眼差しで見上げる。

「やっぱりね、私ヒロコママじゃなくて、お母さんって呼びたいの」  
「えっ……」

一瞬驚いたような、しかし喜びを表すようなはにかんだ複雑な表情を見せた。

「やっぱりダメ？……かな」

「ううん、ううん、凄く嬉しいわ」

泣き出しそうな顔で頭を左右に振りながら、ヒロコは何度も嬉しいと繰り返していた。

「じゃあ、お母さん、今日は何を買いに行くのか教えて？」

「ふふふつ。今日はね、麻琴ちゃんのスーツを見に行くのよ」

「なんで??？」

「だってあと一ヶ月もしたら社会人でしょ。スーツも何着が必要よ。マサさんがね、娘の就職祝いにスーツとパールのネックレスを買ってきなさいって」

「マサさんが？さつきは何も言っていなかったのに」

「恥ずかしいのよ。照れ屋さんだから自分からは直接言えないの。

可笑しな人よね」

「嬉しい。。。でも、そんなに甘えていいのかな」

「いいのよ、娘だもの。思いつきり素敵なスーツ買って見せてあげましょうね」

二人は顔を合わせて笑い、駅へと急いだ。

しかしパールネックレスはやはり高価なものだ。麻琴は遠慮し、その口実に『マサさんと選びたいからまた今度の時に』と断った。だがスーツはヒロコの見立て着もオーダーし、それだけでも結構な金額になってしまい、嬉しさよりも申し訳なさで一杯になったのだ。

お兄ちゃんにもちよつと悪いな。私ばかりこんなにしてもらって。

でも、ちよつと自慢しちゃうと。

和樹の一大事を麻琴は一切しらせられていなかった。いや、麻琴だけではなく、ヒロコ夫婦も・・・





## 向こう側

「お前はその場に居なかったんだな」

「ああ・・・でも、主治医は俺だ」

うな垂れたままの和樹がとても小さく見えた。

初診3年前より診てきた小児喘息患者の男児が救急搬送されたのは和樹が学会で病院を空けた初日だった。飛行機での移動だった為、連絡も取れず対応し判断を下したのは内科医師。発作状態は極めて重篤で、運ばれた段階でチアノーゼが出現し呼吸不全を起こしていた。保護者はスナック務めで生計を立てる母一人。その日は勤めから帰宅したのが明け方の4時だった。いつもより1時間遅かったらしい。すでに喘鳴症状が見られたが少し様子を見るため直ぐには病院へ連れて来なかった。

搬送直後、母親は主治医の和樹でなければ診てもらわないと言い張り騒いだ為、病院側は和樹へ何とか連絡を取ろうとしたが、それは不可能であった。仕方なく母親を落ち着かせ内科医が対応したが、気管支拡張剤投与の後、経鼻挿管、アンビューバックによる換気処置を行うなどしたが、午前7時半死亡。

母親は「美山先生を信じてたのに！」そう泣き喚いた。そして訴えたのは元夫であった。

「直訴されなかったか」

「そりゃあ・・・」

「何処で誰になに言われた」

「病院の駐車場で父親という人物に、お前は人殺しだ、訴えてやるぞって」

何故そこに足が向いたのか、その日和樹は久しぶりにヒロコのマンションへと向かった。健悟に打ち明け依頼を断られたことはショックだったが、それでも相談に乗ってもらうことで随分と気持ちにゆとりが生まれたのは確かだ。弁護士は明日改めて紹介してくれることにもなった。

ヒロコのマンションへ行くと麻琴が居た。もうすっかりヒロコ夫婦の娘になっていて、ヒロコのことをいつの間にか「お母さん」と呼ぶようになっていた。二人が並んで夕食の支度をしている後ろ姿を見ていると、ふと幻ではないかと目を擦りたくなる。そして、もしかしたら自分だけが幻なのではないか・・・とも。

何故、俺は生きているのだろう。あの子は何故死んだのだろう。何故、死ななければいけなかったのか。自分が学会に行かなければ助かったのかもしれない。悲しいことだが今までにも沢山の患者が亡くなっている。その都度無力さと脱力感を味わってきた。やればやるだけ見返りがあるわけではないことも充分過ぎるくらい分かっているが、それでも「もしかしたら助かったかもしれないのに」と後悔が残る場合は諦めきれず苦しむものだ。

「どうしたの？顔色が悪いけど・・・」

テーブルに皿を並べる手を止めヒロコが静かに聞いてきた。それは

その心配の声が麻琴に聞こえないようにとの配慮からであった。その小さな心遣いが和樹にはありがたかった。

「ちょっと色々あって・・・大丈夫だよ心配しないで。ありがとう」

和樹も小さな声で答えた。ヒロコはその心配を拭えないようだったが、それ以上は問い詰めることもなくニコリと目を合わせ、止めていた手を動かさしはじめた。そしてヒロコと入れ替わるように麻琴が料理を運んできた。

「甘そうだな、酢豚か」

「お母さんが作ったのよ。さっき味見したら絶品!」

「そうか。ちゃんと教えてもらえよ。あ・・・悪い電話だ」

ソファの背もたれに引つ掛けておいた背広の内ポケットから携帯電話を慌てて取り出す。

「もしもし、美山・・・健悟か。ちょっと待ってくれ、場所を移動する」

麻琴の横をすり抜け玄関の方へと向かった。その背中を麻琴はザワザワとした落ち着かない気持ちで見送った。

健兄・・・お兄ちゃんと健兄は連絡を取り合っているの？

縁を切ったって言ったのに・・・健兄・・・

和樹の握る携帯の向こう側には健悟がいる。そして声が聞こえるのだ。どうしてもその声が聞きたい。一言だけでも・・・麻琴は無意識のうちに玄関の方へと歩いていった・・・



## 依頼

「分かった、すまないな。じゃあ宜しく頼む」

携帯電話を折り畳み振り返ると、麻琴がリビングのドアを後ろ手に閉めるところだった。その表情に笑顔はなく、無言で和樹を凝視している。

「どうした・・・あ、トイレか？」

麻琴は黙って顔を左右に振る。聞きたいのはそんな言葉ではないと全身で訴えるようだ。

「じゃ、じゃあ、リビングに戻って食べよう。酢豚上手そうだったな」

「健兄・・・」

「えっ・・・？」

「電話、健兄だったんでしょ」

「・・・いや、あのっ」

「元気なの？怪我とか病気とかしてない？」

「・・・ああ、元気だよ。心配するようなことは何も無い」

少し諦めたように答える和樹。だが、それ以上は聞かないでほしい。できれば今更だが何も気付かなかったふりをして欲しいくらいなのだ。しかし・・・

「そう……。なんで健兄から電話……。あつたの？」  
「いやー……。たまたまだろ、別に何も無い」

麻琴を避けるようにしてリビングのドアに手を掛け、一刻も早くその中へ入ろうとするが、その手を麻琴は動かないように両手で掴んだ。

「待って」

「なんだよ」

「お兄ちゃん嘘言ってるでしょ。何か変だもの」

「なーに言ってるんだよ。本当に何でも無いって」

「……………」

「麻琴に関係のないことだから」

立ち尽くす麻琴の手からスルリと抜け、和樹はリビングへと消えた。

翌日、健悟に紹介された弁護士と正式に契約を交わした。年齢は40歳前後で眼鏡を掛けていた。第一印象は淡々と無駄のない話し方で、一言で言えば「合理主義」といった感じだが、しっかりと人の目を見て話す姿勢は、丁寧で大人のゆとりを印象付ける。

「和樹、嶋田さんのことどう思った？」

「余裕って感じだな。依頼主に安心感を与えてくれるよ。だからと言って自信過剰から来るもので決してない。……健悟、本当にありがとう。助かったよ」

「なんだよ、礼なんて水臭いな、ははっ」

「水臭い・・・か、そうだな」

「・・・？ まだ何か心配あるのか」

和樹の煮え切らない表情が気になる。大体の依頼主は契約を結ぶとそれだけで一安心するものだ。

「何でも言ってくれよ。力になれることなら尽くすつもりだ」

「麻琴のことでも・・・か」

「麻琴のこと？ どうしたんだ、何かあったのか」

「・・・昨日から口をきいてくれない」

「なんで・・・俺が聞いて良いのか分からないが、経緯を教えてください」

「感じてるんだよ。昨日お前と連絡とり合ったことも知ってる。

色々聞きたいようだったが、訴訟問題が絡んでいることまで話さなきゃいけないるだろ。

それで有耶無耶にしたら・・・それつきり口もきかない」

訴えられたと話したあの時よりも落ち込んで見えた。ポーカーフェイスを保っているが、健悟は可笑しくなった。

麻琴は凄いよ。男二人を天国に上げたり地獄に落としたりするんだな。

「ずっと言わないつもりか。相手が騒ぎ出すと隠し通すのも一苦勞するぞ」

「そんなことあるのか？ だって弁護士に頼んだらそういうことは・・・」

「世の中には色々な人間がいるんだよ、和樹」  
「だけど・・・」

言いよどむ和樹。健悟は立ち上がって肩をポンポンと叩いた。

「余計な心配掛けたくないんだろ。分かるよ。でも大抵の身内は、事後に一人で苦しんでいたと知らされた時に酷く傷つくんだ。余計なお世話だろうが、麻琴やヒロコさんたちに言うだけ言っという方がいいと思うぞ」

「そうか・・・そうだな。」

「だけど麻琴は・・・お前のことを知りたがっているんだ。あいつの頭の中は透かしたように見えるから分かるんだ」



## 素直になれない

二人は久しぶりに きこりの森 で会った。麻琴は弁護士事務所で見習い、美佳は教員として都内の私立高校に就職することに決まった。この就職難で二人とも二年前から就職活動はしていたが、決まったのは極最近で、周りには面接にすら扱ぎつけない者も大勢いる。苦勞を知っているだけに開けっ広げに喜べない部分もある。

「麻琴も案外大人げないなあ。お兄さん無視するなんて」

「だって・・・お兄ちゃんの状態だって悪いと思わない？」

「うーん、まあ・・・ねえ。じゃあ、お兄さんが取り合わないなら早瀬さんに聞くのはどう？」

「美佳・・・それは・・・」

「だって気になるんでしょ？まだ全然忘れられないんでしょ？」

「そうだけど・・・でも・・・」

美佳はもつと感情にストレートに動けば良いと言う。ヒロコも同じようなことを言っていた。だが、麻琴にはもう行動する原動力がなかった。

別れの言葉も告げぬまま終わってしまった関係。何度も何度も連絡を取ろうとしたが健悟が避けて取り合わなかったのだ。あの時のことを思い出すと胸が苦しくなる。

携帯電話に何度も電話をし、そして何度も留守電にメッセージを残

した。自宅にも足を運んだし、その際手紙も置いてきている。しかし一度も何の音沙汰もなかった。麻琴にとってそれは「拒否」以外の何物でもなかった。それが健悟の苦しい選択とも知らずに・・・

「麻琴、思うんだけど・・・新しい恋愛、したら？」

早瀬さんは全く正反対だけど、翔太くんなんて凄く良いと思うよ

「なに变なこと言ってるの？」

翔太くんにはちゃんとした彼女がいるし、お互いそんな風に思ったことないよ

「翔太くん、一年くらい前に別れてるの知らないの？」

「えっ 知らないっ。それ本当？」

「うん。本人から直接聞いたから」

「どうしょ・・・私、結構彼女のこと元気？とか聞いてちゃってたんだけど」

「あははっ。で、翔太くんはなんて？」

「いつも笑いながら、どうかなあ〜？とかかって・・・やだもあ〜。困ってたよね、きっと」

美佳は左上を見ながらボソツと呟いた。

「なんで草食系の男ばかりなんだ。

肉食顔の早瀬さんに、見るからに草食顔で奥手の翔太・・・」

「えっ？」

「何でもない」

帰宅すると珍しいことに和樹が先に帰宅していた。顔色を見るようにお帰りと声を掛けられたので、仕方なくただいまと返事をした。完全に無視するのはあんまりだと美佳に言われ、必要最低限の会話はしようと反省したのだ。だが自分からは話すつもりはあまりない。

「あの、麻琴さ・・・」

その先の言葉がなかなか出ない。

「ご飯なら直ぐ作るけど・・・」

「そうじゃなくて・・・あ、いや作ってくれ。少し大目に」

図々しい。不貞腐れている麻琴はそんな風に思った。小さな溜息をつき呆れたように言う。

「食欲あるのね。いいわよ、少し大目に作るくらい」

「悪いな」

嫌味を言ってしまったことに自分でも少し気分が悪かった。和樹が少し悲しげな顔をしたことも更に罪悪感を煽り、自分はこんな人間ではなかったはずなのに・・・と。

だが今の麻琴は面と向かって素直に謝ることができずにいた。その代わり和樹の好物を言われた通りいつもより大目に作った。

「お兄ちゃん、出来たよ」

和樹の部屋の前で声を掛ける。しかし返事はない。もう一度声を掛けながらドアを開けた。和樹の六畳の部屋のドアを開けるのはどれ

くらいぶりだろう。

「お兄ちゃん、ご飯食べないの？」

リクエスト通り沢山作ったんだから食べてくれなきゃ困るんだけど・

・

う・・・そ・・・」

それはあまりに信じられない衝撃的な状況が目の前にあり全ての思考を奪い去った。そしてそれ以上、麻琴は言葉を発することができない。

気付かぬうちに腰が抜けたようにへナへナと床にへたり込んでいた。

## 懐かしい匂い

部屋の中央に敷かれたグレーのラグマットの上で、和樹はうつ伏せに倒れビクビクと身体を震わせていた。顔は青白く口元にはベツトリと粘性の吐血の痕。そしてラグの上には赤黒い染みが不気味な形を作っていた。

「おつ おに・・・ちゃ・・・」

麻琴はへたり込んだまま腰は抜け手指は振戦を起こし、血糊の付着したラグを見つめることしかできなかった。思考も停止している状態で、誰かの呼びかける声も耳には入らない。

朦朧とする意識の中、誰かが肩を抱いてくれた。そして大丈夫だからと宥める言葉が聞こえる。足元から顔を上げると、家ではないどこかの壁が目に入った。そして自分は隣りの誰かに抱かれるようにして長椅子のようなものに座っている。ふと落ち着きを取り戻させるような懐かしい匂いがした。寄り添っていてくれていた人から漂う匂い・・・。自分は今、誰と何処にいるのだろう。匂いの元を辿るようにしてその人物の顔をそっ見上げた。

そこには二年間、会いたくて会いたくて仕方なかったかつての恋人の心配そうな顔があった。

「健・・・にい・・・？」

「マコ、心配しなくても大丈夫だから。あいつ意外に喋れたし」

肩を抱く力強い健悟の右手と、目の前にある引き締まった口元に意識を奪われる。

「なん・・・で・・・？」

「ん？　今まだ検査中だから原因は分からない」

もちろん和樹のことは気になる。しかし今の麻琴の疑問は、何故ここに健悟がいるかだった。二年前と全く変わらない健悟を見て、和樹のことも含め、もしかしたらこれは夢なのかもしれないと疑ってもみる。だが、これは現実だとばかりに看護師が血糊のついた和樹の衣服を持って麻琴の許へやってきた。それから数分後、二人の前に50代くらいの細身の女医が現れた。恐らくは十二指腸潰瘍だろうが更に検査が必要で、今現在は数時間の点滴を要す為入院する必要があると言った。そして最後に、美山先生にはいつもお世話になっている、いつ倒れてもおかしくない働き方をしていた　と付け足した。

運ばれた先は和樹の勤める病院だった。総合病院で救急指定病院でもある。

和樹は個室ベッドに横たわって点滴を受けていた。時刻は既に9時を回り院内は静まり返っている。

確かに健悟の言った通り和樹は会話が出来た。

「麻琴ごめん。多分ただの潰瘍だ。」

前兆あったけど忙しくて放置していたからしっぺ返し来たんだと思う」

「あんなに血を吐いて・・・苦しかったでしょう。。。」

その身を置き換えると居た堪れなくなった。ここ一ヶ月、和樹は殆ど帰宅していなかった。帰宅しても風呂に入り少し寝ただけで病院へ向かい、完全に不規則な生活だった。見た目にも痩せ、このところ目も窪んでいた為、気にはなっていた。医者の不養生とはこのことだ。

「こつこついう事でもなければ患者の気持ち分からない。  
まあ、これも勉強のうちだな。ははっ  
健悟も悪かったな。ついでに麻琴送ってやってくれないか」

麻琴の後ろに居る健悟に点滴をしていない方の手を挙げ頼んだ。

病院を出て二人はタクシーに乗った。話したいことは溢れる程あるというのに、何から話して良いのか分からず車内では二人とも押し黙っていた。目を瞑ると健悟の匂いと、肩に残る健悟の手の温もりが蘇った。二年分の積もる話。いや、その前に終わりきっていない気持ちを麻琴は持て余していた。  
あれこれ言葉を搜しているうちに無情にも美山家の玄関前にタクシーは止まった。

タクシーから降り立つと説明のつかない涙が込み上げてきた。

「鍵は？ 開けてやるうか」

気が付いても涙については何も聞かず、健悟は麻琴の手から鍵を取り力チャリと開錠した。

「ちゃんと鍵閉めてチェーンもするんだぞ。」

それから今日は何も考えず寝るんだ。

じゃあ、おやすみ

そう言つと麻琴の頭をクシヤツと撫で踵を返した。



零れ落ちる涙を拭うことなく、健悟の後姿を見ていた。その後姿は一度も振り返ることなく遠ざかって行った。一度も・・・シヨックだった。一度でも良かった。振り返って手を振ってくれるだけでも真っ直ぐ風呂場に行き電気も点けぬまま、服も脱がず泣きながらシヤワーの蛇口を捻り頭から冷水を浴びた。しかしちっとも気持ちに変化は現れず悲しくなるばかりだ。どれ位の時間そうしていただろう。いつの間にか冷え切った身体はタイルの床に崩れ落ち、言葉にならない感情が嗚咽となつて浴室内に響いていた。だから気が付かなかった。玄関のドアの開閉する音も、廊下を歩く足音にも。

「なにやってんだ、このバカっ！」

乱暴に浴室のドアが開けられ、シャワーヘッドは浴槽の残り湯の中に放り投げられ一瞬にして水音は消えた。そしてびしょ濡れで嗚咽を漏らす麻琴を健悟は力一杯胸に引き寄せた。

「しかも冷水・・・風邪引いたらどうするんだっ」

「ううっ だっ だっ・・・て・・・うう。。。」

麻琴の顔を両手で包むと芯まで冷え切っているのが分かった。健悟は麻琴の背中に手を回し身体に張り付くワンピースのファスナーを腰まで下ろした。そして剥す様にして手際よく身体から取り払うと下着姿にした。

「麻琴、ちよっと・・・バスタオル取るから・・・」

そう言つて体を離そうとするが、麻琴はガタガタと震えながら健悟にしがみ付いて離れない。

「ほら、麻琴。このままじゃ絶対風邪ひくから」

「ヤ・・・ヤダ・・・うつ。。。」

だつて健兄、またいなくなつちゃうもん。うつく。。。」

「・・・!」

「お願い、このまま・・・抱きしめて。

今だけでいいから・・・少しだけで。。。」

「いなくならないよ。だから麻琴・・・このままじゃ」

ピタリと張り付くようにして抱きつく麻琴に、健悟は戸惑っていた。下着はつけているが、濡れたブラジャーとショーツ姿はほぼ全裸に近い。薄暗い浴室内でも張り付いた部分が透け、手に触れる肌に対し、気持ちとは反比例するかのよう健悟の男は反応を見せ初めていた。この状況でありながら情けなかった。健悟は己の身体を憎んだ。

「ま・・・こと・・・」

どちらからともなく二人は唇を合わせていた。はじめは軽く掠るくらい。そして次第に角度を変え隙間もないほどに口づけ合った。麻琴の口から色の付いた息遣いが漏れる。

「ん・・・ふっ・・・」

「麻琴の唇、冷たくなってる」

背中に手を這わせブラジャーのホックを外し体から取り去った。そして何も身に着けていない細い背中を健悟のその大きな手が撫で擦った。

「健兄……」

「ん？」

「なんで……ここに？」

「泣いてたから……さ、鍵も閉め忘れてるんじゃないかと思った」

「そ……か。私、泣いてたんだ」

「二年……ぶりだな。麻琴、痩せたな」

「健兄は変わらないね」

「麻琴……麻琴っ！！！」

抱きついていた手から力が抜け、健悟の支えがなければその腕から抜け落ちそうになっていた。健悟は慌ててバスタオルを麻琴の身体に巻きつけ、抱き抱えた。

また健悟の夢を見た。肌の感触が残るほどリアルで、夢なら覚めな  
いで欲しかった。寝返りを打とうと身体をずらした時だった。胸の  
辺りに温かな重石を感じた。パツと目を開けると隣には健悟が居た。  
それも腕枕をし、空いた方の腕は麻琴の胸の上に置かれ圧迫してい  
る。

「うつ……重……い」

ジタバタしていると腕の重みがフツと無くなった。そしてその手は  
麻琴の頬へと移動し包んだ。

「少し温まったか？」

寝起きのような掠れた健悟の低い声と匂いが全身を心地よく包み、

夢ではなかったのだと証明していた。

ベッドサイドの薄暗いライトが二人を照らしていた。隣りにはあれほど焦がれた健悟が居て、その腕枕の中に自分は居る。信じられない想いで健悟の顔を見つめていると、健悟も同じように言葉なく麻琴を見つめていた。額と額を合わせ、お互いの息遣いを感じ、密着するように抱き寄せられた身体には温もり以上の熱を感じる。

麻琴は健悟の手によってコットンのロングネグリジエを身につけていた。浴室で気を失い大判のバスタオルで身を包んでベッドに運ばれたが、ベッド上にたまたまネグリジエがあつたのだ。一瞬の躊躇いはあつたが酷く身体が冷えており、急いで着替えさせた。そして健悟自身も濡れていた。ないとは思つたが以前替えの衣類を置いていた和室の押入れを覗くとそのままそっくりあり、その中から下着とグレーのスウェットのズボンを引っ張り出し着替えた。驚くことに極最近に洗濯されたような洗剤の香りがした。

「ずっと・・・？」

「目が覚めるまでとは思つてね」

「目が覚めたら・・・いなくなっちゃうの？」

「・・・」

言葉に詰まった。さっきは感情に流されるまま抱き合いキスをしたが、麻琴が意識を失い眠っている間、健悟はずっと冷やかに自分を罵っていた。自分の行動がまた麻琴を傷つける。そして自分も傷つく。更には和樹をも・・・。

自制しなければいけない

健悟は返事もせずベッドから抜け出た。その背中を麻琴は信じられない思いで見つめた。

「また・・・また、いなくなっちゃうの？」

何も言わず二年前と同じように・・・

私は健兄に、そんなに嫌われるようなことを？」

ベッドから上半身を起こし、怒りの感情を抑え込むように布団の襟部分をギュツと両手で握り潰し健悟の裸の背中を睨み付けた。

その戦慄くような声に健悟は振り返った。そして・・・

「連絡をするなど言ったのは自分だろう。一切を断ち切ると」

「言っていないわよ、そんなこと！」

「言っただろ。それとも二年前のことはもう忘れたか？」

「だって言っていないもの。そもそも健兄の方が私を避けて無視したくせに」

「なに言ってるんだよ・・・」

「誤魔化さないですよ。携帯に電話して留守電入れたし、家まで行って手紙・・・って言ってもメモ程度のも物だったけど、何度も郵便受けに入れたじゃない。なのに全部無視」

「待てよ、そんな事知らないぞ」

一旦立ち上がった健悟は眉間に皺を寄せベッドの端に腰を下ろした。そして何か考え込むように斜め下を見つめた後、麻琴へ顔を向けた。

「携帯電話、香奈子の裁判のあと無くしたんだ。だけど何時か何処から出てくるかもしれないと思って解約はせずに、事務用の携帯を使っていたんだ。三ヶ月して出てこなかったから結局は解約したけど。だからそれは・・・ゴメン。だけど家の郵便受けに手紙は無かったぞ」

「嘘よ。手紙なんて10回以上は郵便受けに入れたわ。携帯の話だって本当は嘘なんじゃないの？」

「麻琴お……嘘なんかつくかよ。嘘っていうならその証拠は？」  
「証拠……？健兄は証拠が好きね。状況証拠で充分じゃない」

大人しくも責めるような麻琴に健悟は一瞬ムツとしたが、直ぐに気持ちを入れ替えた。

「ごめん、誤解するな。喧嘩したい訳じゃないんだ。よく解らないが行き違いがあったみたいだな。

俺はてつきり自分が避けられているものと思っていたし、その……麻琴からの連絡も本当に届いていないんだ。すごく不思議だけど」

「私もごめんなさい……」

「いや、いいんだ。それより麻琴、もう一時過ぎてるし今日は寝ろ。誤解は起きてからでも解決しよう。ちゃんと肩まで布団掛けて、ほら」

昔と変わらぬ優しい目、声、そして手。懐かしさに駆られ急速に健悟へのこれまでの気持ちが高まる。麻琴は自ら健悟の胸に抱きつき温もりを求めるように頬擦りをした。

「健兄の心臓の音がする。匂いも……健兄のもの」

健悟は自分の胸にキスをする麻琴の行動に戸惑っていた。自分もそうしたい。だが和樹という理性が浮かび上がる。

「麻琴、やめろ……やめろっ！」

健悟は麻琴の両肩を強く掴み、それ以上の行動を抑え付けた。瞬間  
全身をビクツと震わせ、麻琴はそのまま固まり子供のような頼りな  
げな表情を見せた・・・



## 昨日のキッチン

「ごっつ ごめんなさい・・・」

健兄・・・嫌いに・・・ならないで・・・」

拒まれた

健悟の真意などわかるはずもなく、両肩を強く掴まれたまま麻琴はまるで許しを請うかのように自信のない声で途切れ途切れ言葉をこぼす。

「麻琴、違う・・・違うんだっ・・・」

「お願い・・・もう健兄の嫌がることしないから」

「・・・！」

麻琴は健悟の目を見ていなかった。目の前の健悟の胸を通り越し、ずっと先、いや、自分の内側へと心は向かって行った。その後健悟がどんなに話しかけても麻琴は『嫌いにならないで』と小さな声で繰り返すばかり。狼狽したのは健悟だった。麻琴が麻琴でなく、飾られた人形のように見えた。どうすることもできず麻琴をベッドに横たえた。何の抵抗もなくすんなりと麻琴は従う。

色んなことがあり過ぎて麻琴は疲れ切っていた。和樹のことと健悟のこととも、どちらも想像だにできなかった展開で精神が追いつかない。

「麻琴、今日は隣で寝るから。いいな」

一人置き去りにすることなどできなかった。  
細い華奢な手をギュッと握るが、それに対し握り返されることはなかった。

先に目を覚ましたのは健悟だった。熟睡した感じはない。麻琴は隣でスヤスヤと眠っている。その寝顔を見ていると色んな後悔が渦巻いて涙が出そうになった。

あの状況で麻琴から逃げようとしたこと、それ以前に自分や麻琴の感情を押し殺してまで和樹との約束を優先しようとした馬鹿さ加減に、後悔してもしきれない思いで情けなくなった。目覚めたとき、麻琴はどんな顔をするだろう。笑顔を見たい。笑い声を聞きたい。隣りで眠る寝顔を見て、麻琴のチャーミングな愛らしい瞼に口付けた。

「愛してるよ、麻琴。」

ごめんな。いつも泣かせてばかりで」

小さな声で心の内を低く呟いた。

「いいよ、許してあげる」

目を閉じたまま、健悟と同じく聞こえるか聞こえないかの小さな声で囁く。

「ま・・・こと？」

それに返事はない。寝言か 健悟はホツと胸を撫で下ろした。寝ている人間に愛の呟きをし、それを本人に知られるなど恥ずかし過ぎる。

うるたえた自分が可笑しくて、ついフツと鼻で笑う。そしてコーヒーでも飲もうかとベッドから這い出ようとした時だった。

「なに笑ってるの？ 本当に愛してくれてないなら前言撤回だけど」

「まつ ままま まつ まこ まことっ！」

「ドモリ過ぎ・・・」

「お前寝てたんじゃ・・・」

「寝てたけど、健兄の独り言に起こされた」

麻琴はその大きな瞳をパツチリと開き健悟の慌てぶりを興味津々といった様子で楽しげに見た。それは幼い頃、悪戯を仕掛けてワクワクしていた時の表情と重なるものがあった。

ダメだ。情けねー、この顔に弱い。

いや、ここでシツカリしないでどうする俺。

「じゃあ、もう一回寝てすっかり忘れろ」

麻琴の頭にスッポリと布団をかけ立ち上がった。布団の中から何やら騒いでいる声が聞こえるが無視して部屋を出た。

一階リビングを通りキッチンへ向かう。手前にある食卓テーブルが目に入った。二人分の食器がセットされ、後は料理の盛り付けを待つばかりになっている。麻琴はいつも食べる直前に皿に盛り付ける。

百合子がそうしていた。温かいものは温かい状態で食べ始めるのだ。麻琴はそうだった百合子の続けていた習慣をどれだけ覚えていたのだろうか。

大人になった自分たちを二人はどう思っただけで見ているのだろうか。

特にこの二年間を……。きっと悲しんでいたに違いない。大切な娘を泣かされ、抱きしめてやりたい想いだっただろう。後ろめたさがつもの。

「お兄ちゃんが大目に作ってくれって言ったのよ。」

それなのにあんな事になっちゃって沢山残っちゃったの」

いつの間にかネグリジェ姿のままの麻琴が後ろに立っていた。

「……そうか。きっとそれは俺のことを考えたんだな」

「え？どういこと」

「最近和樹と連絡取り合ってたこと知ってるだろ」

「うん。お兄ちゃんは隠してたけどね」

隠し事をされ寂しかったのか、暗い表情を見せる。

「そのことで昨日ここに呼ばれたんだ」

麻琴は気になっていた。昨日なぜ健悟が和樹を助けることができたのか。

「コーヒ―淹れるから座って。」

詳しく教えてくれる？」



## 和樹の現状

訴訟問題のことで自分と連絡を取っていることも、和樹が麻琴に無視されて頭を痛めていることも、そして自分と麻琴とのことに関しても、どれもこれも和樹の意見も聞かずに勝手に話せる内容ではない。そもそも昨日だって本当はどれが本題なのか知らずに来ているのだ。

「んまいつ。麻琴の手料理すげー久しぶりに食うなあ」

全身から喜びを放出させながら三杯目のおかわりを催促する。麻琴は呆れながらもご飯茶碗を受け取る。朝からこれだけガツガツと食べている健悟の姿を見ると爽快で気持ち良いものだ。未解決問題があっても不思議と笑顔になれるほど、麻琴自身もひたひたと溢れそうな嬉しさに浸かっていた。

結局は健悟の計らいで完全な納得はしきれないものの『隠し事なく話す』という約束を前提に、和樹が帰って落ち着いたら説明するということに収まった。

「それにしても凄いご馳走だな」

確かにいつもより豪華であった。麻琴特製の麻婆豆腐・ホタテのバター焼き・ポテトサラダ・中華スープなど、他にも数品ある。どれもこれも和樹の好物ばかりだ。

「ちよつとね・・・お兄ちゃんに意地悪なことしちゃったから、ごめんなさいの代わりに好きなものを作って食べてもらおうと思ってた

の。でも胃に悪いものばかりよね。健兄が食べてくれて良かった」

「和樹はいつもタイミング悪いよな。食いつ逸れてばかりだ」

「ホント。逆に健兄はタイミング良いよね。そういう時に限って来て……」

「……ん？どうした」

食卓テーブルの端に置いてある炊飯ジャーの前に立ち、涙こそ零れはしないが目も鼻も真っ赤になっていた。

「お兄ちゃんが倒れてるの見た時、しっ　死んじゃってると思ったの。そしたら体が全然動かなくて頭が真っ白になってしまつて……あのまま健兄が来てくれなかったら、お兄ちゃん本当に死んじゃつてたかもしれない。私、土壇場で全然ダメな人間なんだ。」

健兄、どういう経緯で家に来たかは分かんないけど、来てくれて本当にありがとう」

おかわりのご飯茶碗を両手に持ったままぺコツと頭を下げた。

「……麻琴」

麻琴の素直で可愛い一面に愛しい気持ちが大きく揺れ動き、そして目を背けたくなった。世の中には他にも女が大勢いるというのに、なぜ自分は麻琴でなければならないのか。なぜここまで麻琴を想うのか。とうに理屈ではないことを分かっているながら、その理由を無理に探そうとしてみよう。だから何時まで経っても答えは見つからない。

朝食を済ませると二人は和樹の様子を見に病院へ行つた。時間は午前9時。院内にはすでに通院患者が大勢いた。これが何処かのレストランやスーパードつたら大繁盛と喜べるのだが、なにせここは病院。患者が居ないと潰れるが、居たら居たで複雑な心境なものだ。

五階の和樹のベッドを目指し二人はエレベーターに乗った。三階で一人の看護師が降り立ち、扉が閉まる寸前に外で聞きなれた男の声がした。

「あれっ？」

「なんだ麻琴」

「今なんか声が聞こえたんだけど……??？」

「それが？」

「なんか……お兄ちゃんの声みたいだったんだけど」

「……お前、あとで精神科で診てもらえ。それ幻聴だろ」

「違つてばっ。本当にお兄ちゃんの声があっ」

そこまで言うとエレベーターは五階に辿り着き二人を追い出した。そして二人は和樹がベッドに居ない事実を知る。部屋の前を若い看護師が通つたので麻琴が呼び止めた。

「ああ、美山先生なら明け方4時頃に緊急の患者さんのもとへ行かれて、そのまま外来の診察に入りましたよ」

「えっ！ そんな、大丈夫なんですか？」

「だって昨日運ばれて点滴して、今日は胃の検査をするってことになつてるんですけど」

「多分大丈夫なんじゃないですか？ 先生結構元気でしたよ」



若い看護師はケロッとそう言い、足早に二つ隣の部屋に入って行った。

「やっぱり三階のあの声、お兄ちゃんだったんだ。健兄、行くっ」「どっっっ?」

「三階よ。今すぐ止めさせて検査受けさせるのよ!」

麻琴は腹立たしげに言い放った。

まずは自分の身体を治してほしい、人の気も知らないで。

三階で降り立つと、目の前の待合室には若い母親と子供が溢れるように詰まっていた。あちこちから子供の泣き声や、それをあやす声が聞こえる。

「すごい・・・」

麻琴は小児科の現状を知らなかった。勿論こどももない麻琴が足を踏み込む機会がないのだから当然といえば当然だろう。想像以上に「戦場化」していることに眩暈を起こしそうになる。

「今日のコウスケは偉かったなあ。」

注射しても泣かないなんて凄いぞ!

はーい、じゃあまた来週な」

そう言いながら患者親子と診察室の入り口に和樹が出てきた。

「じゃあ、次はカワハラ ミヤちゃんどうぞー」

名前を呼びながら母親らしき女性から2歳くらいの女の子を受け取

るように抱き上げ、笑顔で話しかける。

「お待たせ。ミヤちゃんはポンポンが痛いんだって？  
どれどれ、中に入って診てみようね。すぐ治るといいねえー」

子供のお腹を軽く擦りながら麻琴と健悟には一切気が付かず診察室へと入って行った。そして二人は呆然とその姿を眺めるだけで、一言も声を掛けられなかった。仕事中の姿を見るのは初めてだった。和樹が医者として信頼を得ているのは、患者親子の表情から判る。それぞれに安心したような穏やかな顔をしているからだ。

「麻琴、帰ろう。何かあってもここは病院だ。心配無用だろう」  
「でも・・・」

「見ろよ、これが現実だ。和樹がいなきゃどうにもならん」  
「うん」

和樹が帰宅したのはそれから一週間後だった。仕事の合間に検査を受け十二指腸潰瘍と診断されていた。点滴処置や内服しながら過ごしてきたという。一週間前よりも血色のいい顔色で、元気になっていた。

久しぶりに二日連続で休みが取れたと言い、その休みの間に3人でゆっくり話そうということになったのだが・・・

## 兄妹以上の愛情

「もし何だったら、おれ席外すけど」

「いや、健悟も居てくれ。お前にも関係していることもあるし」

「そうか・・・」

両親の仏壇のある和室で3人は座卓を囲んでいた。土曜日の午前中は窓から日差しが入り込み室内を明るくし、窓際に座った麻琴の背中に陽だまりを作っていた。

「とりあえずだな、まずは俺から説明をするから麻琴は黙って聞いててくれるか」

「わかった・・・」

和樹は麻琴の不満のありそうな返事に対し「うん」と頷き、次に健悟の方へ目を向け同じく頷いて見せた。

「まず、一つはどうしても健悟と連絡を取り合っていたかなんだけど・・・驚かないで聞いてほしい。

患者の家族から、ある事で個人的に直訴され訴えられたんだ。まあ、いいから聞けって」

麻琴が驚きのあまり口を挟もうとするのを素早く阻止し、話を進める」

「それでかつこ悪いんだけど健悟に泣きついたんだ。事務所に行つて依頼をしたんだけど専門外だつてことで断られたけど、医療訴訟

に明るい弁護士を紹介してくれたりと力になったもらっていたんだ。麻琴に黙っていたのは、やっぱり余計な心配させるし、自分でもこの先どうなってしまうのか不安だったんだな。言えなかったんだ。でも昨日のことなんだが、紹介してもらった弁護士さんが連絡をくれて相手家族が取り下げたって・・・まだ幾つかの問題はあるんだけど、一先ず最悪の事態は免れたらしい」

「良かった・・・もしかしてその心配やストレスが溜まって胃を壊したの？」

「うーん・・・それだけではないだろ。やっぱりこここのところ仕事がハードだからな。」

それと・・・これは二人に謝らなければいけないことなんだけど・・・謝って許されることも思っていないんだが・・・」

麻琴と健悟の顔を交互に見て大きな深呼吸をした。何の事かと健悟は眉間に皺を寄せた。

「なんだよ、エライ深刻な顔して。和樹が謝らなきゃいけないことなんてあるのか？」

「あるんだよ。お前たち二人のことで・・・俺は二人にとって罪人だと思う。」

この二年間その事が頭から離れなくて、麻琴の顔を正面から見るのが辛くて苦しかった」

「え・・・二年間？ どういうことなの？」

麻琴もキョトンと不思議そうに和樹を見る。

「二年前、例の裁判の後お前たち喧嘩しただろ」

二人はたったそれだけの言葉に表情を曇らせた。一週間前の突然の再会が未だに信じられず上の空になることがある。キスをして抱き合ったが二人は一線を越えることはなかった。そして和樹が退院するまで電話で連絡を二度取ったが、いずれも和樹の体調や退院日のことに関してであり、甘い会話は一つも交わさなかった。

「あの時俺は二人から別々に話しを聞いたんだけど、二人の言っていることは一致していたよ。互いに相手を思いやり、そして反省していたんだ。」

あの時の原因した二人の会話のやり取りっていうのは覚えているよな？」

健悟が「ああ」と軽く数回頷き、麻琴は伏し目がちにコクツと一度頷いた。

「私が悪かったの。健兄の気持ちもよく考えずに傷つくような事を偉そうに言ったのよ」

「いや、違う。麻琴は悪くない。俺の閉鎖的な物の考え方が」

そこまで言うと和樹が割って入った。

「待ってくれ。それは後で話し合ってくれよ。」

ま、当初の俺の考えでは、あの時原因となったやり取りした内容は、それぞれが正当だったと思った。だけどその前に一面だけだったと……ね。もっと多角的な見解がその場であったなら違っていただろうなってさ。だから俺はそこにつけ込んだ。」

意味が分からず麻琴は首を傾げた。だが、健悟はその後の展開を紐解き始めていた。

「麻琴には健悟はもう二度と会いたくないと言っていると伝え、健悟には麻琴は酷く傷ついて不安定になっている、これ以上傷つたくなかったら二度と麻琴の前に姿を現すな……と。俺が連絡を取り合えないようにしたんだ」

「嘘……」

「麻琴、嘘じゃないんだ。本当に申し訳ない」

「でも……私はそれでも健兄の携帯に電話をしたり、手紙を」

「知ってるよ、全部。俺が画策してたんだ」

「和樹、よせ。もう良いよ、分かったから」

「良くない。俺は正直に話すと決めたんだ。麻琴やお前に恨まれても自業自得だ」

和樹は我は強くないが一度言ったらやり通す頑固さがある。健悟も麻琴もそれを知っているだけにそれ以上口を挟むことが出来ない。

「麻琴が健悟に連絡を取ろうとすることくらいは分かっていた。だから俺は健悟のプライベート用の携帯電話をこっそり盗んだんだ」

「やっぱりな……」

健悟が小さな声で呟いた。だが麻琴はショックで声も出ない。

「今も電源を落として病院のロッカーの中にある。手紙も俺が抜き取った。悪いがその手紙は全部シュレッダーに掛けた」

「どっつして……そこまでの。」

お兄ちゃんは私たちのことが嫌いだったの？」

「いや、そうじゃない・・・すまなかった」

「謝罪を聞きたいんじゃないの、理由が知りたいのよ」

「麻琴、和樹だって俺たちと同じく、もしかしたらそれ以上に辛かったと思う。」

責めるような言い方は」

「いや、健悟いいんだ」

「責めてないよ。お兄ちゃんのこと大好きだもの。」

ずっと麻琴のこと大事に育ててくれて兄妹以上の愛情を掛けてくれたと思ってる。」

でも、時々お兄ちゃんが分からない時があるの」

健悟は和樹の気持ちがいほど解っていた。血の繋がりがないと知った時それは真実味を帯びた。そしてこれまでの一連の行動は一つの証明にもなる。だが麻琴には理解できないだろう。全く想像だにしていないのだから。

「麻琴、俺は・・・」

そこまで言つと、和樹は傍らで見守る両親の位牌へと視線を移した。

## 重なる涙

「そりゃあ麻琴、少しでも親代わりと思って兄妹以上の気持ちでやってきたよ。」

それに麻琴はきちんと応えてくれたとも思っている。

ただ少しだな、過保護に・・・違うな・・・」

そこまで言うと頭を掻きむしり、必死に事実と添う言葉を探している。

「過保護に見せかけた束縛をしていたんだろうな、俺は」

健悟には良くわかる適切な言葉であったが、麻琴はその違いをどう受け止めるのか。健悟は黙って二人を見守った。

「わかん・・・ない・・・」

「え？」

「わかんないよ。そのどこが・・・いけないのか」

「それは・・・本来の麻琴の感情とか行動を無視してコントロールしていた部分があるってことなんだよ」

「でもっ！ 私が迷ったり間違っただことをしたりした時は、それが私の助けになるのよ」

「違う。助けではなく障害だ」 静かな声で訂正した。

「そんなこと・・・」

自分を援護するその言葉に、麻琴の妹としての愛情を感じずにはい



られなかった。麻琴は幼い頃から何一つ変わっていない。素直で優しく汚れを知らない。

「健悟にも本当に申し訳なかったと思っている。この通りだ」

座卓から離れて下がると畳みに両手をついて頭を下げた。それは和樹なりの精一杯の反省と一筋の頼みの土下座であった。麻琴はその思いもよらぬ行動に驚き、すぐさま和樹を元の姿勢に戻そうとしたが、雁として崩すことはしなかった。そして震える声で健悟に何度も叫んだ。

「これ以上は言う権利がない！

この通りだ、勘弁してくれ！

この通りだ！」

土下座し必死に訴える和樹を、麻琴は何がなんだが分からない様子で泣きながら背中に抱きついている。

「お兄ちゃん・・・もう、本当にやめ」

「健悟！ 頼む！」

「何なの・・・何してんの お兄ちゃん・・・」

普通ではないその行動に、麻琴も少しずつ何かが変だと気付き始めていた。

「お兄ちゃん、何の・・・まね？」

麻琴の言葉には一切答えず、和樹は頭を下げたまま続けた。

「健悟・・・これ以上は・・・苦しくて・・・もう無理なんだ。

麻琴を・・・頼む・・・」

涙で震える声を必死に押し出し、縋る思いで健悟に乞う。畳の上で握り締めた手もその必死さを訴えていた。

「和樹、それで・・・いいのか」

僅かにだが健悟の声も震えていた。和樹の苦しさは健悟がよく知っている。だから思わずにはいられない。

それ以上、麻琴に対する気持ちを伝えないまま自分を殺して本当によいのか

喉まで出掛かった言葉を飲み込んだ。

和樹は両親の仏壇の前に誓ったのだ。

麻琴の幸せを守る

自分の気持ちを犠牲にしても厭わない。だからそこから見守ってくれ・・・と。

「頼む、大切にしてほしい。

俺、本当に大事にしてきたんだ、本当に・・・」

和樹も麻琴も、そして健悟も子供のように泣いていた。

それは両親の葬式の時と変わらぬそれぞれの感情が重なる重たい涙だった。

## 心の裏側

「悪いけど麻琴、コーヒー淹れてくれるか」

それぞれが少し落ち着きを取り戻した頃に健悟が言った。和樹はつい先ほど顔を洗うと言い洗面所に立った。気が付くと時刻は午後の一時を回っている。

「いいけどお腹は空かない？パスタとか簡単なもので良ければ直ぐできるけど」

「おっ！パスタか、いいな。野菜とキノコたっぷりの和風パスタが食いたいな」

戻ってきた和樹が胡坐をかきながらリクエストした。いつもと変わらぬ穏やかな兄の顔だった。正直、麻琴はいまだ消せない疑問がいくつかある。が、何故かその疑問を表に出す事が躊躇われた。心はずっと奥底の方で、和樹が非常に困惑するのではないかと感じ取っていた。

「じゃあ、直ぐ作るから出来るまで待っててね」

麻琴がキッチンに向かうと、男二人は並んで座っていた。和樹は胡坐をかき両手を少し後ろにつき仏壇を見上げる姿勢を作るのに対し、健悟は同じ胡坐でも、その左膝には左手を置き、右膝には右肘をつくという何か物を考えるようなポーズでいた。

「なあ、和樹」

「ん？」

「いいのかよ、あれで」

「なにが」

「なにがって……その……」

健悟にしても、これまでに和樹から麻琴に対する気持ちを正面から聞いたわけではない。それ故どうしても言葉が詰まる。ふと和樹の横顔を見ると遠い眼差しで仏壇を見上げている。明らかに心の中で会話をしている優しげで落ち着いた表情だった。

「和樹、今後二度とこのことには触れないから本当のことを教えてくれ」

「何のことが分らんが、その今後二度と触れないことを教えたからといってどうなるんだ」

「どうなる……？」

「意味あるのか？」

「もしかしたら、お前自身にとってはあるかもしれないな。」

大体、意味のあることしか聞いたらダメなのかよ。どんだけ頭固いんだ」

「……固く信念を持たなきゃやってこれないこともあったよ」

口の端を上げ、チラリと健悟の目を捉える。

キッチンからグツグツと湯の沸く音がかすかに聞こえる。まだ少し話すくらい時間があろうだ。

「和樹にとって麻琴は……女か」

「はは、男じゃないな」

「ふざけるなよ、真面目に聞いてるんだ！」

「馬鹿、デカイ声出すなよ。またアイツ心配するだろ」

「悪い・・・」

「まあ、そのうち、またゆっくり話そう。今日は充分だろ」

食後すぐに携帯電話の呼び出し音が鳴った。和樹の携帯かと思いきや、鳴っていたのは健悟の携帯電話だった。そして急用が出来たと言い、瞬く間に出て行った。

兄妹は久しぶりに二人きりになった。

「お兄ちゃん、体調はどう？」

食器を洗い終え、ソファーに横たわる和樹の頭の方に腰を下ろすとスースーと軽い寝息を立て眠っていた。麻琴が背もたれに掛けてあるアイボリーのブランケットを広げてフワリと体に掛けてやると、無意識からか和樹は自らくるまるようにブランケットを巻き付けた。

「クスッ お兄ちゃん、なんか可愛い」

よく見ると鼻の形や口元がヒロコととても似ている。そして顔の輪郭や目元は写真で見た実父と酷似している。他に似ているところはないかと、頭の形や手の形、眉にかかる前髪をそつと上げ額の形を見してみる。知的な印象を与える形の良い額。

「ふう〜ん」

「何が ふう〜ん だよ。人の身体検査勝手にして」

「ビツクリしたっ。起きてたの？」

前髪を押さえていた右の手首を掴まれ目をパチクリして和樹を見下

ろす。

「麻琴」

麻琴の大好きな優しい眼差しで見上げられ、声は出さずに微笑んで首をかしげた。

「結婚……すれば」

「え……？」

## 頼み

「もお、なに急に变なこと言って」

手首を掴む和樹の手をそつと外しながら、麻琴は二年間を埋め合わせる罪滅ぼしからの言葉と受け止めたのだ。健悟とはどうなるのか分らない。二人で深い話し合いもしておらず、あの朝『愛してる』と囁かれたにも関わらず避けられているような気さえするのだ。結婚など全く考えられるはずもない。全てのプロセスを一気に削り落とすような話である。そんな気持ちをかき消すように笑いかける。

「お兄ちゃんが結婚したら考えるわ。早く結婚してね、私のためにも」

「ははっ、それじゃあ一生結婚できないかもしれないな」

笑いながらソファから起き上がり麻琴の頭をクシャツと撫でた。何度も畳んできた麻琴への想いを、又その折り目に添って丁寧に畳み深い所にしまいこんだ。

翌日、和樹は数年ぶりに健悟の家へ足を運んだ。

「なんだこれ・・・生活感のない家」

「生活らしいことしてないからな」

「それにしても・・・」

和樹は驚いた。極端に物が無く飾り気もない。そこは殺風景でガラシとしていた。生活らしいことをしていないという言葉通り、男の部屋にありがちなコンビニ弁当の空きパックなどのゴミもないのだ。和樹は呆れた。

「人の家にケチ付けに来たのかよ」

ムスツとして和樹を睨む。男の目から見ても健悟の顔は整った魅力あるハンサムだ。睨む目も美麗を漂わせる。

「いや、今日は相談・・・と言うよりも頼みがあつて来たんだ」

殺風景なりビングの食卓テーブルの椅子を引いて座るとギシッと軋む音がした。向かい側に健悟も座る。

「健悟さ、この家手放す気はないのかよ」

「何でだよ。そんな事考えたこともないな」

「だって、この家でメシすら食ってないだろ。ただ風呂入って寝るだけだろ？」

「そうだけど、いくら俺だって家くらいないと困るだろっ」

「ウチにすればいい、ウチに住めば」

至って真面目な顔だ。決してふざけているわけではない。だが健悟にはそうは思えないだろっ。

「なにバカなこと言ってんだ。そんなことより話ってなんだよ」



健悟はあしらうように話しを切って進めようとする。和樹はうんざりしたように軽く溜息を吐く。

「だからウチに来ないかって話しなんだけど」

「はぁ？何なんだよ、一体。何のために……」

何が何だか分らない掴みどころのない展開に今度は健悟が溜息を吐く。

「俺、家出ようと思ってるんだ」

「……麻琴はなんて？」

「いや、まだ何も話してないんだ」

「やっぱり俺のことが」

「違う、俺の勝手なんだ。技術を学ぶために日本を出ようと思ってる。」

麻琴のことはヒロコさんの所で預かってもらうことも考えたんだが、やっぱり美山の家を空けることはできないだろ。だからと言って完全に一人暮らしをさせることにも心配がある。お前に過保護だと言われるのは承知だ。頼めないだろうか。いや、頼む」

テーブルに両手をつき頭を下げる。昨日といい今日といい、頭を下げて通しである。直ぐに返事をする事が出来ず、テーブルについた和樹の両手を見つめる。

「和樹、俺と麻琴は、まだ始まっていないんだ。

二年前とは違うんだよ」



## 子供の頃みたいに

二人を説得するのに1ヶ月も掛かった。その間麻琴は個人法律事務所に入社し、学生の頃とは違う生活パターンとなった。休みの土日も資料作成の為事務所向かうことも少なくなき、和樹との時間も益々減少していた。

一ヶ月前、麻琴は和樹の話の話を聞かされ戸惑いの色を隠せなかった。確かに日頃から和樹の仕事は忙しく帰宅も月数回と激減していた。それでも海外へ行きつきりで帰らないのとは訳が違う。何かあった時に直ぐ会える距離ではないのだ、技術を学ぶという目標があっても麻琴は直ぐに「いつてらっしゃい」とは言えなかった。が、あまりに熱心に語る和樹に最後は折れた。当初は一人暮らしになるのだとばかり思っていた麻琴だが、話があつてから3ヵ月後の渡米二週間前、突然和樹から「健悟と一緒に住んでくれるから安心しろ」と同居を知らされ驚いた。それもそのはず健悟とは和樹と3人で話をしたあの時以降、連絡は全く取つていかなかったのだ。そして麻琴よりも健悟の説得に時間が掛かった。これは以外なことだった。麻琴が心配じゃないのかと問うと「心配ないわけが無いだろう」と憤怒するが、決して同居を受け入れなかったのだ。そして麻琴の説得に成功したことを知らせると溜息をつき、仕方なくといった様子で一つ頷いたのだった。

## 渡米前日

「とうとう明日行っちゃうんだね」

二人は食卓テーブルで朝食を摂っていた。昨日はヒロコ宅で食事を供にし、暫しの息抜きをした後、夜遅く帰宅した。

「ああ。麻琴、なんかあったら直ぐに健悟に相談するんだぞ」

「・・・うん。お兄ちゃん、たまには電話してもいい？」

不安そうな麻琴を今この場で抱きしめたい気持ちで一杯なるが、これまで同様押し止める。

向こうに行けば、もうこんな気持ちを味わわずに済む

そう思うだけで救われる何かがあった。苦し紛れに笑うことも誤魔化すことも必要なくなる。

「そうだな、たまになら良いよ」

「ね、最後にお願いがあんの」

「なんだ？」

「笑わないで聞いてくれる？」

「内容によるな。でも言ってみるよ」

「うん・・・」

今晚だけお兄ちゃんと一緒に布団で寝たいの。子供の頃みたいに・・・ダメ？」

笑顔のまま凍りついた。

「だって、暫く会えなくなるんだもの。ちょっとくらい我が俣言ってもいいでしょ？」

「いや、でも・・・」

「お願い、お兄ちゃん」

ダメだと言えなかった。今までにこれといった我が俣を言ったことのない麻琴のお願いに愛しさがつのる。正直和樹にとっては辛い夜になる。恐らくは眠れないだろう。

どうせ機内は暇だ。向こうに着くまでに寝腐ろう。

「分ったよ。その代わりに俺の言う事も聞いてくれるか」

「なに？」

「明日、空港まで見送りに来ないでくれ」

「なんで・・・」

「・・・健悟が昼過ぎに荷物運んでくるし」

「いやっ いやよ！」

「でも」

「行くもん。絶対に・・・行くもん・・・」

「・・・ごめん、もう分ったから泣くなよ」

溢れる涙を隠すように食卓テーブルに突っ伏して泣いていた。空港に見送りにくれば麻琴は泣く。最後の最後に泣いた顔を見たくなかった。それにもしかしたら自分も柄になく泣いてしまうかもしれない。どちらにせよ泣いて発つのは嫌だった。それがその前に泣かれてしまったのだ。どうにもならない。

「じゃあ、行ってもいい？」

「いいから もう泣くな」

「ホント？」

「ああ・・・」

「お兄ちゃん、ありがとう。それと・・・ごめんね」

## 旅立ち

「お兄ちゃん、肩までちゃんと布団掛かってる？」

「ああ。お前こそ掛かってるか？風邪引かないようにしろよ」

「大丈夫・・・」

「そうか。じゃあ、おやすみ」

和樹の六畳間で麻琴の願い通り二人は一つの布団に枕を並べた。平静を装う和樹の気持ちも知らず、麻琴はまた一つ無理を口にする。

「ね、お兄ちゃん」

「ん？」

「手・・・繋ぎたい」

「・・・」

「ダメ？」

「・・・おかしいぞ、子供みたいに」

ダメと断る代わりに子供を優しく咎めるような口振りで返した。すると麻琴はクルツと和樹の方へ体を向けると勝手に手を握った。

「あっ、こらっ」

「ふふっ あったかい手。お兄ちゃんと手を繋ぐのなんて小学生依頼かな。」

「・・・本当に明日行っちゃうんだね」

「ああ。でも一生会えないわけじゃない。深刻に捉える必要はない」

「や」

「うん……でも……」

「でも？」

「寂しいよ。お兄ちゃんと離れて暮らすなんてこと、今まで無かったんだもの」

麻琴のおでこが擦りつけられる様に肩に寄せられた。和樹はごく自然に空いている方の手で麻琴の頭を撫でていた。今にも互いの鼓動が聞こえそうだ。こんなに近くに感じるのは、確かに麻琴が小学生の時からだろう。懐かしさと同時に、やり場のない切ない気持ち加重たく押し掛かる。

一瞬連れて行くことも考えなかったわけではない。しかし麻琴には麻琴の選んだ進むべき道がある。閉ざすことなどできるはずがない。そして自分以外に信頼できる人間を思い浮かべると、やはり健悟の顔が浮かんできた。ヒロコやマサも信頼できるが、和樹が甘えたり我が侬を言いやすいのは誰を差し置いても健悟しかいない。

「お兄ちゃん、寝た？」

返事をせず寝たフリをした。暫くすると麻琴の小さな寝息が聞こえてきた。手は繋がれたままだが寝返りを打てば呆気なく外れてしまう程ゆるくなっている。その手を繋いでいたくて身動きもせず顔だけ麻琴の方へ向け、そっと額に口づけた。

空港へは麻琴とヒロコとマサの三人が見送りに来た。健悟はどうしても外せない打ち合わせがあり来れなかった。

「麻琴のことをどうか宜しくお願いします」

「なに他人行儀なことを言っているんだ。心配することないから安心して行っておいで」

「ありがとうございます」

背筋を伸ばしキチツと頭を下げる。和樹の生真面目な一面にヒロコは若くして無くなった和樹の実父の面影を見る。和樹にその思い出などないが、その似た仕草や性格に血の繋がりの不思議を思わずにはいられない。

「じゃあ、そろそろ行くよ。向こうに着いて落ち着いたら連絡するから」

「うん。お兄ちゃん、気をつけて行ってきてね」

無理に笑顔を作るが、麻琴の大きな瞳からは自然と涙が溢れ出る。

「ばか、泣くなって」

頭をポンポンと撫でると、声もなく麻琴が胸に抱きついてきた。見るとヒロコもマサも涙ぐんでいる。貰い泣きしそうになった時、和樹の目にスーツ姿の健悟が映った。その堂々とした風貌に心底ホツとした。「頼む」と一言いうと、健悟が黙って頷き見た目と違って優しく麻琴を引き離した。それを見届けると和樹は一度も振り返ることなく真っ直ぐ歩き人混みの中に消えていった。

そしてこれから

二人の切ない同居生活が始まるのだった・・・



## 見えないルール

麻琴の隣室にある12畳の洋室が健悟の部屋となった。ベランダは二つの部屋を行き来できる造りになっている。荷物は衣類とパソコンくらいで相変わらず必要最低限の物のみで殆どなく、布団も客用のものをそのまま使うことになっている。

「お兄ちゃん、無理言っただんでしょ」

「いや、まあ・・・」

「ごめんね」

健悟のハッキリしない態度に、仕方なく同居を合意したのだと察した。これからの生活に不安が過ぎる。

「違うんだ。知っての通り一人暮らしが長くて、これから二人で上手くやっていけるのかって心配だね」

不安をかき消すように苦笑いで答える。健悟の闇はいつもそこにある。そしてふとした会話の中でそれを思い知らされる。麻琴自身、両親は早くに他界してはいる。しかし常に和樹がいた。親がいない寂しさはあれど不安も不満もなく守られて育ったのだ。健悟と自分との違いをこの二年間、麻琴なりに時間をかけ考え理解してきたつもりだ。

「健兄、私も心配よ。だから一つだけ約束をしてほしいの」

「なにをだ？」

「我慢はしないって。思いやりは大切だけど、遠慮のし過ぎになら

ないようにしない?」

「ああ、なるほど。そうだな、そうしよう」

不安が全く無いわけではないだろうが、麻琴の言葉にやっと笑顔を見せた。その後生活上のいくつかの簡単なルールを決めた。夜10時を過ぎる時は8時までには連絡を取り合うこと、基本的に食事は各々摂るが、同時刻に揃っている場合は一緒に摂る。洗濯や掃除も各々行っても良いが、洗濯は経済的なことを考えると纏めて行うことを基本とする・・・等々。

健悟と同居して1週間が経った。初日の夜だけ8時半に帰宅したが、後は12時を過ぎての帰宅だった。寝ずにリビングで待っていると「待つ必要は無い、好きな時に風呂に入り、眠たくなったら待たずに寝ろ」と素っ気無く言われた。和樹がいた時はそうしていた。だが決定的に違うのは、健悟は12時を過ぎても1時までには必ず帰宅する。

「お帰り」

「ただいま。寝てていいのに」

玄関に迎えに行くと靴を脱ぎながら顔も見ず疲れた声を出した。

「明日休みだから少し夜更かししてただけよ」

「そうか・・・風呂入って寝るよ」

「じゃあ、準備するからちよっと待ってて」

「いや、自分でするから」

言い捨てるようにして階段を上がっていった。その後姿は『話しかけるな』と発していた。この一週間、殆ど会話がなかった。食事もたった一度一緒に食べただけで、健悟は外食が中心だった。風呂に入って寝るためだけの帰宅。離れていた二年間もずっとそうだったのだろうか。とうてい人間の生活とかけ離れているように思えた。二階から降りてきた健悟に聞く。

「ちゃんと栄養のあるもの食べてる？」

「適当にな。気にするな」

「・・・明日はお休みでしょ？」

「ああ」

「美味しいもの作るから一緒に食べてくれる？」

「だからそんなに気を遣うなって」

「そうじゃないよ。一緒に食べてほしいの。」

毎日帰ってきてるのに会話もなくて食事も別で寂しかったの」

大きな目に涙を浮かべ真っ直ぐ見られると、総動員されていた理性の集団が散り散りに散ってしまいそうになるのを感じる。

「健兄は、麻琴のいるこの家に帰るのが嫌なの？」

麻琴のことも嫌いで避けてる？」

最後の方は堪えきれずに声が震えた。

嫌いで避けてる？ そうなれたらどれだけ楽か



## 不器用な男

健悟は言葉に詰まり麻琴の顔から目を反らした。その態度に言いよ  
うのない淋しさと絶望感を感じ、麻琴はそれ以上は何も告げぬまま  
健悟の脇を通り抜け階段を上がった。一段上がる毎に心の距離も離  
れるような気がする。健悟は麻琴の部屋のドアが閉まる音を聞いて  
から仏間へ向かった。襖を開き電気を点けると押入れの奥から一冊  
のアルバムを取り出した。そして赤い布地の表紙を開くと懐かしい  
過去へと引きずり込まれた。

生後半年くらいの麻琴が座布団の上に寝かされ、その両脇に7歳の  
和樹と健悟が麻琴に頭を引っ付けるようにして仰向けになり笑顔で  
カメラを見ている。そこには邪も苦も悩みもなく、ただまっさらな  
幸せしかなかった。あの頃に戻って、7歳の自分に言ってやりたい  
ことがある。

歪んだお前には麻琴を幸せにできない。好きになる前に気が付  
け。

風呂から出ると深夜も2時半を回っていた。静かに階段を上がり部  
屋に戻ると、麻琴の部屋からカタリと小さな音がした。

まだ起きていたのか

何を思っ何を考えていたのかと想像すると、当然それは決して楽  
しい事ではないと察しがつき切なくなった。布団に入っても直ぐに  
は寝付けず、明け方になってようやく深い眠りについた。

コンコンッ

ドアを叩く音で目が覚めた。

「なんだ」

ドアの方へ向かって気だるい声で返事をする、向こう側から遠慮がちな声が返ってきた。

「ごめん・・・寝てた？なかなか降りてこないから心配で・・・」

「ああ、悪い・・・今何時だ」

「もうお昼になるよ」

体を起こし時計を見ると12時近かった。起こされなかったら12時は確実に過ぎていただろう。

健悟がドアを開けると目の前に申し訳なさそうに俯く麻琴がいた。それと同時にコーヒーの芳香な香りが鼻をくすぐった。急に空腹感に襲われ腹が鳴った。

久しぶりに手料理を食べた。外食などとは全く違う満足感が腹と心を満たす。麻琴は昨夜のことに一言も触れず、他愛の無い話を取り止めもなくしている。そして麻琴の健気な明るさに救われる自分にフツと笑いが込み上げた。

「うまかった。やっぱり家で食うのいいな。」

麻琴の下らない話を聞くのもいいし、部屋中に広がるコーヒーの匂いも落ち着く」

一瞬キョトンとした麻琴だったが、一瞬にして咲きほころぶような笑顔を見せた。

「もうっ 下らない話ってなによっ。失礼ねえ」

口を尖らせて睨む顔は社会人とは思えない幼い可愛らしさを残し、健悟をホッとさせた。麻琴自身は何も変わっていないのだ。そう、変わったのは自分だ。和樹の本心を知ってしまったからだ。

和樹が「技術を学びたい」と言いだしたのは紛れもなく自分と麻琴のことが関係していた。和樹は最後までそうは言わなかったが、健悟には分かっていた。一切の気持ちを隠し通す道を選んだ和樹に、同じ男として納得がいかなかった。が、自分と和樹の立場が逆だったらと考えると、似たような道を辿ったかもしれない。麻琴の気持ちを一番に考えてみると自ずとそうなる。苦しい選択であることは間違いない。麻琴を頼むと頭を下げにきたあの時や、空港での和樹の顔を思い出すと、その気持ちが分かるだけに涙が出そうになる。

「頼む、絶対に泣かせないでくれ。大事にしてやってくれ」

何度も頭を下げた。健悟自身、麻琴への愛情は自分の両手からはみ出るほどにあるのだが、和樹のいう「大事にしてやってくれ」に対し、どうすればそうできるのか自信がなかった。それは愛情を受けず育った健悟にとっては難題だった。そうしようと思えば思うほど、上手く距離がとれなくなり、気付くと麻琴の前では、迷走を繰り返すただの不器用な男でしかなかった。

もつとスマートに関係を作れる人間だったのにな・・・

鼻歌を歌いながらテーブルを片付けている麻琴の後姿を見ると、

それだけで幸せに浸っている自分がいた。そして飲み終わった健悟のコーヒークップに麻琴が手を伸ばした時、健悟は無意識にその手を掴んでいた。



会いたい時、それは・・・

突然健悟の大きな手に痛いくらいの力で掴まれ驚いた。そして二人はただ黙って絡み合うように見つめ合っていた。まるで互いに何を考えているのか探り合うように……。鼓動が高鳴り、そして麻琴がそれ以上の触れ合いを心の奥で密かに望んだその時、無情にも健悟の手は離れていったのだった。

「悪い、何でもないから……。気にしないでくれ」  
「・・・うん」

突き放されたような孤独感に押し潰されそうになりながらも、自分から近付こうとするとこれ以上の距離を広げてしまいそうで麻琴は無理に笑顔を作った。

珍しく6時に仕事が片付き事務所を出ることができた。これから30分、電車に揺られ帰路につく。おそらく健悟の帰宅は深夜になるだろう。健悟との休日が毎回一昨日のように気まずいものになるのかと思うと、月曜の今日から気が重たかった。そんなことを上の空で考えながらトボトボと駅の方へと向かった。ふと周りを見るとサラリーマンやOL、2〜3人の女性のグループや仲の良さそうなカップルが皆楽しそうに歩いている。

今の自分は・・・社会人になり学生の頃のような時間の使い方はで

きなくなつたが、忙しいながらも楽しく仕事自体は充実している。就職が決まつたと伝えた時の和樹の顔が忘れられない。喜びよりもホツとしたような、ちよつと泣きそうな表情を見せたのだ。成人した時も同様、麻琴の新たな節目は親代わりの和樹にとってはその都度「役目」を果たしたと胸を撫で下ろすものだ。それもそのはず、常に麻琴に関する責任を背負つてきたのだ。17歳の頃から・・・。

忙しいと言っても、回数こそ減つたがこれまで通りspanにも顔を出すし、ヒロコたちのマンションへ足を運ぶこともある。親友の美佳は麻琴以上に時間の工面が難しく時々電話で連絡を取り合う程度だが、愚痴を言いながらも生き生きとしていた。和樹とはエアメールでのやり取りをすると息巻いている。電子メールという便利なツールもあるが、昔ながらの直筆に拘る美佳。ただ、積極的な面もあるが深い内面では控え目な部分もあつて、『気持ち素直に伝えるけど、それを押し付けるようなことはしたくないの』と、ある時そんな風に言つていた。麻琴には積極的になれと言うが、結局のところ美佳も麻琴と同じように不器用な恋愛を続けているのだ。そんなことを思い出していると、ふと誰かに会いたくなつた。本当は美佳に会いたいが暫くは遊べないと言われたばかりだ。spanにでも行けばヒロコやマサ、顔馴染みの客とも会えるかもしれない。あれこれ考えていると携帯電話の着信音が鳴つた。慌ててバッグを取り出しメインディスプレイに映し出された非通知を目にし、誰だろうと首を傾げながら耳に当てる。

「もしもし・・・？」

「久しぶり。誰だかわかる？」

「その声は翔太くん？」

「大正解。元気だった？」

中年のサラリーマンに軽くぶつかられ、歩道のど真ん中に立ち止まっていたことに気付き脇へよけた。久しぶりの翔太の明るい声だ。珍しく仕事から早く解放され、ダメもとで麻琴に電話を寄越したと言う。一瞬健悟からかもしれないと思ったことは伏せておく。誰かに会いたいと思っていた矢先の電話。以前にも翔太からの電話で助けられたことを思い出した。誰かに会いたい時、それはいつも健悟が絡んでいることに麻琴は気付いていない。

「先輩にウマイ店教えてもらっただけ、今から食事でもどうかなって」

「私なんかでいいの？他に誰か」

「麻琴ちゃんと行きたいんだけど、ダメ？」

少し強引な翔太に面食らった。そして心地よさを感じ返事をした。

「美味しいもの食べたいです」

「了解！」

翔太は車だからと、わざわざ麻琴の居る駅まで迎えに来た。麻琴の就職活動が思うように行かず、なかなか美佳や翔太とも会えずにいた。久しぶりに会う目の前の翔太は、学生の頃とは違いキチツとスーツを身に着け、軽い癖毛の髪の毛も以前より短くなっていた。だが相変わらず可愛い顔で笑っていて隔たりを感じさせない。

「麻琴ちゃん元気だった。会わない間にオトナっぽくなったね」

「あはっ 親戚のおじさんみたいな感想ね」

翔太くんこそスーツ似合っつてて社会人って感じ。」

車に乗り込み走り出すのと同時に互いを懐かしんだ。お互い少しだけ見かけの変化はあるが中身はそう変わっていない、以前と同じよ

うに直ぐに会話に入り込めた。翔太とは会った時から波長が合った。これまでずっと緊張感もなく気遣いも起こさずにきた。それは翔太の平らかな性格と安定した精神がそうさせるのだろうと麻琴は見ている。

20分程で目的地へ到着した。古民家風の落ち着いた和風レストランだった。メニューを見て悩んでいると翔太が率先してコースを頼んでくれた。

「なんか値段書いてなくて高そうなんだけど・・・」

身を乗り出し翔太の耳元で小声で言うと、クスクスと笑いながら「大丈夫、俺の奢りだから。それに結構安いんだ」と安心させた。

「翔太くんて優しいね」

「そうかな。普通だと思よ。ちゃんと下心あるし」

## 破られたルール

驚きのあまり声もなく翔太を見ると、ニコツと微笑みで返された。

「そういうことっ」

「あの・・・」

「まあ、取り敢えずは楽しく食事しようよ。ね」

「・・・うん」

そうは言われても落ち着かない気分だった。次々に出されるコース料理は上品な薄味で確かに美味しかったし翔太もいつも通りだが、先の言葉に対する先入観にとらわれ気忙しさがあった。食事を済ませると二人は店を出た。車に乗り込むと翔太が申し訳なさそうに話しかけてきた。

「さつき変なこと言ってごめんね。その・・・下心がどうのって」「ううん。ちょっとした冗談だったんでしょ？」

ホツとした。よく考えてみればちょっとしたからかいだと直ぐに見抜けたはずなのに。自分の自意識過剰に恥ずかしくなった。しかし翔太は静かな声で否定した。

「冗談・・・言い方は悪かったけど、冗談なんかじゃないよ。麻琴ちゃん、真面目に言うけど、俺と付き合うこと考えてくれないかな」

助手席の麻琴の方を向くと真剣そのもので見つめた。何も答えられ

ず押し黙る麻琴に言葉を続ける。

「今、付き合ってる特定の人っているのかな」

その問いに胸が苦しくなった。健悟とは・・・付き合っているという現状はない。諦めたように顔を左右に振ると翔太は安心したように車を発進させた。

「返事はいつでも・・・と言いたいところだけど、できれば数日中に欲しい」

「・・・どうして私？」

「理由？結構たくさんあるんだけど、言っていていい？」

「うん」

「まず、笑顔と笑い声が可愛い。それから頑張りやで真面目。不器用で守ってやりたくなるところも魅力の一つだと思う。容姿がかなり魅力的なのに、本人がそれに気付いていない鈍感さもいい。飾りすぎず粗野でもないところも、誰に対しても分け隔てなく平等で親しみやすいところも」

「もっ もういいからっ。もう恥ずかしくて聞いてられないっ」

顔を真っ赤にして翔太の賞賛を遮った。真面目に話していた翔太はその言葉に声を立てて笑った。

「あははっ 今日はじめて笑ったよ。実を言うと今日は初めから麻琴ちゃんに告白するつもりで来たんだ。朝から緊張してて・・・で、こう見えて結構舞い上がってたりもする。

でも今言ったことは全部本当だよ。それに麻琴ちゃんを好きになっただのは最近なんかじゃない。二年以上前からなんだ」

キスした時からとは言えなかった。健悟の影を少しでも感じさせた  
くなかったからだ。

「そんな前から・・・」

「うん。だから麻琴ちゃんも真剣に考えて返事してほしいんだ。  
取り敢えず今日はこのまま送るよ」

11時過ぎ、車は自宅前に止まった。

「ご馳走様でした。どうもありがとうございます」

「どういたしまして」

「じゃあ・・・」

ドアに手を伸ばそうとした時、その手を翔太に掴まれて引き寄せら  
れた。そして身動きの取れぬまま一瞬のうちに口付けられ、抗う隙  
もなく唇は離れた。

「おやすみ」

「おやすみなさいっ」

慌てるようにガチャツとドアを開けると、麻琴は小走りに玄関の方  
へと走った。鍵を開け姿がなくなるのを見届けてから翔太は車を出  
した。そして直後、スーツ姿の大柄な男と車はすれ違った。

「早瀬弁護士・・・？」

この時、麻琴はまだルールを破った事に気が付いていなかった。

## 居場所

予想もしなかった翔太のまさかのキスに動揺した。軽いフレンチキスだったがいい加減なものではなかったと思う。嫌ではなかったが同意の許でもない。交際を申し込まれたその日に、返事も待たぬ状態でのキス。そして健悟ではない相手。

玄関を入り真つ先に洗面所に向かい冷水で顔を洗った。タオルで拭いても拭いても何故だか止めどなく涙が溢れる。言いようの無い感情に自ら振り回され、何度か大きく深呼吸をして落ち着かせるしかなかった。そしてそのままリビングへ向かおうと廊下に出た時、玄関のドアが開き健悟が立っていた。

「お帰りなさい。遅かったのね」

ぎこちない笑顔で出迎えた。健悟は表情一つ変えず数秒黙っていた。

「遅かったのは自分の方だろ」

「え・・・」

鋭い目で見られ、背中にヒヤリとしたものを感じた。靴を脱ぐと健悟は麻琴を通り越して先にリビングへと入って行った。その背中が触れると火傷でもしそうなほど怒りに燃えていた。恐る恐る麻琴も後を追うようにしてリビングへと入る。

「ご飯食べた？」

「なぜ連絡しなかった」

麻琴の問いなど耳には入っていないのか、はたまた無視しているのか質問を被せた。



「あ・・・」

「忘れたか。10時過ぎる時は8時までには連絡するというルールを言い出したのは麻琴自身だろ」

「ゴメンなさい。私、うっかりしてて・・・」

門限を破った時の和樹の愚痴などとは訳が違う。そこには火の点いた導火線がジリジリと爆弾に近付いて、爆発するまでのカウントダウンをしているかのように見えた。

「男なんだろ。隠すことはない」

「え・・・ちがつ」

「俺じゃなくてそいつと住めばいいのに」

「待って、違うのっ。翔太くんは」

「ああ、富樫 翔太か。あいつなら安心じゃないか。

じゃあ、さっそく俺は明日出ていくよ」

「健兄っ 聞いてっ」

麻琴の話も聞かず健悟は物凄い足音を立て階段を上がって行った。健悟があんなに短気でせっかちだとは思わなかった。あれ程までに怒る理由も分からない。連絡を忘れたことは悪かったが、自分は社会人で学生の頃とは違う。そこまで時間に縛られなくても・・・ふと食卓テーブルの上に目が行った。麻琴の好きなケーキ屋の箱が置いてあった。箱を開けると以前麻琴が「ここのが一番美味しい」と絶賛したシュークリームが5個整列していた。店は遠回りしなければいけないような場所にあり、決して近くはない。わざわざ買いに行っただとしか思えなかった。

奇しくも今日、抱えていた仕事の一つがやっと解決し、麻琴と同じ

く健悟も早く退社した。帰りがけ麻琴の好きなシュークリームを買ったため、家とは反対方向に車を走らせ、帰宅したのは7時だった。8時までには連絡はなかったのでそろそろ帰宅する頃かと食事も摂らず待っていた。だが、9時になっても10時になっても帰宅せず、心配になり携帯に電話をしてみたが出る事はなかった。最近痴漢や通り魔などがニュースになっていたことが脳裏を過ぎり居ても立っても居られず駅まで迎えに行ってみたが、やはり姿は見えず携帯も置いてきたこともあり戻ることにした。そして自宅近くで一台の乗用車が横切り家の前で停まった。顔までは見えなかったが運転席と助手席に人影が見え、助手席の人物が麻琴であることはそのシルエツトで分かった。無事に帰ってきたことにホッと胸を撫で下ろすのと同時に、そのシルエツトは運転席側へと傾き、顔と顔がピタリと重なった。それは暗闇にも男と女がキスをしたことを明確に映し出していた。頭に血が上り、直ぐには足が動かなかった。だが麻琴が車を降り、車が発進すると自分の足にもギアの切り替えが来た。両手に拳を握り、一步進む毎に冷静さを欠いていくのが自ずと感じ取れた。

麻琴には男がいたんだ。

当然といえば当然だと思いつつも、腹の底では怒りがマグマのようにグツグツと煮えたぎっていた。玄関のドアを開けると麻琴が所在無さげに突っ立っていた。なぜか濡れた顔に赤い目をしていた。最近の麻琴が自分に脅えているように見えていたのは、自分に何かされるのではないかという警戒からのものだったのかもしれない。好きな男がいたら今の自分の存在は疎ましいだろう。健悟は一人で結論づけ納得した。

納得しても神経はピリピリと針を刺すように気持ち逆撫でした。リビングに入ると言いたくも無いし聞きたくも無いのに、男がいることを認めさせようとした。麻琴は一生懸命に言い訳をしようとし

だが、吹荒れそうなマグマに蓋をするかのようにことごとく遮った。健悟自身、翔太の名前が出た時には想像以上に絶望的な気持ちに駆られていた。学生の頃の翔太は優秀で、それなりに注目されていたし、とりわけ引っ込み思案の麻琴でさえ心を許していた存在でもある。そればかりか、常に翔太は麻琴のことを気に掛けていた。二人には健悟の知らない絆があるように思われ、自分の居場所を見失いそうで息が詰まりそうだった。そもそも自分の居場所など初めからあったのだろうか。布団の上に寝転がり、グルグルと目まぐるしく纏まらない自問自答が繰り返された。

長い夜になりそうだ・・・

このまま抱きしめて

コンコンッ

「健兄・・・起きてる？」

ザツとシャワーをすると12時を少し回っていた。頭の中は健悟のこと一杯で、気が付くとドアをノックしていた。返事がないので寝たのかと思いつながら、そつとドアを開けると、服を着たままの健悟が布団の上に大の字を書いていた。

「返事もしてないのに開けるかフツウ。素っ裸だったらどうすんだよ」

ブスツと不機嫌な声色。そう言えば昔、あれは中学生になった頃だっただろうか。今まで優しかった健悟が急に距離を置くようになって、訳が分からず、それでもまとわりついた時があった。話しかけてもろくに返事してもらえず、返事をしてくれたと思えば今のような簡単には寄せ付けないオーラを声色に出していた。

「ごめん。返事が無かったから・・・怒らないでよ、そんなに」

「はあ・・・明日帰ってきたら荷物纏めて出るから安心しろ」

投げやりに言い捨てられた言葉。健悟は本気で言っている。麻琴の言い訳も何も聞かず、たった一人で結論を出して・・・

「やだっ。絶対にヤダから」

「・・・」

「健兄ずるいよ。私の言い分も何も聞かずに全部自分で決め付けて全部誤解だから。健兄がさっき言ってたこと、全てが事実と違うから」

「なにが違うんだ。アイツと付き合ってるんだろ」

「だから付き合ってたなんか・・・今日、付き合うことを考えてほし  
いって申し込まれたけど、返事もしてないわ」

健悟の鋭い目で睨みつけられ一瞬怯みながらも、絶対の自信をもって正々堂々と反論した。しかし健悟は呆れたように鼻でせせら笑い、布団から上半身を起こした。

「お前俺をバカにしてんの。さっき車で熱いキスをしてただろ。付き合ってもいない男とキスするのか。だったら淫乱の気でもあるんじゃないか。和樹知ったら泣くぞ」

その言葉に心は打ちのめされ、頭の中で何かが破裂したように粉々に散っていった。涙も出ず、ドアの取っ手を握ったまま健悟の顔を見つめる。そして徐に健悟のもとへ近付くと、

バチンツッ！

右頬を思いつ切り引っ叩いていた。力任せに叩いた方の右手が、その衝撃でジリジリと焼ける様に痛み我に返った。

「あ・・・健兄っ、ごめっ - -」

「麻琴、ごめん。今のは言い過ぎた。本当に悪かったっ」

麻琴の肩を抱きしめ胸に引き寄せると、片手で後頭部を覆い何度も謝る健悟。僅かに肩が震えていた。

「健兄、ちゃんと私の話を聞いてくれる？  
そして信じてくれる？」

「・・・ああ」

「このまま・・・聞いて」

「ああ、分かった」

「キスはしたわ」

いきなりの告白に抱きしめる腕に力が入った。

「車を降りる時に突然・・・付き合っではないし、明日にはNOの返事をするつもり。つまり、私は翔太くんとは付き合わない」

「無理矢理・・・されたのか」

「ううん。そうではないの。だけど許可したものでなくて・・・」  
「拒否しなかったのか」

「しなか・・・った。だけど感情が見つからなかったの。翔太くん  
のことは好きだけど・・・健兄とは違った」

健悟の両手が離れそうになり、しがみつくようにして麻琴から密着すると、その広い胸からは懐かしい健悟の匂いがした。

「このまま聞いてって言ったでしょ。このままちゃんと抱きしめて  
珍しく押しの強さを見せた。健悟は言われた通り両腕を回し抱きし  
めるしかなかった。暫しの沈黙の後、遠慮がちな小さな声で麻琴は  
それを口にした。」

「ね、抱いて……」

「ま・・・こと・・・」

「もう泣いて困らせるようなことしないから出て行くななんて言わないで。」

愛して無くても、体だけでもいいから・・・抱いて」

健悟に向かい合うように布団の上に座ると、自ら薄いピンクのネグリジェのボタンを一つずつ胸の下まで外し、肩からパサリと落としました。下着など着けていない陶器のような白い素肌が明るい電気の下に艶やかに映え眩しい程だ。

麻琴らしからぬその大胆な行動の一つ一つを健悟は驚きの眼差しで見つめていた。健悟とてこれまで何度麻琴と抱き合いと思っただか知れない。その白く柔らかな肌を目の前にし、それに負けぬ男などいるだろうか。

「麻琴・・・」

健悟は胸の内であらゆる葛藤を繰り返しながら結局は降参するしかなかった。

そして細い肩に手を回すと強く抱き寄せると何度も唇を合わせた。今の健悟にはすでに翔太の顔はもう浮かばない。ただただ、麻琴へ



の執着と欲望、そして愛しさで溢れ 溺れそうだった。上ずりそうになる声をなんとか平静を装い落ち着かせる。そのせいで少しづつきらばうになっただかもしれない。

「電気、消さないぞ」

「・・・いいよ」

恥ずかしそうに俯き頬を赤らめる。今まではどうしても麻琴が恥ずかしがるので極力照明を落として愛し合った。だが今日は違う。そもそも自分で言い出したことだ。愛されて抱かれるのではないから照明の配慮など必要ないのだろう、と煌々とした電気の下で組み敷かれ、薄れる思考で言い訳するように無理矢理解釈した。それでも麻琴は良かった。体だけでも健悟との埋められなかった隙間を、そして少しでもこの家に引き止めることができるのなら・・・。

最中、健悟は何度も麻琴の名前を呼び、何度も抱きしめ『愛してる』と繰り返した。

健悟はこの二年間の隔たりを埋めようとしていた・・・。

「苦しくなかったか」

「う・・・ん・・・ちょっと」

「麻琴、この二年付き合った男は？」

「なんで今そんなこと・・・」

「いや、麻琴の中キツかったから・・・さ、その・・・」

「どっぴいっ」と。」

「だから・・・まあ　いいや。何でもない」

「あっ・・・ん」

敏感になった胸の突起に軽く吸い付かれ全身が跳ね上がるようになった。今になって明るい部屋での行為にひどく羞恥をかき立てられ慌てて布団を被った。そっと健悟を顔をのぞき見ると、そこからは険しさは消え失せ、穏やかで以前のような温かさが戻っていた。だが、これは今だけでまた朝目が覚めると元に戻っているかもしれない。健悟の心が自分に戻ったなどと誤解してはいけない。そんな愚かな誤解をしてしまえば、またきつとそのうち辛く苦しくなってしまう。隣りで横たわる健悟の肩に頭を預けながら心に言い聞かせた。

『愛してるといふ甘い囁きは行為の為にある呪文のようなもの。決して勘違いしてはダメ』

「麻琴、愛してるよ」

肩に乗せられた麻琴の頭にキスを落とす健悟の本心は、胸の奥、心の方まで届くことはなかった。

目まぐるしく色々な感情が入り乱れる中、健悟の広々とした胸に抱かれつつらうつらと夢の世界へ吸い込まれ規則正しい寝息を立て始めた。健悟は麻琴の額に掛かる髪の毛をよけ優しくキスをした。そして溢れそうな愛と優しい眼差しをもって寝顔に語った。

「麻琴、これからは沢山の会話をしよう。同じ時間を大切にしてください。来を見よう。」

もう、すれ違いはいい。いつか今までの二年間を笑えるように・・・

「

## 私の好きな人

あれから2週間、健悟の帰りは早い時で8時、遅くても10時を過ぎることがなくなった。毎日機嫌が良く、以前よりもずっと口数が増え、麻琴への優しい気遣いも見られるようになった。例えば食後の後片付けや風呂洗い、洗濯物をたたむなど、家事に対し積極的な手助けをするようになったのだ。健悟にしてみれば二週間前に二人の心は通じ合い、そしてそれまでにあつた蟠りから開放され気持ち的にもグンと近付いたわけで

『二人の時間を大切にして少しでも幸せと安心感を与えてやりたい』そんな想いからであつた。

しかし麻琴とすればその意図することとは正反対に受け止めており、以前からは全く考えられない健悟の変化に不安を感じずにはいられなかつた。そして変化はそれだけではなかつた。あれからは頻繁に体を重ねるようになり、麻琴はその変化を全体的にこう捉えている。『愛のない交わりを少しでも正当化するための優しさだから、本気にしてはダメ』

ぬか喜びして傷つくのが怖かつた。

本心からの「愛してる」の言葉も、愛しみからの優しい行動も、全てが裏目裏目に出ていた。

「いじめんなさい」

とある喫茶店の隅の席。学生の頃に良く通った木の温もりのあるきこりの森。とは違い、白を基調にシャープでモダンな造りで清潔感もあるが、少しばかり寒々としていて居心地はイマイチだ。

「そう……か。理由、聞いていいかな」

些か以外そんな声の翔太。麻琴に付き合っている相手がないのだから断られる理由は自分の何かにあるのか、それとも……

「……」

「付き合ってる人いないんだよね？」

「うん……でも、ずっと好きな人が……」

「早瀬さん……？」

言葉の変わりに俯いたままコクンと頷いた。翔太は店の入り口の自動ドアの方を見て力なく細い溜め息をついた。そして短くなった髪の毛を両手で梳きながら天井を仰ぐと口を開いた。

「麻琴ちゃんの気持ち、ちゃんと伝えてるの？」

「……」

「あのさ、実を言うと美佳ちゃんから聞いてたんだよね。早瀬さんと同居してること。」

それ聞いたら焦っちゃって……それで早瀬さんと元の鞘に収まっていなかったら付き合ってたほしいなって思ったんだ。もう……よりは戻ったってこと？」

麻琴は首を左右に何度か振って否定を見せた。そんな麻琴を見据えたまま翔太は質問を重ねた。

「まだ気持ちは伝えてないんだね。だったら僕の入り込む隙はある

「思っていいかな」

「伝えてないし、伝えるつもりもないわ。近付くと遠のいてしまうの。」

「だから私はいまのままが良いと思ってる。中途半端と思うかもしれないけど・・・」

「だから翔太さんの気持ちに応えることはできないの」

「そんなの変だよ。」

「気持ちが通い合っていない方が安心だとも言ってるみたいじゃないか」

「でもっ・・・もう、いいの。」

「今の方が前よりずっと優しいし、時間の合う時に・・・お互いに過ごしやすいから。」

「それって、もしかして体だけは繋がってるってやつ？」

「・・・」

「なんか嫌だな、そういうの。麻琴ちゃんらしくないな。」

「早瀬さんも同じなのかな。ああ、そうか、早瀬さんがそう仕向けたんだ。」

「自分と付き合っしてほしいから言うんじゃないけど、人として男として間違ってるよ。やめなよ、そんな男。」

「ハッキリ言うけど、ロクなヤツじゃないよ。」

「初めて翔太から他人を否定的批判する言葉を耳にした。」

「自分のことならまだしも、健悟のことを侮辱され胸が痛くなる。だが逆の立場であったなら、同じようなことを口にしていたかも知れ

ない。翔太はきつと間違ったことは言っていない、頭ではそう思っ  
ていながらも、

「翔太くん、もうやめて。言わないで。私の好きな人を、それ以上  
悪く言わないで……」

麻琴は椅子から立ち上がっていた。涙を必死に堪え、頑なな眼差し  
を向けて。

## アルバムと冷えたカレー

涙を堪えているのは翔太も同じだった。体だけ繋がっているという事実を知り、カツとなり麻琴の気持ちへの配慮は欠いたかもしれない。だが今すぐにでも目を覚ましてほしいと言う気持ちの方が勝るおっとりとしているが芯の強い麻琴が、なぜ・・・なぜ早瀬健悟に固執するのか。確かに誰が見ても端正な容姿は明らかである。そして知性も持ち合わせ、ここ二年、弁護士界では大きな畏怖と羨望の的となり、更なる注目を浴びるようになっていく。

でも女たらしの優柔不断じゃないか。どうせ他にも女泣かせてるんだろ。

翔太は喉まで出掛かる言葉をグツと飲み込み、口を噤む。

「訂正はしないけど、これ以上は言わないから取り敢えず座ってよ」  
その言葉に麻琴は黙ってストンと椅子に腰掛けた。硬い椅子で座り心地が悪い。いや、本当は椅子のせいではないことくらい自分でも分かっている。

『心はいらない、体さえ繋がっていれば・・・』  
翔太の言う通り、自分らしくないし間違ったことをしている。だが離れても思い続けていた辛い二年間を思うと、健悟のいない生活はもう耐えられない。

矛盾した相反する行動と気持ちに、その身の置き場がなく何処に居



ても居心地が良くないのだった。

「嫌な気持ちにさせてごめんなさい。

でも、翔太くんが思っているより悪い人じゃないの。

それから今の関係は・・・私が望んでそうしてるの。だから・・・」

「そんな話、聞きたくないな」

奥歯を噛み締め、麻琴から目を反らした。

「ごめんなさい・・・」

謝ることしかできなかった。

「ただいまあー」

9時ジャスト。健悟は靴を脱ぎながら犬のように鼻をクンクンさせた。先に麻琴が帰宅した場合、大抵は夕食ができているからだ。今日はカレーライスの匂いがする。健悟が口にするのは数年ぶりだ。麻琴も健悟も好物だが、唯一和樹が嫌いな食べ物である。そのせいで滅多に作ることはなかった。

「おかえりなさい。お腹空いたでしょ。直ぐ準備できるから」

「カレーかあ。すげー久しぶりだな。上手そー」

嬉しそうに洗面所で手を洗い、その足で仏間に入り手を合わせて戻

ってきた。

鍋に向かう麻琴の後ろに立ち、大切に包むように背中を抱きしめ耳元に優しくキスをする。幸福感の裏側に不安をかかえながら、麻琴は目を瞑って受け入れる。

「愛してるよ、麻琴」

最近よく聞くようになった言葉。その言葉を本気にしてしまうと、何時か立ち直れないほど傷つく。「だから心に留めない」と震える心で毎回自分に言い聞かせる。

そうは言いながらも健悟との時間は一日の中で一番大切なことになりはなし。健悟の帰りを待ちながら献立を決め、喜ぶ顔を想像しながら料理を作ることにも今までになかった温かな感情だ。和樹と違って大食いなのも見ていて爽快で気持ちが良い。

「お兄ちゃん、ちゃんとご飯食べてるかなあ」

スプーンでカレーライスを掬いながらぼんやりとした声で呟いた。正面に座る健悟が一瞬表情を曇らせた。

「そうだな。あいつ食に対していい加減だからなあ・・・でも食わなきゃ生きていけないし、なんかは食ってるだろ」

「健兄だって相当デタラメな食生活してたって、お兄ちゃんいつてたよ。」

だからできるだけ美味しいもの食べさせてやってってくれて」

「麻琴」

「ん？」

「和樹のこと、男としてどう思う？」

「すっごくイイと思うよ。お兄ちゃんと結婚する人は絶対に幸せになれると思うもん」

考えるまでもなく当然のように答える。

「健兄とは大違いねっ ふふっ」

ちよつと冗談めかして付け加えると、健悟は真顔で頷き

「そうだと思うよ。あいつは本当に真面目でイイ奴で・・・」

稀に見る一途な男だ

言葉に出す事はできない。和樹のためにも、麻琴のためにも・・・。麻琴がキョトンとして見ている。話を切り替えるために慌てて、しかし冷静を装いながら話題を変えることにした。

「俺たちの親は、俺たちの年齢ではもう結婚していたんだよな。子供のころは二十歳過ぎるとみんな立派な大人で悩みもなく悠々自適に生きてるように見えたけど、きっとそれなりの悩みや葛藤があったんだろっな。そう思わないか？」

「うん、そうかもね。健兄のお母さんなんか私の年齢で亡くなってるんだよね。」

写真なんか見ることある？」

「いや、ないな。そもそも遺影以外の写真なんか見たことがないんだよな」

「うそっ……」

「ホント」

「あの……健兄のお母さんの写真、うちに何枚かあるんだけど・

」

「え……ホントに？」

「見る……？」

遠慮がちに健悟の顔色を伺う。余計なことをと怒るかもしれない。しかし健悟の顔はパツと明るい表情になり、「見てみたいなあ、見せてくれるか」まるで夢のようだと云わんばかりだ。

「待ってて、今すぐ持ってくるから。どの写真もすごい美人なの」「食ってからでいいよ。おいって」

サツと立ち上がりパタパタとリビングを出て行き、そして2〜3分で赤い表紙の正方形のアルバムを抱えて戻ってきた。

食事も途中で二人はソファーに並んで座り、麻琴が3ページまで一気に捲った。健悟の目は、その右上の一枚に止まった。

麻琴の母、百合子とその隣りに同じ年頃の若い女性が笑顔で立っている。切れ長の大きな目が印象的な日本美人だが、ふっくらとした唇が冷たさを感じさせない。食い入るように見入る健悟の口からは素直な感想が出た。

「へえ〜 初めて見るよ。遺影とは違って、なんか若くて綺麗だな。ん？」

顔細いけど、腹周り少し太ってるな」

「……それ、健兄のせいだよ。健兄がお腹にいると思う」

「あ……じゃあ、この数カ月後に俺が生まれて、母親は死んだのか」

生まれてきたことを後悔し責めるような言葉だった。

「お母さんに感謝しなきゃね。生んでくれてありがとうって。」

誕生日は生んでくれたお母さんへの祝いの日なんだよ。

今年はちゃんとお母さんを祝ってあげようね」

「そうなのか？誕生日って、自分を祝うものだと思ってたんだけど」

「それも間違いじゃないけど、生まれた時って、出産したお母さんに

『おめでとぅ』って言うことが殆どなんだって。

だから元々はお母さんへの祝いの日」

「へえ〜 なるほどねえ」

その後食事も忘れ、一枚一枚を丁寧に見続け、気が付くとカレーライスが冷えてしまっていた。

「だから食ってからでいいって言ったじゃないか」

「だってえ〜 早く見せたかったんだもん」

冷えたカレーを温め直さず食べたが、それでも心はホンワカと満たされるものがあった。

## 健悟からの視点

はじめ二人の生活に強い不安を抱いていたのは健悟の方だった。特に同居当初は和樹のことが頭を離れず、上手く距離が保てずに麻琴に辛く当たることもあった。毎日麻琴の居る家に帰るのが重苦しく、できるだけ顔を合わせずに済むよう12時過ぎに帰っていた。しかし麻琴は寝ずに帰宅を待ち、食事や睡眠時間などの要らぬ心配をしていた。何度「気にするな、先に寝てろ」と言っても悲しい顔をすればかりで翌日はまた同じように待っていた。その姿は健気で可愛くもあるが、その時の健悟にとっては煩わしいものでもあった。

仕事が早く終わったあの日、当然今のままではいけないと思い始めていた矢先で、時間が出来た事は麻琴と向き合うための良い切っ掛けだと思った。麻琴の好きなシュークリームを買って帰宅し、初めて帰りを待つという逆の立場に立った。

麻琴の居ない美山家は物音一つない空気の動かないガランとした寂しい家だった。健悟自身10年以上も一人暮らしをしてきて、誰もいない家に帰り『寂しい』などと感じたことは一度もなかった。いつの間にか無意識のうちに『家に帰る』から『麻琴の所に帰る』に変換されていたのかもしれない。独りよりも二人での生活に寂しさを感じるなど思ってもいなかった。

10時を過ぎても麻琴は帰らなかった。携帯に電話をしても麻琴とのコンタクトは取れず、何か悪い事件に巻き込まれたのではないかと心配になった。すると今度は居ても立ってもいらなくなり慌てて鍵だけを手に家を飛び出し駅へと走った。暫く待ったが改札から

出てくる気配はなく、ふと携帯も持たずに無闇に飛び出して来たことに気が付いた。もし何かあつて警察から電話が来たらと想像を回らせると、自分の突発的な行動のバカさ加減にイラついた。

なるほど。そういうことか。もう手遅れだったのか・・・。

美山家の自宅前で一台の自動車が停まった。ホツとしたのも束の間、健悟が目にしたのは車内の二つの影が重なる瞬間だった。直後、助手席からは慌てたように麻琴が降りると小走りに玄関へと走って姿を消した。

自分だけがあれこれと想いを回らせたのかと思うと滑稽だった。情けなさを通り越し感情は怒りへとすり替わっていった。沸々とした怒りを全身に纏い、玄関のドアを開けると、そこには不安そうな顔に無理に笑顔を作った麻琴がいた。

「お帰りなさい。遅かったのね」

怒りに任せて押し倒してやろうかと一瞬頭を掠めた。相手が富樫翔太であると分かると、怒り更に増し爆発しそうだった。今顔突き合わせて冷静な会話などできない。もう、居場所がないと思った。

出ていかなければ

明日、仕事が終わったら片付けて出ていこう。言い訳など聞きたくなかった。頭を冷やすために麻琴を無視して部屋に行き布団の上にゴロンとなった。

やっぱり和樹には知らせておかなきゃな。

本気でそう思っていた。だが、そうしなくて済んだのは麻琴の平手打ちのお陰だった。全ては自分の勝手な誤解で、もっと麻琴を信じても良かったのに……。

気付くと麻琴は目の前でネグリジエのボタンを外し、胸を露わにしていた。さつきは押し倒そうなどと頭を掠めたが、あれは心の中で毒吐ただけで本気ではなかった。その証拠に目の前で誘われても戸惑っていた。

結局はなにを言っても言い訳になるのは自分の方だった。理性やら理屈やらを並べ立てたところで、麻琴の全てを手に入れたくて仕方なかった。誰の手にも渡したくない。

もし翔太と深い関係になっていたらとしても……

麻琴の体はこの二年間、きっと誰も通過していないと思った。それは最中、初めての時のように痛がったからだ。他の男の手に触れていないと思うと、普段は隠れている独占欲が出てきて震えて喜んでいるのが分かった。

「麻琴、愛してるよ」

麻琴からの返事はなかったが、抱きしめた腕の中でスースーと寝息を立て気持ち良さそうに寝始めた。

やっと二人の時間が動き始めた



疑いもしなかった。

## 乱れる心拍

「早瀬弁護士」

榎村総合法律事務所のビル前で声を掛けられ振り向くと、そこには富樫翔太がいた。まだ体に馴染んでいない若いスーツ姿には眩しささえ感じる。

「突然すみません。麻琴さんのことで・・・少しお時間を作っていただけませんか」

緊張はしているだろうが真っ直ぐ健悟を見据え、物怖じしている姿は見せない。翔太もまた、弁護士として父親の法律事務所へと就職した。とうに引退したが祖父も弁護士であった為、翔太で3代目ということになる。富樫法律事務所は民事専門で、榎村の事務所からみると手広く何でも扱うというわけではない。

「これからまだ仕事が残っているんだが・・・  
もう全員退社して誰もいないから事務所に上がるか」

「いいんですか」

「ああ。メシは食ったか」

「いえ、まだです」

「そうか」

そのまま健悟はビルの中へと入り翔太もそれに続いた。エレベータ

は使わず大股で階段へと向かう健悟の逞しい背中に強い嫉妬を感じつつも、やはりその魅力は健在だと思いきらされる。

「2階なんですか」

「いや、なんでだ」

「階段を使われるので、そうかと」

「ああ、いや、10階だ」

「えっ！　なんでまた・・・」

「学生のころとは違って運動する時間が取れないだろ。」

だからこうやって無理にそういう機会を作るんだ。

勿論急いでいる時はこんなバカなことはしないが。

富樫、お前運動不足だろ、まだまだ上はあるぞ。息が上がってる」

健悟は愉快そうにそう言うと、息を乱すことなく小走りにどんどんと階段を上がる。翔太は遅れまいと後に続くがハアハアと息を切らし、明らかに運動不足を露呈している。10階の事務所のドアの前に立った時は折れた膝に両手をつき全身で呼吸をしていた。健悟は息切れ一つせず、事務所の鍵を開けている。

## ギイー

今時なかなかお目に掛かることのないほどの古いドアが奏でる懐かしい音は、それだけで呼び鈴の働きをしている。以前榎村にドアを新しくしないかと提案した事務員がいたが、榎村は笑いながら言った。

『この古いドアは開ける人のその時の気持ちや体調をその音で知らせてくれるんだよ。例えば早瀬くんがイライラしている時は何時よりもより乱暴な高い音で知らせてくれたり、アルバイトの川間くんが遅刻してきた時は控え目な細い音で知らせてくれたりしてね。その

音の声を聞くのが私の趣味なんだよ。だからどうか、そのままにしておいてもらえないだろうか』

それからドアを新しくすると言う者は一人もいなくなった。そしてそれぞれにドアの音を楽しむようになったのだった。

「失礼します」

額に大粒の汗を滲ませながらも、やっと心拍を整えた翔太が事務所へと足を踏み入れた。

入り口直ぐにはカウンターがあり、簡単な受付や事務仕事が行えるスペースになっているようだ。その奥には10人分のデスクが5台ずつ向き合うように並び、デスクの後ろには書類棚や本棚がキチキチに詰まるように収まっている。その奥の窓からは周囲のビルからの明かりが弱く差し込んでいた。時刻は夜9時。今日は徹夜のつもりで麻琴にも連絡を入れ、健悟は近くのコンビニで今から食べる夕食と翌朝の朝食、そして飲み物を買ってきていた。

「こちらへどうぞ」

奥の方から呼ばれ、明かりの漏れるそちらの方へと進む。

すぐに窓際にある木製の重厚感ある大きなデスクが目飛び込んできた。その手前には黒の革張りの二人掛けのソファが二組、テーブルを挟んで対面した形で設置されている。

健悟はズボンの後ろから財布を取り出しデスクの上へポンと置くと、応接用のテーブルにコンビ二で買ったビニール袋を置きソファへへと腰掛けた。翔太にも向かい側のソファを手ですすめる。堂々とした落ち着いた大人の仕草に無意識の威圧感を漂わせる。

テーブルに置いた袋からガサゴソとビール2本を取り出し自分と翔

太の前に置く。

「ちようと良かったよ。

寝酒と言いついて、実はメシを食いながら飲む羽目になるだろうと思ってたんだ。

弁当もあるから好きなの食べ。俺は言つとくけど1個だけだからな」

弁当は何故か5人分ある。夜と朝に一人で全て食べるつもりで買ったらしい。大食いの健悟には弁当2個でも少ないが、時間的にタイミングが悪かったのか、行ったコンビニには弁当が少なく選ぶ程もなかった。

「すみません。じゃあ、これを」

「あ、それクソ不味いぞ。こつちにしとけ」

「いや、おれ唐揚げ好きだし」

「・・・そっか」

健悟の大好物でもある。仕方なく譲る。ビールをお茶代わりに二人は黙々と食べる。健悟が二つ目に手を伸ばした時、翔太が口を挟んだ。

「あの、弁当いつも何個食べるんですか」

「普通3個は食べるよな。お前もだろ」

「まさか。1個ですよ」

「お前・・・女みたいなヤツだな。だからヒョロヒョロしてた。食えるんならもう1個食ってもいいぞ。

ビールないならその冷蔵庫に水とお茶があるから勝手に出して飲んでくれ」

「いえ、もう充分です」

「遠慮するなよ。麻琴でさえ2個は食うぞ」

大嘘である。翔太の目が一瞬ひん？いたのを見て健悟は大笑いした。食事の手を止めビールを一気に喉に流し込み、

「ふうー 空腹がちょっと落ち着いたかな。

つき合わせて悪かったな。で、そろそろ本題に入ろうか」

ふざけた態度から急に落ち着き払った『早瀬弁護士』へと入れ替わり、翔太は息を呑んだ。

「はい・・・今日は色々と申し上げにくいことを言いに来ました」

背筋を伸ばし、できるだけ健悟から目を離さないように自らに言い聞かせ、一つ大きく息を吸い込んだ。心拍がまた上がり出していた。

## 女の幸せ

「ごめんね、せつかく作ってくれたのに。最近暑いせいか食欲無くて」

「いいのよ。でも栄養不足にならなきゃいいけど・・・マサさんもこのところ食欲ないのよ。去年より2キロ太ったからちよつど良いなんて笑ってたけど」

「でも元気なんでしょう？」

「元気も元気。張り切って同窓会に出掛けたわ。ふふっ」

健悟が帰宅しないと分かりspanの休みの今日、久しぶりにヒロコ夫婦のもとに訪れていた。当然泊まるつもりで一旦帰宅して必要な物は揃え、準備万端だ。が、ここ数日、確かに食欲は落ちてきている。

「フルーツなら食べられるでしょ？」

メロンがあるのよ。夕張のメロンじゃないけど、マサさんのお友達が北海道の足寄から送ってくれたの」

「メロン大好き。でもマサさんが居ないのに食べちゃっていいの？」

「いいのよ。だってマサさんが麻琴ちゃんに言ってたんだもの。明日あたりに持って行くつもりでいたのよ」

ヒロコ夫婦は毎日のように麻琴や和樹について話している。とりわけマサに関しては麻琴が可愛くて仕方なく、何かある度に「麻琴ちゃんに」と言い出す始末でヒロコも多少呆れている。だが、やはりヒロコにしても気に留めて時々足を運んでくれる麻琴は可愛く、少しの体調の変化であっても心配につながる。

「職場はどうなの。社会人になってストレスとかあるんじゃない？」

「仕事は大変だし、まだまだ勉強中なんだけど、新しいことを覚えるって新鮮で楽しい。」

ストレスは自分ではあまり感じていないけど、緊張感はそれなりにはあるかなあ。

でもお母さんだって緊張の毎日だって言ってたでしょ。

きつとそれって仕事には必要なんだよね？」

健悟にもよく言われていることでもある。緊張感がなくなったら後は怠けていくだけだ。そして怠けた人間は要領よく合理的に事を運ぶのではなく、手を抜こうとするものだ・・・と。要領こそ良くはないが、麻琴にはこういった注意や指摘を上手く取り入れることができる柔軟性があり、健悟や和樹、ヒロコたちだけではなく、職場でも評価される場所であった。

「ねえ、お母さん。全然話が変わるんだけど」

「なに？」



「今度いつでもいいんだけど、時間ができたら二人で温泉かどこか行ってみたいな。」

ちよつと夢なんだ、そういうのって。お兄ちゃんには悪いけど、母と娘だけって良くない？」

「まあ、いいわね。私もそういうの憧れてたのよ。どこが良いかしらねえ〜」

ヒロコが少女のように胸の辺りで両手を握り、目を輝かせている。しかも頭の中では既に温泉宿の敷居を跨いで温泉にまで浸かっている。今まで店と家の往復ばかりで、マサとも旅行へ行ったことがない。穏やかだが変化のない生活。それも望んだ幸せなのだが、和樹と再会し、そして麻琴という娘ができ人生が一変し、華やかに色付いたのは大きな変化だった。和樹も麻琴も、ヒロコ夫婦にはかけがえない存在となっていた。

メロンを食べながら何処に行こうかと楽しく会話をしながら、いつの間にか女二人の話は脱線していった。それは麻琴のこんな一言が切っ掛けであった。

『女の幸せって、なに？』

ヒロコは自信満々に答えた。

『今の私』と。

「愛する人がそばにいて、気持ちを通じ合っていること。」

そして愛する子供たちがいて、その子供たちが健康で幸せであることよ」

愛する人はそばにいる。だけど気持ちは通じ合っているとは言えない自分。それはやはり不幸なことなのだろうか。そばに居てくれるだけで良いと思っていたし、居てほしくて身を捧げ繋いできた。やはり人様に堂々と言えぬ汚らわしいことなのだろう。身体を重ねたあの日から自問自答して今日まで来た麻琴にとって、ヒロコの純粋さが凶器のように胸に刺さった。

「うっ……！」

急に胸が苦しくなり吐き気に襲われ、慌てて口元を押さえ洗面所へと走った。

「麻琴ちゃん、大丈夫？」

ヒロコも後を追ひ、直ぐに麻琴の背中を擦った。

「うん、ごめんね。大丈夫。やっぱり夏バテかな」

「……顔色悪いわね。今日はもうお休みなさい。」

麻琴ちゃんは明日お仕事休みなんでしょう？

もし具合が悪いままだったら病院へ行きましょう。私も付き添うわ」

「ありがとう。でも寝たらきつと良くなると思うから心配しないでね」

その夜なかなか寝つけず、ますます体はだるく断続的な嘔吐感に見

舞われ、翌朝は微熱が出てしまい起き上がるのも辛くなっていた。

## 責任

『そう、落ち着いたなら良いんだけど、次に同じようなことがあったら絶対に診てもらってね』

「うん。心配かけてごめんなさい。今度はマサさんが居る時に行くね」

『ええ、喜ぶと思うわ。じゃあ、何かあったら直ぐ連絡してね』

「ありがとう、お母さん」

一人で病院へ行くと言いヒロコの付き添いをやんわりと断りマンションを出たのだが、病院へは行かなかった。はじめから病院へ行くつもりなどなかったのだ。この数日は本当に体調が優れず、麻琴自身不安でたまらない。生まれて初めて薬局で妊娠検査薬を手にとった。いくつか種類があつてよく分からなかったので適当に選びレジで精算した。レジ係りが自分と同じ年頃の女性で、なんとなく気まじい思いにかられ足早に店を後にした。

もしこれで妊娠が判つたら、自分は次に何をどうしたら良いのだろう。本来であれば健悟に相談するのが一番なのだろうが、そんな事をしてしまえば健悟は困るはずだ。以前、香奈子の子供が自分の子供であるかもしれないと知った時、何らかの責任を取ろうと考えていた健悟だ。恐らくはまた同じように『責任』を取ろうと考えるだろう。

どうしたら良いの・・・

仏壇の前に崩れるように座り、両親の人懐こそうに微笑む写真を見つめているとポロポロと涙が零れた。

泣いても始まらない

麻琴は妊娠検査薬を持って立ち上がった。

午後7時、健悟が帰宅した。前日帰宅しなかった為その分帰りを早めたようだ。いつもは点いている玄関の灯りが今日はなく、自分が先に帰宅したのだと判断し自ら鍵を開けて真っ直ぐ仏間へと行き手を合わせた。時々には先に手を洗ったりトイレに行ったりして順番が変わることもあるが、帰宅直後の行動は概ねこう決まっている。

「さてとつ、風呂でも沸かしとくか」

廊下を進み突き当たりの風呂場へと向かう。途中、リビングのドアが僅かに開いていることに気が付き不思議に思った。いつもはキッチンと閉じているからだ。足を止めリビングの電気を点け、部屋をぐるりと見回すがそこは無人。

「なんだよ、麻琴案外だらしないな。俺が居ないといつもこうか？」

誰も居ない空間での独語は、壁にぶつかり思いのほか大きく跳ね返ってくる。

カタッ

その時どこかで物音がした。奇妙に思いながらも、できるだけ足音をさせないようにソロソロと階段を上がった。そしてそっと麻琴の部屋のドアを開けた。だが真っ暗だった。

自分の部屋か？

麻琴の部屋のドアを閉めようとした時、ベッドで何かが動いた。さすがにドキッとしたが、無意識に健悟の手は電気を点けた。

「麻琴・・・？」

「お帰りなさい。ごめんね、出迎えなくて」

酷く落ち込んだ声。くぐもった声は布団の中にいるからだけではなさそうだ。

「いや、どうした。具合でも悪いのか」

「ちょっとだけ。でも大丈夫だから心配しないで。

それより今日、ご飯作ってないの・・・」

「いいよ、そんなこと。あ、でも麻琴も食ってないのか」

「私はいい。食欲ないの」

「大丈夫かよ。ちょっと顔見せろよ」

布団に手を伸ばした時、いつもとは違うヒステリックな麻琴の声に驚いた。

「イヤッ！ ほっといて。もう出て行って！」

意地でも出ないと云わんばかりに頭からスッポリと布団を被ってしまった。

「あ、分かった。腹痛いんだろ。イライラするアレだろ」

健悟のおちよくる言葉に一瞬沈黙があり、そして涙声が返ってきた。

「……だったら悪い？ もういいでしょ、分かったら出て行ってよ」

「なんだよ。本当にイラついて」

首を傾げながら電気を消し、健悟は静かに部屋を出て行った。ベッドの中、麻琴の手に握られた妊娠検査薬の印しが『陽性』を意味していることも知らずに……。

## 離したくない

何の変化もないままに一ヶ月が過ぎた。妊娠検査薬は必ずしも正確ではないと知り、あれから二度、別の製薬会社の検査薬で試してみたが結果は同じだった。

この一ヶ月間、麻琴は誰に相談するでもなく、一人でただ闇雲に考えあぐねていた。そんな中でも一つ分かったことがある。今の健悟との関係は決して望ましいものではないが、確信して言えることは、妊娠したことを日に日に受け入れ、自分の体内に芽生えた新たな生命に愛おしさを感じているという事実だった。

## この子に会いたい

通勤途中の電車の中や、入浴中、小さな子供を目にした時など、極普通の日常の中で思うことだ。そして生活にもその変化が垣間見えるようになっていた。ふいに訪れるあの嫌な悪阻がない時は少しでも栄養価の高いものを口にするようになり、腹部を締め付けるような洋服は避け、走ったりすることは勿論、小走りもできるだけしないようにした。何より一番に避けたことは健悟との体の交わりだった。初めは生理が長引いているからと断り続け、それが通用しなくなると思風邪気味だと仮病を使い、極最近では仕事が忙しく寝不足だと言って避けた。だがそれもそろそろ通用しなくなる。さすがに健悟も不可解に思ってきているからだ。

「麻琴、ちょっと話がある」



先に仕事から帰宅した健悟は、麻琴が帰宅するのを待ち構えていたかのように玄関まで出てきてそう言った。そろそろ言われるだろうと想定していた為、別段驚くことはなかった。

「どうしたの？ 怖い顔して」

低めのパンプスを揃えながら何気ない様子を作ってみせる。

健悟は無言のままリビングへと向かった。麻琴も後に続く。少し疲れたように見える健悟の背中。きつと今日はあまり良い日じゃなくてイライラしているかもしれない。そう思うと尚更事実を言えないだろうと察する。

リビングに入って直ぐ、突然健悟が向き直り覆い被さるように麻琴を力一杯抱きしめた。

「うっ っ いっ・・・」

「麻琴・・・やっぱり俺じゃダメか」

「・・・！」

「俺よりも、やっぱりアイツの方がいいのか」

追い詰められたような切なげな涙まじりの声。今までに聞いた事の無い声だった。

「健兄っ・・・くる・・・しい。 はっ はなし・・・て・・・」

「離さない。離したくない」

全身を圧迫されながらも、健悟のいう「アイツ」が誰を指しているのか分からずパニックに陥りそうになる。そして強く抱きしめられることで腹部にかかる圧力も更なるパニックを引き起こす。

「ヤダ、おね・・・がい・・・健兄、息が・・・」

苦しきのあまり麻琴の足の力が抜けかかったところで、初めて無我夢中のまま恐ろしい程の力で抱きしめていたことに気が付き、慌ててその力を緩めた。

「ごめん、大丈夫か。つい・・・」

「はあはあ・・・大丈夫。　ちよつと座りたい」

そう言い、側にあるソファーに身を沈めた。健悟は座ることなく、ただ麻琴の姿を見つめていた。どれくらい沈黙が続いただろう。先に沈黙を破ったのは麻琴だった。

「健兄、アイツって誰の事？」

「富樫・・・じゃないか」

健悟には麻琴が惚けているように映った。馬鹿にされたような気にもなる。

「翔太くんが？　なに？　どうして彼が出てくるの」

「一ヶ月くらい前、俺の所に来たんだよ」

「健兄のところになんで??？」

「麻琴、回りくどいのはやめよう。アイツから聞いて知ってるんだろっ」

「しっ　知らないわよっ。だって翔太くんとは連絡とっていないもの」

「・・・本当か」

「信じないなら信じないでいいけど」

つい投げやりになってしまつ。妊娠してから自分でも感情のコントロールが難しくなっていることには気付いている。しかも健悟のことを考えると余計に感情の昂ぶりを抑えられなくなる。自分から避けていながら、本心ではいつも健悟の広い胸に抱きしめられたがっているという矛盾した気持ち。

「信じるよ。正直、事実なんてどうでもいいんだ。

ただ、麻琴の気持ちがアイツに向かっているのだとしたら・・・

奪い返すまでだ」

## 宣戦布告

「はい・・・今日は色々としあげにくいことを言いに来ました」  
背筋をピンと伸ばし尖った声。明らかに緊張と、そして挑戦的なものを感ずる。

健悟はソファアの背にもたれ腕を組んで次の言葉を黙って待った。

「麻琴ちゃんのことです」

それにも無言を貫く健悟に、全て話が終わるまで口を挟まない態勢なのだ気付いた。あしらわれているのか、それとも対等と見なされているのか。それすら判断できず身の置き所に戸惑う翔太。

「ご存知かもしれませんが、先日彼女に振られました。その断られた理由に僕はどうしても納得ができません。」

彼女はあなたに近付くと遠のいてしまうから一部でも繋がってれば気持ちを通じ合っていないなくても、良いと言うのです。

それが僕には理解できません。そんな不自然な関係に未来はあるのですか」

そこまで表情一つ変えず聞いていた健悟だったが、その問いには眉間に深い皺を刻んだ。

「僕にはどうしてもそうは思えない。」

早瀬さん、その偽りの関係は、いつかきつと終わりが来ます。いえ、僕が終わらせませす。今日はそれを伝えに来ました」

翔太が事務所を出てから直ぐに仕事に取り掛かったが、思うように捗らず溜め息ばかりが繰り返される。愛してるの言葉も、それに伴う心底からの愛の行為も、麻琴には本当の意味で伝わってはいなかったと言っのか。

「情けね・・・」

その後健悟は、何も考えず精力的に仕事をこなした。仕事以外の全てを頭から追い出すこのやり方は、麻琴と離れ離れになっていた間に身に着けた術だ。当然のように効率は上がり、その集中力で返って無駄とミスはなくなる。1年前、不慮の事故で突然榎村がこの世を去ったときもそのお陰で事務所は乗り切ることが出来た。身内のない榎村は同じく身内のない健悟を我が子のように可愛がっていた。だが健悟がそれに気付いたのは榎村の葬儀の後だった。榎村のお気に入りの木製デスクの中を整理していた時、一つだけ二重に鍵を掛ける引き出しがあることを知った。左右に並んだ二つの鍵穴はそれぞれ異なる形状にあり、どうしても左側の鍵が見つからず気を揉んだが諦めかけた頃に思わぬ所から出てきた。ある日健悟が床に落としたペンを拾おうと屈んだ時だった。自分のデスクチェアの座面裏にガムテープが貼り付けられていることに気付いた。妙にガツチリと貼られたガムテープに不自然さを感じながら、無理矢理引き千切るようにして剥がすと、見慣れない小さな鍵が姿を見せたのだ。その鍵は紛れもなく探していた鍵であった。恐る恐る鍵を差込みゆっくりと引き出しを引くと、いくつかの封筒

と預金通帳数冊に事務所の権利書と不動産の登記に印鑑。そして封筒とは別に自分宛の手紙があった。それは封筒にも入れられておらず、三つ折の中央に『早瀬健悟様』とだけ自筆された簡素なものだった。

直ぐさま手紙の指図通りに動いた。まずは開封と検認手続きの為、遺言書を持って家庭裁判所へ提出した。あとはその流れで更にあらゆる手続きを踏み、それらが全て終わると、榎村の残した土地、事務所、預貯金等の遺産の全てが健悟に託される形となっていた。20代の若者にとっては莫大とも言える形見であり、傍目には羨めるものにもなりうる。だが健悟にとって心に残る一番の遺産となったのは自分宛のあの簡素な手紙だった。手紙には榎村なりの健悟に対する愛情が滲んでいた。その一部にはこう書かれていた。

『私がそうであったように、人は一人では幸福になれない。幸福が欲しければ、まずは愛する者を幸福にすることです。それによって、また自らも幸福になれ、やがては財産になります。あなたはきつと幸福になれる。愛する人がいるのだから』

まるで暗示かけるかのような手紙だった。その時の健悟は麻琴との接点がなく、諦めから素直に理解できなかったし、時々手紙を出して目を通しては自虐的にボヤいてもいた。

「世の中そう上手くいかないことの方が多いだろ？ボス。あなたがそうだったじゃないか」と。  
しかし今は違う。

「俺は和樹とは違うんだ。  
どんなことがあっても俺は自分の手で幸せにする」



## 携帯電話

「奪い返す……？ 酷い。そんな……  
物みたいに言うのね」

「そんな風に受け取るなよ。そうじゃな」

ピンポーン

玄関チャイムの音に虚しく宙に消える健悟の言葉。無意識に溜め息が出る。

無言のまま麻琴が玄関へ向かおうとするが、健悟が軽く肩を掴み自分が行くからと麻琴を残しスタスタと玄関へと行き無造作にドアを開けた。

「夜分にすみません。麻琴ちゃんはお帰りですか」

「……今立て込んでいる。  
悪いが出直してくれないか」

会話を中断されたことに腹を立て、半ば八つ当たりとも取れる遠慮のない健悟の門前払い。そんな事を知るわけもない翔太は、一瞬ムツとしたが表情には出さなかった。

「そうですか……では、出直しますが、言付けをお願いします。



明日、午後7時半に携帯に電話しますと。それだけで結構です」

「悪いが」

「待って、翔太君。今でいいわ」

「麻琴ちゃん……」

明らかに断るであろう健悟の言葉を、今度は麻琴が遮った。

「ちょうど今出掛けようと思っていたところだから、ちょっと待っててね」

「麻琴……」

そう言うと健悟には目もくれず急いでリビングへと行きバッグを持って再び玄関へ戻ってきた。

「麻琴……」

「健兄、少し遅くなるかも。心配しないでね。行って来ます」

「麻琴、待てよ。話が」

健悟から目を逸らし、翔太の背中を押すように玄関を出て行ってしまった。残された健悟は直ぐにでも追いかけてようと靴を履いたが、今追いかけたところで麻琴は冷静に話ができそうもなくて思え、玄関ドアに手を伸ばしたまま二の足を踏んだ。慌てなくてもいい、ジツクリと時間をかけて、出来てしまった溝を埋めよう。以前の健悟であればそんな風に考えなかっただろう。しかし今は違う。和樹との約束や榎村の手紙、そして二年前と同じ繰り返しだけはしたくないという思いが強く働いていた。

「へんな気起こすなよな、富樫」

「ごめんね、強引なことしちゃって」

「いや、会えて良かったよ。取り敢えず何処に行く？」

「どこでも・・・」

「ホテルとか？」

勿論悪ふざけである。翔太にしては珍しい冗談だ。だが・・・

「いいよ」

「え・・・じゃあ、そうしよう」

驚いたのは麻琴だった。自分でいいとは言ったが、翔太に限っては本気に捉えるとは思わなかったからだ。急に翔太が見知らぬ男に見えるはじめ怖くなってきた。その不安を感じ取ったのか、翔太は麻琴に笑いかけた。

「ははっ　嘘だよ。その居酒屋にでも入ってちよっと飲もう」

二人は会話らしい会話もせず時々下らないジョークを言って笑い、そして飲んだ。飲んだとは言っても麻琴は身体のことを考えアルコールは避けオレンジジュースのみに徹した。

「麻琴ちゃん、門限は？」

「ん・・・知らない」

「でも、早瀬さん待ってるんじゃない」

「今、何時？」

「11時少し過ぎたと」

「そう・・・じゃあ、連絡だけするね」

そう言いバッグから携帯電話を取り出した。ボタンを手馴れた手つきで押し耳にあてる。その姿を見て翔太は嫉妬を覚えた。就職を機に携帯電話を変えた。その際番号も違うものに変えたのだ。その携帯電話から麻琴へ電話をした時、ちよつとした悪戯のつもりで「非通知番号」を使ってみた。当然会話の流れで新しい電話番号を聞かれるかと思っていたが、未だ聞かれたことはない。そのため連絡を取る時は必然的に翔太の一方的なものとなる。

「もしもし、連絡遅くなってごめんなさい。

あの、今日帰らないので・・・待たないで寝てね。

じゃあ、おやすみなさいっ」

## ささやかな夢

悪い冗談なんじゃないかと思った。

一方的に電話が切れ、暫くは呆然と立ち尽くしていた。どれくらい  
の時間そうしていただろう。そもそも二人で出掛けさせてしまった  
ことから間違っていたんだ。いくら麻琴を信用しても富樫は麻琴の  
ことを想い続けてきた男だ。全く信用ならない。二人で何処で何を  
しているんだろう。今どこに……

当然携帯の電源は落とされ連絡のつけようがない。居ても立っても  
いられず電話したのは美佳の携帯電話だった。

『もしもし、ご無沙汰しています。どうかしましたか？』

美佳も健悟からの電話など初めてだ。何かあったのかもしれないと  
鋭く察するあたりが新任と言えど教師らしい。

「突然申し訳ない。麻琴、美佳ちゃんのところになんて行ってない  
よね」

『残念ながら来てないですね。どうしたんですか、喧嘩ですか？』

「富樫とは連絡取り合ってる？」

美佳の質問には答えない。いや、耳にも頭にも入ってなどいないの  
だ。

『ああ、翔太くんケータイの番号変わっちゃったみたいで連絡取れ

ないんですよ。

私も忙しいからそのままにしちゃってるんですけど、実家の電話番号なら知ってますよ」

まさか麻琴を連れて実家にはいるまい。だが少しでも情報は欲しい。一頻り考えていると美佳が機転を利かせ提案をしてくれた。

『早瀬さん、翔太くんの実家に電話して携帯の電話番号教えてもらいますから、一旦電話切りますね。ちょっとだけ待って下さい』

返事をする前に美佳との電話は切れた。その後、美佳からの電話を待つほんの5分程度がとんでもなく長く、忙しなく携帯を開けたり閉めたり繰り返し返していた。

『もしもし、翔太くんの番号教えてもらいましたよ。でも・・・』

さっきとは打って変わって言い難そうな美佳の声に嫌なものを感じる。

『翔太くんのご実家でも急に用ができたからさっき電話してみたらいいんですけど、電源が落とされていて出ないそうなんです・・・あ、でもだからって麻琴と一緒にすることは』

「一緒になんだ。あの二人。一緒に出て行ったんだから」

『えっ！ ウソ・・・それは・・・その・・・』

「美佳ちゃん悪かったね、巻き込んで。もし麻琴から連絡があったら教えてくれないか」

『ええ、それは勿論。あの・・・』

「本当にすまなかったね、じゃあ」

翔太と連絡がつかないという事実は絶望意外のなにものでもなかった。もし麻琴が翔太を拒否したとしても、男の力に敵う筈もない。それよりも、もし麻琴が拒否せずに・・・それ以上は気が狂ってしまいそうで頭から想像を叩き出した。

麻琴の行きそうなところは思い浮かばなかった。友達も美佳しか知らず、会社の人間関係も知らない。好きな場所も、好きな街も、今なにを思っているのかも分からず健悟は悔やんでいた。これから自分と麻琴はどうなってしまうのか。絶対に手離したくない。麻琴のいない人生など、もう考えられないのだ。

男でも30歳間近に想うことは『結婚』の二文字だ。身内だけでいいから小さな結婚式を挙げて愛を誓い、短い時間でいいから新婚旅行へ行きたい。そこで一生に一度しかできない思い出を焼付け、あとは平々凡々でいい。二人の子供を授かり、死に物狂いで家族を守りたい。年老いた時に、同じく年老いた麻琴の手を握り、二人の築いた家庭を振り返り思い出話に目を細め時を潰したい。

そんなささやかとも思える健悟の夢が、今粉々に砕けそうになっている。何が悪かったのか、なぜこんな風になるのか。誰でもいいから教えて欲しかった。

## 和樹

和樹ならきつと教えてくれる。間違いがあれば間違いであると正直に指摘してくれるはずだ。日本との時差14時間のボストンに和樹はいた。和樹と麻琴を影から支えた叔母の美山花子と暮らしている。花子は今年70歳になるが、若々しく医師としても現役で活発的な生活を送っていた。和樹の渡米に関しても積極的に協力し、世界でも学識高い有能な小児外科医を紹介してくれるなど、そのバックア

ツプは大きい。子供のいない花子は事のほか和樹を可愛がり目を掛けてきた。医師への道も花子の協力がなければ困難だったに違いない。その期待に出来る限り応えてきたつもりだが、まだ足りないと思ふことがある。それは独身を貫いてきた花子の老後だ。金銭的にはなに不自由のない花子だが、70歳にもなると金銭だけでは心許無いだろうと和樹は気になっていたのだ。麻琴への気持ちは花子本人には勿論伏せてはいるが、渡米の相談を持ちかけた切っ掛けの一つに同居の意思があったのは事実だ。自己満足かもしれないが、今自分にできることはそれくらいだった。そしてこの事を知っているのは健悟だけだ。

しかし時差14時間とは、連絡のつけにくいものである。こちらが寝る時間でもあちらは昼にも満たない午前だ。当然普通は自宅に居る時間帯ではない。つまり仕事中心なのである。逆にあちらが空く午後の時間帯にはこちらが仕事中心であったりするのだ。お互い電話をして迷惑だろう。しかも和樹に関してはなにせ即戦力ではなく学びに行っている学生と同じようなものだから尚更だ。メール・・・これも文章にしてしまえば心配するだけだろう。諦める健悟だった。

朝まで何をするでもなくリビングのソファで時間を潰した。身体も頭も疲労しているが一睡もできなかった。コーヒーを一杯飲んだが、味も臭いも感じず素っ気無いものだった。

麻琴が翔太と朝を迎えたのかと思うだけで胸が締め付けられ、無理をわかりつつも時間を巻き戻したい思いに駆られた。何も手につかず、気付くと出社時刻だった。ボサボサの頭にスーツを身に着けた仕事を休むわけにはいかなかった。働いているのは自分一人ではないのだ。槇村が大切にしてきた事務所と従業員、クライアントがいる。槇村が居たらもう少し甘えられたかもしれないが、今は自分が支えなければ忽ち潰れかねないのだ。鉛のような体を奮い立たせ、

鏡も覗かず手ぐしで雑に頭を整え髭も剃らずに家を出た。事務所では誰もが健悟の酷い姿に眉を寄せた。

「どうしたんですか。何があつたんですか」

どんなに忙しくても身形だけはきちんと整えていた健悟に、全員が驚きを隠せないのだ。

「なにがだ」

仏頂面で聞き返す。本人は自分が今どんな姿でいるかなどまるで分っていないのだ。

「その姿です。髭面で髪の毛は乱れ、ノーネクタイ。しかも背広のボタンは一段ズレています。

体調が優れないのでしたら、今日は私たちに任せてお帰り下さい」

年長者の野上が心配そうに小さな声で気遣う。今年55歳の大ベテランだ。口数は少なく淡々と仕事をこなす彼は榎村からの信頼も厚く、健悟も頼りにしている。

「ああ、ありがとう。でも色々さばかなきゃいけない雑事があつて・・・」

そこまで言うとボーっと一点を見つめたまま言葉が切れた。

どうやって帰宅したのかさっぱり覚えていない。気が付くとまたリビングのソファアに腰を下ろしていた。時計は午後2時を指している。麻琴が返った気配はない。ダラダラとなすすべなく時間をやり過ごしているうちに、いつしか健悟はソファアで丸まって眠ってい



た。

## 母性

夕方6時。近所の公園のベンチに麻琴は座っていた。10歳くらいの女の子が2人、無邪気に笑いながらブランコをこいでいる。自分にもあんな時があった。10歳・・・両親が亡くなった年、和樹と健悟は17歳で、小学生の自分にとっては充分大人に見えた。二人ともそれぞれに生活のやりくりまでし、今の自分よりもずっと自立していたし大人に近いといえれば近いが、今になって分かること、それは「まだ17歳」だったということだ。未成年の子供だったのだ。自分はその子供にとても甘え、そして守られて育った。自分はちゃんとした大人になって、ちゃんとした母親になれるのか・

帰宅すると健悟が乱れたスーツ姿でソファで寝っていた。まだ7時少し前だ。伏せた臉には長く濃い睫毛が美しく扇状を作り出している。疲れているのだろうか、その姿を目にし起こすか起こすまいか迷った。

健兄、私のお腹の中にはあなたの赤ちゃんがいるんだよ。

私ね、赤ちゃんと会いたい。会って、お母さんになりたいの

右手を腹部にあて心の中で呟く。日に日に強くなる母性を抑えられなくなっていた。

「なに考えてる」  
「・・・！」

目を閉じたままの健悟に驚き言葉に詰まる。

「今、なにを考えていたんだ」

怒っているのかと思いきや以外に穏やかな声だった。その声に胸を撫で下ろすが返事に困り黙り込む。健悟がゆっくりと目を開き眩しそつに麻琴を見つめると、自嘲的な笑いを漏らした。

「そつか、喋りたくもない・・・か」

「えっ・・・ちが」

「いや、いいんだ。いま無理に喋る事はない。

ただ、その内にも話し合いはしような。

今度こそ誤解のないように・・・な」

「健兄・・・」

「メシ食ったか？」

「ううん・・・まだ。健兄は？」

「俺も」

「何か作るね。ちょっと待ってて」

「手伝うよ」

キッチンに並んで立つと、何のわだかまりもないと錯覚するほど自然に感じる。しかし麻琴はまだ自分へ向けられた健悟の愛情に気付かず、健悟もまた麻琴と翔太との関係に悔し涙が出る想いを抱えたままである。

一通り料理が出来、食卓テーブルに皿が並べられる。健悟が先に席に着いた。

「ちょうどメシが炊けたな」

「うん。ピツタリだね」

ジャーの蓋を開けると炊き上がりの白い湯気が麻琴の顔を一気に覆った。その瞬間、

「うつ……」

片手で口元を押さえ洗面所へと向かった。

「麻琴、どうした。大丈夫か」

直ぐに駆けつけた健悟が大きな手で背中を擦る。水を流し洗面台に向かうが嘔吐物は一切出ず、すぐに落ち着き二人は鏡越しに顔を合わせた。

「ハアハア……大丈夫なの。ごめんね」

「大丈夫かどうかは病院に行かなきゃ分からんだろ」

「ううん、大丈夫なの。ホントに、大丈夫だから……」

「でも顔色悪いぞ、今から診てもらうか」

「いいのっ 今日診てもらったんだから！」

「そう……だったのか。で、どうだったんだ」

「大したことないって」

「薬は出たのか」

「ううん……」

「麻琴……正直にはな」

「

「じゃ飯食べよう」

健悟の言葉を遮り洗面台から離れ、テーブルへと足を向けた。

「待て、麻琴。」

身体のことだ。それだけは正直に教えてくれないか。

もし俺が心配するからとか、そういうことが引つかかっているなら、そんなものは不要だ。有耶無耶にされるほうがずっと気になって心配だ」

絶対に譲らないと云わんばかりに麻琴の両肩をガツチリと掴み離さない。

「・・・分かったわ・・・」

## 異なる事実

リビングの間口で立ち止まったまま、真剣な面持ちで二人は向き合っていた。

「特にどこも悪くないってば。本当よ。」

ただ最近暑いから無理しないで栄養のある物を食べて、適度な運動を心がけて普通に生活していれば良いですって」

「病名は」

「そんなのないわ。だってどこも悪くないんだもの」

麻琴は本当に病院へ行っていた。初めて産科を受診したのだ。つわりは時々襲ってくるがそれ程酷くはなく、大事にし過ぎることは返ってよくないと言われ、食欲が減退していると相談すると、食べられる時に栄養価の高いものを少量でも口にするように指示を受けたのだ。嘘を言っているわけではない。妊娠の事実を伝えていないだけ……。

「どこの病院へ行っただ。検査はしたのか」

健悟はなにか不自然さを感じるのか、納得するどころか疑っている様子だ。

「・・・ちゃんとした病院よ。もちろん検査もしたわ」

「富樫と・・・行ったのか」

「・・・そう・・・健兄は結局それが聞きたかったのねっ」

頭の中でパチンとなにかが弾ける音がした。それと同時に激しい怒りが麻琴の全身をグルグルと縛り付けた。最早感情のコントロールがきかない状態となり、健悟の言葉は全て負のスパイラルへの切っ掛けとなっていく。

「そうじゃないっ！俺はただ・・・」

「もういいっ。もう何も聞きたくないっ。」

私の自由にしたいだけなの。健兄には迷惑かけないから放っておいて!!!」

「どうしたんだよ麻琴。何をそんなにイラついているんだ。」

俺に迷惑かけないって、自由にしたいって、一体なんのことだよ。それに昨日一晩帰って来なかったんだぞ。

誰とどこに居たのか気になるのはそんなおかしいことか？」

激しく怒りをぶつけたかと思えば、今度は間口に崩れ落ちるようにして泣きじゃくる麻琴。未だかつてこれ程までに乱れた麻琴を見たことなどなく、戸惑いを隠せず健悟は狼狽した。そして触れていいのかさえ躊躇われ愕然と立ちつくしていた。そして泣きじゃくりながらも麻琴は健悟が想像もしなかった言葉を発し始めた。

「ううう。。。いやっ 反対しても無理だからっ

うっ ひっ。。。絶対に・・・ううっ 絶対に迷惑かけな・・・から、

お願いいっ うう。。。うっ うみ・・・た・・・いの。。。」「

「えっ・・・なに？」

「産みた・・・いつの。」

あつ あかちゃ。。。。ううっ 赤ちゃん。。。。産みたい」

「まさか・・・ま・・・こと・・・」

「驚いた？驚くよね。 ヒックッ

そうよ、私・・・妊娠・・・してる」

「俺・・・の・・・？」

健悟の表情は信じられないという想いと、くすぐったい喜びとが入り混じった複雑なものであったに違いない。だが麻琴は俯いたままでその表情を知る由もない。それどころか妊娠し体の繋がりが途絶えることで健悟は確実に遠退いてしまおうと大きな勘違いをする。

「ううっ いいの、ズッ。。。。安心して。

健兄の子じゃないから・・・だから・・・

だから、健悟は好きにしているよ。。。。」

そしてまたワツと大声で泣き自分の部屋へと閉じ籠ってしまった。

健悟が何度声をかけても泣き声だけが聞こえるのみで話し合いは不可能だった。

健悟はリビングに戻り食卓テーブルに並べられた皿を眺めながら複雑な想いに駆られる。

約一ヶ月ほど前からだろうか、麻琴から拒まれ避けられるようになってのは。その原因は妊娠のせいだったのか。それとも、考えたく



ないが富樫と何かあって・・・そして妊娠に至ったのか・・・だとすると何が何でも自分の気持ちだけで麻琴を引き止めることなどできない。やはり病院も富樫と行ったのだろう。考えてみれば昨日富樫が突然家に訪れたことも不自然だ。富樫は昨日、麻琴と会えないのなら翌日に電話すると自分に伝言を頼んだ。麻琴との接触を絶対のものにしなければいけなかったのだ。それは妊娠の事実を知っていたからではないのか。そしてあの後二人は話し合い、そして病院へ行った・・・なるほど、そう考えると辻褃が合うじゃないか。

「クソツ　もう完全に手遅れなのか」

健悟はいつもの癖で次々に推理していく。仕事柄、無意識のうちに推理する癖があり、それはほぼ100%事実と合致するのだが、プライベートではその力を発揮することは困難だった。いや、寧ろ不器用さを発揮してしまい事態を悪化させてしまう節がある。

その夜、麻琴は泣き腫らした目で健悟に気付かれないように家を出たのだった。

## 刻々と

「ダメじゃないの、こんな時間に」

「ごめんなさい」

「一体どうしたの？ちゃんと話はしたんでしょ？」

「……………」

麻琴が家を出て向かったのはspanだった。安心して向かえる場所にはヒロコとマサの所しか思い浮かばなかった。閉店までにまだ時間のある11時だったが、マサの機転でタクシーが呼ばれ、ヒロコと麻琴は一足早くマンションへ帰ることになった。今はその車中である。

「もしかして……健悟さん反対でも？」

言葉なく左右に首を振る。聞きたいことは沢山あるが、タクシーの中で詳しく聞きだすことに躊躇いを感じ、ヒロコは控え目に話の矛盾を変えた。

「とにかく今日は病院に行ったりして疲れたでしょうから、返ったらお風呂入って温まって……今大事な時なんだから」

「……お母さん、ごめんね」

「いいのよ。私だって同じような事で親に心配をかけたわ」

ヒロコが和樹を妊娠したのは高校生の頃だった。今の麻琴よりも幼く不安だったに違いない。そして親たちも……。

マンション前でタクシーは停車した。降りると夜間であるにも関わらず車内よりも蒸し暑く湿気を帯びた空気が、ジツトリと全身に纏わりついた。

「お母さんの両親でどんな人たちだったの？」

「そうねえ・・・田舎者で心配性で大人しい人たちだったわね。

だから私が和樹を身籠ったと知った時は大げさなくらいに驚いて・

昔は『デキちゃった結婚』とか『おめでた婚』なんて言葉もなくてね、

未婚の、それも学生の妊娠や結婚は恥ずべく行為だったの。

今でも喜ばしいことではないかしらね・・・。だから私の親たちは一緒に死のうとまで言ったのよ。今の時代では信じられないでしょう？

でもね、後に相当苦しめたってことに気が付かされたわ・・・。

和樹の父親とその両親は全く違う考えを持った人たちでね、本人たちが幸せなのに

そののどろが恥ずべきことで不幸なのかって、私の両親を説得してくれたの。

きつと彼の両親も悩んだでしょうにね・・・ありがたかったわ。

家族として迎えさせて欲しいと頭まで下げてくださって」

「羨ましい。愛されてたのね」

「なに言ってるの。麻琴ちゃんだって皆に愛されてるわよ」

部屋に着くと麻琴の前にホットミルクが出てきた。自分で作るより

も遙かに美味しい。お風呂が沸くとなぜか急かされるようにして入った。そして風呂場から戻るとリビングのソファには・・・健悟が座っていた。

「健兄・・・どうして・・・」

「ごめんね、麻琴ちゃん。勝手な事して。

でも時間は刻々と過ぎていくの・・・二人でよく話し合っしてほしいのよ。」

私は席を外すから」

「いえ、ヒロコさんも居てください。オブザーバーとして・・・いや、居てくれるだけで良いんです」

そう言ったのは健悟だった。お互い冷静に話し合うには、やはりこの場にはヒロコが必要だと思った。情けないと言えば情けないが、麻琴が取り乱すと健悟にはどうすることもできなくなる。ヒロコが居ることで麻琴がリラックスし、それを回避できるのではないかと咄嗟に判断したのだ。

「私はいいけど・・・でも麻琴ちゃんは・・・？」

「お母さんさえ迷惑じゃなければ・・・」

ヒロコは黙ってソファの一番端に腰を下ろした。

「麻琴は俺の隣りに座るんだ」

対面して座ると緊張感や圧迫感、対抗心が生まれやすい。隣りに座ると同じ視線で物事を考えられるという心理に基き健悟は場所を指定した。

麻琴が素直に従うと静かな落ち着いた状態で会話に入っていた。

## プロポーズ

「ヒロコさんから昨日ここに泊まったことも、今朝一緒に産婦人科に行っただってことも聞いたよ。妊娠は本当なんだな」

コクンと頷くだけの麻琴。

「麻琴は産みたいんだよな？」

「産みたい・・・健兄が反対しても、私産むって決めたから」

「どうして俺が反対するって決め付けてるんだ。そんなこと一言も言った覚えはないぞ」

「だって・・・私のこと・・・」

「俺の子だよな？」

この質問は一瞬タブーとも思われるが、健悟にとっては『そうであってほしい』という希望的な意味が大きく含まれる。麻琴がさっきのように取り乱すことなく落ち着いている今だからこそ、確認したかった。

「私の・・・子」

「麻琴と俺の子 だろ」

「ん・・・」

「麻琴は俺のこと嫌いになったのか？」

左右に首を振るだけの麻琴に健悟は

「麻琴、甘えるな。子供じゃないんだからきちんとした返事をしろ。そんなの社会で通用しないぞ」

麻琴は はつとしたような困った顔で健悟を見た。なぜだか分からないが確かに健悟の前では幼い自分が顔を出すのだ。生意気になつたりイラツとして我が侂になつたり、そして甘えたり・・・健悟以外の、和樹にも見せない麻琴の一面。健悟はその子供っぽさを決して嫌いではないし、寧ろ可愛くさえ思えるのだが、度が過ぎたりその場にそぐわない場合は今のように入ストレートに容赦ない。

「俺はね、麻琴とずっと一緒に居たいよ。」

ただ麻琴にその意思がないのなら無理にというわけにはいかない」

「私だつてっ 私だつて健兄と一緒に居たいに決まってる・・・」

「じゃあ、なぜなんだ。なぜ俺を避けたり家を出たりおかしなことをするんだ」

「だって・・・健兄、私のこと愛してないんだもん。」

赤ちゃん出来たら困るだろうし・・・それに・・・」

言い辛そうにそこまで言うと、遠慮がちにヒロコの顔をチラツと見る。麻琴の気持ちを察知したのか、ヒロコは立ち上がって微笑んだ。

「ちゃんと落ち着いて話し合いができるわね。」

私はお風呂に入つてそのまま寝るわ。

健悟さん、部屋がなくて申し訳ないんですけど、

今日は麻琴ちゃんの部屋と一緒に寝てください。

お帰りになるならそれでも構いませんが、

麻琴ちゃんを置き去りにはしないでね。  
それから、口うるさいオバサンで嫌われそうだけど、  
麻琴ちゃんは身重で夜更かしは禁物なの。  
できるだけ早く寝かせてあげて下さい。  
じゃ、おやすみなさい」

「はい、色々ご心配掛けですみません。おやすみなさい」

健悟は立ち上がって深々と頭を下げた。心底感謝の思いを込めて。  
そしてヒロコが部屋から出て行くと、二人は互いに下を向き言葉を  
選んでいた。

「麻琴、ヒロコさんが側に居てくれて良かったな」

「うん。本当に。お兄ちゃんにも感謝してる」

「・・・そうだな。親子なだけあって間の取り方とか似てるしな・・・」

「うん。だから安心して甘えてしまつ」

「・・・そうか。そうだな」

何気ない麻琴の言葉。和樹の話題、それも麻琴の中に染み付いてい  
る和樹の存在を目の当たりにすると、胸の奥が締め付けられるよう  
な苦しい感覚に襲われる。この感情はそこに入り込めない事に対す  
る嫉妬なのか、それとも超えられない悔しさからなのか・・・どち  
らにしても好ましい感情でないことだけは確かだ。

「話を戻そう。さっき聞き捨てならない言葉を言ったな。」

俺が麻琴のことを愛していないとか。一体なんなんだ、どういう意



味なんだ、それは。

なんでお前が勝手に俺の気持ちをそんな風に捻じ曲げて代弁してるんだ？」

「だって・・・体だけの関係・・・でしょ、私たち」

「はあっ？ なに言ってるの。意味わかんねー」。

「って、こんな時にヘンな冗談言うなって」

「冗談じゃないっ。私が愛してなくても抱いてほしいって言ったら・・・  
そうしてくれて・・・それから急に優しくなって・・・毎晩のように・・・」

「ちよつと待て。もしかして麻琴は、その、  
ずっと俺が体だけを求めて抱いてると思ってた・・・のか？」

「だって、そうだったでしょ。  
でも妊娠したらそれも出来なくなって健兄はいなくっちゃうんできよ」

「ハァー・・・麻琴はずっと俺の事をそんな男だと思ってたってことか・・・」

「・・・情けね。。。」

ショックを受けうな垂れる。そして目も虚ろにうな垂れたまま、

「怒らないで聞いてくれ・・・富樫とは付き合っているのか」

「だから付き合ってるほしいって言われたけど断ったから」

「昨日、ヤツとどこ行った」

「居酒屋さん」

「お前え。飲んだのか」

「まさか。ソフトドリンクで我慢したもん。あ、でも塩分の強い塩辛食べちゃった」

「食べちゃったって・・・んなこたあどーでもいいよっ!」

「だってえ・・・意地汚くつい食べちゃってから、赤ちゃんに良くなかったかなあって後悔したんだもの」

「大したことないだろ、そんな事。どうでもいいって・・・」

それより麻琴、これからこっ恥ずかしいこと言うけど黙って聞け」

「うん・・・なに?」

そういうと麻琴の耳元に近付き、心の底、心髄に向かって小さな囁くような声で健悟は話し始めた。

「耳かつ穿って聞けよ。一度だって体だけだなんて思って抱いたことないぞ。」

いつだって麻琴のこと愛して、愛して愛して愛して、全部喰ってやりたいほど愛して抱いてたんだ。それに抱いてる時以外だってそうだ。洗濯物畳んでいる姿も、メシよそう姿も、でっかい口開けて笑ってる時も、ブーたれてる時も、余すところなく愛してる」

「うそ・・・ホント・・・に?」

まだ信じられないのか、それとも確認なのか、睫毛を濡らし震える声。健悟は耳たぶに優しくキスを落とす、また耳元に口を近づける。そして更に溶けるような優しい声で囁いた。

「愛してる。俺と結婚して」

なんの飾り気もない、最もシンプルなプロポーズだった。

そしてそのプロポーズに対する麻琴の返事とは言えば、健悟の想像するものとは明らかに違い、大きな動揺を与えた・・・

お返事は・・・？

「結婚・・・？ いい・・・の、私なんかで・・・」

大きな瞳で健悟の顔を覗き込む。ここがヒロコのマンションであることも、真夜中であることも、自分が妊娠していることも全てがどこかに置き去りにされ「結婚」の二文字だけが目の前にバンとある状態。衝撃のみが存在していた。

「麻琴じゃなきゃダメなんだ、俺。  
で、早速だが、プロポーズへの返事は？」

「プププッ プロッ プロポーズッ！  
あっ そっかあっ 今のそうだよね。  
プロポーズだあ・・・」

「あ・・・ああ・・・」

やや引き気味の健悟。

「それで返事は？」

「おっ お兄ちゃんに相談してみるっ」

「！ えっ！！！！」

ドン引きである。どこから和樹に相談するという発想が出てくるのか全く理解ができない。しかも、よりによって和樹である。

ヤバイ。それはかなりヤバ目な相談だぞ……

和樹の気持ちを知っているだけに健悟は内心慌てふためいた。

「ちよちよちよちよつ 麻琴、

プロポーズの返事くらい自分で決めるのが普通じゃないのかつ？

それにアイツに反対されたら麻琴は俺にNOって返事するつもりか？」

「それは……そんなこと……ない……  
と思うけど」

「と思うけど って……またそれか。

なんでそう曖昧な……麻琴お頼むよー。

俺と結婚してくれよー」

何故か平謝り状態で頼み込む姿勢になる健悟。もっとロマンチックにスマートにキメルつもりであったが、全く理想とかけ離れている。

「え……でもお」

麻琴は生まれて初めての突然のプロポーズにパニックしていた。

「まだ起きてこないのか？ そろそろ起こしに行こうか」  
「あと30分寝かせてあげましようよ。きつと心地よい眠りの中にいるんだから」

麻琴の顔を早く見たくて仕方ないマサがさっきからソワソワと落ち着かない様子で、ソファから立ったり座ったりを繰り返している。マサが帰宅したのは明け方の4時頃だった。ザツとシャワーを浴びただけで寝た。そして起きたのは8時半。麻琴が泊まりに来ている時はいつもこのパターンだ。少しでも麻琴と顔を合わせて話したい。それだけの為に。だがいつもだったら7時には起きている麻琴が、珍しく起きて来ていない。ソワソワするマサの前にヒロコは「  
ーヒーをそつと置いた。」

「孫が出来たらどうなるのかしら」  
「え？なに、ごめん。聞こえなかったよ。なんだって」  
「いいのよ。聞こえないようにわざと小さな声で呟いたんだから。それより、そのコーヒー飲んだらちよつと覗きに行ってみましようか」

「ああ、いいね。アチツ」

急いで飲もうして唇を軽く火傷したが、1分という猛烈な速さで「  
ーヒーを飲み干してマサは嬉しそうに立ち上がった。」

「あら・・・まあ。ふふっ

もう少しだけ寝かせてあげましようよ、ね」

静かに開けたドアの先には、健悟に包み込まれるようしてスヤスヤ

と安心して眠る麻琴と、宝物を手に満足気に屈託のない姿の健悟が寝っていた。

「ああ、幸せそうだ。そのままにしておこう」

二人が起きたのはそれから1時間後の10時だった。

「少し寝不足かなあ。もう1時間寝るよ」

そう言ってマサが自分の寝室に入った時、ついドアをバタンツと閉めてしまい、その物音で二人は目覚めたのだった。そしてマサがベッドに入り眠りについた頃、二人は揃ってリビングに姿を現したのだ。コントさながらの展開に、一人クスツと笑うヒロコだった。

## 分籍の孤独

妊娠が安定期に入るまで和樹への報告は控えようという考えもあったが、その前に結婚という問題があった。本当であれば顔を見て伝えたい、麻琴はそう言っていた。が、健悟はそういう気分ではなかった。和樹にとって麻琴の妊娠・結婚がどれ程の苦しみを与えるのかと想像すると、胃が痛くなる思いだった。事務所の椅子から立ち上がり窓の外を見る。考え事をする時、よく榎村がそうしていたように。窓を少し開けたところで熱風と強い日差しが入り込んできた。午後二時、酷暑の攻撃に無言で窓を閉めた。

和樹への重い後ろめたさを肩に感じながらも、対極して感じる幸福感はこの上なく大きい。愛して止まない麻琴と、そして血を分けた子供。夢なのではないかと、まるで高校生が初めて恋人ができて浮かれまくる気持ちにも似た思いが胸に広がる。男か女かさえ分からぬ、まだほんの小さな細胞に想いを馳せ、あ行から順に思いつく名前を頭の中で口ずさむ。途中で舞い上がっている自分に気付き、ふと笑いが込み上げた。そしてまた、和樹の顔を思い浮かべては胸を締め付けられた。

「忙しかったんでしょう？ごめんなさいね、突然」



「いえ、それは良いんですけど。あ、コーヒーと紅茶とどちらがいいですか」

3時を回った頃、ヒロコから少しの時間話したいことがあると電話があった。近くまで来ていると言っているので事務所に上がってもらったのだ。ヒロコがここに訪れるのは勿論初めてのことだ。

「あら、お構いなく。でも・・・麻琴ちゃんがここの紅茶は絶品で言ってたわ」

フワツと笑顔を見せるヒロコにつられ、健悟も口元を緩めた。小柄なヒロコからは俗に言うオバサン臭さは微塵も感じられず、時々か弱くも少女のような可愛らしさが顔を覗かせる。

「亡くなったボスが紅茶が大好きで、麻琴に淹れたことがあったんですよ。自分はその見様見真似ですから期待はしないで下さい」

すぐ隣のドアを開けると小さな専用キッチンがある。大柄な健悟が立つには少々狭いが、以前よりも慣れた手付きで紅茶を淹れた。一口飲んだヒロコが「美味しい」と笑顔で言くと、絵を描いて褒められた少年のように健悟の心は弾んだ。無理もない。大人になって褒められることなど滅多にないのだ。それも仕事以外で。

「まだお代わりありますから遠慮なく」

「ありがとうございます」

「ところで今日はどうしたんですか」

「ええ、健悟さん悩んでいたようだから・・・」

悩んでいた・・・？

「和樹のこと」

「！ どうして……」

「和樹の気持ちに思い悩んでいたでしょう？」

「それは……でも……何故」

健悟は驚いた。和樹の気持ちは自分しか知り得ないことだと思っていた。まさかそれをヒロコが気付いていたなんて……。

「大丈夫よ。私に任せてほしいの」

「え、なに……をですか」

「麻琴ちゃんと健悟さん、それから赤ちゃんのことよ。私から伝えたいの」

「でもそれは……やはり筋として」

「大丈夫。気まづくなるような事にはしないわ。私を信じて。

みんな大切な可愛い……私の子供なの。あなたもよ」

ヒロコの温かな声と眼差しに、不覚にも健悟の目から涙が伝った。

数日後、真夜中にテンションの高い和樹からの電話が掛かった。

『おめでとぅっ、健悟。やったなお前』

第一声は祝福の言葉だった。叩き起こされた形の健悟は隣りの部屋の麻琴を起こさないよう小声でクレームをつける。

「馬鹿お前。今こっち何時だと思ってんだよっ」

『なに言ってるんだよ。子供出来たら赤ん坊は夜泣きするんだぞ』

「お前は赤ん坊じゃないだろおお……」

活動時間帯の和樹には至って支障なく嬉々としている。声のトーン

から充実ぶりが伝わってくる。

『まあ、そう言うなって。籍はいつ入れるんだ。式はどうする』  
「まだ具体的には決めていないんだ。」

籍は早い方が良いかなとは思っているんだが、  
お前の承諾も得なきゃならんと思ってたし……」

『承諾も何も、早くしろよ。子供じゃないんだから。  
あ、もしかしてお前美山の籍に入りたいとか？』

「そうじゃないけど……いや、  
実は早瀬でも美山でもどっちでも良いと思っっているんだ。  
その辺りに拘りは無い。だからそこも相談しようと思っっていた」

『……早瀬に入れるよ。お前たちが新しい早瀬を作っっていけばいい』

和樹は健悟の気持ちを一瞬時に読んでいた。麻琴が美山の籍から抜けるということは、当然この世の中には和樹が一人となる。戸籍上の孤独は以外に寂しいものだ。これ以上和樹に寂しい想いはさせたくない。それに早瀬の籍は健悟からすると暗いものだ。二十歳の誕生日にこれから一人で生きていく決意を持って分籍、つまり親の籍から抜け、新たに自分だけ戸籍を作ったのだ。戸籍の孤独は健悟がよく分かってる。

『あと結婚式は挙げるよな。生まれた後でも良いし、時期はお前たちに任せるから』

「ああ……和樹、短期間でも一度戻って来れないか」

『考えておくよ。悪い、もう切らなきゃ。またな。麻琴に宜しく。無理させんなよ!』

一方的に言うたあつと言う間に電話は切れた。

ヒロコは和樹にどう説明したのか。親子で、それも健悟には一生手に入れることのできない母と子の関係。想像以上に素晴らしいものであるに違いないと思いつつ、自分にはその幸せを和樹が持っていると思えば救われる何かがあった。そして明るい和樹の声に温もりをもらい、考えることは山ほどあるのに、布団に横になると直ぐに寝付いてしまった。

## 父性

それから間もなく、麻琴は苦勞してやっと掴んだ就職先を辞めることにした。社長は40代の女性であり、自分の経験からも出産・育児休暇の適用を気持ちよく勧めてくれた。だがまだ入社して間もない自分が、『想定外の妊娠』という形で退職を願いだしたのだ。それは社会的に見て無責任とも言えよう。社長の気持ちは有難かったが、実際そこまで甘えることは到底できなかった。

とはいえ物の、まだまだ勉強したいことはあった。願わくばギリギリまで仕事を続け産休を取りたいと密かに思っていたのは事実。だが健悟とマサが大反対をしたのだ。うんざりするほど何日も二人に懇々と説得され、和樹の過保護ぶりを懐かしく思い出しながら最後は麻琴が折れる形となった。社長に言われた「復帰を楽しみにしている」という言葉が、社会との繋がりをまだ断ち切られていないように嬉しかった。

「ただいまあ」

上がり気味の語尾。最近帰宅すると真っ先に麻琴のお腹に両手をあて、丸く円を描くように撫でながらキスするのが習慣になっている。

「大人しくしていたか」

まるで病人扱いであるが、健悟にしてみれば大真面目の本気である。和樹が知ったら間違いない健悟は大目玉を食らうことだろう。

「はいはい、大人しくしてました・・・」

久しぶりに昼間美佳と会い、カラオケを楽しんだことは少しの間秘密にしておこう。カラオケなんかで大きな音なんか聴いて胎教に悪いなどと言いかねない。麻琴は心の中でペロツと舌を出した。

つわりの期間は比較的短く済んだが、日に日に大きくなるお腹。とにかく重たい。妊婦なのだから当然なのだが、そのスピードにはヒロコも驚くほどだ。それもそのはず、麻琴のお腹には双生児がスクスクと育っているだから。健悟の喜びようは半端ではなかった。知ったその日からベビー用品を何でもかんでも2つずつ揃えはじめたのだ。大量のオムツからベビーバスに至るまで、二部屋が潰れるほど暇さえあれば買ってくるのだ。一番驚いたのは早瀬の家を建て替えてしまったことだ。

「これからいくらお金がかかっていくのか分からないんだから、もう買いまくるのはやめて」

妊娠6ヶ月目を迎えた頃、麻琴は注意してみた。だが、そんな麻琴の言葉にも

「生まれてからでは間に合わないかもしれないじゃないか。  
金の心配はするな。銀行にそこそこあったし、無くなればちょっと多く働けばいいんだ」

猪突猛進である。もう誰にも止められない・・・。しかし実際金銭的な心配は無用だった。これまで忙しく働くばかりで金を使う時間がなかったし、健悟の父親の送金も高校生の頃から手をつけておら

ず、槇村の残した遺産である金銭、土地・建物や不動産などの相続による権利も相当にある。隠しているわけではなかったが、健悟はそれらの財産については一切知らせていない。

「ふうー。重たっ」

仏間の押入れの一番奥から、やつとの思いで古びたA4サイズ位の缶の箱を取り出した。重たいのは箱ではなく自身のお腹である。出産までにやっておきたい事の一つは片付けだ。それも普段なかなか手を入れることのない場所のである。

「何が入ってるんだろ。宝石とか大金とかだったらどうしよお」  
一度も見たことのない箱だった。隠されるようにして置かれていたその箱を振ると、紙のようなものが束で動いているようなカラカラと乾いた軽い音がした。  
少しか期待感のあるドキドキと共に、そつと蓋を開け麻琴の手は止まった。

「あ……あの時の……」

それは2ヶ月前だった。早瀬の家の建て替えが始まり、麻琴は散歩がてら様子を見に行った。新しい家は住んでも良いし住まなくても良い、物置代わりにしても良いし、人に貸しても構わないと健悟は

言った。だがそれなりに拘った内装で、実のところ住む目的なのだろうと麻琴受け止めている。それに麻琴自身は健悟に従うつもりでいる。だがその際、美山の家をどうするのか和樹に相談しなければいけない。健悟はきつと自分の建てた家で、自分の家庭を築きたいのだ。それも特別なものではなく、ごく普通のありふれた家庭を。

そんな風に考えながら早瀬邸の前に着くと、建て替えの様子をジッと動かず見ている見知らぬ男の後姿があった。背が高くスラリとした細身の白髪交じりで、年は50代前後だろうか。近隣住人かと思いい、挨拶のつもりで声をかけた。

「あのお・・・ご近所にお住まいの方ですか？」

男は一瞬ビクツとしたが、ゆっくりと振り返りながら返事をした。

「いいえ、通りすがりの者です」

低く響くような声を持ったその男は、端正な顔立ちをしていた。

「ゆりちゃん・・・？」

「えっ？」

「いや、失礼」

麻琴を見た途端、男は明らかに目を瞠った。そして動揺を見せたかと思うと、慌てて麻琴の横を擦り抜けあつと言う間に姿を消したのだ。

缶の箱から出てきたのは麻琴の父寛和の、高校、そして大学時代の整理されていない写真の束だった。若い父の傍らでは殆どと言って良いほど、決まってその男が笑顔で立っていた。端正な顔立ちのそ



の男が。

写真の裏をひっくり返して見る。

早瀬と成田山にて

## 本当に無関心？

「……でも良いよな？……おい、麻琴？」

「あ……え？」

「だから健康ならどっちでも良いよなって」

「ああ……うん。そうだねえ……」

「どうした？具合でも悪いのか」

「ううん。そんなことないよ。どうして？」

ずっと上の空で健悟の話に身が入っていないことなど気付いていない。昨日あの箱を開け、見てしまった写真が頭から離れないのだ。健悟に言うべきか、それとも忘れるべきかとあれから考えあぐねている。

「健兄、怒らないで聞いてくれる？」

「ああ。なんだ」

夕食を終え、二人は肩を並べてソファで寛いでいた。健悟の大きな手が麻琴の頬を覆うと、「遠慮なくどうぞ」そう言いニッコリと微笑んだ。麻琴の妊娠を知り、大きくなるお腹と共に健悟自身の心も少しずつゆとりを見せ始めていた。頑固さはなりを潜め穏やかに過ごす日々に、健悟自身この世の中にこんな幸福感が存在したのかと、生まれて初めて神様に感謝したほどだ。それほど満ち足りて充実しているのだ。だから今の自分なら無理難題、何を聞かされても受容する余裕がある。得意げに顎を上げ麻琴の頬を撫でた。

「うん、あの・・・ね、健兄はお父さんに会いたくないのかなあ・・・って」

健悟の笑顔が一瞬にして固まった。いや、全身が固まったと言っても間違いではないだろう。そして徐々に笑顔は消え、小さな溜め息が零れた。傷つけて怒らせてしまったかもしれない。麻琴の胸はズキズキと痛み始めた。

「あの、ごめんなさい。私余計な・・・」

「顔も思い出せなくなったよ。会いたい・・・と思ったこともないな。」

自分に子供が出来て思うことは、親父も俺と同じくまだ見ぬうちから子供を愛しく感じたことがあったのかなってことくらいで、後は本当に何の感情も持ち合わせていない」

「・・・そう。じゃあ、もし、もしもよ。お父さんが会いに来たら？」

「別にどうもしない・・・そろそろもういいか」

「え？」

「この話題、もういいだろう」

麻琴の頭をポンポンと軽く叩き立ち上がった。

早瀬邸は先日完成したばかりだった。着工から完成まであつと言う間だった。それには健悟が若干の我が儘を言い立てたからだ。大工にしてみれば『若干』どころではなかっただろう。とにかく現場を見に来ては、「急いでくれ」と繰り返し、棟梁に嫌な顔をされた。後で謝ったりお茶菓子を持っていくなどフォロする麻琴に、棟梁は『出来た嫁だ。あんたに免じて出来るだけ頑張るよ』と。そして汗を拭きながら『悪いがあの色男はせつかちで敵わん』と大声で笑

つてくれた。そんな風に急がせた割りに、健悟は住もうとは言わないのだ。それには健悟なりの理由がいくつがあるのだが、一つにはやはりこの家には温もりを感じたことがなかったからだろう。

健悟の父親は何をしに来ていたのだろう。どんな思いであの家を見つめていたのだろうと麻琴はそのことばかり考えてしまう。もしも健悟に少しでも会いたいという気持ちがあるのなら、この一連に關して話しただろう。だが、どう優しく解釈しても怒っていない代わりには会いたいという気持ちもなく、そればかりか『関心がない』というように聞こえた。完全に健悟からは父親への愛情は感じられなかった。本当に無関心なのか・・・？

せつかく生きてて会えるっていうのに・・・

「ねねっ 甘い物とか大丈夫？」

おばあちゃんが麻琴につて、いちご大福作ってくれたんだけど」

「うそっ 嬉しいっ。家でいちご大福なんて作れるのお？」

「いや、初めて。ただの大福は時々作るけど、いちご入りはスペシャルよ」

「すごい。お茶淹れるから待つて。

あ、お皿そこの棚から出してくれる。その一番上のね」

「はいはいっ。人使い荒いなあ・・・」

この前カラオケに行つてからまだ2週間しか経っていないが、その間二度遊びに来ている。久しぶりに会つた麻琴のお腹の成長ぶりに感激した美佳は、生まれるまでにその成長過程をもつと感じたいと

言い、時間をつくって足を運ぶと言い出したのだ。麻琴としては一人である時間が長いため、その提案は有難く、日々美佳の来訪を心待ちにしている。

「いったただつきまーす」

パクツと一口大きく頬張ると、甘酸っぱい清涼感が口一杯に広がった。

「おーいしーいつ。あっ！」

「えっ、どうしたの麻琴っ」

「動いたの。最近ね、私のはしゃいだり笑ったりする時に、

お腹の中でモコモコツて蹴ったりパンチしたりしてるみたいなの。

あ、ほらっ　ね？」

美佳の手を取り腹部に当てる。

「うわっ　ホントだっ。すごいねえ。美佳お姉さんですよ。早く会いたいでーす」

「あははっ　すごい動いてる。嫌がってもがいてるのかな」

「どういう意味よ・・・早く会いたくて暴れてるに決まってる、絶対に」

「ね、明日学校お休みでしょ？　泊まってるよ」

「あー、ごめん。授業はないんだけど、色々とやんなきゃいけないことあるの」

「そう、仕事なら仕方ないね・・・」

「ん？どうしたのよ。悩みでもあるの？」

美佳の口調は説教がましいものも威圧感もないが、はじめから受け

入れる体制が垣間見える教師のそれだった。そして最後の一口をポ  
ンと口に放り込み、「何でも聞くわよ」と口角を上げた。もともと  
シツカリした美佳だったが、麻琴の知らない場所で社会人、教師に  
なっていた。そして相談事をするつもりなど一切なかったが、いつ  
の間にか健悟に話すべきことを美佳相手に話していた。その結果、  
いつもと同じシンプルな結論が出される。

「会うも会わないも、それは麻琴が決めることじゃないし、  
隠しておくのもなんだから、取り敢えず早瀬さんに言っべきよ」

## 相手の立場

健悟自身、本当は会いたいのではないだろうか。だとしたら美佳の言う通り、早瀬家の前で会ったことを正直に伝えるべきなのかもしれない。だがそう思う一方で、もしかしたらまた健悟が辛い思いをするかもしれない・・・と思うと二の足を踏んでしまっていた。

健兄はどう思うの・・・どうしたいの・・・

『相手の気持ち分からない時は、相手の立場に身を置き換えてみるんだ』

麻琴は和樹のそんな言葉を思い出す。そして目を閉じた。

それは恐ろしい程に悲しく辛い想像であった。

『捨てられた』

そうとしか思えなかったからだ。その後10年以上経って突然現れてきて、それにどう反応しろというのか・・・。泣いて喜ぶか、それとも泣き喚いて怒りをぶつけるか。もしかすると健悟の言った「どうもしない」とは、怒りも嫌悪も全て通り越した虚無に似た感情なのかもしれない。だとすると、十数年ぶりに目の前に父親が現れても殆ど他人のような感覚・・・いや、そんなはずは・・・血を分けた親子だ。きっと特別な感情が、僅か欠片でもどこかに残っているはず。でも・・・しかし・・・と、いくら考えても計り知れないものがあつた。

それはまるでバラバラにはら撒かれたトランプカードを、手元に？き集めて一枚ずつ順番に並べる作業に似ていた。そしてそのカードを捲っていく中で見えてくるいくつかの事実。

まず、多感な少年期にたった一人の身寄りである父親が突然姿を消す。それも女性と……。

少年はその時父親にだけでなく、世の中に捨てられた思いだったに違いない。唯一の救いは美山家だっただろう。だが……そこにあった極普通の家庭もある事故によって崩壊を見せる。子供だけが取り残されるという不幸。家族以上に愛した人たちがこの世から居なくなる。少年の心は暗い所を途方もなく彷徨った。その後がむしろにアルバイトをしていたのは、送金だけしてくる父親に依存したくないのと、悲しみに震える時間を作りたくないという孤独からであつた。

そして少年が少年らしく泣いたのは、美山夫婦の葬式の時のたった一度だけだつた。想い出話に出てくるのは血の繋がりのない美山夫婦の話ばかりで、実父の話は彼から一度も聞いたことがなかつた。

傷ついたまま、癒えぬままに成長してしまつた少年に、二年前麻琴は取り返しのつかない言葉を投げかけてしまつたのだ。

『親子の絆の分らない冷たい人』

・  
・  
健兄のこと、心の深いところ……私は何も分かつてなかつた。

「麻琴、ありがとう」

「え、なにが？」

横向きに寝ている麻琴を背後から抱きしめるようにしてお腹を撫で、



この上なく幸せそうな優しい声で囁く。珍しく11時半だというのに麻琴と一緒に健悟はベッドに横になっていた。

「俺にないものを麻琴がつくりあげてくれること」

「なに？ それ」

「家庭、家族、愛情っていうエゴや金で買えないもの」

「健兄・・・」

「夢みただよ・・・あ、こいつら起きてるのかな。今動いたよな」

「私が嬉しいと一緒に喜んでくれるの。可愛いでしょ」

「ははっ 俺が嬉しい時も動いてると思うぞ」

「うん」

「明日、少し早く起きるからもう寝よう。お前たちもな」

お腹を撫でながら麻琴の頭に軽くキスを落とすと、余程疲れていたのかほんの数分でスースーと寝息を立て始めた。最近の健悟は寝る間もないほど忙しく、帰宅時間も12時を過ぎることが多かった。麻琴が翌日のスケジュールを聞いても「気にするな。今はのん気にお腹の子供のことだけを考えていればいい。寝る時間も起きる時間もマイペースにしてくれ」と言うのだ。美佳に言わせれば「大事にされすぎてムカつく」らしいが、麻琴自身も、甘やかされ過ぎているといふ自覚があり、何とか脱出したいところなのだが・・・

翌朝5時に健悟の携帯のアラームが鳴った。こそこそとベッドから起き出す健悟に麻琴は声をかけた。

「おはよう。ご飯食べる？」

「ああ・・・いや、寝てるよ。適当に空港・・・いや、その辺でパ  
ンでも買っから」

「今日はどこかへ出張なの？」

「・・・いや、そういうわけじゃ・・・とにかく寝てるって」

なんとか寝せようとする健悟だが、麻琴にはその気はない。ベッドから身を起こし、目をパツチリと開けている。

「もう目が覚めちゃったもん。起きる。何時に出るの?」

「6時半くらいかな」

「そう。私はパンとミルク飲むけど、健兄付き合ってくれろ?」

「はは、分かったよ。ミルクをコーヒーにしてくれ」

朝食を共にするのは久しぶりだった。簡単にサラダを作ってパンとコーヒーをテーブルに並べる間に、健悟は出掛ける身支度をする。いつもよりラフな格好だ。仕事ではないと直感したが、聞いても誤魔化されるような気がして触れなかった。

「今日ね、お昼前にお母さんたちが来るの。」

ランチは任せてって、何か作ってくれるみたい。

健兄は何時頃に帰れそう?」

「そんなに遅くはならないよ。もしかしたら昼頃に帰れるかもな」

昨日の就寝時間といい、今日の出勤時間といい、いつもとはパターンが全く違う。それに加え帰宅時間が考えられないくらい早いのだ。麻琴の表情がパツと明るくなり声が弾んだ。

「ほんとっ?じゃ、健兄の分も作ってもらっね」

「ああ。嬉しそうだな、麻琴。きっと今日は良い日になるぞ」

「うん、私もそんな気がする」

そしてこの日、麻琴は大粒の涙を零す事になる。

## 玄関の外

健悟は公園の前を通り過ぎ、建ったばかりの早瀬の家へと向かった。その道すがら、和樹に言われた「新しい家で、新しい家庭を二人で築き上げる」という言葉を繰り返し思い出していた。一ヶ月前、やっと婚姻届を提出した。悩みに悩んだ末、やはり「早瀬」の姓を選んだ。これまで早瀬の姓に拘りなどなかったが、麻琴が「お嫁に行きたい」と天真爛漫な笑顔で抱きついたことが決定の要因だった。たったそれだけの小さな理由に時々思い出してはクスツと笑ってしまふ。

今健悟が考えている事は、やはり建ったばかりの家のことであった。強引に建ててしまったは良いが、実のところ多少後悔もしていた。古いまま物置代わりにしても良かったし、さら地にして駐車場にでもして小遣い稼ぎに役立てても良かったかもしれない。貸家にするか・・・いや、それは新しいだけに今となっては些か悔しい気もする。

外観を眺めながら一つ溜め息を零していると、道を挟んだ向こう側から中年らしき男が自分の家をジツと見ている。そして健悟の視線に気付いたのか、パツと踵を返し足早にその場を立ち去ったのだ。

「なんだよ、気持悪いな。麻琴にも気をつけるように言っとかなきゃな」

ブツブツ言いながら鍵を開け家の中へ入ると、新築独特の新しい木の香りが真っ先に全身を包んだ。空気の入替えの為に窓を開けていく。二階の一番奥の部屋のみ、現在開く事のなくなった古い書物

が置かれている。

ピンポーン

予定通りチャイムが鳴った。

「おはよーございまーす。待ちましたか？」

「いや、さっき来たばかりだよ。じゃあ、行くか」

「はいっ！」

「その服なかなか良いじゃないか。似合ってるよ」

健悟は麻琴に向けるのと同じ優しげな眼差しで告げると、言われた美佳はポツと顔を赤らめた。水色のシンプルなカットソーに、ベージュのシフォン素材のフワリとしたギャザースカート。白のバッグとパンプスが夏に映えていて、麻琴にでも似合いそうな華奢な可愛さがあった。美佳は頬を赤らめたまま、

「ずっと会えなくて我慢してたんです。

今日くらいは・・・オシャレしてもいいじゃないですか」

社会人とは思えないほどの初々しい緊張が見て取れた。

「大きくなったわねえ。歩くのが大変なんじゃない？」

「歩くのも大変なんだけど、実は靴を履くのが至難の業で、足元が全然見えないの」

「ははっ 下足番が必要だな」

ヒロコとマサ、そして麻琴はリビングで寛いでいた。食事はマサが

既に下ごしらえしてきたものを持ってきており、適当な時間になったら調理に取り掛かるだけだ。

「健悟さん、今日は何時に帰るの？」

「それがね、お昼頃に帰れるかもしれないの」

「そう。じゃあ、あと1時間くらいかしらね」

「じゃあ、俺はそろそろ調理に取り掛かるか。

あ、いいよいよよ、今日は私に任せなさい。

二人はそのまま座ってお喋りしてなさい」

鼻歌交じりにマサがキッチンへと姿を消すと、ヒロコがクスクス笑いながら

「マサさんたらね、毎日毎日勝手に赤ちゃんの名前考えてるの。」

男の子か女の子か分からないし、麻琴ちゃんと健悟さんが二人で考えるんだからって

言っても、そんなの分かってるけど、考えるだけで楽しいからって  
言ってる聞かないのよ」

「嬉しい・・・」

じんわりと心の芯が温まる感覚に、つい涙ぐむ麻琴。まだ決まってい  
ないが、確かに麻琴も健悟も名前は考えている。

「みんなで決めたいの。一人一つずつ名前を考えて、その中から決  
めるっていうのどう？」

お母さんも考えてほしいの」

「まあ、私も？」

「ダメ？」

「まさか。どうしよう。眠れなくなっちゃつかも」

既に遠い目をして考え始めてしまった。

12時50分。健悟が帰宅した。

「ただいまっ」

「お帰りなさい。本当に早かったのね。」

お父さんが大量のランチ作ってくれたから、早く手を洗って食べようよ」

大きなお腹を抱え健悟の腕に纏わりつく麻琴の肩を抱き、頬に口づける。

「麻琴、ちよつと玄関の外見てきてくれないか」

健悟の嬉しそうな声に、何となく良い事があるような気がしてワクワクしながら玄関のドアを開けた。

「・・・うそっ、お兄ちゃ・・・」

「ただいま、麻琴。元気だったか」

「なんで、どうして・・・？」

久しぶりの予期せぬ再会にポロポロと大粒の涙を落としながら、和樹の首に巻きつくが大きなお腹が邪魔して和樹は仰け反る形となった。

「おいおい、何で泣くんだよお」

麻琴の頭をポンポンと撫でながら笑っている。日本にいた時よりも何となく遅しく見えるのは食べ物のせいか気のせいか・・・。

「妊婦が泣いたら赤ん坊がビックリするだろ」

「ん・・・お兄ちゃん、会いたかったよ。帰ってきてくれたんだね」

「とにかく話は中に入ってからだ。美佳ちゃんも入って」

「はい、麻琴っ、おっじやまつしまあゝす」

和樹の後ろからヒョッコリと顔を覗かせた。

「美佳あ・・・どうしたの。」

嬉しいよー、みんなが集まるなんて信じられない」

今度は美佳に抱きつくがさすがに美佳には支えきれそうもなく、瞬時に和樹が後ろから麻琴を支えていた。

「美佳、なんかキレイ。いい匂いする」

「はいはい、いいから家に入るよ。お腹ペコペコだよ」

美佳に背中を押されるようにして家の中に入った。

「知らなかったのは私だけだったの？お父さんも知ってたの？」

「知ってたよ。だからご飯いっぱい作ったのさ」

「なんだゝ 教えてくれれば良かったのに」

「はははっ。みんな麻琴ちゃんの喜ぶ様子が見たかったのさ」

ブツと頬を膨らませ幼い表情を見せる麻琴に全員が笑った。そしてそんな麻琴に和樹は笑いながら注意をした。



「麻琴、子供ができたならその顔はやめとけよ。子供は親の全てを真似ようとするんだ。そのフグみたいな顔だって絶対に真似るぞ」

「分かってるわよ。でもフグって・・・  
あ、お兄ちゃん、他の荷物はいつ届くの？」

「荷物って？」

「だから生活に必要な・・・」

「いや、今日持ってきたものだけだ。また一週間後には向こうに戻るから。」

今回はこっちで大事な学会があつて、それで来たんだ」

「帰ってきたんじゃないの・・・」

急に萎んだようになる麻琴。そして美佳。

二週間に一通の頻度で美佳はエメールを送っていたが、これまで和樹からは一度も届いたことはなかった。途中何度も迷惑なのかもしれない、送るのは止めようと考えたが、何故か送り続けていた。そんな中届いた一時帰国を知らせるエメールは、飛び上がる程嬉しいものだった。そして今日、麻琴を驚かせるために、早瀬宅で健悟と落ち合い空港へと出迎えに行ったのだった。もちろん提案したのは健悟だ。

空港で対面した和樹は、以前よりも日に焼け少しだけ野生的に見えるが、発する言葉は以前の和樹そのもので、恋焦がれた和樹が目の前にいるというだけで天にも昇る思いだった。帰りの車では健悟が気を利かせ、和樹と美佳を後部座席に乗せた。健悟は密かに美佳を応援している一人なのだ。

「積もる話もあるけど、明日は学会なんだ。時差ぼけも少しあるか

ら、少ししたらやすませてもらうよ」

ヒロコもマサも食事の片付けをし始めている。美佳もそこに加わり、リビングには和樹と麻琴と健悟だけになった。

「お兄ちゃん、日焼けしたね」

「そうか。最近 近所の子供相手にキャッチボールしたりサッカーしてりしてるからかな」

「向こうの子供は体格がいいだろう」

「そうなんだよ。足が長い長い」

他愛ない話が時の流れを感じさせない。しかし麻琴は一週間後にはいないのかと思うと、既に寂しい想いに囚われ始めていた。そして予期せぬ出来事がいくつか降りかかってくるなどとは、この時誰も想像していなかった・・・。

## 逃げは後悔

それは和樹が来て三日後の事だった。その日の午後和樹は一人、学会資料を手に新しくなった早瀬邸に足を向けた。水道・電気等のライフラインは既に通っており、必要な荷物さえ運べば直ぐにでも生活ができる状態にはなっているのに、なぜ健悟は直ぐに住もうとしないのか和樹は首を傾げる。

「へえ 結構いい家じゃないか。ホント分かんねえヤツだ。住む気バリバリで建てた感じじゃないかよ・・・」

予め受け取っていた合鍵で家の中に入る。健悟と同じく窓を開け空気の入れ替えを始める辺り、意識していないにしても似た者同士だ。そして二階の一番奥の部屋、本来であれば書斎になるべく10畳のその部屋の窓を開け顔を外に出すと、一人の男が所在無さげに早瀬邸を見ていた。健悟ほどではないが図体のデカイのは分かるが、距離が離れており顔の認識まではできない。なんだろうと思いつながら和樹がその動向を見守っていると、5分ほど佇み男は下を向いたまま静かに立ち去って行った。

「建築士か・・・？」

ま、いつか。さてと、とつとと纏めるか」

少しでも残りの日を充実させるべく、学会資料を広げた。

4時間後の夕方5時。

「やべ、途中で寝ちまったか。どれくらい寝たんだ・・・」  
腕時計を見ると20分ほどしか寝ていないことが分かりホツとした。そろそろ帰らなければ。今日は麻琴が腕を振るうと息巻いていた。

「早瀬 麻琴・・・か。

麻琴が子供をねえ・・・」

感慨深いものがある。一昨日抱きついてきた時の麻琴は、子供の頃の麻琴そのものだったが、その身体は明らかに母体で、まるで神秘的な女神のようだった。

麻琴の妊娠は和樹に新たな心の転機をもたらした。アメリカに行っても麻琴のことが頭から離れたことはなかった。いや、寧ろ一層麻琴の存在は大きくなっていったようにも思える。そんな中、時折送られてくる美佳の手紙は、多少の煩わしさと心地よさを僅か与えてくれた。だが、麻琴への想いを残したまま美佳の手紙への返信は、ある意味残酷にも思えてできなかつたのだ。

全ての窓と玄関を施錠し、ポケットに鍵を押し込めながら振り向くと、ジツとこちらを見ている男が居た。

あ、さっきの・・・

そしてその男は遠慮がちに和樹の方へと近付いてきた。

「すみません。ちょっとお尋ねしたいのですが・・・」

図体のデカイわりには声の小さな男だった。身長も和樹とそう変わらないその男は、50代くらいと見受けた。

「何でしょうか」

「こちらのお宅の方ですか？」

「いえ、私は違いますが、この家の者にご用ですか。失礼ですがお宅は……」

「いや、私は……突然すみませんでした。失敬」

クルツと背中を向けるその仕草に見覚えがあった。

そうだ、その背中はいつも何かを振り切るように頑なだった。常に時間に追われ、苦しそうだった。美山家に健悟を預け、仕事へ出掛ける時の背中だ。あの頃、この人は自分たちと同じ年代だった。

「おじさん……」

男は凍りついたように足を止めた。決して振り向くことない頑なな背中。

「健悟に会いに来たんですね」

「何のことか……」

「生きてたんですね。健悟、元気ですよ。

うちの麻琴覚えてるでしょ？健悟、麻琴と結婚したんです。

もう少ししたら子供も生まれて父親になるんです」

「本当に何のことか……失礼するよ」

男は背中を向けたまま一度も振り返らず、大股で一步、二歩と遠ざかるうとする。

「おじさんっ！……！」

和樹は近所中に響き渡るほどの大声を出し、走り寄ると男の腕を力一杯掴んだ。

「和樹……見逃してくれ……」

震える涙声。俯いたままの男の足元には、雫が落ちては消え落ちては消えを繰り返していた。

「ない……それは……でき……ないよ……」

そうは言ったが和樹とて、腕をガツチリと掴んだまま、今どうすべきかその最善案に迷っていた。そうこうしている内に、和樹の大声を聞いて出てきた近隣住人が数名、心配そうにこちらの様子を見ている。

「お騒がせしてすみません。何でもありませんからお引取りください」

和樹の落ち着いた言動に会釈をして戻っていく者、まだ訝しげにチラチラと見ている者が数名。

「取り敢えず家の中に入りましょう。大丈夫、今日健悟はここに来ないんだ」

「分かったよ……だから腕を放してくれ」

「玄関を入ったら放します。おじさん逃げそうだから」

鍵を差込みながら柔らかい声で言うと、男は緊張が取れたよう腕の力を抜いた。

「リビングって言っても家具も何もないんだ」

二人は床に胡坐をかいて座った。健悟の顔の輪郭は父親譲りらしい。目元は以前見た写真から母親と似通っていたことを思い出す。

「この前・・・と言っても、二ヶ月くらい前かな。百合子さんそっくりの女の子を見たんだ。声を掛けられて驚いたよ。あれが麻琴ちゃんなんだな」

「多分そうです。二十歳頃から急に母さんに似てきたんです。麻琴、なんて？」

「近所の人かと聞いてきたよ。俺は・・・慌てて逃げた」

「・・・もう逃げるのよしませんか。逃げて残るのは後悔ばかりですよ」

「分かってる。分かっているけど・・・アイツが・・・怖いんだ」「なら、なぜ会いに？」

「2年位前の話だが、榎村という弁護士が突然現れたんだ・・・」

## 麻琴の効力

「お兄ちゃん遅いなあ〜」

ダイニングテーブルに頼杖をつき、さつきから壁掛時計を見ること5回。5時には戻ると言ってお出掛けたが和樹だが、6時を過ぎても帰宅しない。

「もお・・・ま、近いから行っちゃえっ」

携帯に電話を掛ければ連絡は取れるのだが、直ぐ近くで歩いて行ける場所に和樹がいるかと思うと嬉しくて、わざわざ面倒なことを選んでしまう。ささやかな楽しみのように。

今の麻琴の足取りは若い妊婦と言えどもやぼったいものがある。やや背を反らして左右に身体を揺らしながらポテポテとのんびり進む途中公園を横切る時、向こう側から手を振りながら走ってくる人物がいた。麻琴は笑顔で手を振り替えた。

「お帰りなさい」

走らなくてもいいのに。汗かいちやって・・・ふふっ」

「ただいま。汗は今かいたんじゃないよ。

ところで手ぶらで何処行くんだ」



「あ、今朝お兄ちゃん5時には帰るって言ってたでしょ。なのにまだ帰らないの。近いからお散歩がてら迎えにね」

「ふうーん。じゃあ、俺が行ってくるよ」

「じゃ、一緒に行こつ。ね」

健悟は麻琴の手を取ると鼻歌を歌いながら歩調を合わせブラブラと歩き出した。大きな手に包まれ守られている実感が足の先から頭为天辺まで浸透していく。妊娠前後に苦しめたつまらない誤解が、今の幸せに繋がっている。二人はそのことをよく理解していた。

「あれ、和樹出てきた」

「ホントだ」

20メートル程離れた場所から見える我が家から、ちょうど和樹が出てきたところだった。そして直ぐ後ろから見知らぬ男が姿を見せた。

「ん？誰か出てきたな。誰だ。麻琴、知ってるか？」

二人は立ち止まったまま和樹達を見ていた。麻琴には直ぐに分かった。そして健悟の手を無言でギュッと握った。男が和樹に何度か頭を下げている。そして男がこちらを振り返った時、同時に和樹と健悟、麻琴のそれぞれが顔を見合わせる形となった。

「健悟・・・」

驚愕の顔を見せたのは和樹だった。

父親は健悟の姿に釘付けで立ちつくしたままで、遠目にも足がガタガタと震えているのが分かる。健悟は何か異様なものでも見るように目を細め、その姿を凝視している。

「健兄……？」

麻琴は小さく声をかけ健悟の顔を見上げた。相手が誰なのか気付いてる。そう思わせる疑いのない視線だった。

「あ……ああ。帰ろう」

グイツと麻琴の手を引つ張り和樹たちに背を向けようとした時、和樹の声が聞こえた。

「健悟、ちょっと話がある。こっち来るか、それとも向こうに帰るか」

「……俺には話しなにかない」

体は斜め向こうを向いたまま返事だけする。

「こっちはあるんだ」

「ほっとけよ……」

「えっ？なんだって」

「ほっとけって言ってんだよ……!!」

麻琴は大きな声に驚きビクンと体を震わせた。その声に連鎖したように近くの犬たちの遠吠えが聞こえる。

「ごめん、麻琴。驚かせたな」

「う……ん、いいの。でも……  
家に来てもらおうよ。ね、健兄」

心配そうな麻琴の表情に押される気持ち。ここに麻琴さえ居なければ、確実に無視して走り出していた。妊婦の麻琴に悲しい思いだけはさせない。妊娠を告げられた時、心に誓ったのだ。どんなことがあっても、絶対にこの誓いだけは守るのだ……と。

「麻琴がそう言うのなら……」

「ありがとう、健兄」

麻琴は何故かお礼を言い、和樹に向かって軽く手を振った。

「家に来ていいって」

まるで健悟が進んで招いているような言い方だった為、健悟の表情は一瞬曇ったが、麻琴が笑顔で見上げるものだから諦めて肩を落とした。生活、仕事、と全てを自己決定してきた健悟にとって、誰かにコントロールされるということには馴染みのない違和感がある。だが、抵抗する気にもならなは麻琴の効力の成さぬ業か。

ああ、すでに尻に敷かれてる……

## ターミナル

仏間には座卓を挟み和樹と健悟がいた。

二時間前まで、この部屋で健悟の父親は情けないくらいに畳に頭を擦り続けていた。仏壇を前にしても驚かないところを見ると、美山夫婦が他界したことは知っていたようだ。麻琴はお茶を用意すると自ら席を外し健悟たちを3人にした。

シンと静まり返った部屋に耐え切れなくなったのは和樹だった。

「おじさん、何か言う事あるんじゃないの」

背中を丸め、ずっと下を向きっぱなしの健悟の父に静かに言葉を投げかける。

父親は瞼をギュッと閉じ、震える口元を隠すように食いしほり、消え入りそうな小さな声で「申し訳なかった」と言い、土下座をした。健悟には分かっていた。この父親は謝って土下座することしかできない・・・と。それは仕事柄、度々目にする極一般的な行動の一つだからだ。

・  
・  
日本人の最も深い謝罪の礼式として、土下座は欠かせないよな

覚めた思考で健悟は思う。他に新たな感情は浮かばない。

「別に土下座なんかしなくてもいいんじゃないですか。今更そんな事されるこちらの気持ち、考えていますか？」

「・・・すまない」

「はぁ・・・困るんですよね。」

そもそも今頃どうして現れたんですか。

ああ、家ですか。あの家、法的には問題ないですけど、つい先日勝手に手入れさせてもらいました。もし必要であればお返ししますからどうぞ。手続きに数日掛かりますが名義も貴方に戻しましょう」

あくまでも事務的に淡々と話す健悟に、和樹は咳払いをした。

「まあ、そう言うなって、健悟。

おじさんも・・・もっとこう・・・通り一遍じゃなくて・・・まあ、仕方ないか」

謝る以外、理由を述べたところでそれは単なる言い訳や言い逃れに過ぎなくなる。ならばいつそ陳謝せず謝るだけの方がマシだと察する。

「和樹さ、まさか親子関係の修復とか考えてないよな。

悪いけど、今更それは無理だから。

この人だってそれは分かってんじゃないの」

チラツと父親を目の端に捉えて和樹を見る。辛辣な言葉だが、これまでの事を思い起こすと最もだと和樹も思う。だが、時間をかけ少しずつにでも・・・と心の底では和解を願う気持ちがあるのも事実だ。

二人の前で小さくなって下を向きっぱなしの父親からは何の表情も捉えられない。

「お金は・・・あるんですか。無いなら貴方のお金が纏まってあるのでお返ししますよ」

健悟の言葉に父親は下を向いたまま言葉なく頭を左右に振った。

「遠慮しないで下さい。本当に手付かずであります。多分1800万・・・いや、少し欠けるかな。とにかくそこそこありますよ。使う予定もないので明日にでもご用意しましょう」

「うっ　くっ・・・頼む、そんなこと言わないでくれ。

あれは・・・お前の・・・」

搾り出すような苦しい声。泣いていた。

その後一向に話は進まず、2時間足らずで父親は和樹と麻琴の見送りで家を後にした。

玄関を出てから、麻琴はこっそり父親に鮭入りのおにぎりを二つ手渡した。

「おじさん、また来てね。

健兄の、彼の好きなおにぎり食べてね」

大きく膨らんだお腹を撫でながら微笑む麻琴に、母親の百合子が重なる。

「ありがとうございます。健悟を宜しく頼みます」

深々と頭を下げ背中を向けた。

遅くなった夕食を済ませ二人はまた仏間へと戻った。麻琴は片付けてからお風呂に入るからと、やはりその場から離れた。

麻琴は健悟が決めたとおりで良いと思っっているのだ。健悟の気持ちを一番大切にしたい。如何なる理由があつたにせよ、父親の勝手で辛い思いをしてきたのだ。麻琴自身、健悟の父親を責めるつもりは全くない。しかし健悟に対する罪はあり、それを赦すも赦さぬも健悟の気持ち次第であると考える。以前の麻琴であれば、『理由があつたのだ、謝っているのだから赦してあげるべきだ』と詰め寄つたに違いない。だが、人の心はそんな二元論ではないのだと過去から学んだ。

「健悟、聞いてくれ。実は榎村さんが死ぬ前、親父さん見つけ出して会いに行ったそうなんだ。北海道に一人でいたらしい。で、榎村さんは、健悟があの家を売らずに一人で生活していることや、弁護士になつて社会生活を送っている事を話した。大人になつた今だからこそ、心から詫びて許しを乞う頃ではないかと持ちかけたらしい。でも踏ん切りというか、お前に顔を合わせる勇気がなかつたんだ。だが・・・」

「早く言えよ」

昔から和樹には核心部で溜める癖があり、健悟をイラツとさせた。

『正解を口にするまでにネチネチと時間を食い尽くすクイズ番組の司会者同様 性質が悪い』と健悟を怒らせたこともある。

「親父さん、末期癌でターミナル期に入ってる」

「ターミナル？」

「余命、3ヶ月だ」



R15 ・ 私の胸で甘えて（前書き）

ちよつとだけR15です。

苦手な方やとつっても若い方はスルーして下さいね。

「どうしたの？ おっきな子供みたい」

麻琴は柔らかな声で、健悟の背中や頭を優しく撫で擦った。健悟はベッドに入ると無言で麻琴の背中を抱き、そっと自分の方へと身体を向けさせた。以前よりも大きく張った乳房をやわやわと揉むとボタンを3つ外し、固く尖った敏感な先端に唇を這わせ赤ん坊の様に吸い付いた。妊娠してからというもの軽いスキンシップはあつても直接的な刺激は極力避けてきた健悟の行動。その行動と刺激に一瞬驚いた麻琴だったが、気が付けばたおやかなその腕で健悟を抱きしめていた。それは無意識にも母性そのものであった。

父親の情けない土下座、涙、小さくなった背中、余命。健悟の憎しみは高校を卒業する頃には無くなっていった。いや、送金の受け取り日以外には父親の存在や影すら無くなっていったのだ。強がりではなく、本当に会いたいと思ったことも無かった。それなのに姿を目にしたらどうだろう。今まで心の隅にもなかったにも関わらず、その存在はモクモクと灰色の煙が広がるように心の中に充満している。

「大丈夫、安心してくれ。これ以上のことはしない。  
だから・・・このまま・・・もう少し・・・」

片手は陶器に触れるように優しく愛しげに右の乳房を、そしてもう

片方の手は左の乳房に添えられ一心に吸い付いて離れない。

「いい、よ……赤ちゃんたちが生まれるまでは……それまでは健兄のだもの……」

胸への刺激は少しずつ官能への扉を開きつつある。しかし健悟も麻琴もそれ以上は本気で望んではいない。身重で、しかもお腹の中には二つの心臓。当初麻琴が想像していた以上に健悟は子供の誕生を心から楽しみにしている。『夫婦』『子供』『家族』、そして『妻』というそれぞれのありふれた響きを耳にするだけでも誇らしげで優越感たつぷりの表情を見せるのだ。

「麻琴……優しいな……  
母さんと……同じだ。んっ……」

決して胸から離れず途切れ途切れうわ言のように囁く。その間も麻琴はずっと健悟の身体を優しく擦り続けていた。温かな感情がベツドから溢れ返りそんな感覚に健悟は酔いしれた。何もかも忘れて、ただその行為にのみ没頭し、そのまま眠りについた。

翌朝目が覚めると、麻琴のはだけた胸に縋るようにして顔を埋めている自分に嫌悪感を感じた。麻琴に申し訳なさで一杯になりながらそつと顔を離し、麻琴のパジャマを整えようと手を伸ばした時、

「おはよう。よく眠れた？」  
「ああ……昨日は……その、ヘンな事して悪かった」  
「ん？ ヘンなこと……？」  
「だから、あの……」

目の前で露わになったままの麻琴の胸を見ると、伸ばしかけていた手で前を閉じた。

「いいのよ。私、頼られているような気がして嬉しかったの。だって、いつも私ばかり甘えて・・・健兄だって甘えたい時あるよねそんな時は、私の胸で甘えていいのよ」

「麻琴・・・」

麻琴の優しく温かい気持ちに包まれ、健悟の目にはうっすら光るものがあつた。麻琴がそれを隠すように、そっと胸に抱き寄せ頭を撫でた。

その日の朝、健悟はこれまでにない晴れ晴れとした表情で家を出た。何かを吹っ切つたような、そんな潔ささえ漂わせて。

和樹が起きてきたのは8時を過ぎた頃だった。早起きの和樹にとつては珍しい起床時刻である。

「あー 寝た。麻琴、悪いけど食うものある？」

「おはよー。あるよ。お兄ちゃんの好きなサンドイッチ作ったの。聞いてよ、健兄なんか腹の足しにもなんないとか言つてね  
おやつみたいにバクバク食べて最後にメシまだ？なんて言うのよっ。  
信じられる？」

「はははっ。麻琴、お前さあ」

「ん？」

「いつまでも 健兄 のままなの？」

「え・・・ヘン？」

サンドイツチを皿に並べて和樹の前に差し出す。それを受け取り一口頬張った。

「結婚して夫になった男に 健兄 ってのはヘンじゃないか？」

モグモグと口を動かしながら籠った声で逆に問いかける。

「そ・・・そう？ じゃあ、ちょっと呼び方変えてみる？」

「そうだな。きつと新鮮だぞ。」

あ、それはそうと、今日は久しぶりにspannに行つて、そのまま向こうに泊めてもらう約束したんだ。だから今晚は帰らないから。

それから明後日はあちこち仕事で動くから帰ってくるのは二日後になると思う」

「え・・・じゃあ翌日にはもう・・・」

「そうだな。最後の夜はここで過ごすよ。ここから空港に行く」

和樹の予定や昨日の出来事などで、和樹とゆっくりした時間を持っていない。明日も明後日もあるのだから・・・と思っていた麻琴は心底ガツカリした。だがヒロコのところでゆっくりすることは和樹だけではなく、ヒロコやマサにとっても大切な時間だ。それに仕事で帰国しているのだから、その関係で時間を取られることも仕方のないこと。そう自分を説得して麻琴は無理に笑顔を作った。

「最後の日は早く帰ってきてね。美味しいもの沢山作るから」

麻琴がこっそり隠した寂しさ。それは和樹の目に小さく映りこんでいた。

「今日は夜までのんびりここに居るよ。どこにも行かない」

麻琴の目が少しだけ喜びの色に輝いた。

R 1 5 ・ 私の胸で甘えて（後書き）

ご覧くださってありがとうございます。

ここのところ更新が滞ってしまい申し訳ありません。

こんなでも最後まで書ききるつもりです！

多分、きつと、あともうちょっとだと思っています。

きつと何かのご縁があったのだと思います。

お時間がありましたら、最後まで寛容なお心でお付き合い下さい。

まだまだ暑い日が続きます。

どうぞお体大切にお過ごし下さい。

それではまた。

芽吹

## スパイ

「なんだよ、くっ付き過ぎ」

和樹は苦笑いで体を捻るようにして左側へとずれた。

「いいのっ。お兄ちゃんとうっしていられるのも限られてるんだから」

満面の笑みで逃げた和樹に引っ付き右肩に自分の頭をもたれかける麻琴。

「お兄ちゃんいなくて寂しかったんだからね」

「嘘付け。健悟がいて何が寂しいんだよ」

逃げることをやめた和樹はそのままの姿勢で話をすることにした。やはり寄り掛かれると、以前よりもかなりの重みを感じる。

「お兄ちゃんと健兄とは違うもの」

「どう違うんだよ」

「うーん・・・秘密」

「なんだよ。思いつかなかったただけだろ」

「へへっ。秘密でいいのっ」



それから他愛ない話を延々していた。話は尽きることなく時間が刻々と過ぎていく。気が付けば夕方になっていた。何か飲み物をと立ち上がった時、和樹は麻琴の手を軽く握った。

「麻琴、頼みがあるんだ」

「・・・なに、突然」

「ただいま」

片手で麻琴を抱き寄せ、お腹を撫でながら頬に軽い口づけをする。

「おかえりなさい、健悟さん」

「んっ??? なに、なんだっ」

「えっ? なにが」

「今、なんて言った」

「おかえりなさい」

「その後」

「健悟さん」

「・・・なに企んでるんだ」

「なんでそうなるのよお」

「だってヘンだろ。急に呼び方変えたりして」

「お兄ちゃんに夫婦なのに健兄っていう呼び方はおかしいって言われたのっ」

「へえええええっ へえええええっ」

「なによっ その へえええええっって」

「気持ちわるっ。寒気がするねえっ」

「……あ、そっ。」

『きつと新鮮だぞ』って言ってたけど全然じゃん……」

「えっ？」

「なんでもないっ！ フンッ 早くお風呂入ってきてっ」

「なんだよお……ご機嫌斜め。」

はいはい、奥様の言う通りお風呂に入って来ますとも」

カバンとネクタイを麻琴に預けると、タコのように口を尖らせたまま風呂場の方へ向かった。

健悟の入浴時間は大体30分前後だ。与えられた時間は30分。麻琴はベッドルームへ入ると、手渡された黒い皮製カバンの外ポケットから携帯電話を取り出した。そして発信履歴を上から順に追っていく。

T 地裁

榎村事務所

S 区役所

C 警察署

杉田一郎

村沢弁護士

K 大学……

「あつた」

携帯電話を折り畳み元の場所へと戻す。次にカバンの中から手帳を取り出す。さすがに手帳を取る手に振るえが走った。ページが上手く捲れない。ドキドキと心臓が忙しく動き、無意識に肩で浅い息をする。弁護士にとって手帳は命だ。当然人には渡さない、まして見せることなど絶対のない完全シークレットだ。麻琴は心の中で「ごめんなさい、ごめんなさい」と繰り返しながらおぼつかない目で目的のページを探す。

「あ……これ……だわ」

慌ててクローゼットの中から用意しておいてペンとメモ用紙を取り出し書き写した。文字はカクカクと振るえ滑稽な形を作ったがそれでも読める文字だった。どれくらい時間がたったのか時間の感覚も分らぬまま、マタニティードレスのポケットにメモ用紙を押し込み、手帳を元に戻しいつもの定位置へと置いた。

カチャッ

ドアの開く音にハッと振り返ると、取っ手を握ったまま、腰にバスタオルを巻き上半身裸の健悟が不思議そうな顔で突っ立っていた。

## 見えない絆

「あ……」

「なにしてんの？」

「あの……」

「着る物無かったから呼んだんだけど返事ないし、何かあったのかとおもっ」

「あつ！ ごめんなさいっ。今直ぐにっ」

震える手を隠すように後ろのクローゼットに向き直り、爆音とも思える自分の心臓の音を掻き消すように雑な音を立てクローゼットを開いた。

「ね、もいつかい温まってきた。風邪引いちゃうから。直ぐに着替え持って行くね。本当にごめんねっ」

「いや……そんな慌てるほど大袈裟なことじゃ……麻琴……大変だったらこれから着替えくらい自分で準備するよ」

「ううんっ いいの。でもありがとっ」

声が震えそう。健兄お願い。お風呂に戻って！

「そうか。じゃあ、頼むな」

「うん」

ホツとした。健悟が部屋から出るのと同時に足から力が抜け、ヘナヘナと床にへたり込んでしまった。だが、このままノンビリこうしている訳にもいかない。床に両手を付き、のそりと立ち上がり着替えを揃えて部屋を出た。最近では階段の昇降が非常に大変になってきている。お腹は前にも横にも大きく膨らみ、まるで大砲を抱えているようだと思つた。

「よいしょつ　よいしょつ」　と一段ずつ掛け声して慎重に降りる。

「あと三段つと。　よいしょ　あつ！！！」

激しい大きな音と共にあちこちをぶつけながら階段を転げ落ちた。

「い・・・た・・・」

「どうしたつ！！！」

激しい物音に気付いた健悟が全裸のまま慌てて飛び出てきた。

階段の下には腹部を抱えるようにして横たわる麻琴の姿。健悟は一瞬にして顔面蒼白となった。直ぐに駆け寄り麻琴の上半身を起こす。

「健兄・・・ごめ・・・なさい。私の不注意で・・・」

「そんなことはいいつ。どこ打った？　痛いところは？」

「お腹・・・いた・・・い」

「おい、麻琴。麻琴つ！！！！」

「うっ……ん」

動こうとすると身体の節々に鈍い痛みが走る。薄っすらと目を開けると薄暗い中に淡いピンク色が一面に現れた。目をパチパチと慣らしもう一度、今度はしっかりと開眼した。

一面のピンクはその部屋の天井だった。部屋全体に目を走らせ、要約ここが病院のベッドであることを理解した。

あ、赤ちゃん

腕の痛みを忘れ右手をお腹に当てると、そこには馴染みのある大きな膨らみがあった。ホツとしながら左手を動かそうとした時、手を握ったままベッドに突っ伏して眠る健悟に気が付いた。

「健兄……？　ねえ、健兄？」

左手に少し力を入れ健悟を呼ぶと、ガバツと頭を上げ

「大丈夫かつ。どこか痛いのかつ。医者を呼ぼう」

ナースコールしようとする健悟の手を麻琴は慌てて掴んだ。

「待って健兄つ。私、どうして……？」

「階段から転落して、気を失ったんだ。それで救急搬送されたんだ。医者が言うには骨折もないし、頭も打っていないから大事には至らないそうだが、

右足に擦り傷と、所々痣はある。悪かったな、これからは自分のことは自分でするよ」

「健兄のせいじゃないよ。私が足を滑らせて・・・  
ね、赤ちゃんに異状はないよね？」

「あ、ああ。大丈夫だ。赤ん坊には全く問題ない。

今は肉体的というより精神的ショックもあるだろうから  
一晩安静にしてから帰れってさ」

「そう・・・心配かけてごめんね。

赤ちゃんたちも ごめんね」

右手は健悟の手を握り、左手は大切そうにお腹を擦りながら謝った。  
今朝、和樹に『足元には気をつける』とくどいほど言われたばかり  
だったのにと、自分の不甲斐なさにジンワリと涙が浮かぶ。

「何でもなかったんだ。良かったよ。

まだ2時だ。目を閉じて寝るんだ」

麻琴の顔を両手で包むと、親指で涙を拭い 触れるだけの優しいキ  
スを落とす。

翌朝目覚めると窓の外を眺める背中があった。

ああ、そうだった。何かを考える時、いつも静かに窓の外を見て  
たっけ。

声は出さず暫くその背中を眺めることにした。5分経ち、10分経  
ち・・・やっと背中は窓に向けられた。

「なんだ、起きてたのか」

「お兄ちゃん どうしてこんな所にいるの？」

「健悟から連絡があったんだ。用があるから麻琴を頼むってさ。」

「・・・麻琴、ごめん。昨日は変なこと頼んだりして、お前それで慌てて・・・」

「そうじゃないの。足が滑って落ちちゃっただけなの。」

それよりおじさんの病院のことだけだ

「もういいんだ。健悟に直接聞いた。というより、昨日の事は全部ばれてたよ」

「えっ、うそっ でも健兄は何も言っただけじゃなかった・・・」

「麻琴や俺を責めても何にもならないって、そう言ってた。返って巻き込んでしまっただけが悪かった だってさ」

末期癌であることを健悟に伝えたあの日、『明日、身内として主治医に連絡を取って経過を聞く為の日時を決める』と和樹は父親の通院先を教えたのだ。その時健悟はそんなことはしないと張り張っていた。もし本当に健悟にその気がないのなら、その時は自分が主治医のところへ行こう。ただ日本に居られる日数に限りがある。健悟が連絡をし、確実に日時を決めたかどうかの確認が必要だった。そしてその確認ができるのはただ一人・・・。

「自分で病院行くって言った後、あいつなんて言ったと思う？」

麻琴が考えもせず首を傾げる。

「はあ。。。少しは考えるよ・・・。健悟は、

『血の繋がりに、断ち切れない何かがあるらしい』  
って言ったんだ。その『何か』を知りたいんだと」



「健兄・・・」

それは二人にとっては辛く苦しく、そして忘れたくても忘れられないあの日の会話の中の言葉であった。親子や家族の絆を認められずもがき続けてきた健悟が、初めて向き合おうとしていた。健悟の心に新しい血管が一つ繋がったようにさえ感じる。しかし、一度バツサリと切れてしまった見えない絆を手繰り寄せることが如何に困難であるか、この時の麻琴はまだ知らなかった。

## 妻の勘 対 昵懇

「え、もう行くの？」

「ああ、言つたら、色々とあるんだよ。」

明日は何時になるか分らないけど、できるだけ早く帰るよ。」

静かに麻琴をソファアールへと座らせ、頭をポンと優しく叩いた。

昨日はspanでマサの勧めるままに酒を飲み、旨い酒で久しぶりに気持ち良く酔う事ができ、余計なことを考える間もなく睡魔に襲われ泥のように眠りについた。が、明け方に携帯が鳴ったのである。始めは寝ぼけていたのか、はたまたアルコールが抜けていなかったからか、携帯は急患の知らせと思ひ込み「どんな状態だ。意識レベルは。年齢は」などと矢継ぎ早に質問していた。それに対し連絡した健悟も「特に問題はない。意識はあるが今は寝ている。年齢は22歳だがもう直ぐ23だ」などと大真面目に答えていた。そんな感じで噛み合っているようで噛み合っていない二人の会話は10分にも及び、和樹が覚醒した頃に現状がやつと伝わったのだ。結局のところ簡単に言えば階段からの転倒で救急車を呼び搬送されたが異常はなかった。妊婦の精神状態を考慮して朝まで入院して帰宅することになったが、健悟は朝8時半に出向かなければいけない用があり、退院手続きと帰宅時の付き添いを頼まれたのだ。和樹にも予定があつたが少しくらいの時間の融通がきいた。昼にはヒロコも様子を見に来る。和樹はそれだけ伝えると急ぐようにして出てしまった。麻琴の無事に安心したのか、なんとなく軽やかな足どりで表情も明るかった。

夕方いつもより早めに健悟は帰宅した。この帰宅までに麻琴の安否を確認する為、なんと15回も携帯に電話をよこした。始めの頃こそ「心配かけてごめんね」などと謝っていた麻琴だったが、5回、8回と電話が来る度に溜め息をつき、10回を超えた時にはとうとう「もう大丈夫だから、電話いらないつ。しつこい!!!」と怒ってしまった。が、その後も懲りずに電話し続ける健悟に、半ば諦めを握り締めつつ、『こんな人だったっけ?』と、もう苦笑いするしかなかった。

帰宅した健悟は心なしか憑物が落ちたような、そんな楽そうな顔をしていた。

「なにか良い事あったでしょ」

「いや、べつに。なんでだ?」

「妻の勘・・・かな。ふふっ」

「妻・・・かあ。良い響きだ。ははっ」

「ほらっ、絶対に良いことあった。なにになっ なんなの?」

ソファアの上で横座りする麻琴の隣にゴロツとなり、ズルズルとよじ登る様にして麻琴の膝の上に頭を乗せた。そして目を瞑ったまま、

「やつぱさ、三十年来ごじゅうさんねん昵懇ごんにしている和樹わじゆがいると、なんかこう、色んなことが纏まとまるというか、丸く収まとまるというか、解とるかなあ、解とらないだろうなあ、麻琴には」

「なんかムカつくんだけど。しかも何それ。ジッコン?」

「お前、昵懇ごんくらい知しつとけよ。法廷ほうていでも時々出る言葉ことばだぞ。後ごで辞書じしょ引ひけ」

心を込めてバカにする健悟。しかしどこか楽しげである。

「はいはい、自分で調べますよおくだ」

「はい 一回」

「お兄ちゃんみたい。あー、やだやだ」

膝の上の健悟の頭などお構いなしにバツと立ち上がった。瞬間、健悟の首は鞭打ちを受けたようなおかしな角度へ向いたかと思うと、次には引力に逆らいきれずソファーへ吸い込まれるようにして落ちた。気まぐれな神様の悪戯である。健悟はしかめっ面で首を押さえながら起き上がった。

翌日、和樹が帰宅したのは午後6時を過ぎてからだだった。麻琴はもっと早く帰宅するものと思っていた為、苛立ちと寂しさで心の中はザワザワとしていた。だが和樹はそんな麻琴の気持ちには気付かず健悟と仏間に籠って何やら話をしている。食事の支度が出来たら呼べと言うので呼んだが、ちょっと待ってくれと言ってから、かれこれ20分は待たされている。こっさり仏間の前に行くと二人はボソボソと話し内容はさっぱり分らない。そして時々噴出すような笑い声が聞こえたりする。男同士のコソコソ話はロクな会話じゃないと以前美佳が言っていたことを思い出し、この二人にも当て嵌めてみた。が、仲間に入れない寂しさは拭えず、黙っていられずパシッと襖を開けていた。

「旨いつ。やっぱりさ、食事はウチで食べるのが一番だな。アメリカはなんでも大味なんだよ。甘いものはとことん甘かったり、この微妙なうま味っていうものがないんだよな」

和樹はさつきから麻琴の料理を褒め通しである。麻琴の機嫌とりもあるが、心底美味しいと思つての正直な感想だ。しかも今日が最後の夕食で、また暫く会えないのだ。全て和樹の好物を並べたのだ。カボチャの鶏そぼろ煮・カレイの唐揚げ・茄子の煮浸し・茶碗蒸し・そしてイタリアンサラダ。

珍しく健悟よりもモリモリと食べた。明日の移動のことを考えてアルコールは避けた。

食後は和樹と健悟が片付けてくれた。その間、和樹に勧められ麻琴は先に風呂に入った。

「健悟、例のことだけど麻琴には？」

「いや、それが落ち着いた時間がなくて何も話していないんだ。でも明日にでも思つてる」

「そうか。うん、早い方がいいな。麻琴にも心の準備が必要だ」

## 無縁の重さ

翌朝、麻琴は空港まで見送りに行くつもりでいたが、健悟も和樹も鬼の形相で却下した。そして代わりに健悟が見送りに行くと言ったが、できるだけ麻琴のそばにいてやってほしいと和樹はやっぱりと断り一人で空港へと向かったのだった。

たった一週間。しかも自宅にいたのはほんの2、3日程度で大した話も出来なかったが、和樹という存在がそこに居るだけで自然な安らぎがあった。それは麻琴だけではなく、健悟やヒロコも同様であった。和樹はどうだったのだろうか。日本に、自宅に帰り少しは落ち着けただろうか・・・いや、おそらく時間が足りず後ろ髪引かれる思いで発ったに違いない。

「麻琴、ちよつと大事な話があるんだ」

当然のように仏間へ連れて行かれる。

何時の間にかこの仏間は大切な話をするための神聖な場所となっていた。人を傷つけない為の嘘偽り以外は赦されない場所。もちろん「貪り・怒り・愚痴」の三毒も繰り広げられてきたが、それも偽りの無い真実だ。麻琴は健悟の支えを受けながら座卓の前の座布団にヨイシヨと座り、横に足を崩した。健悟はそれを見届けると直ぐ横

に胡坐をかいた。

「おじさんのこと？」

麻琴の切り出しはストレートである。特に最近は『どストレート』とも言えよう。

「あ、ああ・・・」 若干出鼻を挫かれる思いだ。だがそんな事お構いなしの麻琴は、

「大丈夫なの？ おじさん重い病気なんですよ。それで健兄病院に治療方針聞きに行ってきたんですよ？」

和樹から教えられ大学病院の担当医に電話をしたのは翌日の午後だった。電話口に出た医者は声の感じから50代前後と思われた。身内の者だと伝えると空かさず患者との関係性を聞かれた。『息子です』と躊躇いなく言えず、健悟が言葉に詰まると、医者の方は一瞬にして怪訝そうなものに色を変えた。突き放すような硬質な声色で「個人情報保護法はご存知ですか」と冷たくあしらわれた。健悟とて素人ではない。当然医者の云わんとしていることは解る。気を取り直し健悟は端的に続柄と身分を伝え、一度会って話を聞きたいと申し出ると、医者は少しの間を置いたあと態度を変えた。

「なるほど息子さんですか。ご本人は天涯孤独とおっしゃっていらしたものと困っていたんです。今後のケアのことも含め、是非息子さんとお会いしたいですね」

医者は手の平を返したように明日の午前8時半を指定してきた。学

会やら手術が立て込んでるので・・・と、後でグタグタと言いつけを付け足した。結局は少しでも早く身内に任せ、死亡後の雑多を丸投げしたいのだろう。当然といえば当然か・・・と、健悟も職業柄理解する。

もちろん和樹には成り行きを話そうとは思っていた。医者に会ってある程度纏まった話をと考えていたのだ。それがまさか麻琴にスパイをさせるとは思っていなかった。以前であれば余計なことをしてくれるなど怒ったかもしれない。しかし、それもこれも善意からの行動であることは間違いないのだ。元はと言えば医者とのコンタクトは取らないと言い張った自分が悪い。和樹がそのまま放っておける人間でないことくらい分かっているし、麻琴にまで要らぬストレスを与えた。感謝こそすれ、文句を言える立場ではなかった。

医者によると原発性肺癌で現在はあちこちに転移があり手の施しようがないという。本人の意思で抗癌剤治療はせず、現在は痛みを取り除くだけの最低限の薬だけで生きているというのだ。だがその薬も日に日に効きが短くなってきたており、薬が効いている短い間に簡単な食事や排泄など最低限の行動をしているが、それ以外は布団の上だ。余命3ヶ月というのも、実はいつどうなっても不思議ではない状態である。癌センターの紹介状を頼んでみたが、現実には治療目的でない患者の受け入れはなく、緩和ケアのためにホスピスはどうかと提案された。すでに余命は僅か、死は目前だ。これまで会いたいと思ったことはなかったが、別に死んでもいいと思ったこともなかった。だが、確実に近い将来「死」はやってくる。健悟としてはどう受け入れていいのかが分らない。

医者は健悟が弁護士であると知るとアツサリと父親の所在を教えてください。病院を出たその足で父親の住む住所地へ車を走らせた。会いに行くのか、それとも家を見に行くだけなのか、何一つ決めずに



そこは昭和を思わせるような錆び付いた古くみすばらしいだけの二階建てアパートだった。鉄階段も所々抜け落ちそうな状態で、よく崩れ落ちず建っているものだと言えど寧ろ変に感心すらしてしまう。車から降りアパートを眺めていると、ふと、そう言えば・・・と思いついた。そもそも父親が家を出たのは女が出来たからだだったのだ。天涯孤独と言えども、その女がいるのではないか。ならば余計なことはいしたくない。ここで死のうが何しようが二人の勝手にすればいいのだ。車に戻ろうと向き直ったとき、向こう側からビニール袋を手にヨロヨロと歩いてくる男がいた。目が合うと男は立ち止まり、そしてまたヨロヨロと歩き健悟に近寄ってきた。

家の中は外観同様、薄汚れていて天井や壁、畳にまでちよつとやそつとじゃ取れないだろう染みが模様を作っていた。敷きっぱなしの布団に脱ぎ捨てたままの衣類。ゴミ箱から溢れるティッシュや紙くず。部屋の隅には倒れかけた古新聞の束が一層みすばらしさを強調している。父親は無言でペタンコに潰れた座布団を差し出したが、健悟はそれをよけ畳に座った。

「一緒に住んでる女は」

「そんなもん・・・いない」

「いつ居なくなっただんだ」

父親は下を向いたままそれには答えなかった。正直健悟もいつ居なくなっただかなど、そんな話はどうでも良かった。余計なことだったと思いつながら、医者に聞いた薬の効きがなくなる前にと話を先に進める。

「これからどうするんだよ」

「・・・これまで通りだ。もう姿を見せるようなことはしないよ。」

だから俺のことは忘れてお前は今まで通り  
「癌の事、和樹に聞いたよ。さつき医者にも会って詳しく聞いてきた」

真正面から畳み掛けるように告げられ、父親はその落ち窪んだ目を一瞬見開いたが、二度ほど頷き口の端に諦めの薄笑いを浮かばせた。

「そうか・・・知ってるのか。・・・心配するな、迷惑はかけない」「そうは言うけど、じゃあ死んだ後はどうするんだよ」

違う。本当は死ぬまでにどうするのか、いや、どうしたいのかを聞きたいのだ。自分は父親に泣いて詫びさせ、面倒をみてくれとせがんでほしいのか。それも違う。意地の悪い自分に心底ウンザリしてしまう。

「無縁仏に入れてもらうさ。人づてに頼んでいるんだ。だから安心してしろ」

あくまでも自分を頼る気などないことが分りホツとするのと同時に小さな落胆を感じた。

無縁仏・・・無縁・・・心に寒々と冷たい響きが氷のように硬く重く置かれる。

「金、あるのかよ」

「まあ、食うくらいある啦」

「まともに食ってないだろ。こんなところで、こんな暮らし・・・よく平気で」

「平気だよ。これくらい、何てことないさ。ゴホッ　ゴホッ」

背中を丸め近くにあったタオルを口に当ててる。昔に比べ頭頂部が薄

くなっている。病魔のせいも全体的に小さくなり、頬がこけ目が落ち窪み年よりも老けて見えた。

「悪いな、最近咳が出るようになって。人には移らないらしいから」  
「それくらい知ってるよ」

淡々とした言葉で、さも何でもないという風に健悟は言った。

「健悟」

「・・・なんだよ」

名前を呼ばれたのは何年ぶりだろう。

「死ぬことは怖くないんだ。生きていく事に執着もない。  
もうすぐ逢えるんだ。祥子と逢えるんだ」

女と蒸発までした男が、本当に妻を想い続けてきたものか。些か信じがたいが、死を目前に弱った身体と思考が思い出させるのは、若くして亡くなった妻のことなのか。

「そう。今後のことだけど・・・  
俺に任せてくれないか。  
というか、悪いけど俺の言う通りにしてもらおうよ。  
今日は帰るよ。じゃあ・・・また来るから」



## 短いレールの上で

「嫌よ。絶対にそんなこと嫌だから」

静かに、だが頑なな強い意思を示す口調。

「そう・・・か。だよな。」

あんなヤツに金かけるなんてバカらしいもんな。  
悪かった、忘れてくれ」

事の成り行きを全て聞かされた麻琴は、健悟の意見に考える間もなく反対した。

健悟は何の疑問も持たず医者言う通り、緩和ケアを目的に都内のホスピスで最期を迎えることが望ましいと思っていたが、確かにそれは自分の独り善がりな考えである。それにこれまで父親に対し自分とはどちらかと言うと・・・いや、完全に否定的であった。そのことを知っている麻琴にすれば当然の反対だろう。健悟はあっさりと引き下がった。

「なにがホスピスよ」

「ああ・・・申し訳ない」

「あんなヤツとか、金かけるなんてバカらしいとか、どっちがバカよっ」

「ああ・・・えっ?」

「もう時間がないんでしょ。なのに、どうしてそんな寂しいこと・・・うっっ」

見ると麻琴は目を真っ赤にして涙を拭っていた。

「ま・・・麻琴・・・」

「ギリギリまで家で見るから。絶対に家で見るもん。わたし・・・健兄がなに言っても譲らないからねっ」

信じられない思いで麻琴を見、そして小さな溜め息を吐いた。もう自分には選択肢などない。麻琴が泣いて断固として譲らないというのだ。もうきつと何を言っても自分の意見は通らないだろう。だが、現実的に無理もある。少し遠まわしに、だが消極的に聞こえないように麻琴に問う。

「麻琴、家で見るって、一体どうやって。」

麻琴はそんなお腹だし、俺だって仕事がある。

・・・実質無理があるだろう」

最後の方は意識していても、探りを入れるような情けなく消え入る自信のない声になってしまった。とことん麻琴に弱い自分を己に露呈しているような気がした。

「出来るわよ。きつと出来る。」

健兄、介護保険ってあるでしょ。基本的には65歳以上の人が対象なんだけど、40歳以上65歳未満でも特定疾患があれば対象になるの。17疾病のその中に末期癌があるわ。だから対象になるはずよ。認定が下りるかどうかは分らないけど・・・でも、とにかく明日にでも区役所で申請してくる」

完全に麻琴の敷いたレールの上まっしぐらである。それからの麻琴は妊婦とは思えないほどテキパキと動き、あらゆる手続きをしていた。区役所で介護保険の申請を行い、認定調査を受けるまでの間には、なんと早瀬邸へ引越しまでしてしまっていた。一階のリビングの横にある和室を父親の部屋にするのだと言い、介護用ベッドも暫定でレンタルした。問題は父親の意思だったのだが、その父親の遠慮も全くお構いなしだ。新しくなった早瀬邸へと連れ出す時など正に強引そのものであった。既に足腰が立たなくなっていた父親を見て、健悟に有無も言わせぬ勢いであっさりと担がせたりもした。

その後介護保険調査を受け要介護3の認定を得ることができた。すぐに在宅酸素を取り入れ訪問看護を受け始め、双子を宿した妊婦と末期癌の父親、そして父親にどう振舞っていいのか分からない健悟との3人暮らしが始まった。

痩せ衰えていく姿は見ていて辛い、家族の最期を温かなものにした。麻琴は父親との時間を少しでも多く過ごせるように、最低限の外出しかしなくなった。それでもストレスになることはなく、体調の安定している時の父親の話を書くことが楽しくて仕方なかった。それは健悟が生まれ、初めて立ち上がった時の感動であったり、何でも口に入れる癖がついて困った時の話や、野良犬を怖がり逆に犬が驚いて退散するほど大声で泣き喚いた話など、麻琴の知らない健悟の子供時代の話が父親の口から鮮明に蘇った。そしてそんな時、唯一父親も嬉しそうな顔で話すのだ。遠慮がちだった父親も麻琴の朗らかな人柄にいつしか心を開き始め、家中にある健悟の確かな幸せをひしひしと噛み締めた。願わくば、ポカポカとした陽だまりの中、孫の手足に触れてみたい。そんな小さな夢が出来た時、全身がガクガクと震えだした。それは初めて感じる死への恐怖からだった。

優柔不断な麻琴があっという間にセッティングした完璧な介護環境

に気後れ気味なのは健悟だった。間違えて始めの三日は美山邸へと帰ってしまった。早瀬邸へ帰れば未だ馴染めない父親が酸素チューブを鼻に苦痛の顔でベッドに横たわっている。同居して2週間経つが、まだ「ただいま」と声をかけたことすらない。物怖じしない麻琴は日々親密になっている。多少の疎外感があることに気付き少しだけ笑える。

それでも入浴は健悟が介助するしかなかった。もちろんプロのように上手くなどできるはずもなく、力任せでぎこちないものだ。そう、プロに頼んでしまえば一番ラクなのは百も承知だが、敢えて麻琴はそうしなかった。目の前に迫るタイムリミットまで、限りある僅かな触れ合いを惜しむように、健悟と父親の時間を蜜なものにしたかったのだ。

それは同居して3週間目のことだった。突然呼吸が浅く会話がままならなくなり、食事も座位を保つことも、そして排泄動作さえも困難となった。前触れ無く寝たきりとなったのだ。人の身体とはこんなに急に変化するものなのだろうか。

「麻琴、在宅介護はもう無理だ」

「まだ大丈夫」

「もうダメだよ。医者にもこうなったら後は短いと言われている。

それに延命はしないと約束しているんだ。

もちろんギリギリまでは家で看ることも約束したが、しかしここでこの場所で逝かせるわけにはいかない」

「でも」

「俺の親父だ。ここからの判断は俺が決定していく」



大きな瞳からポロポロと零れ落ちる涙を拭う事もせず、麻琴はコクンと頷いた。

『俺の親父だ』 その言葉に初めて息子としての健悟を目にしたのだ。意識のあるうちに聞かせてあげたかった。叶わない小さな想い。

## 温もりの涙

病院のベッドの上、静かにその時はきた。

「父さん、あと一ヶ月頑張れないか。  
孫が二人生まれるんだ。  
見たいだろ。触りたいだろ？  
もう少しだけ頑張れよ」

力の抜け切った父親の手を握り、初めて『父さん』という言葉を経るように口にする。その懐かしく誇らしい響きに、ベッドの上では意識の無いはずの父親が薄っすらと開眼した。しかし朦朧とする意識の中で焦点は定まらず、親子の視線が交わることはなかった。閉眼する時、目尻からツーンと一滴、何かを訴えかける涙が零れた。

雲一つ無いよく晴れ渡った日だった。午後2時10分、それは呆気ない最期だった。

結局は最後まで言葉を交わすことなく、人生を閉じるには静か過ぎる末路であった。たった3週間という短い間で、途切れていた15年という歳月を埋めることは簡単ではなく、その証拠に健悟の知りたがった親子の絆を知る術は断られた……。

葬儀は完全な密葬となった。全てが終わり、駆けつけた和樹がとんぼ返りし、あらゆる事が片付くと、何もかも架空の出来事だったような解消しきれない虚しさが健悟を取り巻いた。それには父親の残した数冊の預金通帳が大きく関係している。蒸発してから滞ることなくされていた月々の送金が、孤立無援の中からの捻出であったような気がしてならないのだ。

どのような仕事をしていたのかは不明だが、毎月19〜21万の給料が（有）アリモト という会社から振り込まれている。そして決まって振り込まれた同日に10万が引き出されていた。恐らくはそれが健悟への送金にあてられていたのであろう。それとは別に月末には6万が引き出され生活費にあてられていた様だ。住んでいたあの古いアパートの家賃は風呂なしで2万5千円と言っていた。3万5千円が食費、光熱費に消えたのだらう。元銀行員だけあって計画的に貯蓄はしていたが、ここ2年ほどで底を付いている。癌の診断を受けた当初は治療を行っていた。抗癌剤治療の為、定期的な入院をし高額医療費がかかっていた。当然仕事は出来ず無収入だ。それでも健悟への月々10万の送金は続けた。既に弁護士として自立した生活を送り、収入も父親と比較するのが申し訳ない程得ていた健悟は、正直なところ送金は有難くも何ともなかった。いや、寧ろ父親の存在を嫌でも感じるため、煩わしいだけだった。

ソファーで編み物をする麻琴をボンヤリと眺めながら、無意識に呟いた。

「共働き・・・か？」

「えっ？」

自分に話しかけられたと勘違いした麻琴が返事をした。

「誰が共働き？」

「あ、いや・・・さ、親父って女と蒸発したたる。俺に送金して、更に貯蓄してたら二人分の生活費って、どう考えても出てこないんだよ。」

で、もしかしたら共働きして生活の殆どを女に頼っていたのかな・・・って」

「・・・女の人とは、直ぐにお別れしたみたいよ」

「直ぐって・・・、何年くらいで」

「2ヶ月」

「はっ？ 2年の間違いだろ」

「ううん、2ヶ月だったって言ってたよ」

「なんでまた・・・」

「女の人ね、お母さんにどことなく似ていたんだって。それで・・・つい・・・」

面影を求めて・・・その女の人に向かって何度かお母さんの名前で呼んだらしいの」

「バカだな・・・」

「・・・うん」

「帰って来れば良かったのに。」

バカみたいに意地張りやがって」

「ふふっ お父さんも同じ事言ってたよ。」

意地張ったばかりに自分ばかりでなく、

健悟の人生にまで暗い影を落としてしまった。

馬鹿なことをした・・・って。

親子だから思考回路、似てるね」

「ああ、全くだ」

「変な意地張るところもね」

「・・・あそこまで意地っ張りじゃないだろ」

「どうかなく。いい勝負だと思うけどお〜?」

「なんだとっ このっ」

「ひゃっ あ・・・んっ」

両手で麻琴の頭を押さえつけると、一気に瞼 鼻 唇に口付けた。

「麻琴、ありがとうな。」

麻琴が在宅介護するって言い出した時は、

正直面倒な事になったと思ったよ。だけど今は感謝してるんだ。

俺も親父も確かに意地っ張りで、最後まで心を割って本音で話すことはできなかつたけど、

でもこの家で共に暮らせただけでも・・・よかつ・・・」

父親が死んで初めての涙だった。それは健悟自身これまで感じたことのない温もりのある涙だった。

麻琴は両手を伸ばすと子供をあやす様に健悟を胸に抱き寄せ頭を撫でた。

幸せのお裾分け（前書き）

終盤です。久しぶりに健悟の語りです。

## 幸せのお裾分け

深夜1時半。

明後日までに片付けなければいけない仕事があり、俺は2階の一番奥の部屋で黙々とこなしていた。基本的には家に仕事を持ち込まないが、麻琴が臨月に入り何時どうなっても助けられるようにと、家で片付けられるような仕事は持ち帰るようになった。あと30分程で片付くかなと欠伸をした時、隣りの寝室からガタンと物音が聞こえた。トイレかと思いパソコンに向き直ったところ、今度は変なうなり声が聞こえた。なるほど、寝ぼけて置き時計でも下に落としたな。あの腹だから自分で拾おうとしても届かないのだろう。とにかく麻琴のお腹は半端ないくらい膨れ上がっていて、親友の美佳ちゃんなんか会った時に「ねえ、もう良いんじゃないの。出てきなよ。ママもあんた達も苦しいでしょお〜」などと外に誘い出そうとする程だ。ま、そう言われたからって「あ、そうですか。それじゃあ」と出てくるわけもないのだが……。

そんな感じで、下に落としたりした物は大抵俺が拾うのが常だ。隣の寝室に向かつて、今行くから待ってる声を掛けた。寝室のドアノブに手をやると、さっき感じたうなり声の10倍苦しそうな声が聞こえた。ただ事じゃないと慌ててドアを引くと、ベッドの下に麻琴がうずくまっていた。

「麻琴っ！」

「ハアハア お腹……痛……くて……」

「感覚も……短くなってるみたい」

「どうする。トイレ行くかつ！」  
「ふっ　バ・・・カ・・・陣痛だっ・・・てば・・・ハアハア」

軽くパニックを起こしていた。他人が俺と同じような台詞言ってるの聞いたら『コイツ馬鹿だろ』って思うこと間違いなしだが、あの時は本気で言ってた。良い訳させてもらうと、初めてのことでだし仕方なかったんだ。そう、男なんてイザとなったらあんなモンだよ。それに予定より2週間も早かったんだ。・・・和樹だったらもつとテキパキと対応しただろうけどさ。

病院までは麻琴たつての希望でタクシーで病院まで行った。もちろんタクシー会社には俺が電話したよ。でも、何故かその後タクシーを待つ間に自分の車に乗ろうとしたけど・・・いや、だからパニックだったんだって。

麻琴があれば七転八倒したのに医者には安産だったと言いやがった。どう見ても難産だろ、と掴み掛かりたくなかったが、直ぐに看護師が一人ずつ赤ん坊を俺の手に連れてきてくれた。赤ん坊って、本当に赤いんだ。か細い声で「ファーン　ファーン」って中途半端に泣いていた。俺は心密かに男の子が良いと思っていたが、双子は二人とも女の子だった。だって女の子だと将来何処の馬の骨とも知れぬ男に搔つ攫われてしまうだろ。生まれる前からヤキモチを妬くなんてって思つかもしれないけど、俺としては結構切実な問題だ。しかも、しかもだ。ちよつと可愛いんじゃない。凄く可愛いんだ。二人とも麻琴にそっくりで、あ、ヒロコさんは俺に似てるって言ったっけ。とにかく目も鼻も口も手足も、全部壊れそうなほど小さくてもういきなり将来に向かってしっかり生き始めてる。そんな双子をこの手に抱き、初めて自分自身も「生きなければ」と思った。それは自分の為じゃない。双子と、そして麻琴の為。俺の生きる意味と価値を初めて手にした大切な日。



分娩室から出てきた麻琴は、汗で額や首元に髪の毛が張り付いていたけど、思いつきり女神のオーラを纏ってて眩しかった。上手く表現できないけど、今までで一番美しいと思ったんだ。

「麻琴・・・おめでとう。それと、ありがとう」

「健兄・・・ありがとう。私、本当に幸せよ」

麻琴は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに生き生きとした嬉しそうなお顔を見せた。出産後、一番初めになんて声を掛けようかずっと考えていた。でも、やっぱり祝いの言葉なんだ。麻琴が前に話していたことの意味が、本当の意味でやっと分かった。産んだ母親への祝いの言葉と感謝。それ以外ないんだ。

名前は 長女が美菜、次女が茉莉 と決定した。

美菜はマサさん、茉莉はヒロコさんが考えてくれた名前だが、これからの時代、和樹のように海外で生活する可能性がある子供たちだからと、海外でも覚えやすく発音も簡単で、響きの可愛い「美菜・ミーナ」「茉莉・マリイ」としたらしい。

それから和樹の考えた名前だけど、口に出したくないくらいセンスの欠片もないダサイ名前で、麻琴が即却下していた。

俺は正直自分で考えられなかったんだ。生まれて顔を見てからと想っていたんだけど、実際生まれると双子だから当たり前だが、二人とも同じ顔しているし、なんかこう・・・全然イメージが湧かなかった。麻琴は具体的には教えてくれなかったが最後に「子」がつく名前を考えていたらしい。だけどヒロコさんたちの話を聞いて「ミーナとマリイがいいっ！」とすっかりそちらに転じてしまった。俺も気に入ったけど。

麻琴がこの世に生まれた時、俺はまだ7歳だった。その赤ん坊は幸せのお裾分けをしてくれるんだと聞かされ、毎日ホッペを撫でた。

撫でるとやっぱり幸せで、毎日その幸せがほしくなつて毎日毎日飽きずに撫でた。積み重なつていく幸せはやがて大きくなり、そして地面に根を張り広がつた。麻琴は気付いているだろうか。生まれたての赤ん坊に、そんな凄い力があることを。美菜と茉莉の小さなホッペを交互に撫で、あの頃の幸せに浸つた。

これからの為（前書き）

今回は麻琴の語りです。

## これからの為

ミーナとマリイが生まれて6ヶ月が経った。目まぐるしく本当にあつと言つ間で、何が何だかよく分らない内に月日が経ったという感じ。最近では二人とも表情が豊かになってきて、抱っこしてほしい時は甘えた顔で両手をあげて催促するなど、自分の意思を少しずつだけど見せるようになってきたりして、日に日に成長していることが判るようになってきた。でも自分が親としてちゃんと成長できているのかは正直判らない。こんなので良いのかな？って、いつも疑問符が付く毎日です。

健兄は予想を裏切らないメロメロぶり。だけど、ここ1ヶ月は仕事に忙しくて休みもない程で、ほんの少しだけピリピリしている。とは言つても夜中に帰宅してスヤスヤと眠るミーナとマリイの寝顔を見るとデレ〜ンとなつて『明日の活力になる』なんて言ってるの。もっとパキツとしたクールなパパになるのかなって思っていたんだけど・・・とにかくメロメロでデレデレ。将来二人がお嫁ちゃんになる時はどうなつちゃうんだろう。ちよつと心配な今日この頃。そういえばこの前、日曜日に久しぶりに美佳が遊びに来ただけど、「あたしにまで赤ちゃん言葉で喋ったよ」って呆れていた。職場では大丈夫なんだろうか・・・将来のことよりも、そっちの心配の方が先よね。でもね、やっぱり凄く幸せ。すごく幸せ。

何月ごろかは決まっていらないらしいけど、来年お兄ちゃんが帰ってくることになった。また皆で暮らせるのかと喜んだんだけど、お兄

ちゃんは美山の家に住むって決めてた。健兄とお兄ちゃんが相談して決めたんだけど、お父さんとお母さんのお仏壇は、私たちの引越しの時に早瀬家に移動したの。でもお兄ちゃんが帰ったら元の仏間に戻ることになる。いま我が家には7ヶ月前亡くなった健兄のお父さんのお仏壇もある。お兄ちゃんは早瀬の嫁になったんだから早瀬の仏壇を大切にしろ、という。もちろん大切にしているんだけどな。お兄ちゃんは言わないけど、結局はあの家にはお父さんとお母さんの魂がなければいけないってことなんだと思うの。きっとそれが自然なんだと……。

「ただいまあ」

玄関でカバンを受け取ると、健兄は優しい眼差しでいつものように目元にチュッとキスをする。なぜ目元なのかは分らないけど、最近はずっとそうなの。

「お帰りなさい。どうしたの？ 珍しく早いよね」

「ほら、やっぱり忘れてたな」

「え……あっ」

いつも0時を回ってから帰宅するのに、今日は珍しく6時に帰宅。そして今日は私たちの入籍した日、結婚記念日！！！！一年目なのにすっかり忘れてた。

「ごめんなさい。私ったらすっかり……」

「はい、これ」

気が付けば私の両手にはあふれんばかりの深紅のバラの花束。所々にある白いバラが深紅をより惹き立てている。卒業式なんかには小さな花束を貰ったことはあるけど、こんな豪華な花束を貰うのは初めてで、心が躍るような感動が全身を駆け巡った。

「嬉しい・・・ありがとう。凄く・・・綺麗。でも私、なにも」

「俺が覚えてたんだから、それで良いんだよ。」

それより花束持って歩くのって、想像以上に恥ずかしかったよ。ははっ

「ふふっ きつと素敵に似合っていたと思うから大丈夫よ」

多分、本当に似合っていたと思う。長身でスラリと伸びた手足に端正な整った目鼻立ち。花束だけじゃなくて、子供を抱いていても様になるんだもの。いまだに見とれちゃう時があるくらい。美佳に『オンナ惹き寄せる殿様オーラ持ってんだから浮気されないように気をつけなよ』なんて言われたけど、でもね、そんな心配全然してないの。なんの根拠もないけど、浮気なんてしないと思うから。え、甘い？ そう？

「ミーナとマリィをちよつと見ててくれる？  
夕食直ぐに支度するから」

「ああ。簡単なものでいいぞ。」

「ほーら、パパでちゅよあ〜。美菜も茉莉も良い子にしてまちたかあ〜」

ここは日本だからあくまでも漢字読みするのだと発音に拘る健兄だけど、やっぱり赤ちゃん言葉なのね。。。。

二人ともバブバブといいながら両手を挙げて抱っこポーズをキメている。これ以上下がらないくらいに尻尾を下げて健兄はベビーチェ

アから二人を抱き上げる。こういう時、男の人は得だと思う。私がどう頑張っても二人同時に抱き上げることは絶対に無理だけど、男の健兄はラクラクと抱き上げられる。育児においてかなり有利よね。お言葉に甘えて夕食は短時間で出来る煮込みハンバーグをメインに、サラダやスープ、それからお気に入りのワインを用意した。それからプレゼントされた花束から深紅のバラを一本だけ抜き取りテーブルに一輪挿しとして飾ってみると、いつもとは違うんだか大人っぽいテーブルが出来上がった。いつもはね、ミーナとマリイのヨダレ拭きよ用のタオルなんか置いてあるの。

「あ、そうだ。今日は二人とも俺が風呂に入れるよ」  
サラダにドレッシングをかけながら二人の顔を交互に見ている。

「いいけど疲れるわよ。明日も早いでしょ」  
「いや、明日は休みだ。仕事が一つ片付いたんだ」  
「そうだったの。それで早かったのね。お疲れ様っ」

何となく感じた開放感のようなものは、仕事が落ち着いたからだったのね。寝る間も惜しんで仕事していたんだものね。明日は思いつきり休ませてあげよう。

8時頃、健兄は一人ずつ順番にお風呂に入れ、寝かし付けるところまで手伝ってくれた。疲れているだろうに、健兄はとっても楽しげ。物音を立てないようにソロソロと階段を下り、廊下を進みながら健兄の背中に話しかける。

「もうクタクタでしょう。ビールでも飲む？」

「いや、まだやること残ってた」

「もう何も手伝ってもらうことないわよ。疲れてるんだから気を遣わないで」

「気を遣う？まさか。今日は全部これからの為に動いたんだから」「これからの為？」

健兄はクルツとこっちを振り返って、ちよつと意地悪そうな顔を見せた。

「そう、これから麻琴を風呂に入れて、ベッドに運ぶんだ」

切りに行く暇がなくて伸びてしまった私の髪の毛を、軽く指に巻きつけながら口の端を上げる。ちよつとニヒルで男の人なのに色っぽい。私は少女のようにドキドキして、つい目を逸らしてしまう。健兄はフツと笑みを漏らすと、耳元に口付けながら囁く。

「僕の奥さんはいつになったらこういうことに慣れてくれるんでしょうか」

「だって・・・」

顔が真っ赤になっているのが分る。なおさら見られたくない。。。健兄の顔を見れず俯いてしまう。

「なんだよ、可愛いな。」

速攻で押し倒したくなる」

そんな言葉とは裏腹に、そつと静かに抱き寄せられた。そして魅惑の低い声で囁かれた言葉。

「結婚記念日は忘れてたけど、あの約束覚えてる？」

「え・・・あ・・・ヤダ・・・」

「ヤダじゃない。どれだけ我慢したと思ってんの」

「それは・・・」



軽いノリでしてしまったバカな約束。健兄、どうしてそんな変なこ  
と覚えてるのよ！

これからの為（後書き）

次回、最終回かもです！

「さてと、じゃあ俺たちも風呂入るか」

「どうしても一緒に入らなきゃダメ？」

ソファーから立ち上がる健悟に今更ながらと思いつつも聞いてしま  
う。その問いに一瞬だけ考えた降りをする健悟。

「そんなに俺と風呂に入るの嫌なの」

「そうじゃないけどお・・・」

「はい、じゃあ先行つてるから後でおいで」

頭をポンポンと叩くと自分だけスタスタと行ってしまった。

健悟が家を建て替える時に拘ったのがバスルームだった。建て替え前は古く薄く暗くて、何より身体の大きい健悟には狭かった。腕を動かせば必ずどこかにぶつかり、出入り口も頭上に注意が必要な程ドアの規格が低く小さかった。要するに新しいバスルームは、その正反対のものにしたのだ。明るく広々としたスペースを取り、尚且つ機能性も持たせた。和樹もこのバスルームを気に入り、一時帰国した際わざわざ入浴するだけの為に何度か来ていた。

モタモタと着替えの準備をしていると、ある物が目に入った。それはタンスの奥の方にひっそりとしまわたれ懐かしいもの。なんとなく甘酸っぱくて切ない気持ちになる。健悟は覚えているだろうか・  
・麻琴はそつと手に取った。

隣室の双子を覗くと、並べて置かれたベビーベッドでそれぞれ口を半開きにしてスヤスヤと気持ち良さそうに眠っていた。つい笑みが漏れてしまう。時々悪魔のように泣くが、寝ている時は本当に天使

のように可愛いのだ。そのギャップに今度は苦笑してしまう。きつと誰しもがそうだったに違いない。

カチャ

「遅いよ・・・のぼせそうだ」

「ごめんね。でもちゃんと来たじゃない」

やや逆ギレぎみの麻琴。だが健悟は気にもせず浴槽に浸かりながら麻琴を見上げ納得した表情で何故か頷いている。

「なに頷いてるのよ・・・」

「いや、子供産んでも変わんないなーって思ってたさ。

よく産後は腹の肉が取れないだの、胸が垂れるだの聞くだろ」

「もう・・・変な観察しないでよ。

私だって2キロ太って気にしてるんだから」

「2キロくらいで気にするか？そう言えば おっぱい更に大きくなつたか」

「それは双子のだから・・・って、見ないでっばっ！」  
両手で胸を隠しながら睨みつける。

「今は俺のおっぱいだろ」

そう言いながら腕を取り浴槽に引き入れ、麻琴を背中から抱きしめた。その後は恥ずかしがりながらも楽しい雰囲気になり、暫しの戯れのあとお互いに全身を洗い合った。

「麻琴、おいで」

先に風呂を出た健悟がベッドの上で背中をもたれた状態で座って待っていた。麻琴はいつになく緊張しドアの前で立ち止まっていた。

「どうした。さあ、ほら」

なかなか動かない麻琴にクスツと笑い、しょうがないなという顔で健悟がベッドから立ち上がった。腰にバスタオルを巻いただけの姿で、上半身は彫刻のように立体的な筋肉が逞しさを強調していた。健悟は麻琴の瞼、額、に軽く口づけ、唇をすくう様に舐めると優しく吸った。

「ここで脱がせていい？」

「ダメって言ったら？」

「脱がす」

二人は見つめ合いクスリと笑った。そしてまた口付ける。今度は耳たぶ、首筋を舐めるように下りていき、デコルテに到達するとネグリジェのボタンを一つずつ慣れた手付きで外していく。そしてパサリと足元に落として健悟は息を呑んだ。

「健兄、覚えてる？」

それは初めてデートした記念にと、健悟が無理矢理買ったサーモンピンクの露出度の高いランジェリー。カップを縁取るフリルは可愛いが、カップそのものは透け感のある 至って薄いレースで何とも艶めかしく、シヨーツも同じレース素材で両サイドはリボンで結ばれている。男であれば無意識にも解きたくなってしまうような代物だ。健悟は驚きと喜びのあまり声が出ず、ただ食い入るように見つめていた。

「あの・・・ごめんなさい。私ちよつと行き過ぎたかも」  
「あ、いや、麻琴。そのまま、そのままも少し見ていたい。  
ヤバイな。視覚的にすげー興奮する」

意味のなさない薄いカップの上から健悟が触れると、そこはもうすでに硬く尖り敏感になっていた。健悟自身は麻琴が浴室に足を踏み入れた時から天井を向きっぱなしである。

胸の先端を弄びながら絡まり纏れ込む様にして二人はベッドへと沈んで溶けていった。

乱れたシートの上でうわ言のように麻琴の名を呼びつづけ、健悟は夜通し麻琴を求めた。

「やあーだつ、ミーナがやるのおっ」

「んー あーっ だめえー、

マリイが、マリイがしたいいいい

うああああああああん。。。。」

「こらっ 喧嘩しないの。」

二人とも順番にしたらいいじゃない」

美菜と茉莉が奪い合っていた哺乳瓶は、今やアツサリと麻琴の手元にある。早いもので双子は3歳半になっていた。二人ともお喋りでおませな甘えん坊だ。隣の花は赤いとはよく言ったもので、片方が

持っているものは良く見えるのか、よく何かを取り合っている。

「ふあ ふあくん ふあくん」

「ほーら、裕ちゃん泣いちゃったじゃないのお。」

「はいはい、お腹ペコペコだねえ。はい、ミルク飲もうねえ」

麻琴は生後4ヶ月になる裕樹を抱き上げ哺乳瓶で口元を刺激した。泣きながらも本能で小さな口を開き啜える。

喧嘩していたことも忘れ、双子は麻琴の前に仲良く正座し、その可愛らしい口元を覗き込んだ。

「かわいい。ミーナはやくママになるう」

「マリイもママになるう」

「ふふっ じゃあ、いっぱいご飯食べて おりこうさんにして大きくなるうね」

「ハイ」

「はい」

二人とも同時に片手を挙げた。

「ただいまー」

「あー けんにーだあ」

「ミーナ、パパでしょっ」

「パパおかえりですうー」

「おかえりですうー」

またも同時に立ち上がり玄関へと駆けていく。途中ボタンと鈍い音の後「あっ！」と健悟の声がし、「ウワァーン」と大きな泣き声が

響いた。美菜が茉莉のどちらかが転んだようだ。そして「いたい  
いたい の とんでけえー」と、聞こえた。泣きながらも「あーう  
ー。マリイ もいつかい とんでけてえー」「いいよ。ミ  
ナの いたい いたい の とんでけえー」

最近はずんずんしていたとしても、どちらかが失敗した時や困っている  
時は自然と助け合ったり励まし合ったりするようになってきた。年  
齢とともに健やかに成長していく二人を見ていると、時々若くして  
亡くなった両親を想う。そしてこれまでは辛いとき、苦しい時には  
かり両親に語りかけてきたことに気付き、自分の過去を振り返るよ  
うにもなった。

今思えば悩まなくてもいいようなことに悩んだり泣いたりした。そ  
んな時、決まって心と心の狭間を行ったり来たりしていた。それは  
自分の中の狭間であったり、自分と誰かの狭間であったり、又はそ  
の誰かの中の狭間であったように思う。きっと大切な人や大切な事  
が多ければ多いほど、それに比例して心と心の狭間が生まれるのだ  
ろう。悩みながら泣きながら狭間を行き来し、時には彷徨うことも  
あった。だが、その時々はいつも真剣で一生懸命だった。きつとこ  
れからも同じような場面が出てくるかもしれない。だがそれら全て  
は後に至る大切なプロセスなのだ。幸せな家庭を築き、健悟という  
夫に守られた今だから素直にそう思える。

「おい、美菜が転んで膝擦り剥いて血が出てる。病院行くぞ」  
「お帰りなさい。そんなの消毒して絆創膏していれば治るわよ。大  
袈裟なんだから」  
「そうかな・・・でも、やっぱりさ・・・」

血相を変え美菜を抱きかかえている。しかし美菜本人は茉莉のお陰



か目に涙は浮かんでいるものの泣き止んでいる。というよりも、大きなパパに抱き上げられ嬉しそうだ。その脇でやはり茉莉が抱っこして欲しくて健悟のズボンの裾を掴んでソワソワしている。そして

「パーパ パーパ、マリイもお。マリイも抱っこお」

「え？ああ、茉莉もか」

「やー やあーあっ ミーナおりないいいい」

おろされたくない美菜が健悟にガシツとしがみ付いて離れようとしていない。困ったなあという顔をしながらも若干嬉しそうな健悟。まるで『ほら、仕方ないだろ？』とでも言いたげな顔を麻琴に向け、「あー 分った 分った。二人とも一緒に抱っこするから騒ぐな」なんて言いながら茉莉をヨイシヨと抱き上げた。

「甘やかし過ぎ・・・」

「えっ？」デレツとなったままの健悟。

「なんでもないですよあー。ねえー、裕ちゃん」

「おっ 裕樹いたのか」

双子を両手に抱きながら哺乳瓶のミルクを勢い良く飲む裕樹を碎けそうな顔で見る。

「うん、さつきね。9時半頃には迎えに来るって」

「そうか、じゃあ、あと2時間か。可愛いなあ。よし、俺がミルクやるう」

そこに美菜が口を尖らせ抗議する。そして茉莉も続く。

「あー ダーメエ パパ じゅんばんまもってくださいい」

「パパはさいごのじゅんばんだもんねえー」

「ねえー」

「えっ 順番？なんだそれ」

「じゅんばんばは じゅんばんだもんねえー。」

おりこうさんにしなきゃ パパもママになれないですよ」

「えっ えっ！！！」

さすがは3歳半。パパもそのうちママになれるものと思っているのだ。麻琴がおかしそうに笑った。よく分らないが健悟もつられて笑った。

双子をソファアの上に座らせるとテレビアニメに子守りをさせ、健悟は麻琴の腕から裕樹を抱き上げた。そして麻琴の目元に口づけて耳元に囁いた。

「ママ、今日パパと仲良くしませんか。」

美菜と茉莉もそろそろお姉ちゃんになってもいい頃だろ」

「健兄……」

「マーマー けんにーじゃないですう パパですう」

「あ……そうだった。あはっ」

アニメを観ていた茉莉に注意され肩を竦める麻琴。健悟は裕樹に耳打ちした。

「今日のお裾分け、かなり期待してるぞ、裕樹」

完

最後までお読み頂きありがとうございました。

途中イライラしたことでしょう。私自身がそうでした。（いろんな意味で）

正直申しますと、書き始めの頃は10話位で完結する予定でした。内容もちよっとラブエッチな恋愛もののもりでしたが、終わってみるとなぜかヒューマン・・・。

書いててちよつと矛盾を感じてきた頃に書いたのが短編の「手の平の人柄」でした。（しかも本当にかなりの短編）

せつかく書き始めたのだから最後まで書く！とは決めたものの、次第に

仕事ハードになってきて徐々に更新が滞りがちになりました。いつもの私だったら投げ出してしまっていたと思いますが、どこかで誰かが読んでくれるかも？と思うと、それに励まされました。そういった色んな意味も含めて、お読みくださった方に大変感謝しています。

11月頃、少し仕事が落ち着きます。

その頃、またこのページでお会いできれば嬉しいです。

（愛する和樹のことが気になってえええええ）

この夏、酷い酷暑でしたね。急に秋になり体調崩されませんよう、お体ご自愛ください。

芽吹

お知らせでございます

ご無沙汰しておりました。芽吹です。

これからまた、少しずつですが番外編として

「もう一つのラブストーリー」

を展開していきたいと思っています。

そしてこちらの勝手に大変申し訳ありませんが、

その番外編「もう一つのラブストーリー」を今後

<http://novel18.syosetu.com/n5831k/>

で更新させて頂きますので、もしご興味がありましたら、そちらを覗いてやって下さい。宜しく願いたします。

芽吹

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5287j/>

---

心と心の狭間

2011年4月20日21時51分発行